### かいしすい 一番恵公 怒りで慶鄭を誅殺 でまる おりで はいてい 介子推 太腿の肉を切り君に献ず

のために穆公に逆らったことなど全く知らないで、韓簡に言った。 晋恵公は霊台山に囚われ、穆姫のことを疑っていて、喪服を着て恵公

「昔、先君が秦との結婚を検討しているとき、史蘇の占いでは『西隣

な事にはならなかったに違いない」 は要求が多く結婚は不利』という事だったが、それに従っていたらこん

うかこのところはよくお考えください」 れた事は、好意を仇にしたもので、決して秦が悪いとはいえません。ど す、秦の援助を受けて入国されたにもかかわらずその恩人を討とうとさ ありません。秦に婚姻の事が頭にあったからこそ殿はご帰国できたので 「いいえ、最初に殿に背徳問題があったからで秦との結婚のせいでは

とを伝えた まもなく、穆公は公孫枝を霊台山に遣わして晋侯の君主復帰を許すこ

恵公は何も言わなかった。

西の五城の割譲を速やかに実施されること、太子圉殿を質としていただ 必死のお願いもあって婚姻の誼を大切にしておられます。お約束の黄河 「わが国の家臣団は皆あなたをお許ししています。わが主君も夫人の

く事この二点、ご承知下さいましたらご帰国頂けることになりました」

いくらい恥ずかしかった。 直ちに大夫郤乞を晋に帰し、呂省(呂鮨甥)に土地割譲と人質の件を『きこう 恵公はやっと穆姫がとりなしてくれた事がわかり、穴があれば入りた

> を献納した。そして質を出す事を条件に君主を帰してくれるよう頼んだ。 指示した。呂省は秦城へ出向き穆公に会って、五城の地図と地租、戸数 「太子はどうして来ないのだ」

「国内がまだ安定していませんので太子は暫らくわが国に残させて

いただき、わが主君が帰ってまいりましたら直ちにお出しいたします」

「賢臣達は自分の過ちを知っていて貴国の恩を感じています。小人達 「晋国内にはどういう不和があるんだ」

はそれをわきまえず貴国を仇として報復を考えています。それが不和の 原因なのです」

「そなたの国では君主の帰りを望んでいるのか」

| 賢臣達は必ず帰ると思っていますから、太子をお出しして講和を考

国へ出すのを強行に反対しているのです。すでにわが主君を捕え貴国の えています。しかし小人たちは絶対帰してもらえないと思って太子を貴 1

かけらましょう。賢臣の気持ちを傷つけ、小人たちの怒りを焚きつけて もはっきり示されます。徳と力が備わってこそ覇主として諸侯に号令が 威は十分示されました。このたび主君をご放免いただければ君侯の仁徳

君侯のお考えには沿わないのではないでしょうか」

「そなたの言うとおりだ」

侯を晋国へ送り届けた。牛、羊、豚、各一頭で一牢といい、七牢とは手 に対する礼をとり、七牢を贈り物として公孫枝に命じて呂省と一緒に晋 れぞれに守備の責任官を配置させた。そして晋侯を郊外の公館に移し客 と穆公は笑いながらそう言って、孟明を派遣して五城の境界を定めそぼろう

厚い贈り物という意味でこれは穆公の修好の気持ちを表わしたものであ

秦国に何の利益がありましょうか。先の功を捨て覇業から遠ざかるのは

した家臣たちと帰国したが、虢射だけは秦で病死し帰国できなかった。 蛾晢は恵公が帰国すると聞き、慶鄭に言った。 恵公は九月に戦いに敗れて秦に囚われ十一月にやっと釈放され、苦労

はお許しにならないと思います。他国へ避難したほうがいいのではない (恵公穆公交換の機会が失われ) 殿が捕えられることになったので恐らく殿 「あなたは殿を救うのに韓簡に間違った指示をしたために、結果的に

ます。皆にも罪あっても逃げるべきではない事を知らしめたいと思うの とはなく、逃げないで殿のご判断を待てば、お怒りを静められると思い を率いて秦で死ぬつもりでした。帰ってこられるのだから罰せられるこ を辱めたのですから大罪です。殿がお帰りにならなければわたしは家兵 「軍法に、『敗将、虜囚将軍は死刑』とあります。まして、誤って殿

けると怒りがこみ上げ、家僕徒に鄭を呼びに遣った。 恵公は絳都へ帰って来ると、太子圉が狐突、郤芮、慶鄭、蛾皙、司馬恵公は絳都へ帰って来ると、太子圉が狐突、郤芮、慶鄭、蛾皙、司馬 蛾晳はため息をついてその場を去った。 勃鞮等を率いて郊外まで迎えに出た。恵公は車の中から慶鄭を見つ

ましたがお聞きいただいておれば戦いは避けられました。 更に、小駟は 撃を受けることはありませんでした。続いて秦との講和をご提案いたし 「殿が最初に臣の意見をお聞きになり秦の恩に報いておれば秦の攻

「鄭よ、そなたどの面さげてわしに会いにきたのだ」

状況で囚われる事はありませんでした。臣は殿に忠実であったと考えて お使いにならないようにと申し上げましたがそうしておられればあんな

おりますがどうしてお会いできないのでしょか」

「未だ何か言いたいことがあるか

けましたが結局お救いできなかったことが第二の罪であります。刑をお だけなかったことが第二の罪、殿をお救いしようと何人かの方に声を掛 なかったことが第一の罪、占いで臣の車右が吉であったが採用していた 「臣には死罪となる罪が三つあります。 忠言をお聞きいただく能力が

受けして罪に服したく存じます」 恵公は何も言わず、梁繇靡に罪状を言わせた。

罪は、何人かが捉えられた時あなたは余り戦わず身の安全を考えさっさ と逃げ帰った事であります」 が秦君捕獲寸前だったのに殿を救出せよと誤った指示をした事、第三の からあなたをお呼びになった時それを無視した事、第二の罪は、わたし が三件ある、わかりますか。すなわち、第一の罪は、殿がぬかるみの中 「あなたの申し状はいずれも死罪には当らないが、別に死罪相当の罪 2

が敵前で力戦を怖がるなんてことがあると思われますか」 「三軍の士はみなここにおられますが、逃亡せずに坐して刑を待つ男

ら今回は許して仇をうたせたら如何でしょう」 と、慶鄭は弁明し、蛾晳も、 「鄭は決して刑を逃げているのではありません。彼は勇猛な将ですか

と慶鄭を弁護して死刑を諫めたが、梁繇靡は 「戦争はもう負けたのです。罪人に仇を討たせりすると天下の人たち

から晋には人がいないのかと失笑を買うことになります」 と反対した。家僕徒も慶鄭を擁護し、 「鄭は三度忠言しているのですから、死は償なわれています。冷たい

根を絶っておくに限ります」

ようか」 法をたてに処刑するより殿の暖かい慈悲の心で赦してやったら如何でし

と諌言したが、梁繇靡は更に言った

「国力強化には法の順守が大切です。刑執行をいい加減にすれば法を

伸べて従 容として死についた。恵公の狭量を詠った髯仙の詩がある。 恐れなくなり、今回鄭を赦せば今後の用兵に支障が起こりかねません」 恵公は司馬の方を振り向いてすぐに刑を執行させた。 慶鄭は首を差し

借米を断り泛舟の恩に背き、奸佞を用い忠臣を殺す。 心狭く徳なき恵公、寧ろ霊台に永く虜囚となるべし。

ち必ず殺してやろうと思っていた。鄭が誅殺された時、急に天地は荒れ て暗くなり、大夫の中には涙を流すものが多かった。蛾晳は車に乗せて 放り出してそちらに向かったのである。だから慶鄭を非常に怨みそのう ところが慶鄭に、急いで殿を助けに行けと言われたので、穆公の包囲を 梁繇靡はあの時秦穆公を包囲していて絶対生け捕れると思っていた。

て屠岸夷の遺体をもらい請け上大夫の礼をもって葬り、その子に中大夫 救ってくれた恩に報いたいといって遺体の埋葬を願い出た。 恵公は帰国できたので世子圉を公孫枝に預けて秦に質に出した。そし

恵公はある日郤芮に言った。 「三ヶ月秦にいた間、気になっていたことは重耳がこの事変に乗じて

を継がせた

帰国を要求して来ることだったが、今やっと安心したよ」 「重耳が外国にいること自体常に心配の種です。殺して将来の不安の

「誰にやらせばいいだろう、金には糸目はつけん」

を咎められるのを畏れています。重耳を始末するならこの男にやらせる を逮捕に行って着物の袂を切り取った男ですから、重耳が帰国してそれ 「寺人(第27回注138参照)勃鞮がいいでしょう。彼は以前蒲城へ重耳

のに限ります」

恵公は勃鞮を呼び出しそっと重耳殺害のことを話した。

勃鞮は承諾し

自分の考えを述べた。

ければそっと翟に入り、郊外へ遊びに出たところを暗殺しようと思いま 来るでしょう。勝負はなんともいえません。むしろ、力士を数人いただ 配はないと思います。もしいま兵を出したら翟は重耳を助けて迎撃して にしました。どちらも子供があり君臣共に家庭を楽しんでいますので心 という二人の美人の娘を手にいれ、季隗を重耳の妻に、叔隗を趙衰の妻 「重耳は翟の国で十二年になります。翟は咎如を討って 叔 隗、季隗 3

すが

「それは妙案だ」

すぐに勃鞮に金百鎰を与え力士を求めさせた。 「三日以内に出発せよ。成功したら重く用いようぞ」

らの国舅だから内侍たちをよく知っている。この陰謀が狐突の耳に漏れ めている事を聞き、警戒心を強めそっとその理由を調べた。狐突は昔か がこの謀計を聞いていた。狐突は勃鞮が金をふんだんに使って力士を集 というが、恵公はこの件を勃鞮一人に言ったつもりだが内侍の多くの者 昔から『知られたくなければ為す勿れ、聞かれたくなければ言う勿れ』

めて昼夜兼行で翟に使者を送り、公子重耳に急を知らせた。るてくるのを防ぐ事はできなかった。狐突は驚いてすぐに密書をしたた

こうに、 う目に こうど 翟君と 渭水の河岸へ狩に行っていた。 突然重耳はこの日、 ちょうど 翟君と 渭水の河岸へ狩に行っていた。 突然

人の男がその囲みに入り込み狐氏兄弟に面接を求めた。

「父上からは久しく便りを頂いていないが、突然の手紙は国許で何か「国舅からの手紙をお届けに上がりました」

手紙に目を通した。 出して叩頭のあいさつをするとすぐ帰って行った。 兄弟は心配になって

へ避難せよ。遅れて災いに遭わないよう大至急行動すべし。するよう命じている。そなたたち兄弟は公子に知らせ、すぐに他国

もない。

ご心配なさらないで」

主君は公子を殺そうと、すでに勃鞮を刺客として三日以内に出発

一人は驚いて手紙を重耳に見せた。

のだ」
「わしの妻子はみな此処にいる。此処はわが家だ。どこへ行くと言う

此処はすでに長くなりましたので大国に移る時が来ました。勃鞮が来るめのはずです。力を溜めるために暫く此処に足を休めていただけです。「我々が翟国まで来たのは一家を営むためではなく復国の大業のた

「わかった、すぐ移ろう。行くなら何処が適当だろうか」と言うのは天が公子にそれを促しているという事です」

える賢臣がいなくなったので公子がおいでになれば斉侯はきっと礼遇し をもって抱えています。管 仲、隰 朋 が亡くなったばかりで、君主を支 「斉侯は年をとったとはいえまだ覇主であり、諸侯を扶助し賢士を禄 追い、車が間に合わないものは歩いて追った。 「頭須はどうして来ないんだ」

重耳は納得して、狩を切上げて帰り、妻の季隗に言った。ともできます」

てくれるはずです。もし晋に変が起これば斉の力を借りて復国を図るこ

てくれ、それでも帰ってこなければ再婚してもかまわないよ」いる。そなたは頑張って二人の子を育てて欲しい。わしを二十五年待っうに遠方の大国へ避難し、秦楚と連絡しあって復国を計りたいと考えて「晋君がわしに刺客を送ってきているんだ。彼らの手にかからないよ

になってしまって再婚なんて。わたくしお待ちしています。二人の子はょう。でも、私は今年もう二十五歳ですわ。二十五年も経てばお婆さん「男子志四方に有りといいます。わたしが引留める事はできないでし

のを整理するよう指示している所へ、狐毛、狐偃が慌ててやってきて、翌朝重耳は壷叔に命じて車を用意させ倉庫係の小吏頭須に金目のも翌

を使って昼夜兼行で知らせてきました。時間がありません。大至急避難いなければ間に合わないと心配して、父は手紙を書く間も惜しんで腹心

- 勃鞮は命じられた翌日すぐに出発したらしく、 公子が未だ翟を出て

されますよう」

追い、車が間こ合うないものはよいて自った。 たのを知ってとりあえず牛車一台で追いかけた。趙衰、臼季他も続々と ごしらえもそこそこに二狐 (毛、偃) と城外へ出た。壷叔は公子が出発し 重耳はその情報を聞き、どうしてそんなに急いでるんだろと驚いて身

1

帝と曹値の骨肉の争いを詠ている本詩の場合は恵公と重耳(兄弟の争)を言てい

贈ろうと思ったが間に合わなかった。詩がある。 急いだ。公子が城を抜けて半日たって翟君は始めて事情を知って旅費を もおられず、こうなってしまってはとにかく前へ行くしかない。何しろ らないと言う。。重耳は住む家を失い旅費も無くしたが、この時は悩んで と重耳が聞くと、彼は蔵のものを洗いざらい持ち逃げして行方がわか

まめがら はなばだ 困苦の蛟龍未だ時を得ず異邦にさすらい十二年 困苦の蛟龍未だ時を得ず 豆萁を煮るに何ぞ 太 急なる。 是より再び流離の旅

しでも速く行って、公子が準備をしない内に結果を出したかったのであ もでき、一挙両得だから是非成功したい。だから力士数人を集めると少 てる事ができるだけでなく重耳に怨まれているという心配を払拭する事 の命令で行く事になった。ここで重耳を殺す事ができれば恵公に功を立 る。前回献公の命令で蒲へ重耳を逮捕に行ったが失敗して僅かに袂を切 って来ただけで、重耳には怨まれていると思い込んでいる。今度は恵公 人の側に仕える小役人)だから専ら主人のご機嫌をとって寵を得る者であ っていたが、どうして翌日にしたのだろうか。勃鞮は元来寺人(宮中で主 ところで、恵公はもともと勃鞮に三日以内に翟へ出発せよと期限を切

> 翟に長居もできず悶々としながら帰国し恵公に復命した。 恵公もしかた まな刺客のような事をして、翟に詰問されたら答えようもない。だから 追究させた。勃鞮も晋国のれっきとした君主の近侍の役人でありよこし が翟に着くとすぐ公子の消息を尋ねたが、その時はすでに公子は姿を消 る。まさか国舅が二度も情報を流していたとは考えてもいなかった。勃鞮 なく暫くそのままにしておくしかなかった。 していた。翟君も水陸要道の検問所に命じて重耳の行方を表面上厳しく

す。貴国に道をお借りいたしたい」 ものであった。数日して衛の国境に来た。関守は一行の経歴を問うた。 を盗まれたため重耳の翟国境を出てからの苦しい旅は筆舌に尽くし難い の道も一歩から』である。先ず衛国を通らなければならない。頭須に金 さて、重耳はとにかく斉に向かった。『高きに登るも低きより、千里 「わが主人は晋国の公子重耳です。国内の難を避け斉へ参るところで 5

上 卿 寧速は彼らを迎え入れて面倒を見るべきだと進言したが と趙衰が言うと、看守はとりあえず開門して入れ、衛侯に急報した。

りだ。追い出すにかぎる 衛と晋は同姓とはいえ友好同盟もない。まして国外を流浪している連中 ではないか。何も重視する事はない。引き留めたら歓迎会や贈物で物入 「わしが楚丘で即位したとき晋には全く援助してもらってはいない。

重耳はしかたなく城外を迂回した。 衛文公はそう言って、関守に晋の公子の入城を断わるよう指示した。

「衛公め、無礼じゃないですか。文句を言いましょうよ」

魏犨、顛頡が憤慨するのを趙衰がなだめた。 『蛟龍も勢いを失えばミミズの如し』。徒に人の無礼を責めることは

は釜中に存って泣る。本是れ同根より生ず、相煮るに何ぞ太急なるこの詩は曹丕文 3『七歩詩 三国時代魏曹植 曹操の第三王子より。「豆を者るに豆萁を燃やす、豆 に男子驩かん、女子伯姫の一男一女がいた。 出奔した時は二人とも幼み たので 薄に 欠かさずに支給してきたのである。 放ておいたが、 頭須が二人を引き取り 蒲の遂氏に養育を頼み その後衣食の 歳費は 頭須この時金を持ち逃げし、後に重耳が復国した後出頭して出た。重耳には蒲城

できないよ。公子にもどうか我慢をお願いいたします。」

村を掠奪して朝夕の飯の足しにしても文句は言えまい」 と二人はなおも言うと、重耳はそれを抑えて言った。

「向うが主人の礼を尽くさないのだからこっちも礼を守る事はない。

「略奪は泥棒だ。たとえ飢えを忍んでも盗賊のまねはできない」

けて飯を食っているのを見かけた。 重耳は狐偃に食事を分けてもらうよ 昼過ぎ、五鹿(現河南省濮陽県)というところで数人の農夫があぜに腰掛 この日、一行は未だ朝餉をすませてなくて飢えをしのんで先を急いだ。

「あんた方何処から来なさったかの」

うに頼みに遣った。

「我われは晋から来た者で車の上の人が主人なんだ。 遠方へ行くのに

途中で食料が切れてしまったのだ。すまないが飯を少し分けてもらえな いだろうか」

やるほどの余裕など何処にもないよ」 か。我われ農民だ、腹一杯食ってこそ力が出るってもんだ、人に分けて 「はっはっは、一人前の男が自分で稼げなくてわしらに飯をくれって

「もし貰える飯がなければ、食器を一つ貰えないだろうか」

と偃が言うと、農夫はふざけて

「この土は食器になるぜ」

と言って土くれを渡した。魏犨は、 「百姓め、わしらを愚弄するのか」

した。偃は急いでこれを止めて、 と怒鳴って食器を取上げ投げて割った。重耳も怒って鞭を加えようと

「飯は得易く土地は得がたいもので、土地は国の基です。天が農民の

下りになってこれをお受けください」 前兆に違いありません、お怒りになる理由はありません。公子、車をお

手を借りて土地を公子に授けるという啓示です。これは国を得るという

重耳はその意見に従い車を降りて拝受した。農夫はその意味を理解で

「こりゃほんとうに馬鹿だ、わっはっは」

と皆で笑った。後の人の詩がある。

土地は国の基 なり 皇天農夫の手を借り重耳の苦難を慰さめり 子犯 (狐偃の字) の先見 愚民はわからず笑い痴れたり

休憩を取った。重耳は腹が減って眠くなり狐毛の膝を枕に横になってい 更に十里ほど歩いている内に、みな腹が減り歩けなくなって樹の下で

ましょう」 (趙衰) が少し食料を持っています。遅れていますが少し待ち

「食い物があるといっても子余一人分くらいしかないから、

と狐毛が言うと、魏犨は

うしても喉を通らない。 ふとみると介子推が重耳に肉のスープを捧げて てしまってきっともうないよ\_ と言う。みんなでわらび、ぜんまいを採って煮て食ったが、重耳はど

「これは何処で手に入れた肉かね」

持ってきた。重耳はうまそうに食い、食べ終わって子推にたずねた。

「臣の股の肉です。『孝子その身を殺して親に仕え、忠臣その身を殺

して君に仕える』と申します。公子の空腹がひどいので腿の肉を切りと

って差上げたのです」

重耳は涙を流して言った。

どのように報いたらいいのだろう」 「わしは逃亡者でみんなに大変苦労をかけている。将来そなたたちに

「公子が一日も早く帰国なさって、我われ股肱の忠義が成果に結びつ

く事を願うのみです。どうして報酬など望みましょう」

介子推はきっぱりと言った。髯仙は賛嘆の詩を作っている。 孝子は親から受けし身を全うす 傷は親への侮辱なるも

ああ介子推
わが股肉を切り君の空腹を癒したり 献身奉公を股肱といい 禍福を共にするを腹心という

君の禄を食み 何を以てかこれに報いん 親への孝も忘れはせぬも 忠孝両全なり難し

しばらくしてやっと趙衰がやって来た。

「いばらのとげが足に刺さって歩けなくなったんです」

そう言って竹かごの中から飯の入った壷を取出し重耳に差出した。 「子余は腹が減ってつらくはないのか、どうして自分で食べなかった

のだ」

できません」 狐毛は魏犨をからかって、 「臣がいくら腹が減っていても主君をさしおいて勝手に食べる事は

「もしこれがあんたの手にあったら今頃は腹の中だね

と言うと魏犨は恥ずかしそうに引下った。

重耳はそれを趙衰に与えたが、趙衰はこれを水にふやかしてみんなで

分けて食べたのである。重耳は趙衰の態度に感心した このようにして、重耳一行は道々食べ物を探しながら常に空腹を抱え

ながら、やっと斉国に到着した。

着いたと聞くとすぐに公館に迎え入れ、宴を催して歓待した。

斉桓公は以前から重耳が賢明な人だと聞いていたので、一行が関所に

席上桓公が質問した。

「公子は奥さんを連れて見えてますか」 「逃亡者は自分の身を守るのが精一杯で家族など連れていられませ

慢できないたちで、公子に旅の途中で世話をする女性がいなかった事を 思うと大変気の毒に思います」 「わたしは一人で寝るのが一日であっても一年ものように思えて我

えるように手配し、毎日倉庫係には穀物を、料理人には肉を支給させた。 二十乗分の馬(一乗は馬四頭即ち八十頭の馬)を贈与し随行者にも馬車が使 そう言って同族の女性の中から美人を選んで重耳に与えた。それから

重耳は感謝して

主となられたのもまた当然の事だ」 と感心したものである。周襄王の八年(紀元前六四四年)、斉桓公の四十 「かねてより斉侯は賢人を大切にされると聞いていたが、なるほど覇

二年のことであった。

雍巫、開方の三人を追放したあと食事は美味くなく、夜はよく寝られず、 || 極公は前年から鮑叔牙に国政を任していた。管仲の遺言に随い豎 ヲ

「主上は豎刁たちを追放した後、国政はご覧にならなくなり、お顔は

冗談は言わなくなり、顔からは笑いが消えた。

# 日に日に憔悴し、ご自分のお考えがなくなっています。豎刁たちをお召

しになったら如何です」

と長衛姫が言うと、

また呼び上げると鮑叔牙がどう思うか… 「わしも彼らのことを思っているのだが、すでに追放した連中だから

ょうぶで自分をお苦しめになるのですか。それじゃ様子を見るために先ず易牙ご自分をお苦しめになるのですか。それじゃ様子を見るために先ず易牙 「鮑叔牙たちは使用人でしょ、主上はお年を召してどうしてそんなに

んに呼べばいいのです」 (雍巫)をお呼びになって見れば如何です。その後開方、豎 刁をだんだ

桓公は彼女の意見に従い雍巫らを呼上げたので鮑叔牙は強く諌言し

召しになるのです」 「この三人はわしには必要なのだ、国に害を及ぼす事はない。仲父の 仲父の遺言をお忘れになったのですか、どうしてこの連中をお

心配しすぎだよ」

と言って遂に叔牙の意見を聞かず開方、豎刁も呼び上げ、原職に復帰

乱れる事になるのである。 させて傍に仕えさせた。 鮑叔牙は憤懣と心配が高じて病死してしまった。斉はこれより大いに

さてこの後は如何なりますか、次回のお楽しみ。

### 晏蛾児 塀を越えて節に殉じ第三十二回

桓公の公子たち 朝堂を騒がす

た。三人は益々憚ることなく、桓公が耄碌してきたのをいいことに、 せばか ものうと した。 鮑叔牙は口を極めて諌めたが聞いてもらえず遂に病死してしまっ 斉桓公は管仲の遺言を聞かず、再び豎 刁、雍巫、開方の三人を登用

国事を独断専行した。三人に従順な者は昇進し或は富が増え、逆らう者

この話題はしばらく置いておく。

は死刑あるいは追放された。

自分は太子を治す事ができますと言って宮中を訪問した。 大昔、黄帝の時代扁 鵲という医薬に精通した有名な医者がいたが、人々 悪いか一目で見通す事ができるので、盧医の医術は非常に有名になった。 向うの人が見えるようになる薬である。病人を看ると五臓六腑の何処が うに明るくなって、暗闇の中でも怪物を見分けられるようになり、壁の れに感じて彼に一種の神薬を授けた。これを池の水で飲むと眼が鏡のよ 言動が風変りなのが気に入って厚遇し報酬を求めなかった。長桑君はこ をしていた事がある。 ある時長 桑 君という人が泊まった。 秦緩は彼の といい、斉国の盧村に住んでいたので盧医といわれていた。若い頃旅館 は盧医の医術がすごいので古代の名人に 擬 え扁 鵲と呼ぶ様になった。 話変わって、この頃鄭出身の名医がいた。姓を秦、名を緩、字を越人 何年か前、彼が虢国へ行った時、ちょうど虢の太子の急死に遭った。 「太子はもう亡くなっているんですよ、生き返るわけがないでしょう」 8

「とにかくやらせて下さい」

を招き入れた。彼は弟子の陽厲に針治療をさせた。まもなく太子は蘇っ と扁鵲が言うので内侍は魏公に報せに行った。魏公は涙ながらに扁鵲

生の技術を褒め称えた。彼が天下を周遊して救った人は数知れない。 た。さらに薬を与え二十日ほど経つと回復した。世の人は扁鵲の起死回

ある日、臨淄に来て、斉桓公に謁見した。

大変な事になります」 「ご主君には皮膚の内側に病がございます。治療を致しませんと将来

「わしは今まで病気などやったことがない」

った。 桓公は信じなかった。扁鵲は帰り、五日後に再びやって来て桓公に会

す 「ご主君のご病気は血管に入っています。これは絶対に治療が必要で

それでも治療すると言わなかった。また五日経った。

桓公はなおも治療を断った。扁鵲は退出した 「ひどいもんだ、医者と言うやつは病など無い健康な者にまで無理に 「ご主君の病はすでに内臓に達しています。治療をお急ぎください」

病気だと言って治療をしようとするんだから」 更に五日が過ぎ扁鵲はまた謁見を求めた。彼は桓公の顔色を見て何も

桓公は人を遣ってそのわけを聞かせた。

言わず退出して帰って行った。

酒薬 (酒で調合した薬) で治療できます。 しかし、今は骨髄に達していま 温湯湿布で十分でした。血に入れば針治療が必要になり、内臓に及べば 「ご主君の病はすでに骨髄に達しています。病原が皮膚にあるうちは

何も申し上げずに退出いたしました」

すのでご命令をお受けしても処置のしようがございませんでしたので、

が、 その後五日経つと果たして桓公は病の床につき、扁鵲を呼びに遣った 旅館の者は

と言った。桓公は後悔して止まなかった。 「秦先生は五日前に旅支度をして発たれました」

桓公には最初王姫、徐姫、蔡姫の三人の夫人がいたが三人とも子供が (扁鵲については『史記』扁鵲列伝参照

後六人の如夫人(第二夫人)ができた。皆同じように君主の寵愛を受け待 遇は夫人と差が無かったので如夫人と呼ばれた。六人にはそれぞれ一子 なく、王姫、徐姫は先に相次いで亡くなり、蔡姫は蔡国へ帰した。その

があった。一人目の如夫人は長衛姫といい、子は公子無虧という。二人 子は公子潘、五人目は密姫、子は公子商 人、六人目は宋華子、子は公 目は少衛姫、子は公子元、三人目は鄭姫、子は公子昭、四人目は葛嬴、

子雍という。その他にも妾は多く子も多かった。

雍巫、豎 刁 と長衛姫は密接な行き来があり、彼らが桓公に公子無虧を の子の公子無虧は公子の中で最年長であった。しかも桓公の寵臣である この六人の第二夫人のうち長衛姫が桓公に仕えた期間が最も長く、そ

の後桓公は公子昭が聡明なので昭を愛し、管仲と相談の上彼を太子にし、

世子に推薦していたので桓公はそれに同意したことがあった。しかしそ

葵丘の会盟のとき宋襄公に昭の後見を頼んでおいた。

寵愛を受けている事もあって野望が芽生え出していた。 衛の公子開方だけは公子潘と親密で潘を後継にしようと企んでいた。 公子商人は人に施すのが好きな性格で非常に民心を得ていて、母親が

ていたが、その他の五人の公子はそれぞれ自分の与党を作り互いに猜疑 公子雍だけは母親の出身が低い身分なので分相応に身の保全を図っ

備し公子たちの反乱にも備えた。

桓公は一代の英主ではあるが、いわゆる、『剣も古びれば光なく、覇王も 心を持ち、五頭の虎のようにみな爪や牙を隠して、陰に陽に争ってきた。 一方中の桓公であるが、床に臥せって立ち上がることもできない。側

らせて桓公の生死の確認をさせるようにした。さらには宮中の衛士を整

廉無欲ではなく常に目標を忘れる事がなかったが、このところ耄碌して 老いればただの人』で、長年覇主として士気に溢れ、酒女に耽っても清 がして、まもなく誰か窓を推して入ってきた。よく見ると賎妾の晏蛾児で んやりとしていた。突然上から何かが落ちてきたようなドスンという音 近の者を呼んでも答える者は誰もおらず、ただ両目を開けなんとなくぼ

は耳目を覆われ、ただ歓楽に耽り憂国の意識もなく忠言を聞かず 諂 い 覇気もなくなってしまった。 しかも、小人を登用して政治向きに関して 「腹が減った、粥が欲しいのだが作って来てくれないか」

「お粥は何処にも見当たりません

「暖かい湯でもいい、のどを潤したい」

るようせがむが、桓公もあいまいな返事をするだけで全く処理能力を失 のみに耳を貸すようになった。五人の公子はそれぞれ母親に太子になれ

正に『遠き 慮 りなければ必ず近きに憂いあり』である。

「お湯もだめなんです」

突然桓公が病気で寝込み、扁鵲が何も言わないで帰ったので不治の病 「易牙殿と豎 刁 殿が謀反を起こしまして、宮門を閉じ三丈もの塀を 10「どうしてだ」

建て外と隔絶していますので、人も通れずお食事をお持ちする事もでき

宮門に桓公の命令だと偽って次のような内容の札をかけたのである。 ません」

と判断し、雍巫は豎司と相談して一計を案じた。

心臓の動悸が激しく苦しいので当面人の声を聞きたくない。家臣、

「そなたはどうして此処に来たのだ」

期をお見届けしようと思いまして命を顧みず塀を乗り越えてまいりまし 「わたくしは一度主上のご恩を頂戴いたしました。ですから主上の最

「太子昭はどうしている」

「二人に外で遮られて入る事ができないのです」

であった、これは身から出た錆だ」 ああ、仲父はやっぱり偉いやつだった。やはり彼の忠告を聞くべき

て、塀の下に一つだけ犬の通り道のような穴を開け、朝晩小内侍にくぐ

寝室の周囲には三丈ほどの塀を建て風の隙間もないほどに内外を隔絶し **侍衛たちを男女を問わず全員宮廷から締め出し宮門を閉鎖した。しかも** いに来ても宮中には入れなかった。 三日経っても桓公が未だ生きているので、雍巫、豎刁は桓公の側近の 公子無虧だけを長衛姫と一緒に宮中に住まわせ、他の公子たちが見舞 雍巫に巡邏させる。国事は一切病気が平癒してから処理する。 子、親族を問わず宮中に入る事を禁止する。寺貂に宮門を厳守させ

奮い立って大声を出し、

「ああ、神さま、小白の最期はこんなことなのでしょうか」

と何度も叫び何度も血を吐き、蛾児に言った。

わからないわ」

「死んでお供をしますと申し上げたけど、女でどうして葬ればいいか

しを看取ってくれた。平素何もしてやれなかった事を申し訳なく思う」 「籠姫が六人、子も十数人もいるが誰も傍にいない。そなただけがわ

お供をいたします」 「殿さま、しっかりなさってください。万一の時はわたくしも死んで

「わしは何の面目があって九泉で仲父に逢う事ができよう」

そう言って着物の袂で顔を覆い嘆きながら息絶えた。

三才であった。潜淵先生の桓公の業績を讃えた詩がある。 襄王九年(紀元前六四三年)十月で在位は実に四十三年になる。享年七十

桓公の即位は周庄王十二年(紀元前六八五年)五月、亡くなったのは周

南に王を僭称する楚を討ち 包茅を貢をがしめ 周朝東遷後 綱紀は亡びしも 列国に尊王を首唱し

斉桓公 正に誰もが認める 正真正銘春秋五覇の雄 衛・邢の復国援助で仁徳示し 大義に訴え周太子の即位を助く

北は辺境の砂漠に入りて 頑迷な北戎を討つ

朝病に伏せば牙刁狂う
仲父知りせば浮かばれまい

四十数年覇王を称え 南破征西無敵の英雄

塀が高く声が外に届かない。塀を越えて出ようと思ったが足場がなく乗 り越える事はできない。あれこれ思ったが、しかたないとため息をつき、 **晏蛾児は桓公が死ぬとしばらく泣き崩れた。外へ人を呼ぼうとしたが** 

そこで、着物を脱いで桓公の遺体に掛け、二枚の窓を降ろしてこれで

桓公を覆い仮納棺をした。そしてベッドに叩頭の礼をして、 「お殿さま少々お待ちください、わたくしもお供いたします」

その夜、小内侍が穴をくぐって中に入り、寝室の柱の下の血溜りに死 と言って頭を柱にぶつけて死んだ。賢女なり。

「主上は頭を柱にぶつけて亡くなっています」

体があるのを見て、慌てて出てきて巫、刁の二人に報告した。

が、それが女性の死体だったのでびっくりした。 二人は信じられず内侍たちに塀を掘って開かせ自ら確かめに行った

ベッドの上を見ると二枚の窓枠で覆われて物も言わず動かなくなった斉 内侍の中に知っている者がいて、それが晏蛾児だとわかった。そこで 11

ヒッタータック 哀れなるかな。亡くなった時間もわからない寂しい死であった。あめ、哀れなるかな。亡くなった時間もわからない寂しい死であった。 豎 刁 はすぐに死亡通知の件を雍巫に相談した

「ちょっと待った。もめ事が起こらないよう先に長公子 - (長衛姫の子

無虧)の君位を決定しておいてから発表したほうがいい」

豎刁も賛成しすぐに二人で長衛姫の宮殿へ行き密かに報告した。

位が適当と考えます。しかし、先君がご存命中に公子昭を太子に立てる 「先公は亡くなられました。長幼の序に従って、夫人のお子さまの継

から、このばたばたに乗じて今夜宮中の衛士を使って太子を攻め殺して

おります。先君が亡くなったことを知れば必ず太子を補佐するでしょう について宋公に後見を頼んでいて、家臣たちの多くがそのことを知って

しまうのがいいと考えます。そうして長公子を奉戴して即位願えば大事

は定まります」

「わたしは女ですから、卿の良きに計らってください」

そこで、雍巫、豎刁は宮中の衛士数百名を率いて世子を捉えるために

東宮へ突入しようとした

としていた。その夜、孤灯をかかげぼんやりとしていると、夢かまこと 一方世子 昭 は、父親の見舞いに宮中に入ろうとしたが許されず悶々

「太子早く逃げてください、危険が迫っています。わたしは晏蛾児と 一人の婦人がやって来て、

申します、先公のご命令で特にお知らせに参りました」

と言う。昭が何か聞こうとすると、婦人に一押しされ千尋の淵に落ち

も奇妙な事なので放っておけず、いそいで従者を呼び明かりをもたせ、 るところではっと目が覚めた。もう婦人はどこにもいなかった。余りに 上 卿の高虎の屋敷へ行き、これこれと夢に見た事を話した。

「殿は病気で半月寝ていましたが奸臣のために内外を隔絶され、状況

がつかめなくなりました。世子のこの夢は吉の可能性は少なく恐らく凶 っているのです。この話は信じたほうがいいです。世子は不測の事態に 兆でしょうね。夢の中で先公と言っているという事は恐らく殿は亡くな

備えててしばらく外国へ避難された方がいいでしょう」

「何処が安全だろうか」

宋公ならきっと公子を守ってくれると思います。わたくしは国を守る役 割がありますので、世子と同行できませんが、わが門下の崔夭という者 「殿は以前、宋公に世子の後見を頼んでいますから宋が最も適当です。

が東門の鍵を管理していますので門を開けさせておきますから夜陰に乗

じて城を出てください」 話が終わらないうちに門番が、宮中の侍衛が東宮を包囲していると知

らせて来た。昭は驚いて顔が真っ青になった。 へ行って崔夭に、開錠して世子を外に出すように、という高虎の指示を 高虎は昭を従者と同じ服装に変装させ、腹心の者に、昭と一緒に東門

伝えるよう命じた。崔夭は、

しければ宋へご一緒いたしましょう」 う事は大変な罪です。<br />
太子の随行者がいないのでしたらわたくしでよろ 「主君がご存命かどうかわからないのに、太子を勝手に放り出すとい

世子は大変喜んだ。崔夭は直ちに城門を開き自分で車馬の 轡 を取り 「そなたが同行してくれれば願ったりかなったりだよ」

宋国へ向け急いだ。

話変わって、巫、刁二人は宮中の侍衛を率いて東宮を包囲し、世子を

探し回ったがどうしても行方がわからなかった。時の太鼓が四更(午前 一時前後を打った。

って長公子を擁立したほうがいい。それから状況を見てもう一度対策を

他の公子たちに知られて朝堂を先に占拠されたらおしまいだぞ。早く帰

「相手の意表をついて東宮を包囲したが、ぐずぐずして夜が明けると

立て直そう」

に暇がない。彼らは巫、刁二人が大勢の兵を率いて宮城を出て行ったと 管氏、鮑氏、陳氏、 隰氏、南郭氏、北郭氏、 閭 丘氏ほか参集者は枚挙 来る前に朝門は大きく開かれ百官が次々と集まっていた。高氏、国氏、 雍巫がそう言うと豎刁も賛成して二人は兵を引揚げた。宮城に帰ってょうよ

も公知となっていた。ていて、奸臣がこれに乗じて反乱を起し東宮が包囲されているという事ていて、奸臣がこれに乗じて反乱を起し東宮が包囲されているという情報は漏れて来たのである。宮中ではすでに、斉侯が亡くなったという情報は漏れ聞き、宮中に何か事件があったに違いないと思って情報を聞きに参内し

のことがあれば斉侯に申し訳ないではないか」「あの方は先公がお決めになった世子である。もしこの世子にもしも

を連れて帰ってきた。みな一斉に二人の前に集まり、世子の消息を聞い三々五々世子救出について話し合っていたところへ巫、刁二人が兵

ょうか。 きょうしゃ 「世子無虧殿は宮中におられます」 せいしゃ き

雍巫は拱手して答えた。

豎刁は、剣を持って大声で恫喝した。

国君に奉戴する。これに従えない者はこの剣で誅殺する」「昭は追放した。先公のご臨終の時のご遺命によりご長男の無虧殿を

集まった人々は口々に不平を鳴らし

らは臣従しない」 勝手に君位を改廃しようとするものだ。無虧殿を君主に立てるならわれ られはみな、先君を欺き我われをないがしろにして、そなたたちが

さらに、と、管平(管仲の子 北京金盾出版社東周列国志脚注)は身を挺して言い、

う」
「先ずこの両奸臣を始末して禍根を除いてから先のことを相談しよ

と言って手に持った象牙の笏で豎司の額を打ったが豎司は剣でそれ

たちに大声で叱った。、を受け止めた。集まった諸官が管平に加勢をしようとすると、雍巫は兵を受け止めた。集まった諸官が管平に加勢をしようとすると、雍巫は兵

「皆の者!何をしている、日頃お前達を養っているのは何のためだ」数百名の兵士が一斉に武力行動を開始し官員たちに無作為に斬りか数百名の兵士が一斉に武力行動を開始し官員たちに無作為に斬りか数百名の兵士が一斉に武力行動を開始し官員たちに無作為に斬りか数百名の兵士が一斉に武力行動を開始し官員たちに無作為に斬りか数百名の兵士が一斉に武力行動を開始し官員たちに無作為に斬りか数百名の兵士が一斉に武力行動を開始し官員たちに無作為に斬りか数百名の兵士が一斉に武力行動を開始し官員たちに無作為に斬りか数百名の兵士が一斉に武力行動を開始し官員たちに無作為に斬りか数百名の兵士が高の大力である。

まだ新君をお迎えした事を知りません。国、高の老臣をお召しになって「先君がお亡くなりになった事をまだ発表していませんので、群臣は

百官を呼び出させれば人々を承服させられます」

てかけつけた。 
こうと無虧は雍巫の申し出を認め、ただちに右卿国懿仲、左卿高虎の両人を内侍にそれぞれ呼びにやった。この両氏は周天子が命じた監国の両人を内侍にそれぞれ呼びにやった。この両氏は周天子が命じた監国の一人を内侍にそれぞれ呼びにやった。この両氏は周天子が命じた監国のである。国懿仲と高虎は内侍から召喚なので彼らを呼ぶ必要があったのである。国懿仲と高虎は内侍から召喚なので彼らを呼ぶると思いる。

巫、刁二人は急いで門外で引き止め、

「今日は新君の登位の日です。まずは吉礼に従ってください」

13

と言うと、国、高二老は声をそろえて、

ければならないという事はありません、葬儀を主宰した人が継位すれば挨拶をするというのは非礼ではないですか。先君のお子であれば誰でな「旧君のかりもがり(埋葬前の儀式)も行われていないのに先に新君に

いいと思います」

て帰って行った。 で帰って行った。 で帰って行った。 で帰って行った。 で帰って

1ば、^^! 「先君の葬儀が終わっていないのでは群臣も従わないだろう、どうす

らくさ ぎょしぎょく こうぎょく しょう はい こうとう 上は正殿にいていただき、 臣たちが両側に兵を忍ばせ、 入朝しようとす「これは虎を捕えるという譬えのように力がある方が勝つのです。 主

無虧は彼の意見に従った。長衛姫は宮中の兵を全て出して、内侍も全る公子がいればすぐに始末いたします」

さて、衛の開方は、巫、刁が無虧を擁立していると聞いて、葛嬴の子れぞれ半数ずつを引きつれ廊下の下に隠しておいた。からないて武装させ宮女の中で体が大きく力のある者は兵の数に入れ、巫、刁そ

密姫の子商人は小衛姫の子元と相談しながら、と言い、家兵で決死隊を作り右殿に陣取った。と言い、家兵で決死隊を作り右殿に陣取った。「太子昭は何処へ行ったかわかりませんが、無虧が君主になれるのな

「みな同じく先君の血族だから斉の国を分与されない理由はない。

います」

しよう」 もし世子昭が帰ってきたら世子に譲り、帰ってこなければ斉国を四等分もし世子昭が帰ってきたら世子に譲り、帰ってこなければ斉国を四等分公子潘が右殿に拠ったのであれば、我われは左殿に陣取ろうじゃないか。

者で話し合って掎角の体勢をとることにした。
とした。公子元は左殿に陣をとり、公子商人は朝門に陣をとって、両とした。公子元は左殿に陣をとり、公子商人は朝門に陣をとって、両と言う。元は同意してそれぞれの家兵および門下の士を組織して軍隊

御していた。まさに、宮城内でそれぞれ敵国を成し、通行人もいなくなった。三公子も巫、刁の力を畏れそれぞれの軍営を守り突撃を慎重に防巫、刁は三公子の勢力を畏れ、正殿を固め、攻めて出ようとはしなか

鳳閣龍楼に虎豹吠え 続々宮殿に軍隊溢る

四虎争い最後の肉を狙い 頭を下げる者あらばこそ

主がいないので、みな門を閉じて外出しなくなった。
さて、諸官は世子が出奔したことがわかり、無虧を認めず朝見する君さて、諸官は世子が出奔したことがわかり、無虧を認めず朝見する君公子雍だけは事態を畏れ秦国へ逃れ、穆公に大夫として用いられた。
(鳳閣龍楼―宮城の建物)

ばない。そんな状況でいつの間にか二ヶ月余りが過ぎた。老臣国懿仲と高虎は心を痛め解決の道を探っていたがいい案が浮か

ていません。わたしはこれから命がけでこの問題の解決に当たろうと思「公子たちの頭は君位をとる事ばかりで先君の葬儀の事は誰も考え

ある日高虎が国懿仲に言った。

ら呼応して敵をけん制し、または両方から挟撃すること 「春秋左氏伝 襄公14年。掎角 鹿を捕えるのに前から角を後ろから足を取るように 兵を二分して 前後か

<sup>4</sup> 大哭 死者を悼み大声で泣く習慣があ た

これを聞くと群臣はみな地に伏して慟哭した。無虧も涙を流した。

「わたしの不孝は、大罪に当ります。先君の葬儀のことは気にはなっ

いまこそ代々爵禄をいただいてきたご恩に報いる時です」 「あなたに先に言われたが、わたしも一緒に命を投げ出しましょう。

をかけて朝堂に集め、公子無虧殿に葬儀を主宰願うのは如何ですか」 「二人だけでしゃべっていてもどうにもならない、家臣の一軒一軒声

そこで分担して四方に飛び群臣に先君の葬儀に出席するよう呼びか 「『長子継承』ということからいえば無虧殿に大義名分がありますね」

けた。

参内して来た。 群臣は老大夫二人が呼びかけ人なので公然と喪服を着てぞろぞろと 寺貂は彼らを引き止めて高虎にいった。

「老大夫殿ここへ何をしに見えたのです」

公子に先君の葬儀を主宰していただこうとお願いに来たのだ」 寺貂は高虎に拱手の礼をとり通した。高虎は手で国懿仲に合図して群 「あちこちで向き合っていて事が進まないから、わしらは他でもない

臣と一緒に宮中に入り、朝堂で無虧に会った。

主君が不孝であれば臣がどうして忠でありえましょう。すでに先君が亡 事がありません。しかも主君は臣下に対する模範でなければなりません。 が亡くなっているのに葬儀も行なわず富貴の奪い合いをするなど聞いた は父母に対し、生前は敬い、亡くなれば厚く弔うべきであります。父親 殿におられて平気でおられましょうか」 くなられて六十七日になりますが未だ納棺も終っていません。公子は正 『父母の恩は天地の如し』といわれています。ですから子たるもの

> ていたのですが。元たちが攻めて来るのが心配で」 「太子はすでに出奔されていて、公子が最年長です。公子が先君の葬

たします。公子と争う方はどなたもいらっしゃいません」 子元殿等が各殿門に分拠されていますが、この老臣が義をもって説得い 儀を主宰なさって埋葬なされば公子が君位を継がれる事になります。公

無虧はお辞儀をして涙を収めてそう言った。 「卿の言われる事はわたしの願うところです」

高虎は雍巫に殿中の廊下を警護させ、公子たちがおとなしく葬儀に参

え肉は腐乱し死臭がむんむんして虫が蟻のように塀の外まで這い出して 命じた。寺貂は前もって寝殿へ行って納棺埋葬の手配を行った。 加するのであれば入れるし、武器を離さない者は直ちに捕えて罰せよと 桓公の遺体はベッドの上で長い間、誰も顧みる者がおらず、冬とはい

寝室に入って窓を開けると虫が遺体に集まっていて、みるも無残な有様 きているようで形も崩れていなかった。高虎らは忠烈の婦人だと知って かにざっと包帯でくるむ程度であった。ただ、晏蛾児の遺体は顔色は生 うちにきちんと納棺を終えたが、遺体は皮肉が腐ってしまっていてわず であった。無虧は声を上げて泣いた。群臣も皆泣いた。そしてその日の いた。最初外から見たときその虫が何処から来たのかわからなかったが、

高虎らは群臣を引連れ無虧を葬儀の主宰者の地位に奉じ、全員順次弔

むべなるかなと非常に感動し彼女も厚く葬らせた。

ってその夜は棺の傍で通夜を行った。 方、公子元、潘、 商人は外の各陣営にいて、高、国の両老臣が群

後から桓公の納棺は終わり群臣はみな無虧を奉じて葬儀の主宰者とし君 臣を引連れ喪服で参内するのを見たがその意味がよくわからなかった。

主に奉戴したと伝え聞き、

「高、国が指導しているのならわれら争っても仕方がない」

互いに声を出して泣きあった。 と言って、それぞれ兵を解散し一緒に葬儀にかけつけ、兄弟が揃いお

ったかはわからない。胡曾先生の詩 高、国二人の老臣が無虧を説得していなければこの件の結末はどうな

忠臣の諫言聞かず佞臣を寵信 結果骨肉の争いに至る 高国二老の仲裁なかりせば 白骨埋れ葬儀もなからん

に伏し雍巫、豎 刁の反乱事件を訴えた 話変わって世子昭であるが、彼は宋国へ逃避し襄公に会い、泣いて地

襄公は群臣を集めて話をした。

た。それから指折り数えて十年になる。わしは常にこの件を忘れた事は 「昔、斉桓公がわしに公子昭殿の後見役を頼んで昭殿を太子となさっ

れを実施すれば、諸侯を動かす大義名分ができ、会盟を主宰して桓公の 侯を集めて一緒に斉を討ち昭を斉に帰して君主に戻さなきゃならん。こ ない。いま、巫、刁が内乱を起こし太子を追放したとあれば、わしは諸

「宋は三つの点で斉にかないませんが、それでも諸侯に覇を唱えられ

覇業を受け継ぐ事ができるのだが、どうだろうか」

ましょうか」 誰かと思えば公子自夷、字は子魚である。かれは、宋桓公の長男で襄誰かと思えば公子自夷、字は子魚である。かれは、宋桓公の長男で襄

公の庶兄、先年襄公が即位するとき彼に国を譲ろうとしたが受けなかっ

たので、襄公から上卿に任じられた人である。 「子魚のいう『斉にかなわぬ三点』とは何だ」

これが第一点。斉には高、国という代々の卿がいて国を支え、管仲、寧戚、豊かな土地でありますが、わが国は国土は狭く兵力も食料も少ない事、

「斉は泰山、渤海によって地理的に険要であり、琅琊、即墨は非常に

れ、どちらも覇王にのみ見える瑞兆がありましたが、わが国では正月に 桓公は北伐の時兪児に会い道を教えられ、郊外の巻き狩りでは委蛇が現 文武共に人が足らず賢才も少なく人の層に違いがある事、これが第二点。 隰 朋、鮑叔牙が都度の謀略をもって事に当ってきました。わが国には

これらの事を勘案しますと斉とは実力が違います。自己防衛が精一杯で されていたというあまり好ましくない現象があったこと、これが第三点。 羽の鷁。が吹き飛ばされ上がっては吹き降ろされ、進もうとしても吹き返

五個の星が落ちてきましたが全て石に変り、二月には異常大風があり六

「わしは仁義を大切にしたいが遺児を救わなければ仁者とは言えな 16

他人のことに構っている余裕がありましょうか」

に集合するという檄を飛ばした。 い。人から頼まれていてこれを放棄するのは不義である そう言って、諸侯に、太子昭を君主にするために来年春正月に斉郊外

檄が衛国に届いた。

北狄に殺された後斉が復国援助 23 回) がありますのでこの話には乗らない 常識です。無虧は長男でしかもわが国としては彼に国防の恩(鶴の懿公が 「君主の継位は嫡子を優先し、嫡子がいなければ長男というのが礼の

ほうが言いと思います」 衛大夫寧速がこのように進言したが、衛文公は

を彫刻した。龍頭鷁首。 鷁 白鷺に似た大形の水鳥 風によく耐えて飛ぶといわれ、古代母人 さきにその形 と、高虎が国懿仲に言うと、

「易牙は郊外に駐屯しているから、わたしが豎 刁を相談したいといっぽきが

義を捨てる事はわしにはできない」
「昭殿はすでに世子で立り、ことは公義である。私恩のために公「昭殿はすでに世子であり、この事は天下周知の事だ。助けてもらっ

檄が届いた魯国では、

ける」
「斉侯は昭を宋に託したのでありわしは頼まれてはない。長幼の序と

と言うのが鷽僖公の意見であった。

とし、城を出て迎撃体制を取らせ、高、国二卿は分担して城を守った。は中大夫に昇進し司馬として兵権を握っていた。無虧は彼に寺貂を参謀曹、邾の三国の連合軍を自ら率いて斉郊外に陣営を置いた。この時、雍巫曹、邾の三国の連合軍を自ら率いて斉郊外に陣営を置いた。この時、雍巫曹、邾の三国の十年、斉公子無虧の元年三月、宋襄公は世子昭を奉じて衛、周襄王の十年、斉公子無虧の元年三月、宋襄公は世子昭を奉じて衛、

高虎はそっと国懿仲に言った。

「我われが無虧殿を立てたのは先君の葬儀が行なわれてなかったか「我われが無虧殿を立てたのは先君の葬儀が行なわれてなかったからで、奉戴したわけではない。今世子が宋軍のなかにおられるのだかららで、奉戴したわけではない。今世子が宋軍のなかにおられるのだかららで、奉戴したわけではない。今世子が宋軍のなかにおられるのだからいません。この機会に彼らを除き、世子をお迎えして君主に奉戴するにいません。この機会に彼らを除き、世子をお迎えして君主に奉戴するにいる。この機会に彼らを除き、世子をお迎えして君主に奉戴するにいる。 「我われが無虧殿を立てたのは先君の葬儀が行なわれてなかったからます。

国懿仲も積極的に同意してこう提案した。えしましょう。易牙は手が出せないと思います」て呼び出して殺し、大夫たちを引連れ世子を無虧殿に変えて君主にお迎て呼び出して殺し、大夫たちを引連れ世子を無虧殿に変えて君主にお迎

高虎もその案に賛成したので、国懿仲は直ちに壮士を伏せて機密の重「それは妙案です」

まさに、「謀略で猛虎を捉え、好餌ですっぽんを釣る」の策である。要事項の相談があると言って豎刁を呼びにやった。

豎刁の生死は如何なりますか、それは次回のお楽しみ。

### 宋公 斉に出兵し公子昭を擁立

### 楚 伏兵を置き盟主を強奪す

ずに横柄な態度でやってきた。高虎は部屋に酒を置いて、三杯ほど飲ん ませて、豎刁を打ち合わせをしたいといって呼びにやった。豎刁は疑わ 高虎は雍巫が兵を率いて城外に出るとすぐに城内の楼閣に壮士を潜

「今宋公が諸侯を集めて大軍で太子を此処へ送ってきていますが、ど

だ後高虎が話し出した。

のようにしてこれを打ち破りますか」

「すでに易牙が兵を率いて迎撃に出ています」

斉を救うためにお願いしたい事があるのですが」 「わたしが何をやればいいのです。老大夫のご命令なれば何なりと」 「衆寡適せずですが、どうすればいいでしょうか。わたしはあなたに

「わたしが欲しいのはあなたの首です。それを持って行って宋に謝る

のです」

豎刁は驚いて立ち上がった。

「やれっ」

た。 と高虎の合図とともに壁の間から壮士が飛び出してきて豎刁を斬っ

高虎は城門を開き、

「世子が城外に帰って見えている。迎えに出る気のある者はわしに随

いて来るように」

と伝令を出した。人々はもともと巫、刁二人に反感を持っていたので

無虧にはつかず、高虎が世子を迎えに出たのを見てみな進んでそれに従 いその数は千人を越えた

国懿仲は参内して無虧に会い 「人々は世子の推戴を望んで迎えに行っております。老臣は引止める

ことはできません。速やかに避難なさいますよう」

と忠告した。

「雍巫と豎刁はどこにいるのだ」

「雍巫の戦況はわかりませんが豎刁は国人に殺されました」

|国人が豎||を殺したというのに、そなた知らなかったわけはなかろ

Ž

と朝門を逃げ出した。 無虧は怒って、左右の者に懿仲を捉えさせようとしたが懿仲はさっさ

って出た。内侍が周囲に呼びかけるが誰もそれに答えようとするものは 無虧は内侍数十人を引連れ小型戦車に乗って剣を振り上げ憤然と打

いない。逆に多くの人々が仇と呼ばわって集まってきた。まさに、

恩徳には何時か報恩あり 冤恨は忘れ去られる事なし

ということであろう。

不運にも以前犯せし誤ちの

報いが纏めてやって来た

はらぶったちょう (公孫、誾 丘 各氏の孫達で、無虧に臣服しないというだけ南郭、北郭、公孫、誾 丘 各氏の孫達で、無虧に臣服しないというだけなんかく ほくかく こうこく かん ほう ねい ちん あん とうかく これら恨みを懐いている者は、高、国、管、鮑、寧、陳、晏、東郭、これら恨みを懐いている者は、高、国、管、鮑、寧、陳、晏、東京かく

で雍巫、豎刁に殺され、家族はそれぞれ無念の恨みを抱いていた。宋君

行われることに後ろめたい気持ちもあった。しかし高相 国が豎刁を殺し もあり雍巫が負ける事を期待していたが、宋軍との戦いで新たな殺戮が が太子を送って来ているのを雍巫が迎撃していると聞いて、個人的感情 新君を迎えに行く約束をしていた。

ところが商人はこれに反して、

太子を迎えると聞き

「神さまもやっと目を開いてくださった」

声を荒げて言った。 会い誰かが口火を切ると、一斉に武器を持ち無虧を取り囲んだ。内侍が 東門まで来たところでばったりと無虧の車に出会った。目の前で仇に出 と喜こび合ったものである。みんなで武装して太子の情報を確かめに

「殿がここにおられる、皆のもの無礼であるぞ」

「どいつが殿だと言うんだ」

した。懿仲は無虧の死体を別館へ運び納棺し、同時に高虎に急報した。 したが結局殺され、東門は湧き上がった。国懿仲がなだめてやっと解散 と怒鳴って内侍を斬り倒した。無虧はかなわず慌てて車を下り逃げ出

迎えに行っている。われらは逆臣に協力する事はできない」 一方、雍巫は東関に陣を張り、宋と対峙していた。その夜突然、 「無虧、豎刁はどちらも殺され、 相国高虎殿が国人を率いて太子昭を

させた。そして郊外へ世子昭を迎えに行き、宋、衛、曹、邾の四国と講 りイライラして急遽腹心数人を連れてその夜の内に魯へ出奔した 夜が明けると高虎が雍巫の陣へやって来て彼の部下たちを慰め安心

という噂が軍中に乱れ飛んだ。雍巫は既に兵士の心が変ったのがわか

懿仲に使いを出して君主の車を用意すると共に百官の出迎えを頼んだ。 さて、公子元と潘はこれを知って、公子商人に会ってみんなで揃って 高虎は世子昭を臨淄城外に案内してしばらく公館に休んでもらい、国 和し、その後四国軍は解散した。

押え付けられる事がないよう、また先君の覇業を失わないようにしなき 大夫たちの合議に従って、われわれ三人の中で誰かが君主になり、宋に 家兵を率いて無虧の仇討ちを名目に昭を殺ってしまうべきだ。そのあと じゃないか。こんな馬鹿な事はない。諸侯の兵は引揚げたようだから、 ないで宋の兵力を借り長幼の序も無視して斉を強奪しようとしているん

我われは国にいて先君の葬儀にかけつけたのに、昭は葬儀に参加し

やならん」 と言い出した。それを受けて公子元は、

「それなら宮中の人の命令を奉じる形にすれば大義名分が立つんじ

やないか」

世子に対抗した。豎司の腹心たちも復讐しようと加勢に集まり、分担しと言って、直ちに無虧の旧側近たちを集め三公子の与党を合わせて て臨淄城の各門に拠点を置いた。国懿仲は四家の兵力を恐れ、屋敷の門 と言って、宮中へ行き長衛姫にそのことを話した。彼女は泣きながら、 「あなた方が無虧の仇を討ってくれるのなら死んでも悔いはないわ」

高虎は世子昭に、

を厳重に閉めて出なかった。

ば戦いになり、敗れたら前の勝利も灰燼に帰します。ここは宋へ避難し になって城門を閉じて世子の入国を拒んでいます。 もし入国を強行すれ

「無虧と豎刁は死んでもその仲間は未だ健在で、しかも三公子が中心

救援を求めるのが上策です」

**驚き、来意を訊ねた。高虎が詳細にわたって説明した。** 宋襄公は撤兵し国境へさしかかったところへ世子がやって来たので と説得し世子を納得させて彼を奉じて宋へ出奔した。

19

臨淄に入城することなど心配しなくても大丈夫ですよ 「撤兵が早すぎたからだ。世子安心してください。わしがいるから

襄公はそう言って直ちに大将公孫固に戦車の増強を命じ、先に衛、 曹

| 邾三国連合のときは車は二百乗しかなかったが四百乗に増やした。公子

事を知ると直ちに門を開いて通し、軍は臨淄の近くに駐屯した。 国門が 国境を離れ斉に入った。 高虎は先頭を駆け、 関所の守将も高相 国である 蕩を先鋒、 華御事を後詰とし、 自らは中軍を率いて、 世子を護って再び

厳重に閉鎖されていたので襄公は城攻めの準備をさせた。

城内では公子商人が公子元と公子潘に言った。

「宋が城攻めを始めたらきっと民衆が動揺すると思う。我々四家の兵

で相手の体制ができる前に攻めよう。幸いに勝利がはっきりすればよし、

らないだろう」 を期そう。ここで強引に死守しても諸侯の軍が集まってきたら何ともな 残念ながら敗れた場合はとりあえずそれぞれ状況に合わせて避難し再起

元も潘も同意した。

の華御事も斉の国老大夫高虎と一緒に加勢に入った。両軍混戦の内に夜 大将公孫固は前陣が抜かれたと聞き急いで大軍で救援に駆けつけ、後軍 公子蕩の陣であった。 蕩は手の打ちようがなく陣を捨て逃げた。 中軍の その夜、城門を開き宋の陣に夜襲をかけた。攻め入ったのは先鋒の

混戦で宋軍にばらばらにされてしまった。 が一つになっていないのでとても宋の大軍には太刀打ちできず、一夜の

が明けてきた。四家の兵は数は多いがそれぞれ主人がいて全員の気持ち

げて行った。潘と商人は敗残兵を集めて城に入ったが宋兵がぴったり追 公子元は世子昭の入国を恐れ乱に乗じて腹心数名を連れて衛国へ逃

> 官を集め高虎と共に世子昭を君主に擁立した。これが斉孝公でその年を ってきて門を閉じる事ができず、崔夭が世子の車を御して入城した。 元年とした。 上卿国懿仲は四家の兵が四散し、世子はすでに城に入ったと聞き、百

贈与し厚くねぎらい、襄公は斉に五日間滞在して帰って行った。 その頃、魯僖公は大軍を出して無虧の救援に来たが、すでに孝公が即

孝公は論功行賞を行い、崔夭を大夫に任じた。宋軍には大量の礼物を

位した事を聞き途中で引返した。これ以来魯と斉の間には溝ができた。 ったが、ともに元がどうなったか気にしていた。 さて、公子潘と商人であるが、二人は兵を起こし抵抗しようと話し合

みを解いて修好を図りたいというので、反乱の首謀者雍巫、豎刁の二人 国、高の二国老は四家が共謀している事はわかっていたが、孝公が恨

晏蛾児も傍に葬り別に小さな墓を作ってやった。また、無虧、公子元の ৡ৻য়ঢ়৸ その年の八月、桓公を牛 首 崗に葬り、三つの大きな墳墓を並べた。

ために長衛姫、小衛姫の内侍宮人全員が殉死させられその数は数百人に

の墓を盗掘した。墓の前には水銀の池があって異様な寒気が鼻を突きと のぼった。 後年晋の永嘉末年(紀元三一三年)、天下は大乱となり、ある村人が桓公

を牽いて墓の中に入ると、金蚕(金色の蚕)数十斛(一斛は10斗19.4号)、 てもそれ以上中に入れない。数日たってその気も次第に消えたので猛犬

かったが、同時に遺骨が乱雑に散らかっていた。これらはみな殉葬者の 珠の上着、 玉 の 匣 、五色絹で飾った兵器等出土した宝物は数え切れな そうして彼らの力を借りて諸侯を討てば覇業を手に入れることができま

ものである。

の副葬、殉死がなんの役に立とうか。髯仙の詩がある。 孝公がこの時父親を手厚く葬ったという事はわかるが、こんなに多く

古来厚き副葬は盗掘多し 薄き副葬は 吝嗇にはあらずと知れ 何故か山の如き三墓 暴かれて金蚕玉匣世に出たり

盟主になろうと考えた。大国は呼んでも難しかろうと思い、先ず、滕、盟主になろうと考えた。大国は呼んでも難しかろうと思い、先ず、滕、にも稀なる功績と考え、これを機会に諸侯に声をかけ斉桓公に代わりに 君は宋の力を恐れてやっては来たが二日遅れてしまった。 り来たが滕は嬰斉が代理で来たので襄公は怒って一室に監禁した。 鄫 曹、 邾 、 鄫 等幾つかの小国家と曹の南で会盟した。 曹と 邾 は予定通 話変わって、宋襄公は斉兵を打ち負かし世子昭を君主にした事を、世

きです。その時鄫君を利用なさったら如何でしょう」 きていませんでした。殿が新しい盟主をお望みなら東夷を手に入れるべ 遅れた。これにはきちんとけじめをつけないと威信が保てない」 と襄公は群臣に意見を問うと、大夫の公子蕩が次のように進言した。 「諸侯を会盟するのは今回が初めてなのに、小国の分際で鄫は二日も 「昔斉桓公は南北を討伐しましたが、東夷(東部の蛮族)はまだ征服で

公子蕩は話を取上げて反論した。

殺与奪権をもっていると思ってこぞって殿の下へやってくるでしょう。 護を得られるだけでなく、これをやつらに聞かせたら必ず殿が諸侯の生 季節ごとに祭っています。鄫君を犠牲にして睢水の神を祭れば、神の加 睢水の浜には風や雨を起こせる神がいて東夷はみな祠廟を建てて

「どのように使うのだ」

上卿の目夷が慌てて反対した。しょう」

ず、妖神に媚って諸侯を殺すような事があっては諸侯は我々に服するど 21 ころか、かえって惧れて背く恐れがあります」 年盟主を続けられたのは存亡をかけて長年広く天下に恩を施したからで す。そういう年月を経ずに一挙に会盟を行おうとしているにもかかわら なことでは蛮夷が我々に臣従して来るわけがありません。斉桓公が四十 まった祀りがあり、これは宗伯(宗室の事務を司る官)の所管です。いわ 幸せを祈るなんて神もお受けになりませんよ。しかも国にはそれぞれ決 す。そもそも、神を祭る目的は人の幸せを祈るものであり、人を殺して 切にしなければなりません。まして人を犠牲にするなどもってのほかで のを祀るという事は殿が彼らより優れていると言えなくなります。そん んや睢水の河神は妖鬼に過ぎず夷族の信仰対象です。殿が彼らと同じも 「それはなりません。昔から小事に大きな犠牲は使いません。命は大

の問題がありましょうか」 諸侯が天子に対して行ったのです。小国の君主の一人くらい殺しても何 を斬り太白旗に梟首(さらし首)して天下を取ったといいます。 これは 夷は我われを信じず、諸侯は我われを畏れず軽視します。内に軽く見ら 遅速の原則を考え合わせる必要があります。東夷との同盟がなければ東 そも時間が有る場合は徳を用い、急ぐ場合は力と威厳による、すなわち から盟主になったのです。わが殿にはそんなに時間がありません。そも れ外に疑われたのでは覇業を成す事はできません。昔、周武王は殷紂王 「殿と斉侯とは事情が違います。桓公は二十数年かけて国を治めそれ

するよう連絡したが、東夷はもともと宋公のやり方が理解できず誰も来じた。そして使者を出して東夷の首長たちに睢水で祭祀を行うから参加を聞かず、邾文公に鄫君を捕えて殺し煮て睢水の神に祀るるように命襄公の本心は諸侯を早く取り込みたかったので、ついには目夷の意見

曹の大夫僖負羈が曹共公に、滕の嬰子は驚いて多額の賄賂をまわして赦しを求め監禁を解かれた。

なかった。

こは帰るに如かずです」
「宋公はせっかちで残酷ですから大事をなせる人ではありません。こ

帰ってしまった。 と進言したので、共公は地主としての礼を放りだして挨拶もしないでと進言したので、共公は地主としての礼を放りだして挨拶もしないで

襄公は怒って、曹に使者を出して文句を言った。

のです。わが君が貴国に入ってまだ何日にもなりません。貴国の君主の「昔から国君が会合する時は肉料理を出して主客の修好をはかるも

僖負羈はこれに対して、

十分な配慮をお願いいたします」

足いただけるような接待を差上げる余裕がございませんのでどうかご寛わが主君は国務に追われ思うに任せません。恥ずかしながら宋襄公に満場合の一般的な礼儀であります。今、君侯は公事で南鄙へおいでですが、「そもそも宿舎や酒食を出すと言うのは招聘したときや表敬訪問の

はここでも諌めて、と婉曲に断りの挨拶をした。襄公は怒って曹討伐を命じた。公子目夷と婉曲に断りの挨拶をした。襄公は怒って曹討伐を命じた。公子目夷

「以前斉国は諸侯を会盟した時、支出は収入より多く、人には寛大で、

大に願います」

ます」を掛けたわけではないので、軍隊を使ってまで討伐する事はないと思いを掛けたわけではないので、軍隊を使ってまで討伐する事はないと思い人の苦衷をよく察していました。曹は礼に問題は有りますが我国に損害

落せなかった。させたが、僖負羈は臨機応変に対応し、三ヶ月たっても蕩はどうしてもさせたが、僖負羈は臨機応変に対応し、三ヶ月たっても蕩はどうしてもと言ったが、宋公は聞かず、公子蕩に戦車三百輌を与え曹の城を包囲

いものになるのを恐れたのである。そこで蕩に曹からの引揚を命じた。いものになるのを恐れたのであしたら気勢が削がれ、しかも諸侯の笑のは一つは斉、楚どちらかが覇を唱えたら宋はどうしようもなくなる事、し斉の国境での会盟を提唱した。宋襄公はこれを聞いて驚いた。というこの頃、鄭文公が楚の成王に朝見し、魯、斉、陳、蔡の四君主を召集

蕩は次のような案を進言した。

「現在大国といえば斉と楚だけです。斉は覇者だっとはいえ内紛が収現在大国といえば斉と楚だけです。斉は覇者だっとはいえて内が取取を開り、楚に諸侯会盟の協力を頼めば楚はきっと了承すると思います。楚郎の力を借りて諸侯を集め、その後逆に諸侯の力を借りて楚を抑えるのでの力を借りて諸侯を集め、その後逆に諸侯の力を借りて楚を抑えるのでの力を借りて諸侯を集め、その後逆に諸侯の力を借りて楚を抑えるのです。これは一時の間に合わせの計ではありますが」

「その案には無理があります。楚は諸侯を集める力があるのに我われ目夷がまたこれに対し諌言して言った。

7 牛耳を執る(牛耳るの語源

盟約に使う犠牲は天子諸侯では牛豚 大夫は犬

置き その血を別な容器にとる。盟約書を読み上げて神に告げその後盟主から順次庶人は鶏である。歃血盟約の方法は、地に穴を掘り、犠牲を殺しその耳を切て一門に

端緒となる事が懸念されます」 に与し、あるいは我われの下風につくわけがありません。むしろ争いの

で会う事を了承した。
使者に立て、楚成王に謁見を求めた。成王は来意を聞き、翌年の春 鹿 上使者に立て、楚成王に謁見を求めた。成王は来意を聞き、翌年の春 鹿 上襄公は目夷の意見を認めず、すぐに公子蕩に多量の礼物を持たせ楚へ

蕩が復命すると、 襄公は、

「鹿上は斉国だからこれを斉侯に知らせなきゃならん」

を了承した。宋襄公十一年、すなわち周襄王十二年(紀元前六四〇)の事と言って、蕩を斉へやり、楚王との会合の事を話させた。斉侯もこれ

楚両君主を待った。 翌年の春になり、宋公は早々に鹿上へ行き、会盟の土壇を作り、斉と

である

恩を感じ地主の礼を尽して款待した。を自負し、会っている間恩着せがましい様子が見えたが、斉公は襄公のを自負し、会っている間恩着せがましい様子が見えたが、斉公は襄公の土に協力した事二月になり先ず斉孝公が来た。宋公は斉孝公の君位争いに協力した事

爵位の順でいえば宋が首席で次は斉、楚はその後であるが、これはあく時は爵位の順が守られていた。楚は王を僭称しているが実が子爵であり、更に二十数日たってやっと楚王が到着した。 宋、斉二君が会っている

に就き、先に牛耳をとり"全く謙譲の気持ちが見えない。楚王は不満を募約束の会盟の日になって、三人は壇に登った。 宋公は自から盟主の席

までも宋君が決めた席次にすぎない。

王に拱 手の礼をとり、らせたが我慢をして誓いの血を歃った。その儀式の後、宋公は斉公と楚らせたが我慢をして誓いの血を歃った。その儀式の後、宋公は斉公と楚

「代々周天子より忝くも賓客の礼をお受けいたしておりますので、徳になけますことを希望しております。諸侯の召集につきましては両君主の特別なお力きたいと思っています。諸侯の召集につきましては両君主の特別なお力をじます。なお加えて貴国とは今後代々に亘って兄弟の友好を結ばせて存じます。なお加えて貴国とは今後代々に亘って兄弟の友好を結ばせて存じます。なお加えて貴国とは今後代々に亘って兄弟の友好を結ばせていただけますことを希望しております。

って決まらない。そこで襄公は斉侯ではなく逆に先に楚成王に署名を求と言って会盟召集文書に署名を頼んだが、斉侯と楚王は互いに譲り合

い旨が記載されその最後に宋公の署名があった。楚王はそれを見て、文書には会盟を行う旨、斉桓公の衣裳の会にならって戦車は使用しなめた。今度は斉孝公が不満を募らせた。

ご自分で諸侯を召集できるのでしたら、どうしてわたしの私の署名

と顔に嘲りの笑いを見せて言った。が必要なのですか」

んでいますので、君侯の呼びかけがないと纏まらない恐れがあります。「鄭、許は長く貴国の庇護の下にあり、陳、蔡も最近斉国と同盟を結

す」
「それなら斉君に先に署名をお願いし、その後でわたしがやるべきで

貴国の重みをお借りしたいのです」

「わたしは宋公の下ですから、来ない者への威圧はやはり貴国の力が

牲を殺し耳を切 て血を取る手続きを鏡 る事をい、すなわち盟主を指す。 血をすすり盟約書を犠牲の上に載せて一緒に穴に埋める。牛耳を執るとは、この 犠

楚王は笑いながら署名し筆を孝公に渡した。

かってやっと国家を維持する事ができた者で、この会盟の末席に居られ 「楚王の署名があれば十分です。わたしは流れ者になって何度も死か

斉公は署名を固辞した。宋公が楚王に諂い先に楚王に署名を求め、自

るだけで光栄です。とてもこの文書に署名する資格はありません」

分を軽く扱う態度に不満を持ち署名を断ったのである。

と思いそのまま書類をしまった。 宋襄公は斉に対する恩を自負しているので孝公が本音で言っている

三君は数日鹿上でねんごろに話し合って別れた。(鹿上の会員) 諸侯は元来中華の仲間 何故楚を頼み紛糾を持ち込むや

同根の一樹なり 互に枝分かれたるを忘れしや

楚成王は帰って会盟の様子を令尹の子文に話した。

「宋君は頭がおかしいんじゃありませんか。殿もどうして会の招集を

お許しになったのですか」

楚王は笑って、

っかけが無かった。ちょうど宋公が衣裳の会を言い出したので、これを 「わしはずっと中華の覇主になりたいと思っていたが残念ながらき

利用しようと思っているんだ」 と言うと、成得臣が進言した。

「宋公はお人好しで形式を重んじ中身のない人です。人の言うことを

。衣裳の会<br />
武器を持たない<br />
会合<br />
斉桓公の<br />
北恋の<br />
会闘や<br />
管仲の<br />
進言で<br />
桓公は<br />
戦車を

用意しないで臨み諸侯の信頼を得た(第18回

すれば虜にできます」

軽率に信じて考えの浅い男ですから、会盟の場に兵を伏せておいて急襲

「わしもそう考えているのだ」

れます。そんな事では諸侯を承服させる事ができましょうか」

「会盟を許しておいて会場で襲ったりすると楚は信用ならんといわ

子文がそういうと、得臣は反論した。

と思います。諸侯は宋公を未だよく分っていないし親しくもありません。 「宋は盟主になろうとしていますからきっと諸侯に対し傲慢になる

諸侯は宋の無能ぶりを笑い皆楚に帰順してきます。小さな信にこだわっ 宋公を襲って威力を見せ、その後許してやれば徳を示すことになります。

て大功を失うのは上策とはいえません」

と子文もそう言って話は決まった。楚王は成得臣、闘勃の二人を将と 24 「子玉(成得臣)の計にはかないませんね」

してそれぞれ勇士五百人を選抜して演習し、会盟乗っ取りの計を進めた。 さて、宋襄公は鹿上から帰って非常にうれしそうに、

「楚はわしに諸侯の会盟を認めたよ」

と公子目夷に言った。目夷はそれには懐疑的で、

解を得ても、殿が諸侯を集めるのに協力するなど、とても本心とは思え 「楚は未開の国だからその本心は測り難いものがあります。口では了

ません」

と忠告したが、

人もわしを騙すような事はしないよ」 「子魚(目夷)は心配し過ぎだよ。わしは人に真心で接しているから

と言って目夷の忠告を聞かず、諸侯に会盟の召集を通知した。

ねぎらいの準備はどれも徹底していた。あった。蔵には食料飼料を用意し、各国軍の軍馬の食料とし、各国へのあった。蔵には食料飼料を用意し、各国軍の軍馬の食料とし、各国への事前に盂に人を遣り、壇を築き公館を増築し、やることは大変豪華で

たが、目夷はまた引き止めて言った。 七月になった。襄公は盂へ出掛ける乗用車(戦車ではない)を用意させ

か戦車を用意して行かれますよう」
「楚は強国ですし、義などというものは持ち合わせていません。どう

はいかん。約束した自分がそれにもとる事をしたのでは後々諸侯と信を「わしは諸侯に『衣裳の会』だといってあるから、戦車を使うわけに

「殿が信義を大切にして戦車ではなく乗用車で行かれるのでしたら、

もって交わう事ができなくなる」

「戦車をそなたが使うのとわしが使うのと何処が違うのだ。それは絶如何でしょうか」
臣にまさかのときのために三里外に戦車百乗を準備させていただくのは

事になるのを心配して、本人に同行するように言った。 出発の時、襄公は目夷がやっぱり後詰の兵を出して諸侯の信義を失う対にだめだ」

「臣も心配ですから同行させていただきます」

そういう事で君臣一緒に盂へ行った。

香孝公は先の鹿上の合盟時の宋の態度が不満で欠席し、魯僖公は楚とは香孝公は先の鹿上の合盟時の宋の態度が不満で欠席し、魯僖公は楚とは一楚、陳、蔡、許、曹、鄭の六ヵ国の君主が期日どおりに集まったが、

らうよう指示した。その報告では、全員乗用車で楚王も従者は多いがや襄公は接待係りに六国の君主を別々の建物に案内しゆっくりしてもまだ国交が無かったのでこれも欠席した。

はり乗用車だったという。

太史が会盟の吉日を占い、襄公はそれを各国に知らせ、数日前には間「それ見ろ、楚がうそを言うことはないと思っていたよ」

こうこう 『おうこだこはに記ざる』 悪いている というの あっという 当日早朝五更に壇の上下にはかがり火が焚かれ昼間のように明るく違いが無いよう壇上での担当責任者を派遣していた。

が次々と到着した。しばらく待って夜が明けたころ楚成王熊惲がやっと陳穆公款、蔡昭公甲午、鄭文公捷、許僖公業、曹共公襄の五人の諸侯なっていた。壇のそばには休憩所があり襄公はもう来て待っている。

登壇した。 襄公は地主の礼に従って拱 手の礼を取って挨拶をし左右に分かれて

到着した。

左は主人が登る階段で襄公と目夷だけであった。が続いた。諸侯にも随従者が居たが省略する。右は客が登る階段で諸侯は楚成王に首席を譲り、成得臣と闘勃の二将

せて先に口を開こうとはしない。
せて先に口を開こうとはしない。
でいたが、楚王はうつむいて何も言わない。陳、蔡の君主は顔を見合わになった。襄公は楚王を見て自分のために何か言ってくれることを望ん誓のことばを述べ、天を指して誓い、署名を終え、いよいよ盟主の推挙誓のことばを述べ、天を指して誓い、署名を終え、いよいよ盟主の推挙

襄公は我慢できず尊大ぶって言った。

争放棄によって天下泰平のしあわせを享受しようというものにしたいと「今日の会合は、前盟主の斉桓公の遺業を受継ぎ尊王安民ならびに戦

思いますが如何でしょうか」

諸侯は誰も答えない。楚王は前に出て身をそらせて口を開いた。

「宋公の言われる事もっともですが、この場の盟主は誰でしょう」

題がありましょうか」 「功がある場合は功の順位ですが、功なき場合は爵位の順序で何か問

前に並ぶわけには参りますまい。お先に失礼します」 「わたしは王になって久しい。宋公殿が上公だとおっしゃっても王の

楚王はそう言って第一の席についた。

目夷はしばらく我慢して改めて次の手段を考えるべく襄公の袖を引

っ張った。襄公は盟主を掌中に掴んでいたのにここへ来て急に事情が変

り穏やかではいられない。腹の虫が収まらず、激しい口調で楚王に言っ

いただいている。あなたの爵位は僭称したもので、偽の王が本物の公爵 「わたしは代々上公の爵をかたじけなくし天子にも賓客の礼で厚遇

を抑えられるわけがないじゃないですか」 「わしが偽の王だなどとよく言うね。此処に来て下さいとわしに頼ん

だのは他でもないあなたに自身じゃないですか」

しが来てくれと言ったわけじゃありませんよ 「あなたが此処へ来たのは鹿 上で約束したからじゃないですか。わた

傍らから成得臣が大声で言った。

ずねてみればわかる事です」 陳も蔡も平素楚を畏れて服従しているので声を揃えて 「今日のことは諸侯に、此処へ来たのは楚のためか、宋のためかとた

した 「我われ楚王の命令がありましたので来ないわけには参りませんで

楚王は大笑いをして、

成得臣、闘勃は礼服を脱ぎ内側に着ていた。鎧、姿になり、腰に挟んだ赤ない展開となり、逃げようにも護衛の兵がいない。 躊躇している内に まらずそれぞれ着物を脱いで甲冑姿になり手には武器を隠し持って、蜂 い小旗で壇の下に合図をした。楚王に随従してきた連中は何と千人に止 襄公は事志と異なり、彼が道理の分かる人と期待していたが思いがけ 「宋君、まだ何か言う事があるかね」

した。成得臣が先ず襄公の両袖をがっちりと取り押さえ、闘勃は兵士を か蟻のように集まって壇上に駆け上がってきた。諸侯は驚いて肝をつぶ

指揮して壇上のものを掠奪させた。壇上の担当者は逃げ回った。 襄公は目夷が傍に随従しているのを見て小声で、

「そなたの意見を聞かずこんな事になってしまった。そなたは早く帰

って国を守ってくれ。わしの事は考えるな、早く行け

, 目夷も、随いて行っても無益だと考え、混乱に乗じて逃げ帰った(こ 26

宋襄公は生き延びる事ができたのであろうか、それは次回のお楽しみ。

れを孟の会盟という)

## 斉姜 夫重耳を酔わせて送り出す宋 襄の仁 泓水の戦いに大敗第三十四回

の準備をしていた。 の準備をしていた。 がよった。 が大軍を率いて後につき仰々しく戦された。 その随従するものはみな、成得臣、闘勃が選抜して訓練してきた はいた。 を放正は偽の乗用車に乗って大勢の随従者を連れて会盟に出席して の準備をしていた。

な恐れおののき誰も何も言いようが無かった。 東襄公は全く気がつかず罠にかかったのである。心に備え無き者が備 な恐れおののき誰も何も言いようが無かったのである。心に備え無き者が備 な恐れおののき誰も何も言いようが無かったのである。心に備え無き者が備 来襄公は全く気がつかず罠にかかったのである。心に備え無き者が備

げい。 成王は諸侯を公館に集めてみなの面前で宋公の六つの罪状を数え上

る事、これがその六である。天もお見限りだ、やつは軍を連れずに遣った事、これがその六である。天もお見限りだ、やつは軍を連れずに遣った小事を理由に大国を恃み曹を攻めた事がその四、亡国の子孫なのに、した小事を理由に大国を恃み曹を攻めた事がその三、曹国が地主の礼を失畜生に代えて人を殺して鬼神に祀った事がその三、曹国が地主の礼を失君が会盟の時間に少し遅れたからと言って侮辱した事がその二、犠牲の君が会盟の時間に少し遅れたからと言って侮辱した事がその一つ、滕君が会盟の時間に少し遅れたからと言って侮辱した事がその一つ、滕君が会盟の時間に少し遅れたからと言って侮辱した事がその一つ、滕子の葬儀中を襲って勝手に君主の廃立を行なった事がその一つ、滕子の葬儀中を襲って勝手に君主の廃立を行なった事がその一つ、滕

ほど飲み明かしてから解散しようではないか」
らくここにいてわしが宋を取って帰ってくるのをご覧あれ、諸君と十日らくここにいてわしが宋を取って帰ってくるのをご覧あれ、諸君と十日で来ているがわしは千乗の戦車、千人の将軍を連れてきている。これをて来ているがわしは千乗の戦車、千人の将軍を連れてきている。これを

諸侯はしぶしぶ承諾した。襄公は木偶か泥人形のように一言もいえず、

ななく楚に媚び逆に災禍を招き 睢陽戦場と化す でいた。史官は宋襄の失態を非難して詩にしている へ殺到してきた。諸侯は楚王の命に従い誰も帰る者はなくみな盂で待って於。成王は賞を行って兵士をねぎらった後、宋襄公を連行して睢陽城でいた。成王は賞を行って兵士をねぎらった後、宋襄公を連行して睢陽城でいた。

引き締まります」

「国に一日たりとも君主なしでは参りません。公子に是非しばらく摂

公孫固がそう言うと目夷は彼に耳打ちした。

れこれこのように・・・そうすればきっと殿をとり返すことができる」「楚は主上を人質にしてわが国を手に入れようとしている。だからこ

公孫固は賛成して群臣に向かって言った。「それはいい考えです」

昔斉桓公は九度の会盟にて<br />
楚を国境に近づける事なし

「わが君は帰ってこられるかどうかわからないから、公子目夷殿に国

事をお任せしたい

迎した。 目夷が賢人である事をみなを知っているので、誰もが喜んでこれを歓

目夷は太廟に報告して、摂政についた。

く守られた。 三軍は命を受け、命令指示がピシッと徹底し睢陽の各城門は鉄壁の如

睢陽城に向かって叫んだ。

\*\*\*\* 各方面の手配が終わったところへ楚軍が攻め込んで来て、闘勃将軍が

「おまえらの君主はわしらに捕まってここにいる。生殺与奪の権限は

はわが掌中にある。早々に土地を献納して降参すれば、君主の命は助け

て使わす

公孫固は城の上からそれに答えた。

手許の方を生かす殺すはそちらにお任せいたします。投降するつもりは 「社 稷神霊のご加護の下に国人はすでに新たな君主を立てました。お

ございません」

「君主を立てるのは国民です。 国に主がいなくなれば当然新君を建て 「お前らの君主はここにいる。どうして新君を立てたのだ」

「主君を帰してやったら、礼はどうするつもりだ」

に。どうしても白黒を付けるとおっしゃるなら、城中の兵力は全くダメ て見えても君主には復帰はできません。帰す、帰さないは楚王のご勝手 「前君主は囚われてすでに社稷を恥ずかしめているので、たとえ帰っ

ージを受けていませんので決死の戦いをする覚悟です」

降ってきて楚兵に多数の死傷者が出た。三日間連続攻撃をかけたが兵力 の浪費が続きどうしても落せない。

闘勃は公孫固の対応が強硬なので楚王に報告した。

楚王は怒って大声で城攻めを命じた。城の上から矢や石が雨のように

「宋はもう宋君はいらんようだな。殺してしまうか」

楚王がそう言うと成得臣はそれを諌めて言った。

「王は鄫君を殺した事を宋公の罪に挙げましたが、今宋公を殺せばそ

Ž 宋を取れずしかも徒に恨みを買うばかりです。釈放した方がいいでしょ の悪事をまねる事になります。宋君を殺すのは匹夫を殺すようなもので、

「宋を落せずしかも宋君を釈放するとなると、名目をどうするかだ」 「臣にいい考えがあります。今回『盂の会盟』に参加しなかったのは

にはありません。もし宋の戦利品を魯君に献上すると言って亳都(現河 礼を重んじる国で、ずっと斉侯の覇業を支えてきており、楚は彼の眼中 斉と魯だけです。斉とわが国は友好関係にありますから別にして、魯は

柄ですし、魯君は人柄がいいから必ずとりなしを言ってきます。そこで ったと聞いて畏れて必ずやって来ます。魯、宋は葵丘の会合で同盟の間 南省商 丘西北)での会合に出席するよう要請すれば、魯は宋が捕虜にな

持ちを得る事ができます」 魯君の人徳を認めて宋君を許したことにすれば、一挙に宋と魯両方の気

楚王は手を叩いて大笑して、

「子玉の見識はたいしたものだ」

み、次のような手紙を曲阜へ届けさせた。 と言って、軍を毫都まで下げ宜申を使者として戦利品を数車に積みこ

手に処理するというわけにも参りませんので、戦利品を謹呈致しま すので亳都までご来駕をいただき、ご一緒に裁かせて頂きたく存じ 宋公は傲慢無礼でしたので捕えて現在亳都に幽閉しています。勝

魯侯は手紙を見て驚いた。まさに『兎死して狐悲しむ、同類相憐れむ』 (兎死して狐悲しむ 今日は人の身明日は我が身 「宋史」李全伝)

楚は強い。 もし行かなければ楚軍はこちらへ攻めて来るだろう、 後悔先 楚は戦利品の献上などと言葉は丁寧だが本音は脅しである。魯は弱く

夫仲遂を伴って出発した。 に参ります」と楚王宛の返書をしたため使者を帰し、そのあとすぐに大 に立たずである。そこで使者宜申を厚くもてなし、先ず「命により直ち

御前では何とかよろしくお願いしますと頼んでおいた。 **毫都に着くと仲遂は宜申の許可を得て私的に成得臣に会って楚王の**はくと

得臣の案内で魯侯は楚成王に会い、互いに表敬の挨拶を交わした。 蔡、鄭、許、曹の五名の諸侯も盂から来ており、魯侯と合わせて

六名が一箇所に集まり話合う事になった。 鄭文公が口火を切って楚王に盟主になってもらおうと言ったが、諸侯

は口ごもってすぐには賛成しない。

魯侯が発奮して言った。 「そもそも盟主というものは仁義において世に広く知られ、人々が心

うか

して楚王を 奉 るだけでは天下の賢人の笑いものになります。もし楚王 を怖がらせるだけです。わが国と宋とは同盟国です。これを救わず座視 上公を捕えましたが、これでは力はあっても徳があるとは言えず、人々 から悦んで服する人でなければなりません。いま、楚王は強大な兵力で

ですが」

が宋公を釈放すると言われるなら、盟約を結び楚王に従いたいと思うの

諸侯たちは声をそろえて言った。 「まさに魯侯の言われる通りだ」

仲遂はこの話をそっと成得臣に話し、得臣は楚王に伝言した。 「諸侯は盟主の正義と言う観点からわしを責めているのだな、

いわけにはいかんだろう」

て神を呼び宋公を釈放する事にした。 そこで亳都の郊外で盟壇を築き、十二月癸丑と日を決め、血をすすっ

会盟の日取りが決まり、事前に宋公は釈放されて諸侯たちに会った。

侯には感謝せざるを得ない。 襄公は恥ずかしさと憤りではらわたが煮えくり返る思いであったが、諸

を執り、宋、魯以下順次血をすすった。宋公は腹は立つが何もいえない。 当日、鄭文公は諸侯を同道して楚成王に盟主を頼んだ。成王が牛の耳

へ逃避した。(亳都の会盟 全て終わって諸侯はみな解散した。襄公は目夷が即位したと誤解し衛

はもとより殿のものです。どうして宋の国へお帰りにならないのでしょ 目夷は手紙をしたため襄公に使者を送った。 「臣が殿の代わりを務めたのは、殿の君位をお守りするためです。国

下に列した。 すぐに車馬を整え襄公を向かえに行き連れ戻し、直ちに摂政を退き臣

を帰してくれと要求していたら、逆に楚は益々襄公を奇貨と見て容易に 襄公が釈放されたのは公子目夷の計略のお陰であり、ばたばたと襄公

君位を装い旧君守る謀事 瓦より金が奇貨と何故いえよう 新君よくぞ旧君を救いたり 目夷の賢名千古に芳し

は釈放しなかったであろう。詩がある。

楚の眼中に有るはやはり中原である。 六人の諸侯たちは楚に媚びて身の安全を求め、支配権を楚に渡した。

蕃夷(楚)に媚びて恥知らず宋公救出だけでは自慢にならず 古来より兎死して狐悲しむ 襲い襲わるは誰ならん

恨みは骨髄に徹しているが恨みを晴らす力はない。それに鄭伯が楚王を 宋襄公は覇主になろうとしてかえって楚から虜囚の恥辱を受け、その

を聞き、腹に据えかね遂に傾国の兵を起こし自ら鄭討伐に出た。 上 卿の 盟主にしようと提唱したのも不満で鄭を目の敵にしていた。 周襄王の十四年(紀元前六三八)三月鄭文公が楚に朝見に行くというの

公子目夷には世子王臣を補佐させて留守を命じた。目夷は、

「楚と鄭は今大変親しい間柄です。 鄭を討とうとすれば必ず楚が救援

で時を待つのが上策です」 軍を出しますからとても勝ち目がありません。ここはしばらく徳を積ん

と諌言した。大司馬の公孫固も同じように反対した。

「司馬が行きたくなければ、わし一人で行く」

は決定した。 襄公が自ら中軍を指揮し公孫固を副将として、大夫楽僕伊、 華秀老、

と襄公が怒りだしたので司馬もそれ以上は言えず、とうとう鄭を討伐

公子蕩、向訾守等がこれに従った。

直ちに諜報が鄭文公に知らせた。文公は非常に驚き、楚に危急の使者

と楚王が言うと、成得臣は鄭の救援より宋へ攻め込む方がいいと言う。 「鄭はわしの父親のようなものだ。速やかに救援をだすよう

程も知らずに大軍で鄭を攻めようとしていますが、国許はきっと空っぽ 「どうしてだ」 「宋公が囚われた時、宋国の連中は肝を冷やしています。今また身の

宋軍が救援に引返せば兵は疲れてしまって、宋公の考えは挫折する事に です。そこを突けば国人は恐れをなし、戦う前に勝負は見えています。

て宋討伐軍を起こした。 楚王も成得臣の意見に同意し、直ちに、得臣を大将、闘勃を副将にし

なります」

告の使者を出した。 兼行で兵を帰し、泓水の南に陣を張って楚軍を防いだ。成得臣は宣戦布 襄公が鄭と対峙しているところへ楚軍の情報が入ってきた。急遽昼夜

公孫固は襄公に進言した。 「楚軍がやってきたのは鄭救出のためですから鄭を許して楚に謝罪

楚に矛を下げるようではどうして桓公の覇業が継げるというのだ」 すれば楚は必ず撤兵します。戦争になさらない方がいいでしょう」 「昔、斉桓公は兵を起こして楚を討ったというのに、いま攻めて来た

くなります。殿はこれを興そうとなさっておられますが、できましょう 「『一姓一度滅べば再び起こらず』といいます。天が商を捨てて久し

。った を継ぐ事を許して立てさせた国である。他国からは亡国の遺民としてののしられたが 周が殿 商を滅ぼした後、紂王の弟微子に命じ、その遺民を集め祖先の祭り 衛に当る官名

"。 虎賁 賁は走るの意 虎が走るように勇猛であるという意味 周代天子の前後の護

古、文化を継ぐという自負心を持ていた

もとても楚にはかないません。宋の人々は楚を蛇蝎の如く畏れています。か。 しかも武器の堅さにおいても、兵の鋭さにおいても、人材において

殿は何をもって勝てるとお思いなのでしょうか」

きまえた君主でありたい。無道者の臣で生き続けるくらいなら死んだほに勝ったという話があるがこれも仁義があったからだ。わしは仁義をわていても仁義においては楚に勝る。昔、武王は虎賁『三千人で殷の大軍「楚は兵力は十分にあるが仁義に欠けている。わが方は兵力は不足し

て決裁し、『仁義』の二字を大書した大旗を車の後ろに立てさせた。そう言って宣戦布告書の末尾に十一月一日泓陽にて戦闘開始と記し

うがましだ」

公孫固は苦々しそうに、

のだろう。これは天が殿を見放しているんだ。危いぞ、我われが十分気「戦争は人殺しなのに仁義を口にされる。殿の仁義とはいったい何な

をつけて国を守らなきや」

とそっと楽僕伊にもらした。

するよう進言した。
松孫固は夜明け前に起きて襄公に陣容を整え待機

と闘勃が言うと、得臣は笑って、「宋が先に布陣し邪魔される前に、五鼓に河を渡っておきましょう」「宋が先に布陣し邪魔される前に、五鼓に河を渡っておきましょう」一方、楚の方では、成得臣は泓水の北に兵を駐屯させていた。

「宋公は迂闊な男で用兵を知らん。渉るのが早くても遅くても、何の

心配もいらんよ」

と言って、夜が明けてから次々に河を渡り始めた。

公孫固は襄公に

うが兵力が大きいのでとてもかないません。如何でしょうか」に対しわが全軍で当る事ができます。全軍渡りきってしまうと楚軍のほやつらが半分渡ったところで突然攻撃をしかけたら、彼らの半分の兵力

「楚兵は夜が明けてから河を渡り始めたのは非常に軽率といえます。

襄公は大旗を指して、

のだ。敵が半分渡った所を攻めるなど卑怯なやり方は道義に反する」「そなたには『仁義』という二字が見えないのか。わしは堂々と戦う

まもなく楚軍は渡りきった。と言う。公孫固はまた襄公の考えにがっかりさせられた。

り物のついた弓を掛け、手には長い鞭を持って軍を指揮し、東西に陣を成得臣は美しく飾った冠を被り、刺繍のついた軽鎧の上着、腰には彫

展開し意気軒昂、傍若無人の様子である。

公孫固はここでも襄公に、

「楚はまだ陣形が整っていません。いま太鼓を打て出ればばきっと敵

は乱れます」

と進言したが、襄公は唾を吐いて、

いうものに配慮がないのか。わしは堂々と戦うのだ、敵陣が整う前に攻「ばか者、そなたは最初の一撃の利だけを見て後世にも誇れる仁義と

め込むなどもってのほかだ」

楚軍の陣形はでき上がり、人馬は強壮で山野をおおい、宋兵はみな恐と言う。公孫固はまた苦りきってしまった。

襄公は太鼓を打たせた。楚軍も太鼓を打った。

楚の陣へ突撃した。得臣はこの猛烈な勢いを見て、門を開いて襄公の一 を守るため後を追ったが、襄公はすでに敵陣内に入ってしまっていた。 隊が陣中に入るにまかせるよう密かに伝令を発した。公孫固は襄公の車 襄公は自ら長矛を持ち、公子蕩、向訾守の二将と門官"たちを引連れ

人の上将が陣門に立ちはだかって、

して闘勃に突っ込んで行った。闘勃は刀を上げてこれに立ち向かった。 としきりに叫んでいる。誰かと見れば闘勃である。公孫固は怒号を発 われと思わん者はかかって来い、わしが相手だ」

中に駆け込んだ。闘勃は追いかけたが宋将華秀老がやってきて闘勃を遮 楽僕伊と渡り合った。公孫固は機を窺って闘勃の刀をはねのけて楚の軍 ので闘勃は少し慌てた。その時陣中からまた上将の蔿氏呂臣が出てきて 両者の刃合わせが二十合近くに及んだ頃宋将楽僕伊の一隊がやって来た

り両者陣前で激しく打合った。

血だらけになった守将向訾守に遭った。 びっしりと包囲している兵士の集団をみつけた。そこへ急ぐ途中、満面 公孫固は楚の陣中をあちこち駆けずり回り、しばらくして東北の隅で

そこには襄公に随った門官たちが、皆身に重傷を負いながらそれでも と息を切って叫んだ。公孫固は向訾守に随いて重囲の中へ突入した。 「司馬殿、急いで殿を助けに行ってください」

歩も退こうとせず楚軍と戦っていた。それは日頃下の者にたいし非常

旗印の下とはいえどうしてこんなに危険なまねをやってしまったのだろ 門外に集まって口々に恨み罵った。 して輜重、武器などほとんど捨ててしまった。 陣を抜け出した時には彼らは誰一人生き残ったものはいなかった。 宋の 襄公は民衆の声を聞いて、 公孫固は襄公と共に夜を徹して逃げ帰った。宋兵の死者は甚大であっ 「『君子は殺傷を追わず、老人を捕えず』というのに、わしは仁義の

門官 宮町の衛士で国君が出征する場合随従した

32

ある。 傷を負って車の下に倒れ、『仁義』の大旗はすでに楚軍に奪われていた。 襄公は数箇所に傷を受け、右太腿に矢を受け膝の筋を切って立てなく 楚軍は勇猛な公孫固を見て少し退却した。 前を見ると公子蕩が急所に

に面倒見がよかったため、襄公のために死力を尽くして戦っていたので

なっていた。蕩は公孫固が来たのを見て、 「司馬殿、殿の救出をよろしくお願い致します。わたしはここでお別

れします」

をつとめ、門官たちも且つ戦い且つ引き護衛しつつ撤退したが、楚軍の 襄公を助けて車に乗せ、身を挺し奮起して重囲を脱した。 向訾守は 殿 と言って息絶えた。公孫固はしばらく悲しみに沈んだが気を取り直し、

認し、各自逃げ帰った。成得臣は勝に乗じて追撃し、宋軍は大敗北を喫 戦車も十中八九は失った。楽僕伊、華秀老は宋公が虎穴を脱したのを確

た。その親や妻子は襄公が司馬の意見を聞かず大敗北したことを聞き朝

Ž

(これを別水の戦いという) と嘆き後悔した。国中襄公の軽率な行動に怒り嘲笑したものである。 13 九献礼 王が公爵を招待した時 客に九度酌をする る ( 平凡社『戦国簾 斉 「 断 狗尭に 吠ゆ 常石茂訳注 を『宋襄の仁』と嘲って語り伝えた。 後の人は、襄公が仁義を理由に多くの人命を失った泓水の戦いでの事

宋襄が仁の人といえるなら 盗跖2と文王の区別なし 滕 鄫 に同情せず楚軍に同情 とうせき 股肱の臣を傷つけ虚名を得んとす

楚軍は完勝で再び泓水を渡って凱旋した。 宋の国境を出たばかりのと

ころで物見から報告があった。 「楚王が自ら大軍を率いて後詰として現在柯沢で駐屯しておられま

す

得臣はすぐに柯沢へ行って楚王に戦勝報告をした。

楚王はにこにこして言った。

る。そのとき捕虜や取った首を広げて力の程を見せてやれ」

|明日、鄭君が此処へ夫人を連れて軍のねぎらいに来る事になってい

鄭文公の夫人羋氏は楚成王の妹で文羋という。兄妹の情で鄭公に随い

て柯沢へ会いに来たのである。 楚王は捕虜や戦利品を見せて意気盛んであった。文公夫婦は祝いの挨

拶をし沢山の贈物を差出して三軍を 労 らい、成王を翌日の宴会に招待 翌朝文公は自ら城に楚王を迎えに行き太廟に席を設け、天子にならっ

うして司馬遷を嘆かせた。農民起義の最初の領袖ともいわれっのため義賊ともいわれ 『 盗跖 魯の賢臣柳下恵 第39回の弟だが 9千人の手下を楽いた大盗賊 天寿を全 て九献礼"を行い、料理は種類も多く宴席は未曾有の贅沢なものであっ

文羋が二人に伯父姪の礼儀で挨拶をさせたので楚王は非常に喜んだ。文 公は妻や娘らと代わるがわる成王に酌をし、昼から暮方まで大いに食べ

大いに飲んだ。楚王は酩酊して、

「大変なもてなしを受け量を過ごしてしまった。 そなたと姪の二人に

ちょっとそこらまで送ってもらいたいが、どうかな」 と文羋にたのみ、彼女も承知した。

文公は城を出て楚王を送り、先に別れて帰った。文羋と二人の娘は楚

文羋は幕舎の中でおろおろして一晩中寝られなかったが、楚王の威を恐 でいたのでその夜は寝室に連込んで一夜を楽しむつもりだったのである。 王と車を並べて楚の陣へ行った。楚王は元々二人の姪の美貌にほれ込ん れ声を出す事もできなかった。伯父が姪に手を出すとは正に禽獣と同じ

翌日、楚王は軍の鹵獲品の半分を文羋に与え、二人の娘を車に乗せて

はいい死に方をしないだろう」 「礼が守られてこそ物事は順調に進むのであって、こんな事では楚王

連れて帰り後宮においた。

ではないか。

鄭の大夫叔 詹 はそう言ってため息をついた。14

楚、宋の話はひとまず置き、晋の公子重耳に話を戻す。

重耳は周襄王八年(紀元前六四四)に斉へ行き、同十四年まで前後七年

14 叔詹のこの発言は『春秋左氏伝 僖公22 年にある。左氏伝は儒教の考え方が強。

間斉に逗留していた。桓公の事件があって国内は大混乱に陥り、孝公が になり、次々と諸侯との間に矛盾が重なり斉と離反する諸侯が多くなつ 位を継ぐと先人がやってきた事とは反対に楚に従属し宋を仇に思うよう

趙衰たちは密かに話し合って、 「我われ斉へ来たのは覇主の力を借りて復国をはかるためだったの

斉 姜 を溺愛し朝な夕なに宴を開いて他の事には目を向けようとはしな 練らなきやならん」 と言うことになり、公子に会ってその事を話しようとしたが、重耳は

で公子の計画を実行するのは無理といえる。別な国へ行って新たな策を だが、新君主は覇を唱える気概はなくて諸侯は皆離反している。彼の力

い。忠臣たちが十日間も面会を求めて会いに行ったが会えない。 一われら公子が復国してくれるだろうと思うから苦労してついて来

ている。光陰は矢の如しだ。十日も待っても一度も会ってもらえないな たんだ。斉でもう七年にもなるのに公子は帰国の事を忘れて逸楽に耽っ んて、こんな事でどうして大事を成就する事ができるというんだ」

魏犨は怒り出した。 「ここは議論の場所として適当ではない、みんなわたしに随いて来て

は古い桑の木が一面に生えていて、深い緑陰になっていて日も通らない。 と言う狐偃に随いて彼らは東門を出て桑陰という所へ来た。この辺り

「子犯(狐偃)殿、我々をここに連れて来たのは、何か考えがあるの

趙衰等九名の豪傑が地面に莚を敷いて座った。

ですか」

外に出たら皆で心を合わせて公子を無理やり連れてそのまま斉を離れよ うと思うんだ。但し、問題は斉を離れて何処の国へ行けば力を借りられ あらかじめ旅仕度を整えておいて、公子が出てきたら狩りに誘い出し城 るかだ」

「公子の今後は我々が決めなきゃいけない。皆の合意が得られたら、

秦か楚を頼ればきっといい機会が見つかると思います」 宋国を頼って行ったらどうだろう。行ってみて適当でないと思ったら、 と趙衰が言うと、 「宋の国主は最近覇業に執着しており、功績や名声を喜ぶ人ですから、

い、と思っても、『聞かれたくなければ口に出すべからず、知られたくな 34 この静かな奥まったところで話し合った事が人に知られるわけがな と狐偃も賛成した。しばらくみんなで意見を交換し解散した。 「宋の公孫司馬はわたしと古いなじみです。行ってみたらどうだろう」

ければ為すべからず』である。実は彼らが話合っている時、姜氏の女中

命じて全員監禁し、夜半になって口封じに全員殺した。そして寝ていた 姜氏に報告したのである。姜氏は報告を受け彼女達に他言無用と厳しく た。彼女らは木の下で話合っているのを手を止めて漏らさず聞いて帰り が十数人ちょうど樹の上で蚕に与える桑の葉を採っていたところであっ

たしも、早く出国計画を練られた方がいいと思いますわ 達がこの機密を漏らしてはいけないと思ってすでに始末しましたが、わ らしいわよ。わたしの女中達が桑を採っている時に聞いて来たの。彼女 「あなたの従者たちがあなたを又別の国へお連れしようとしている 重耳を急いで起して言った。

「人生とはこの世を平和に楽しむ事で、わしはここで十分満足してい

る。ずっと此処にいるつもりだ。何処へも行かないぞ」

れは天が公子を待っておられるという証です。いらっしゃればきっと晋 民衆には不満が満ち、隣国ともうまくいっていないと聞いています。こ ようですね。夷吾殿は無徳無能で、しかけた戦争に敗れ身は侮辱を受け、 「あなたが晋国を出られた後、晋の人びとは安穏な年を送れていない

国を手にできます。 躊躇なさっている時ではないと思いますわ」

翌朝、趙衰、狐偃、臼季、魏犨の四人が重耳の宮殿の門前にやって来重耳は姜氏に未練があってなかなか『うん』と言わない。

て、公子に郊外へ巻き狩りに行きましょうと家の者に伝言を頼んだ。

重耳はまだ起きてなくてその者に、 「公子は、今日は体の具合が悪くて起きられないので巻き狩りには行

けません」 と返事をさせた。姜氏はこれを聞いて急いで使いの者を通じてこっそ

が、斉に来てからは長く狩をなさっておられず、手足が衰えるのを心配 りと狐偃に入ってくるように言った。姜氏は人払いして来意を訊ねた。 いたしましてお誘いに参ったまでで別に他意はございません」 「公子は翟国におられた頃は毎日馬に乗り狩りに出ておられました

と、狐偃が言うと、姜氏は微笑して、

いですか」 と言う。狐偃は驚いて 「今回の巻き狩りは遠いのですね。宋かそうでなければ秦か楚じゃな

「狩りですから、ど、どうしてそんなに遠くへ行きましょう」

と慌てて否定すると、姜氏は

「あなた方が公子を強要して出奔なさろうとしておられる事は全て

て今夜の内に車に乗せて城を出て下さい。きっとうまく行きますよ」 今夕わたしが酒宴を設けて公子を泥酔させますから、皆さん車を用意し なさるよう説得しましたがどうしても行かないといって聞かないのです。 判っています。お隠しになる事はありません。わたしも昨夜公子に出奔 と言う。狐偃は叩頭して、

な賢徳でございます」 ていただこうとなさっておられる事は、千古の昔からの例を探しても希 「奥方がご夫婦の恩愛を手放してまでも公子に大事を成し名を遂げ

車二輌を重耳の宮門の外に隠し姜氏の連絡が有ればすぐに入って行動を 料、飼葉等を用意し先に郊外で待ち、狐偃と魏犨、顛頡の三人は小型の 狐偃は辞去して趙衰たちにこのことを話した。趙衰と狐毛は車馬や食

起こす準備を調えた。 正に天下に覇を成すべき人は、多く人に交わり万里の道を遍歴すべし 35

である。

「今日の酒は何か意味が有るのか

その夜、姜氏は屋敷に酒を置いて公子に酌をした。

上げています。これはあなたへのお餞別の酒宴です」 「あなたの胸には四方に向かって大志が広がっておられる事を存じ

志を何も別に求める必要などない」(人生如白駒過隙「十八史略」趙太祖匡胤」 「人生は隙間から白馬が走り過ぎるのを見る如しだ。はかなく短い。

たに随従している方々は忠誠の念に燃えています。彼らの忠告をお聞き いれになった方がいいと思いますわ 「情欲のままに安楽に耽るのは好男子の所業ではありませんわ。 あな

重耳は突然顔色を変え、杯を置いて飲まなくなった。

て行くつもりなの」 「あなたは本当に行きたくないの? それとも私を欺いてこっそり出

「わしは行かないよ、お前をだましてどうする」

姜氏は笑いながら、

ったけれど、今はあなたがいてくれることがはっきりわかった祝いのお本当に私に気持ちが有るという事ね。このお酒はあなたの餞別のお酒だ「行くというのはあなたに志が有るということ、行かないというのは

座を盛り上げた。重耳は酔っぱらったところへ更に姜氏に勧められべろ重耳は大喜びで、夫婦は差しつ差されつ、侍女には歌や舞をやらせて酒ね。あなたと一緒に飲み尽くしましょう」

防ぐため車に厚い布団を敷きその上に公子をそっと寝かせ終えて、狐偃顛頡を呼び、掛け布団も敷物も一緒にして持ち上げ運び出した。振動を活きる狐偃を呼んだ。狐偃は公子が酔っ払っているのを確かめ、急いで魏犨、んべろんに泥酔し席上倒れこんで人事不省になった。姜氏は布団を掛けんべろんに泥酔し席上倒れこんで人事不省になった。姜氏は布団を掛け

鴻鵠の志遂げささん為 生木割かる鳳鸞の情 (鳳灣公子は歓楽を貪り) 佳人は送り出す人を想う

は姜氏に別れの挨拶をした。姜氏は思わず涙を流した。

をして侍従を呼んで水をくれと叫んだ。このとき狐偃がそばで轡を取っき声が聞こえ、東の空が明るくなり始めた。そのあたりで重耳は寝返りらと合流し夜を徹して走った。五六十里行った頃、あちこちから鶏の鳴狐偃たちは二台の車を急がせ、たそがれ時になって斉城を離れ、趙衰

「水は夜が明けるまでお待ちください」

「つうとどうどいうなうして、いっと答えた。重耳は揺れを感じて変に想った。

「ベッドではありません、車です」「わしをベッドから降ろしてくれ

「お前は誰だ」

「狐偃です」

き、子犯に怒鳴りつけた。
重耳ははっとこれが狐偃たちの仕業だとわかり、布団をはねのけて起

つもりなんだ」
「そちたちはどうしてわしの許可なく城を抜け出したのだ。どういう

「晋を得る前に斉を失ったではないか。わしゃ行かんぞ「将来、公子を晋にお迎えするためでございます」

「斉を離れてすでに百里ほど来ています。斉侯は公子が逃げたのを知「晋を得る前に斉を失ったではないか。わしゃ行かんぞ」

重耳はにわかに怒り出し魏犨が護衛のため持っていた戈を取上げ狐ってきっと追手を向けて来ているでしょう。もう戻れません」

狐偃の生死は如何なりますか、それは次回のお楽しみ。

偃を刺そうとした。

#### 第二十五回

### 秦懐嬴 重耳と再婚す野里耳 列国を周遊

下り戈を持って追いかけた。趙衰、臼季、狐射姑、介子推等が一斉に車上げ狐偃を刺そうとした。偃は急いで車を下り難を避けた。重耳も車を公子重耳は狐偃が謀計で斉を抜け出したことを咎めて、魏犨の戈を取る。

狐偃は叩頭して詫びた。

かなか収まらない。

から下りて重耳をなだめて許しを請うた。重耳は戈は捨てたが怒りはな

「私が死ねば大業が成就するのでしたら、喜んで命を捧げます」

狐偃)の肉を食って恨みを晴らすから覚えておけ」 「このたびの出奔が成功すればよし、事成らぬときは舅殿(即ち母の弟

たくしの臭い肉などお口には合いますまい」の肉を召上る機会はございません。成功すれば美味しいご馳走が並びわの肉を召上る機会はございません。成功すれば美味しいご馳走が並びわい事成らぬときは私は何処かで討ち死しているでしょうから、わたし

と狐偃は笑って言った。趙衰も、

君は道をはずれ国の人々は皆公子が君主になられることを望んでおりまって参りましたのは歴史に残る功を挙げたいからであります。いま、晋「わたしたちも大きな志を持って、家族を捨て故郷を離れ、公子に随

す。公子がご自分で晋国に帰ろうとなさらなければ誰が斉まで迎えに参

と言い、魏犨も厳しい口調で言った。めた事でございます。どうか誤解なさらないでください」りましょうか。今日のことは実は子犯一人の計ではなく我われ全員で決りましょうか。今日のことは実は子犯一人の計ではなく我われ全員で決

「わかった。事ここに至っては諸君に随うしかない」子女と目前の安楽に恋々として一生の大計を忘れてなりましょうか」

「大丈夫たる者、力を尽くして名を成し名声を後世に残すべきです。

と重耳も機嫌を直した。

鳳 は鶏群を脱し天空を飛翔 虎穴を出でて千山を越える

重耳今正に覇業を成すべく 列国周遊の途につけり

を腹心として、爵位(宿老たち)を糞土の如く無視して、肩をすくめ追従見向きもせず、小人を近づけ賢人を遠ざける君主である。阿諛迎合の輩一日足らずで曹国に着いた。曹公という人物は、遊び好きで国政には

晋の公子が豪傑賢人を従えてやって来たのを聞きつけその小人達は、(大夫着用の服)軒車(大夫使用の車)の使用を認めるありさまである。笑いしかできないような市井の小人どもを三百人余り朝廷に入れ赤芾

のを心配して重耳らを引留めないよう曹公を説得した。正に『香草と臭草器が違う』というもので、長期逗留されて比較される

大夫僖負羈はこれに反対し諌めて言った。

すから礼を厚くして受け入れるべきではないでしょうか」

「晋と曹は同姓です。公子は困窮して我われのところへ来ているので

「曹は小国だが列国に囲まれているから列国の子弟の交流は多い。こ

「公子重耳の賢徳は世に聞こえています。 しかも 『重 瞳 駢 脇』 はこへ来た各国の子弟を一々礼遇していたらとても費用がたまらん」

富貴の相であります、そこらの子弟と同列にお考えになってはなりませ

いましたわ。公子まではよく見えなかったけれど側にいた数人の従者の

「郊外へ桑の葉を採りに行った時、ちょうど晋の公子君臣の車に出会

く気にせず、重耳が重 瞳 駢 脇だと言った事に好奇心を掻き立てた。 曹公は無邪気なもので、僖負覊が重耳が賢徳だといった事にはまった。

どういうのだ」 「わしは重瞳(瞳が二つ)というのは聞いた事があるが、駢脇は知らん、

異相のことです」 「駢脇とは肋骨が繋がっていて一枚の骨の様になっている、いわゆる

「信じられん。それならしばらく公館に泊めて風呂に入っているとこ

ろを見てやろうじゃないか」

さず、歓迎会もせず、とても客を遇するものではなかったので重耳は怒 ただけのもの。貴人を侮辱した常識を欠いた扱い)だけで食事らしい食事も出 って食わなかった。 そう言って公館の管理人に公子を案内させ、水飯(飯を冷水でふやかし

づいて彼の駢脇を見てああだこうだときゃっきゃ騒いで出て行った。 いと思っていたので服を脱いで風呂に入った。すると共 公はお気に入り の女数人と平服で公館へやって来て、いきなり浴室に押し入り公子に近 そのうち管理人が風呂を用意して入浴をすすめた。旅の汚れを落した

いでいた。管理人に聞くとそれは曹公だというので重耳も家臣たちも激 狐偃たちがその事を聞いて急いで駆けつけた時はまだきゃっきゃ騒

公子が我が国に立ち寄ったのに、曹公が非礼であった事を彼女に語った。 妻の呂氏が彼の心配そうな顔色を見て、何かあったのかと聞くので重耳 僖負羈の諌言は結局曹公に聞き入れられなかった。負羈が家に帰ると

> ので早速招じ入れた。僖負羈は丁寧に叩頭の挨拶をし先ず曹君の非礼を 38 やるかたないところへ曹の大夫僖負羈が料理を持って訪ねて来たという 中に白璧を潜ませて表敬の贈物にして急いで持って行ってくださいな」 おいたほうがいいんじゃないかしら。わたしが料理を作りますからその きにならないのでしたら、あなただけでも私的に公子と交わりを結んで ように焼き殺されても後悔先に立たずです。殿様があなたの忠告をお聞 対し報復に来るでしょうね。玉石一緒にされてろくでもない連中と同じ 公子はきっと晋国を復国なさるに違いないわ。そうなれば曹公の非礼に 臣にしてその君あり』と申します。従者の方があれ程の方であれば晋の 方はみな立派な方とお見受けしました。『その君にしてその臣あり、その 僖負羈は彼女の言葉に従ってその夜公館を訪ねた。重耳は空腹で憤懣

者のわたしが幸いにも帰国できる日があればきっとこのご恩にはお報い いたしましょう」 「曹国にあなたのような賢臣がおられるとは思いませんでした。逃亡

わび、個人としての敬意を述べた。

料理を食べているうちに皿の中から白璧が出てきたので負羈に言っ 重耳は大変喜んで心からそう言った。

で十分です、その上こんな高価なものをどうして頂戴できましょうか」 「大夫にはこの逃亡者にご配慮下さり飢餓を救っていただいただけ

「これは公子を尊敬申し上げるわたくしのほんの気持ちです、どうか

お受け取りください」

た事を話した。公孫固はそれを公に報告した。

「公子は昔すでにわが国の女性と結婚しているから、わしは嫁の世話

重耳は再三断りついに受取らなかった。

さらない、大きさがほんとうに計り知れないお方だ」 「晋の公子はこんなに困窮されていてもわたしの璧を受取ろうとな

僖負羈は退出してため息をついて感心したものである。

翌日、重耳は出発した。負羈は個人的に城外十里まで見送った。 竜虎を狐狸に見誤り 盲 の曹公識見無し

ああ軒車に乗りたる三百人 負羈の妻に及ぶ者なし

重耳は曹を出て宋へ向かった。狐偃が先を駆けて宋に入り司馬公孫固

に会った

とお慕い申し、宿舎を清掃してお車をお待ちいたしておりました」 を受け今も起きられない状況です。公子のおん名を耳にしてからはずっ 「わが君は国力の差をわきまえず楚と戦って大敗し、ご自分も腿に矢

は大国であり公子は賢人として有名だからその喜びようは大変なもので 助を得て仇を討とうと考えている。晋の公子が遠方から来たと聞き、晋 公孫固は襄公に報告した。襄公は楚を非常に憎んでしかるべき人の援

固に郊外まで迎えに行かせ、公館に案内して国君の礼をもって待遇する あった。しかしあの腿の傷がまだ治っていないので面会が難しく、公孫 ように命じた

し逗留するよう引き留め、一方でこっそりと狐偃に斉桓公は公子をどの ように優遇したかを聞いた。 狐偃は斉公が斉姜を嫁し車馬を贈ってくれ 翌日、重耳は又旅立とうとした。公孫固は襄公の命を受け再三もう少

> をする事はできん。馬は必要な数だけ用意してあげなさい」 宋襄公は公孫固を遣わして二十輌のいい車馬を贈った。重耳はこの贈

物を非常に喜んだ。

で、狐偃は公孫固と重耳の晋国復興の件を相談した。 数日滞在したが厚遇は変わらなかったが、襄公の病態が芳しくないの

です、やはり別の大国へ行かれた方がいいでしょう」 ら敗戦直後で国力が俄に落ちて公子の晋国復興にご協力するには力不足 とはいえ、十分ご休息いただけます。しかし、もし大志がおありでした 「公子が旅にお疲れになったとおっしゃるのでしたらわが国も小国

流浪の人となった。宋公も引き留めきれず、沢山の餞別を贈った。 狐偃は感謝し、これを重耳に伝えた。結果、重耳は再び旅装束を整え 「あなたのお話には真心があります、本当にありがとうございます」

公子が出発した後、襄公の矢傷は日増しに悪化しまもなく亡くなった。39 臨終に際し、世子王臣に遺言した。

るだろう。位に就けば必ず諸侯を会盟する事ができる人だ。わが子孫は りんざい 誼 を通じてはならん。晋の公子は国へ帰ればきっと国主にな そなたが位を継いだら国のことは彼に任せなさい。楚は憎き仇だ、こん 「わしは子魚(公子目夷)の忠告を聞かずこんな事になってしまった。

臣が葬儀を主宰し即位した。これが宋成公である。 世子は何度も叩頭して拝命した。襄公は在位十四年で亡くなった。王

当でないと言っている。 **髯仙は、宋襄公は徳も実力もなかったので春秋五覇には挙げるのは適** 大事成らず身は致命傷 夢の話で自画自賛

# 名実わからぬ腐れ儒者 何故か宋襄五覇に列す

重耳が宋を去って鄭に近づくと、早くも鄭文公に報告が入った。

文公は大臣たちにそう言った。上卿の叔詹は、晋の公子には三つの度も餓死しそうになった不肖の男だ。礼を尽くすには及ばん」 助けるべき理由があり天佑のある人だから、いい加減に扱うべきではな 「重耳は父親に背いて逃げており、列国は何処も受け入れないから何

「三助とは何だ」

いと忠告した

国を逃げ出してから、晋国は問題が続いておりまして国を治められる人 耳は狐氏の子で狐は姫姓で同族、賢名も高い公子です。第二に、重耳が 「第一に『同姓(姫姓)との結婚で血筋が正しい』という事です。重

事、困っている者を救済する事、賢才を尊ぶ事、天命に従う事、この四 をもつ重耳は礼をもって遇した方がいいと考えます。同姓に礼をつくす は皆当世の英傑で、重耳はこれらを臣として抱えております。この三助 を待望しています。これは天意であります。第三に、趙衰、狐偃等従者

点どれも大切なことです」

「しかし、重耳はもうかなりの年だろ、これから何ができるというの

べきです。そうしないと怨みを買って将来に大きな不安を残します」 「重耳に礼を尽くす必要が無いと思われるのでしたら殺してしまう

らん 礼を尽さなきゃならん恩も、殺さなきゃならん恨み重耳からは受けてお 「大夫は考えすぎだよ。礼を尽せと言ったり殺せと言ったり。わしは

> 国君の待遇で迎え、九献の礼(周王が上公を宴に招待する時の方式)で歓迎 重耳は鄭が受け入れないとわかり、楚へ行って成王に会った。 そう言って守衛に門を閉じて入れるなと命じた。

成王も

「公子は出奔されてから外国で十数年になり、小国にさえ粗略にされ

の宴を設けようとした。重耳は遠慮しようと思ったが、

ですからこれは天命です、遠慮はなさらないほうがよろしゅうございま てきたのですから大国でしたらなお更です。その大国の楚がこういうの

と趙衰がそう言うので歓迎の宴を受ける事にした。

葉遣いに気をつけたのでこれより互いに気が合い、重耳は楚に留まるこ 宴が終わっても楚王は重耳に対し恭敬の態度は変らず、重耳もまた言

とにした。

きて車の前を通り過ぎた。 射止め皆がやんやと褒め称えた。ちょうどその時一頭の熊が飛び出して 巻き狩りを行なった。楚王は武芸を見せつけ、連射して一挙に鹿と兎を ある日、楚王と重耳は雲夢沢(長江中流の武漢と荊州間の広大な湿地帯)である日、楚王と重耳は雲夢沢(長江中流の武漢と荊州間の広大な湿地帯)で

と楚王が言うので、重耳は矢をつがえ胸のうちに祈った。 「あれをやったらどうですか」 わたしが帰国して晋の国主になれるのならこの矢を右の掌に当

サッと放つと正に熊の右掌に命中した。兵士がその熊を捕えて献上し

てさせ給え

「公子の矢はまこと神業なり」

楚王は驚き敬服した。

と趙衰が答えると、魏犨が大声で、

「臣が武器を持たずにそいつを生け捕りにしてお目にかけましょう」

その時猟場で突然喊声が起きた。楚王が何事か見にやらせたところ次

の部分もみな食ってしまうほど非常に強くて、人の力では何ともなても傷をつけることさえできない。鉄を泥のように噛み砕き車の鉄大きさで白黒のまだら模様がある。剣、戟、刀、矢どれをもってし大きさで白黒のまだら模様がある。剣、戟、刀、矢どれをもってし大きでのため、鼻は象のように長く、頭は獅子、足は虎、頭の毛は豺(山山中から奇妙な獣が飛び出してきた。その獣は熊に似ているが熊山中から奇妙な獣が飛び出してきた。その獣は熊に似ているが熊

楚王は重耳に

らないという事で騒いでいるという事である。

をご存知でしょう」
「中原で生まれ育った公子は博識でしょうから、おそらくその獣の名

生まれ、頭は小さくて足は短かく、銅や鉄を喜んで食いすぐ小便になり、「臣が存じております。その獣は名を獏といい、天地間の金属の気でと言う。 重耳が趙衰のほうを振り向くと衰が進み出て答えた。

なるということです」ばちになり、毛皮は敷き布団にすると好く湿気を取って伝染病の予防にばちになり、毛皮は敷き布団にすると好く湿気を取って伝染病の予防にとにかく金属はみな消化して水になるのです。骨には骨髄が無く太鼓の

「皮と肉は鉄の鎧のようですが、鼻の穴だけは開いているので純度の「わかった。しかしどうやってこれを捕まえればいいのだ」

火で炙ればすぐ死ぬでしょう」高い鋼鉄の剣で鼻の穴を刺すか、或いは金属は火に弱いといいますから

と言って車を跳び降り走って行った。

「一緒に見に行きましょうか」

**ぎまり** 楚王は重耳と一緒に現場へ駆けつけた。

舌でひと舐めすると魏犨の腰にあるきらきら光る金の帯が舐め取られた。殴りつけたが、その獣は何ともなく牛のような声で一声叫び直立して、魏犨は猟場内の北西の人垣の中にその獣を見つけ拳を揮って何度も

魏犨は怒って『畜生の分際で無礼者め』とばかり反動をつけて五尺も跳

その首に抱きついた。獣はそこらじゅうを飛び跳ねて走り回って振り落もう一度跳び上がりいつもの力を発揮して獣に馬乗りになりしっかりとび上がるとその獣は地面に倒れたがすぐまた立ち上った。魏犨は怒って

抱えた腕に更に力を加えると獣は首が絞まり窒息して動けなくなった。獣はしばらくもがいて次第に弱まってきたが魏犨には未だ余裕があり、とそうとするが、どんなに振っても魏犨は動きに合わせて手を緩めない。

て火気を入れると柔らかくなった。、魏犨は腰の宝剣を抜いて斬ろうとしった。正に虎将である。趙衰が兵士に命じて火でその鼻の先をくゆらせ鼻を手に巻きつけ犬を引くように、楚王と重耳の車の前に引っ張って行魏犨は獣から跳び下りてやっと銅筋鉄骨の両腕をゆったりと伸ばし、象

「この獣の皮を取るには火で囲って炙ればいいんです」

たが獣毛さえ切り取れない。

事で次第に柔らかくなって皮を剥ぎ取る事ができた。整王が趙衰の言う通りにすると、鉄のような皮や肉が周りからあぶる

「王は晋の家来の武勇をいたくお褒めになりますが、彼と力比べをさ

せていただけませんか」

楚王はそれを許さず得臣を叱った。、

「晋の君臣は大切なお客さまだ。きちんと敬意を表しなさい」

楚王は席上重耳に訊ねた。

この日狩が終わると酒宴が開かれ飲んで楽しく話し合った。

すか 「公子は晋国に帰られたらわたしにどんなお返しをしていただけま 「楚国は物が豊富で大王には足りない物は何も無いでしょうから、ど

のようにご恩に報いたらいいか分かりません」

「でも、必ずお心の中に何かお持ちでしょう、是非お聞きしたいです

ね

安心させたいと思っています。もし万一不幸にして大王と平原において 「もし大王のご意思で復国が成りましたら、貴国と友好を結び、民を

戦車での邂逅となった場合は、三舎退がらせていただきます」 行軍の場合二十里単位で停止しこれを一舎と言う。三舎とは九十里の

ことである。重耳のいう意味は、もし楚国と戦場で会った場合、三舎退 ってすぐには戦わず、それによって楚王の恩に報いるという意味である。 (『三舎を避ける』の故事 相手に一目置くの意味

「春秋左伝」僖公 23 年 )

宴が終わると成得臣は怒って楚王に言った。 「王は晋の公子を非常に厚遇なさいますが、さっきの重耳の言い方は

ちに殺しておくべきです」 不遜です。将来晋に帰ったらきっと楚の恩に背くと思われます。今のう

> 材だ。彼には天佑があるということに違いない。わしは天に逆らうつも 「晋の公子は間違いなく賢人だし、その従者も国家として得難たい人

りはない」

と楚王がいうと、成得臣は、

ば、虎に翼をつけて放す事になりますぞ」 「たとえ重耳を生かすとしても、狐偃、 趙衰たち数人を拘留しなけれ

と言ったが、楚王は、

公子に恩徳を施しておくつもりだ。それを恨みに代えてしまうのは上策 「拘留などするつもりはない。それは徒に恨みを買うだけだ。わしは

とはいえないぞ」

と言って晋の公子を益々厚遇した。

った。一方太子圉は久しく秦国の人質として秦都にいた。圉の母の実家 元前六三七年)、彼は病の床にあって朝政を見ることができない状態にあ 苛 斂 誅 求により万民の怨嗟を買い、税を逃れるために秦へ流れていく

梁君は混乱の中で民衆に殺されてしまった。 秦の穆公は民心の変化を見て、百里奚に梁攻撃を命じこれを滅ぼした。

人が多くなっていた。

太子圉は梁が滅んだのを知って

「秦がわが母の実家を滅ぼしたという事はわしを軽視しているとい

と思いそれ以後秦に怨みを抱くようになった。さらに父恵公が病に伏

う事に違いない」

話変わって、晋国の恵公であるが、周襄王十五年、晋恵公十四年(紀

せているという事を耳にしてからは、

わしは秦で一生を終わることになり、雑草と何ら変わるところがない。事があれば大臣たちは他の公子を立てるに違いない。そんな事になれば晋の国内にも援けてくれる腹心がいるわけでもはない。父上にもしもの「このまま国外にいたのでは、秦にわが身を思ってくれる者はないし、

逃げ帰って父上の看病をし家臣たちを安心させなきゃならん」

そう考え、夜、妻の懐嬴に寝間でそのことを話した。

に晋へ行ってくれたら公私両全という事になるんだが・・・」
「帰ってしまったら夫婦の間はそれっきりだ。もしそなたがわしと一緒「今逃げ帰らなかったら晋国は他人のものになってしまう。しかし逃

「あなたは一国の太子でありながら此処に質として囚われているようなものですからお帰りになりませんからご安心なさってください」と命じられていますので、あなたに随いて行ったのではそれに背くことと命じられていますので、あなたに随いて行ったのではそれに背くことになり大変な罪を犯す事になります。あなたはご自分のご都合だけをおになり大変な罪を犯す事になります。あなたはご自分のご都合だけをおになり大変な罪を犯す事になります。あなたはご自分のご都合だけをおきえになればいいのよ。わたしはご一緒できませんが、あなたのお話を人に漏らすような事は決して致しませんからご安心などのではあれているようなものですがあります。

もなかった。

「義に背くこの人でなしめ、天は汝を許すまい」穆公は子圉が挨拶もせず逃げ帰ったことを知り非常に怒って、

と怒鳴り散らし大夫たちに明言した。

の行方を捜させたところ、現在楚国にいてすでに数ヶ月になる事がわか穆公は以前晋の公子重耳ではなく夷吾の面倒をみた事を後悔し、重耳『夷吾は父子でわしを愚弄しおった。許せん。必ずこの仕返しはする』

え晋国に復帰させたいという意向を伝えた。った。そこで公孫枝を使者として楚王を訪問させ、王に、重耳を秦に迎った。

重耳は心にもなく楚王に言った。

はありません」
「逃亡者の身としては王のご命令に従いますが、秦へは余り行きたく

れは公子にとっては天与のチャンスです。ここは曲げて秦へ行かれるべも秦君はもともと賢明な人ですが、晋君とはうまくいっていないのでこばなりませんが、秦と晋は隣ですから朝出れば夕方には着さます。しか「楚と晋は遠く離れていて公子が晋に入るには数国を経由しなけれ

重耳は感謝して承諾した。

服している国であり、しかも公孫枝が同行していたので行路は何の不安してやっと秦の国境に達した。途中数カ国を経由したが全て秦、楚に帰楚王は手厚い贈物をつけて盛大に送り出した。重耳はまた数ヶ月を要

愛し子圉を恨んでいたので、穆公に懐嬴を重耳の妻に勧めた。穆公は夫えに出て公館に案内し大変なもてなしであった。秦夫人穆姫も重耳を敬秦穆公は、重耳が来たという報せを受け、非常に喜び自ら郊外まで迎

「わたしは一度公子圉殿と結ばれていますのにいいのでしょうか」

人に懐嬴の意向を聞かせた。

多いのできっと晋国の君主になるわ。そうなればそなたは夫人になって、「子圉はもう帰って来ないわよ。 重耳殿は賢明な方だし援助する人も

懐嬴は黙って考えていていたがしばらくして、秦と晋は代々婚姻関係ができるのよ」

「そういう事で両国の友好にお役に立てるのでしたらお任せいたし

関係でありそれからすると懐嬴は甥の嫁という事になり、重耳としては 穆公は公孫枝を通じてその事を重耳に伝えた。子圉と重耳は叔父甥の

倫理面で引っ掛る所があるので断ろうと思った。 ところが趙衰が ・懐嬴様は美しく頭のいい方で、秦君と夫人は彼女を大変可愛がって

する事はできません。公子、どうかこの縁談ご承諾下さい」 ば先ず人に従ってみよ』といいます。秦君と溝ができれば秦の力を利用 もしれません。『己を愛されたくば、先ず人を愛せよ、己に従わせたけれ いると聞いています。彼女をお断りになったら秦とはうまく行かないか

なあ」

と言って強く説得した。

「同姓間の結婚でさえ避けるのが普通なのに、これは兄弟の子だから

重耳がそれでも躊躇していると、臼季が昔の事例でこの話を進めた。

の黄帝、炎帝はいずれも有熊国主少 典の子であり、黄帝は姫水で生ま

「昔の同姓というのは同徳」をいうのであって族ではありません。古

姓を得たものは十四名で姫、己二つだけで同じ徳です。徳も姓も同じで 姜姓となり、姫・姜は代々婚姻関係がありました。黄帝の子は二十五人、 れ炎帝は姜 水 で生まれました。二帝は異徳のため黄帝は姫姓、炎帝は

あれば、族が遠くても結婚できませんが、徳も姓も異なれば族が近くて

55 尭の娘は舜の祖父の姉妹ですが尭は舜の妻にし舜は断りませんでした。 も大丈夫です。 尭は帝嚳の子で黄帝五代の孫で、舜は黄帝の八代の孫、 物に備わった本性をいい、五行説では各王朝の徳は、黄帝は土徳、夏は木徳、商

は金徳 周は火徳 秦は水徳

漢は火徳などとしている

昔の人の結婚はこのようでした。徳で言えば子圉の徳は公子とは異なり 何も差し障りはないないと思います」 ます。近親度合いから言えば秦の女性は祖父の姉妹とは比較になりませ ん。ましてこの話を断れば秦の心を得る事ができなくなります。結婚は

重耳は狐偃にも聞いてみた。

て代わろうとお思いでしたら仇の妻です。お考えになる事はないでしょ 晋君になります。彼に仕えるおつもりでしたら彼女は国母ですが、取っ しょうか取って代るおつもりでしょうか。晋国は今のままであれば圉が 「公子が国へ帰ろうとなさっておられるのは圉に仕えるおつもりで

それでもなお気が進まない様子であったが、趙衰が、

Ď

事の前に小さな道徳にこだわって後悔することになっては大変です」 と押したので重耳も遂に意を決した。 「国を取ろうという時に妻の事を気にする必要がありましょうか。大

った。 与えたので重耳は望外の事に大変喜び、流浪の辛苦は頭から抜けてしま 懐嬴は斉姜よりさらに美人で、その上穆公の一族の美女四人を妾として 公孫枝はそれを穆公に復命した。重耳は吉日を選び公館で結婚した。

懐嬴のことに関して次のような詩がある。 ただ秦の機嫌とらんため 人の噂も気にしない 女に何ぞ二天あらんましてや二人は叔父と姪

柄になったので一層親しみが増し、三日にあげずもてなした。秦の世子秦穆公はもともと晋の公子の人品を尊重していたが、さらに父子の間

かった者も死刑に処す」

晋君として名のある覇主になるように生み落されたのであり、必ずそのすべい言葉に『時来たりなば蘇鉄も花を咲かすなり』という。天は重耳を古い言葉に『時来たりなば蘇鉄も花を咲かすなり』という。天は重耳を古い言葉に『時来たりなば蘇鉄も花を咲かすなり』という。天は重耳を善い言葉に、公孫枝等と打ち解けた。しかし、しばらくは君臣共に復国に向すとして名のある覇主になるように生み落されたのであり、必ずそのをして名のある覇主になるように生み落されたのであり、必ずその音を表して名のある覇主になるように生み落されたのであり、必ずその音を表して名のある覇主になるように生み落されたのであり、必ずその音を表して名のある覇主になるように生み落されたのであり、必ずその音を表して名のある覇主になるように生み落されたのであり、必ずその音を表して名のある覇主になるように生み落されたのであり、必ずその音を表して名のある覇主になるように生み落されたのであり、必ずその音を表して名のある覇主になるように生み落されたのであり、必ずその音を表して名のある覇主になるように表している。

に安心した」のだ。そなたが鳥籠から抜けて世子として戻ってくれたのでわしは本当のだ。そなたが鳥籠から抜けて世子として戻ってくれたのでわしは本当らさて晋国では、太子圉が秦から逃げ帰って来て、恵公は非常に喜んだ。

チャンスは訪れるはずである。

その年の九月、恵公は危篤になり、呂省(呂飴甥)、郤芮に子圉の補佐

太子圉が葬儀を主宰して即位した。これが晋懐公である。と念を押し、呂、郤二人は叩頭して拝命した。その夜恵公は亡くなり、「他の公子たちはどうでもいいが重耳だけは十分に注意するよう」

(罪人名簿(第丁回注5参照)に死刑と記す。また父兄弟で呼戻す努力をしなさせ、既往の罪は問わない。期日を過ぎても帰らない場合は除名し丹書り三ヶ月以内に帰国させるべし。期日までに帰国した場合は旧職に復帰「晋の家臣で重耳の国外逃亡に随従している者は、家族から連絡をと懐公は重耳が外で事を起こすことを心配して、

彼は何度言っても取り合わない。で、郤芮が狐突に息子達を呼び戻す手紙を書くよう私的に説得したが、で、郤芮が狐突に息子達を呼び戻す手紙を書くよう私的に説得したが、老臣狐突の二人の息子狐毛、狐偃が二人とも重耳に随いて秦にいるの

都芮は懐公に頼んだ。懐公は早速狐突を呼びにやった。狐突は死を覚います。どうか殿のほうから直接お話願えませんでしょうか」二人を呼戻そうとしないのでどういうつもりなのか気持ちを測りかねてますが、これは虎に翼をつけているようなものです。狐突はどうしてもますが、これは虎に翼をつけているようなものです。狐突はどうしてもますが、これは虎に翼をつけているようなものです。狐突は死を覚いない。

「毛、偃が二人とも国外にいるが、国舅は彼らに帰国を勧める手紙を「臣は病気で家に居ましたのでご命令の趣旨をよく存じません」

悟し家族に別れを告げて懐公に会った。

書いたのかどうか」

『期日を過ぎたら罪は親族に及ぶ』と命じているはずだ。聞いてな

いと言うのか」

懐公は怒って、二人の力士に命じて二本の白刃を狐突の首にかけ、に忠義を尽くすのは朝臣たちが殿に忠義を尽くすのと同じであります。たとえ逃げ帰ってきても、臣はその不忠を叱ってわが家の廟中で死を言たとえ逃げ帰ってきても、臣はその不忠を叱ってわが家の廟中で死を言い渡します。と同じが君に仕えれば死は一度しかありません。息子たちが重耳殿は一度しかありません。息子たちが重耳殿は一度が二人の息子を重耳殿に預けたのは昨日今日の話しではありま

と言い硯と筆を狐突の手元に置き郤芮が手をとって手紙を強要した。

「二人の息子が帰って来れば死を赦してやる」

#### と言って、

懐公は怒り狂った。 『子無二父、臣無二君』(子に二父なく、臣に二君なし)の八字を大書した。

「そなたは惧れを知らないのか」

るところです。死ごときは臣下として常に覚悟しております、何を畏れ 「子として不孝である事、臣として不忠である事、これが老臣の畏れ

と言って従容として死についた。

ることがありましょう」

太トの郭偃はその死を見て、

臣を殺してしまった。こんな事では長くもつはずがない」

「主君は位を継いだばかりで、その徳はまだ匹夫にも及ばないのに老

と嘆き、その日から病気と称して参内しなくなった。狐氏の家臣は急

いで秦国の毛、偃に知らせた。

さて、狐毛、狐偃は如何対処いたしますか、次回をお楽しみに。

### 晋の呂・郤 夜公宮を焼き 秦穆公 再び晋の内乱を平定す

狐毛、狐偃兄弟は公子重耳に随って秦にいて、父狐突が子圉に殺されこもう。こえん

た事を知り、胸を叩いて号泣した。

趙衰、臼季らが慰めにやって来た。 「亡くなった方は戻っては来ない。泣いても仕方がない、公子に会っ

て大事を相談しようじゃないか」

趙衰がそう言うので二人は涙を納めて重耳のところへ行った。 「恵公が死んで子圉が即位しましたが、彼は晋の家臣で逃亡者に随い

ている者を期限内に呼び戻さなければ家族を罰するという命令を出し、 老父は我われ兄弟を呼び戻さなかったために殺されてしまいました」 二人はそう報告するとどっと悲しみがこみ上げまた大声で泣き出し

重耳はすぐに穆公に会ってこの件を報告した。 「そんなに悲しまないでくれ、復国したら必ず仇をとってやろう」

ャンスを逃してはならん。わしも力になろう」 「これは天が晋国を公子に授けようとなさっているのに違いない。チ

穆公がそう言うと、 趙衰がそれに答え、

定し君臣の立場が定まってしまいます。そうなると皆が動揺して難しい す。子圉が改元して祖廟に報告をしてしまったら子圉の国主の地位は確 「ご主君がわが公子を庇護いただけるのでしたら早いほうがいいで

事になりかねません」

46

□ 泰卦 周易六十四卦の一つ( 乾下坤・土の形で陰と陽が十分に交流し調和する様を

重耳が自分の屋敷へ帰ってやっと落ち着いたところへ、と言うと、穆公もまさにその通りと深くうなずいた。

と門番からの連絡が入ったので、請じ入れた。「晋国から機密の話で公子にお会いしたいという方が見えています」

わせて私兵を集めており、公子がお見えになれば内応する手はずになったじて用いようとはしません。父はすでに郤溱、舟之橋たちと示し合んじて用いようとはしません。父に公子と連絡を取るように命じられて参りまも心服しておりません。父に公子と連絡を取るように命じられて参りました。子圉は呂省と郤芮だけを信頼し、旧臣郤歩場や韓簡等の老臣を疎んじて用いようとはします。受君は清疑心が強く、誅殺「臣は晋の大夫欒枝の子欒盾と申します。晋君は清疑心が強く、誅殺「臣は晋の大夫樂枝の子欒盾と申します。晋君は清疑心が強く、誅殺

樂盾が帰った後、天に祈って占うと『泰卦。 六爻安静』と出た。重耳られた。 まられば そくらもんせい まられ 産工は喜んで、翌年年明けに黄河の河岸で決戦する約束をした。

ております」

はよくわからず狐偃を召してその吉凶をたずねた。

偃がそう解釈して拝賀したので、重耳は欒盾が言った事を彼に話した。称える事もできるということです」が今なさろうとしている事は単に晋国を得るという事だけではなく覇を「これは小事が去り大事がやってくるという大吉のしるしです。公子

いに越した事はありません」 「それなら早速明日秦公に兵を借りる話をされたほうがいいです。早

「公子は帰国を急いでおられるのでしょう。部下に任せてはおけませ重耳は翌日再び参内して穆公に会った。穆公は重耳が口を開く前に、

ん、わたしが自分で公子を黄河まで送って行きましょう」

郊豹は穆公が重耳を帰国させようとしているのを聞きつけ、先鋒で重と言ってくれたので心から感謝して退出した。

耳に尽力したいと穆公に申し出て許された。

何度も頭を下げて感謝した。 の度も頭を下げて感謝した。 のでは、 

で恋々と別れを惜しみ、ずっと渭陽『まで送って来てそこでやっと涙なし東へ向かった。秦の世子罃は重耳とたいへん親しく付き合っていたの先鋒邳豹という態勢で戦車四百乗を率いて重耳を送って雍州城を出発先鋒邳豹という態勢で戦車四百乗を率いて重耳を送って雍州城を出発予定の日になり、穆公は自らも謀臣百里奚、繇余を伴い、大将公子勢、予定の日になり、穆公は自らも謀臣百里奚、繇余を伴い、大将公子勢、

懐公徒に狐突を殺して どうして片手で太陽を遮れよう猛将精兵虎狼に似たり 共に公子扶けて国境に立つがらに別れた。

はもう一度酒宴を張って、耳は黄河の岸に着いた。河を渉る舟はすでに予定通り整っていた。穆公耳は黄河の岸に着いた。河を渉る舟はすでに予定通り整っていた。穆公周襄王十六年(紀元前六三六年)、晋懐公圉元年正月、秦穆公と晋公子重

忘れないでいただきたい」「公子、此処でお別れするが、国に帰られても決して我々夫婦の事を

と言い、軍を半分に分けて、公子 縶 と邳豹に河を渡って重耳を守って

17 渭陽 渭水の北岸 陽とは河の日の当たる側すなわち北岸ない。

晋へ送り届けるよう命じ、自らは大軍を黄河の西に駐屯させて、戦勝報

告を待った。

テントの様な物を整理して船に乗せ、飲み残しの酒なども宝物のように河を渉るに際し、彼がいつも使っていた古くなって壊れた食器、ござ、しんだ時もずっと、乏しい衣服食料を非常に大切に守ってきた。今日黄

いよ」
「わしは今日にも帰国して君主になる。そんな壊れた物はもういらな

大切に船内に並べているのを見て重耳は大笑いした。

と言ってそれらを残さず全て岸に捨てさせた。

狐偃はそっとため息をついた。

「公子は富貴を手にする前にもう貧しく苦しかったことを忘れてし

の苦労も水の泡となってしまうのかもしれない。むしろ河を渉る前におれ、我われ一緒に苦労してきた者もあのように捨てられて、結局十九年まっている。これじゃ復国後は新しいものを愛して古いものは捨て去ら

彼は秦公がくれた白璧一対を重耳に献上して、別れしたほうが何時かそんな思いをするよりいいかもしれん」

んの気持ちでございます」と思います。何もありませんがこの一対の白璧はいささかながら臣のほと思います。何もありませんがこの一対の白璧はいささかながら臣のは外には秦将がいますので晋に入るのに不安はありません。わたくしがい外には秦将がいますので晋に入るのに不安はありません。わたくしがいり、この黄河を渡ればもう晋の国です。国内には諸臣が待っていますし

「やっとこれから富貴を共にできるというのにどうしてそんな事を

と言った。重耳は驚いた。

「臣は公子に三つの罪がございましてこれ以上ご一緒できません」

言い出すのだ」

「聖臣は君に尊敬され、賢臣は君を安んずるといいます。五鹿では大「三つの罪とは何だ」

の君主に侮辱された事が第二の罪、お酔いになっている隙に公子を斉国変なご苦労をお掛けしました。これ臣の責任でこれが第一の罪。曹、衛

臣はこの数年走り回って心身ともにぼろぼろで壊れた食器や破れたテンれておられる間はお別れできませんでしたが、もうすぐ帰国されます。から連れ出しお怒りを蒙りました事、これが第三の罪です。殿が流浪さ

トござのように既にお役に立たなくなっております。お傍にいましても

無益と考え、お別れする事に致しました」

重耳は涙を流して、

「わしが間違っていた、どうか許してくれ」

って、と言い、直ちに壷叔に捨てさせたものを全て取り戻させ、黄河に向か

子孫の繁栄はない」
「復国した暁に、もし狐偃殿の労苦を忘れ軽視するような事があれば、

るのを聞き、この時、介子推は別な舟に居て、重耳が狐偃のために誓いを立てていこの時、介子推は別な舟に居て、重耳が狐偃のために誓いを立てていと誓って、誓いの証だと言って白璧を河に投げた。

あいつらは富貴に執着する連中だ。わしは恥ずかしくて一緒に仕事「公子の復国は天意なのに子犯(狐偃)は自分の功のように考えてい

と密かに嘲笑って、この時から官を辞し隠棲する気持ちになっていた。はできん」。\*\*\*\*

概略次の通り

して令狐城を攻め落とし鄧惛を斬った。桑泉、臼衰等の諸城は情報を聞で、城頭で指揮し抵抗した。秦軍はこれを包囲し、先鋒邳豹は勇躍奮闘重耳は黄河を渡り、東へ進み令狐に着いた。令狐の守城責任者は鄧惛

き投降して来た。

の軍中に届けさせた。
の軍中に届けさせた。
の軍中に届けさせた。
の軍中に届けさせた。
の軍中に届けさせた。
の軍中に届けさせた。
の軍中に届けさせた。
の軍中に届けさせた。

手紙の内容は以下の通り。

わたしは晋のために恩を施してきましたが、晋の父子はその恩を い。災いを転じて福となすはこの一挙にあります。わたしは晋の父親には我 に駐屯し、 繋に、重耳殿を晋の社 稷の責任者にするためにお護り に駐屯し、 繋に、重耳殿を晋の社 稷の責任者にするためにお護り に駐屯し、 繋に、重耳殿を晋の社 稷の責任者にするためにお護り して晋国へお帰しするよう命じています。わたしは日ら大軍を率いて黄河の西 は周知の事であり、これを補佐するもの多く、天佑もこれあり、内外の心は一つになっています。わたしはその父親には我 は できになるでしょうから、 支を収めて迎えに来ていただきた 別はおできになるでしょうから、 支を収めて迎えに来ていただきた 別はおできになるでしょうから、 大を収めて迎えに来ていただきたい。 災いを転じて福となすはこの一挙にあります。

した。

てくださるならご命令に従いましょう。
た諸氏と、天に誓って互いに傷つけないという事を繋大夫が保証しはわたしたちの希望でもあります。もし公子の流浪に随って来られば装解除ができないでいます。しかし公子を推戴申し上げる事は実武装解除ができないでいます。しかし公子を推戴申し上げる事は実

一人で廬柳へ呂、郤に会いにでかけた。二人は喜んで出迎え腹を割って公子繁はその回答書を読み、彼らの猜疑心が強い事がわかったので、

言った。

ば信じられるのですが」
てくれないのではないかと心配しているのです。盟約をしていただけれてくれないのではないかと心配しているのです。盟約をしていただけれていたしたちは投降してお迎えする気がないのではなく、公子が許し

すように話をつけましょう」「大夫が軍を北西方向へ撤退すれば、わたくし繋が公子に盟約を交わ

は郇城の大軍に迎えられ彼らに方針の号令を発した。 盟約が終わると、呂、郤はすぐに使者を狐偃と共に臼衰城へ遣り、重耳の血をすすり共に重耳を扶け君主に推戴する事に二心なきことを誓った。 重耳は狐偃を公子繁と一緒に郇城へやり呂、郤に会わせた。犠牲呂、郤は承諾して、公子繁が帰ると直ちに軍を郇城まで退げて駐屯呂、郤は承諾して、公子繁が帰ると直ちに軍を郇城まで退げて駐屯

懐公に背き、重耳を迎えようとしている事を聞きつけ慌てて懐公に報告った。途中で、呂、郤が郇城まで撤退し、狐偃、公子縶と講和を結んで懐公は呂、郤からの捷報がないので、督戦のため寺人勃鞮を晋軍へ遣

らはみな心は重耳に向いていて、以前から懐公が呂、郤のみを信任して急遽、郤歩揚、韓簡、欒枝、士会等朝臣を集め対策を協議したが、彼いのは、いかい。

いたのを心中不満に思っていた人たちである。

一体どうしろとおっしゃるのですか. 「呂、郤に背かれ危機的状況になってから我われをお召しになって

ある者は体の具合が悪いと言い、ある者は仕事にかこつけて一人二人

と抜けて行き御前に残ったのは半分も居なくなった。

しまったのか」 「秦から勝手に逃げ帰って友好を壊したため結局こんな事になって

懐公がため息をついた。

に留まる事はできません。 臣が御者を勤めますから暫く 高 梁 へ避難願 「大夫たちは密かに新君を迎える話し合いができていますからここ

います。後の事はそれから検討いたしましょう」

と勃鞮が進言し、懐公は高梁に出奔した。

さて、重耳は呂、郤の使者に迎えられて晋の陣営に入った。呂省、郤芮さて、重耳は呂、郤の使者に迎えられて晋の陣営に入った。呂省、郤芮

無事に来た事を喜び合った。呂、郤も非常に喜び重耳は二人の案内で 趙衰、臼季等逃亡を共にした人々は互いに顔を見合わせ共にここまで

プも絳都郊外に迎えに出ていた。 沃に集まり重耳を歓迎し、郤歩揚、 梁繇靡、韓簡、家僕徒等別のグルー

て懐公を始末した。子圉は昨年九月に継位して二月に殺され在位は六ヵ になった時はすでに六十二才であった。即位するとすぐ高梁へ人を遣っ 国へ出奔し、五十五才で斉へ行き、六十一才で秦、そして復国して君主 重耳は絳城に入城し即位した。すなわち晋文公である。四十三才で翟

> 月に満たない哀れな君主であった。勃鞮は彼を葬った後、晋へ逃げ帰っ さて、文公は宴を張って秦将公子 繋等秦軍を厚くねぎらった。 邳豹は

邳豹を自分の下に留めたいと思ったが、彼は、

仕えすることはできません」 と言って公子縶に随って河西に渡り秦穆公の下へ戻った。 「臣はすでに秦国に身をおいていますので、大変残念ですが二君にお

堂々たる車騎黄河を東に渉る 竜虎時を得て意気盛んなり 秦軍もしも義軍にあらざれば この成功はありえしや

考えているのか測りがたく、呂省、郤芮に疑惑を抱かせた。そこで二人 文公は即位後数日経っても論功行賞も罪人の処分も行なわないので何を 内心は、趙衰、臼季等に対し慙愧の気持ちもあり釈然としない。その上、 に立てようと考えた。しかし、朝廷の中には相談できるものはいない。 は腹心の兵を率いて宮室に焼き討ちをかけ重耳を殺して別の公子を君主 さて、呂省、郤芮は晋軍に迫られて一時投降して重耳を迎え入れたが、

誅殺を恐れているはずだし、胆力は抜群だから彼を仲間に入れたらどう

「寺人の勃鞮は重耳から恨まれており、重耳が即位した今となっては

り盟約を交わし、二月末に集まってその夜半に一斉に挙行する約束を交 二人が宮室焼き討ちの話をすると勃鞮は喜んで承知した。三人は血を啜 と話は決まり彼を呼び出した。勃鞮は呼び出しに応じてやってきた。

わした。呂、郤はそれぞれ自分の封地へ帰り密かに人を集めはじめた。

事 (「晋書 康帝紀」

善悪を問わず夫々の主人のために忠義を尽くすという

。ところで、勃鞮は二人の前では承知したが内心ではこれは拙いと思っところで、勃鞮は二人の前では承知したが内心ではこれは拙いと思っ

いと思い、深夜狐偃を訪ねた。狐偃は夜中のこの男の訪問に驚いた。しかし自分がすでに重耳に恨まれている男だから、直接会うのはまず

勃鞮は大声で笑って反論した。

しれない、そうだこれは妙案だ」

「新君にお会いできるよう国舅にお取次ぎお願いいたしたくお伺いないで夜中にこんな所へ来るなんて一体どういうわけだ」「そなたは新君が最も恨みに思っている人の一人だぞ、遠くへ避難しいと思い、深夜狐偃を訪ねた。狐偃は夜中のこの男の訪問に驚いた。

「そなたが主君に会うというのは自殺行為だぞ」

いたしました」

狐偃は彼を連れて公宮門へ行き、門を叩いて偃が先に入り、文公に会かかってからお話申し上げたいのです」「晋の或る方の命にかかわる機密の話がございます。ご主君にお目に

「鞮がわしに何の話があるというんだ。或る人の命を救うだって?って、勃鞮が会いたいと言っている事を話した。

たばかりですから、小さな怒りはお捨てになってご寛大に忠告をお聞き『『賎しき者の言からも聖人は選びとる』と申します。殿は即位されそんなのわしに会う口実だ。国舅に泣きついて許し請いに来たんだろう』

になっていただきたく存じます」

文公はまだ釈然とせず、人を遣って勃鞮に詰問させた。

ずぐずしていると捕えて処罰するぞ」ででずしていると捕えて処罰するぞ」に来たのだ。早々に立ち去れ、ぐだった。天佑があってお前の毒手にかからずにやっと帰国できたんだが、だった。天佑があってお前は翌日すぐやって来たから危なく捕まるところだった。天佑があってお前は翌日すぐやって来たから危なく捕まるところが、まれたはどの面さげてわしに会いに来たではないか。恵公は三日の期限覚える。その後又翟へわしを殺しに来たではないか。恵公は三日の期限

献公、恵公しかなく、どうして殿の事を配慮できましょうか。昔、管仲献公、恵公しかなく、どうして殿の事を配慮できましょうか。昔、管仲さ当然そういう気持ちでした。勃鞮は小吏ですから、あの時臣の頭にはど当然そういう気持ちでした。勃鞮は小吏ですから、あの時臣の頭にはた。父親がその子を仇とし、弟が兄を仇としているのですから、勃鞮なず。父親がその子を仇とし、弟が兄を仇ときの国内の事情がよくお「殿は十九年も国外におられたのでそのときの国内の事情がよくお

にならなくても臣は何の損もありませんが、臣が去った後、近く殿に災めの恨みのために覇業をお捨てになられるようですね。殿が臣にお会いたが、桓公はそれでも彼を用いて遂に天下に覇を称えました。殿は帯止は公子糾のために桓公に矢を放ち帯止めに中ったため危うく助かりまし

がよろしいのではないでしょうか」
「勃鞮は何か情報を持ってきているようです、お聞きになられたほういがふりかかって来る恐れがあるのを心配しているです」

狐偃がそういうので文公は勃鞮を呼んで宮中に入れた。

祝いを述べた。 勃鞮は自分の罪を謝ろうとはしなかったが、何度も頭を下げて即位の

るんじゃないか」 「わしが即位してもうかなり経つが、今頃祝い言とはいささか遅すぎ

して殿の君位はやっと固まりお祝いが言えるようになったのでございま 「即位されたとはいえ、祝うにはまだ早すぎたのです。勃鞮が参りま

文公はその発言を不審に思って人払いをして話を聴く気になった。 勃

鞮は呂、郤の陰謀をかくかくしかじかと細部にわたって話した。 「彼等の仲間は城中にたくさんいますし、二人は封地に帰って兵を集

て内応いたします」 救援軍をお頼みになればこの難局は平定できましょう。 臣は此処に残っ めています。殿にはこの間に狐国舅と一緒に変装なさって秦国へ行かれ

狐偃が言った。

事は子余(趙衰)に任せば必ずきちんとやります」 「事は差し迫っているようです。 臣がご一緒いたしましょう。 国内の

重耳は勃鞮に丁寧に言い、勃鞮も叩頭して帰って行った。

「十分に気をつけるよう、褒賞は十分に取らすぞ」

文公と狐偃はじっくり話し合い、狐偃に宮城の裏門に温車(寝台車)を

絶対口外無用と言ってこれこれと指示をし、その夜はいつものように寝

準備させ数人だけを連れて行くことにした。文公は腹心の内侍を呼んで

と言って内侍に手燭を持たせて厠へ行きそのまま裏門から出て、狐偃 「寒気がする、腹の具合が悪いらしい」

と車に乗って城を出た。

翌朝、宮中には主上は病気でどなたが寝室に見えてもお会いできませ

きた。しかし朱塗りの扉は閉まったままで門の上に面会謝絶の札が懸か 百官が参内してきたが文公が朝議に出てこないので公宮に様子を訪ねて んと発表した。宮中では誰も重耳が出て行った事は知らない。日が昇り、

ん。三月初めには朝議に出て皆さんにお会いできるだろうとおっしゃっ 「主上は夜中に急に風邪をひかれてベッドから下りる事ができませ

っていて、守衛が説明した。

ています」

は文公が病気で三月になるまで出られないと聞き、 しょう。正に『天には不測の風雲あり、人には旦夕に禍福あり』ですね」 と趙衰がいうと皆信じて、心配しながら帰って行った。呂、郤の二人

「殿は即位されたばかりで大変忙しかったので急に倒れられたので

と密かに喜んだ。 「これは天佑だ」

あったなと察し、狩りに行くという名目ですぐに王城へ行き晋侯に会っ を穆公に届けさせた。 穆公は晋侯が微行して来るというので国元で何か して王城(秦の地名 洛陽の王城とは同名異地)でお会いしたいという密書 さて、文公、狐偃一行は潜行して晋の国境を越え秦に入り、使者を出

ちが賊に対しきちんと対処してくれますよ、心配ご無用 「これで天命は定まったな、呂、郤に何ができよう。子余 (趙衰) た

た。会って来意を説明すると、穆公は笑って、

絳都の様子を探らせた、晋侯には王城を仮の住まいとさせた。」と言っていつでも行動できるよう大将公孫枝を黄河の岸に駐屯させ

部内の家で寝泊りしていた。 一方、勃鞮は呂、郤が疑わないように数目前から相談するふりをして

二月の晦日になったので勃鞮は郤芮に、

たとえ羽が生えても逃げられないでしょう」門を占拠して火を消そうとする連中を抑えましょう。そうすれば重耳は気が幾らか良くなったのでしょう。もし宮中に火を付けたら必ず外へ出気が幾らか良くなったのでしょう。もし宮中に火を付けたら必ず外へ出たとえ羽が生えても逃げられないでしょう。変更が無いのはおそらく病

中を大勢の兵士たちが走り回り口々に、い勢いで燃え、宮人はみな驚いて夢から醒め大混乱に陥った。火の光のの外で待ち伏せた。おおむね三更頃宮門に火が放たれた。火はものすごの外で、家兵に武装させ、火種を持たせてそれぞれ分担して宮殿の門

「重耳、もう逃げられないぞ」

「どうだ」

慌てて知らせてきた。火の中に入り探し回った。突然外のほうから喊声が沸き起こり、勃鞮が火の中に入り探し回った。突然外のほうから喊声が沸き起こり、勃鞮がと聞かれたが呂省は答えられずただ頭を振るだけである。二人は再び

明けを待って、晋侯の生死を確認してから後の策を検討すべきだと思い明けを待って、晋侯の生死を確認してから後の策を検討すべきだと思いと国人が集まり、逃げられなくなります。この乱れに乗じて城を出て夜

「狐、趙、欒、魏等が兵を連れて消火にやって来ました。夜が明ける

ます」

晋公 袂 の恨忘れざれば 何ぞ潜行し再び秦公に見え得よう 火は無情にも殺人器と化すも 主上の車駕は何と王城にありいい案がない。仕方なくみなに号令して朝門をとび出していった

呂、郤はこの時、まだ重耳の死体を見ていないので焦っていたが他に

時の恨み。 王城は前注の通り秦にある王城という地名)(袂の恨 勃鞮が蒲城の重耳討伐時重耳は袂を切ってやっと逃れたの十二才 7才 7

していた晋侯の腹心の内侍があらかじめ命じられていたことを報せに来晋侯が見当たらないのでみな肝をつぶした。そこへ、火の中から逃げ出た。夜が明け鎮火してからやっと呂、郤の謀反であったことがわかり、た。夜が明け鎮火してからやっと呂、郤の謀反であったことがわかり、然、趙、欒、魏等大夫たちは宮中の失火を見て、そこで殺し合いがあ

た。行き先はお聞きしていません」
「主上は数日前の五鼓に微行服に着替えられてお出かけになりまし

と趙衰が言うと、狐毛がそれに答えて、「それは狐国舅に聞けばわかるだろう」

事前にわかったのでしょう。我われは厳重に都城を守り宮殿の修復をしのです。おそらく殿と一緒なんだろうと思います。きっと二賊の謀反が「弟の子犯(狐偃)も数日前に宮中に入ったまま家には帰っていない

て殿のお帰りを待つべきだと思います」

53

と言う。魏犨は、

「やつ等は謀反を起して宮城を焼き、殿を弑逆しようとしたんだ。逃

げても未だそう遠くへは行くまい。一軍を預かり追撃してやつを斬りた いのですが」

といきまいたが、趙衰がなだめて言った。

「兵を動かすのは国家の大権であり、主上がいない時に勝手にやって

城を謹厳に守っている事を探りあて、 彼等に追撃される事を心配して他 はいけない。二賊が逃げたとしてもしばらく首を預けておくだけだよ」 さて、呂、郤らは郊外に駐屯し、晋君が死んでいない事、大夫たちが

国へ逃げる事を考えたが何処へ行くかを決めかねていた。 勃鞮は二人を

「晋君の廃立は以前からみな秦君の意のままです。ましてお二人は

だとごまかして秦君を頼って行って、公子雍殿を迎えて晋君とすれば、 元々秦君とは旧知の間ではないですか。公宮が失火して重耳は焼け死ん

たとえ重耳が生きていても入国は難しくなります」

と説得した。呂省は、

もしれないな。だが秦が受け入れてくれるかどうかはわからないぞ」 「秦君とは王城の盟約を結んだ間であり、今となればそれしかないか

と心配するので勃鞮は更に押した。

考えましょう」 入れてくれそうだったら一緒に参りましょう。だめでしたら又別の事を そこで勃鞮は黄河の岸へ行って、公孫枝が黄河の西に駐屯していると 「それでは、わたしが先に秦へ行って意向を探って見ましょう、受け

聞きすぐに河を渡り会見した。双方腹蔵なく話し合い真情を語った。

って幸便に始末をつけましょう」 公孫枝はそう言って勃鞮に手紙を託して呂、郤を呼んだ。手紙の概略

「賊臣が投降してくるというのであればそれを誘い込んで国法に則

は次の通り。

るのでしたら、わが君もお聞きする用意はあります。速やかにおい くなられたとお聞きしましたが、お二人が公子雍殿にお気持ちがあ 化のため河西に兵を駐屯するよう命ぜられました。新君が火事で亡 恵公の故事が繰返されないよう、わが君よりわたくし枝が境界明確 新君が入国されるにつき、わが君と土地割譲の約束が有りますが、

わなかった。公孫枝の事前の報告で秦穆公が王城へ来て待っているなど 54 出迎えた。挨拶の後、席を設けて二人を款待し、呂、郤はそれを全く疑 呂、郤は手紙を読んで喜んで出向いた。河西の秦軍へ行くと公孫枝が でいただき共に相談いたしたく存じます。

れたらいかがです」 はしばらく待っていただいて大夫殿が帰って見えてから一緒に河を渡ら 「わが君が王城に見えました。ご同行いたしましょう。ご一緒の方々

知るわけがない。呂、郤は秦君に会おうと三日間待った。

持ち出した。「公子雍殿なら此処にいますよ」 入って秦穆公に会った。穆公は邳豹に呂、郤を迎えにやり、文公を屏風 の後ろに隠した。二人はやって来て拝謁の挨拶後、子雍を立てることを 呂、郤はその意見に従った。王城に着くと、勃鞮と公孫枝が先に城に

と穆公が言うと二人は声をそろえて会わせて欲しいと言った。

と穆公が呼ぶと屏風の影からゆっくりと拱手した貴人が二人の前に 「新君、どうぞこちらへ」

現れた。なんと文公重耳ではないか。呂、郤は肝がつぶれるほど驚いた。

「死んだはずじゃなかったのか・・・」

「逆賊め!お前等を一度は寛大に扱ってやったのに何が不満で謀反穆公は文公を呼び寄せ同席した。

と文公がそう言って初めて呂、郤は勃鞮の裏切りを知った。を企てたのだ。勃鞮の自首がなかったら今頃灰になっていたわ」

いい「勃鞮は実は血をすすって謀反を誓った男です一緒に死をお与え下

を知る事ができたんじゃないか」
「勃鞮がそちたちと誓いを立てたからこそ、わしはそなたたちの謀反

| 支っより弓骨、が内。刺公、裏公と捕左して一寺よ豪桀としいえど。斬刑の監視を命じた。間もなく、二人の首が階下に運ばれてきた。| と文公は笑いながら言って、武士たちに二人を取り押さえさせ勃鞮に

を失ってしまった。これが哀れといわずして何を哀れと言わんや。 し、このように公孫校におびき寄せられ王城で殺され、ついに身も名誉 虚柳の陣(懐公の命で正副大将として重耳に対抗)では強直に重耳と敵対し 虚柳の陣(懐公の命で正副大将として重耳に対抗)では強直に重耳と敵対し

撫させた。同時に国許へ朗報を知らせた。文公は勃鞮に呂、郤の首級を河西へ持って行かせ彼等の部下たちを慰

「子余(趙衰)の予想通りだったな」

で迎えに出た。 と大夫たちは皆非常に喜び、趙衰らは急いで君主の車を用意し河東ま

このあと如何なりますか、次回のお楽しみ。

賀を受け、懐嬴を夫人に立てた。

## 太 叔 帯 太后の寵愛を恃み宮中に入るたいとうたい 介子推 志操を守り綿山に焼死 かいいきれ

「娘は一度子圉との結婚歴があり、貴家の宗廟を辱める恐れがありまを夫人に迎えたいので晋国へ連れて帰りたいと申し出た。

晋文公は王城で呂省、郤芮の粛清を終え、穆公に何度も礼を述べ、懐嬴

すから、正夫人にすることはありませんよ」

は誰も知りませんので結婚のためだということにすればちょうどいいじありません。ご心配なさらないで下さい。わたしが出て来ている事は国人ありません。ど心配なさらないで下さい。わたしが出て来ている事は国人を

やないですか」

あり物事を取り締まれる人)といった。現在家の使用人を紀綱というのはこ千人を文公に与え晋へ送り届けさせた。これを『紀綱の僕』(才能力量がの妾を彼のもとへやった。穆公も自ら娘を黄河の河岸まで送り、精兵三穆公は大変喜び文公を再び雍都に招き、夫人の車を飾って懐嬴と四人 55

こから来ている(明清時代現在の言葉で現在では既に古語)。

着くと都の人々はみな心から歓迎し互いに祝い合った。文公は百官の祝晴れがましく渡っていく。あれも重耳であり、これも重耳である。絳都へに頭も尻尾も縮めていたが、今は丘に出た二羽の鳳の如く仲良く黄河を盛んであった。昔夜陰にまぎれて宮中を逃げ出し土に潜り込む亀のよう盛んであった。百官が随従し、旗は日を蔽い太鼓の音は天に鳴り響き意気で出迎えた。百官が随従し、旗は日を蔽い太鼓の音は天に鳴り響き意気が出迎えた。百官が随従し、旗は日を蔽い太鼓の音は天に鳴り響き意気が出迎えた。道衰たち諸臣は河岸に車を用意し

伯姫が秦穆公夫人となり、穆公の娘懐嬴が晋文公夫人となった。これは『世作婿舅三定我君(世代をこえて婿舅となりわが君を三度定める)』と出た。むかし、晋献公が伯姫を穆公に嫁にやるとき郭偃に占わせると卦にむかし、晋献公が伯姫を穆公に嫁にやるとき郭偃に占わせると卦に

むかし宝夫人の夢で天上の城を訪れ天帝に拝謁した時穆公の名は遥か天誅殺し重耳を援けた、これ正に『三定我君』ではないか。更に、穆公は『世作婿舅』ではないか。穆公は最初夷吾を帰国させ、更に重耳を復国のかま春なサノとだり、科なの如情麗が晋ブムサノとだった。これに何かま春なサノとだり、

今回また呂、郤の乱を平定した。卜筮といい、夢のことといい霊験といと命じられたがこの平定も二回になる。穆公は先には里克の乱を収め、

上にまで聞こえていて、天帝から

「汝に晋の内乱平定の任務を与える」

嗤うべし天分弁 えぬ愚者 敢て求める冬の雷 夏の霜。 万物には栄枯の定めが有るけれど ばたばた浮世を駆け巡る うものは確かにあるものである。

残党は非常に多く、大赦文を読んでも安心できずデマを流し続けたので、と趙衰が説得したのでその意見に従い大赦を行った。しかし呂、郤のてしまったのです。殿は寛大な政策で臨まれたほうがいいと考えます」「恵公、懐公はともに厳しく恐怖政治を行ったため民衆の支持を失っ文公は呂、郤の恨みが消えやらず、その残党を掃討しようと考えた。

怒って、文公は髪をといて頭を洗っているところだったが、頭須が来たと聞くと文公は髪をといて頭を洗っているところだったが、頭須が来たと聞くとある日、夜明けに、小吏の頭須が宮門を叩き文公に拝謁を願い出た。

文公もこれには頭を痛めていた。

と言って守衛に追い返すように命じた。衛に乞食する羽目になったのだ。今頃会いたいとはどういう了見だ」「あやつが蔵の財産を盗んでいったために、わしは旅費を無くして曹、

「主上は今、頭を洗っておられるでしょう」

「どうしてわかるんですか」

「頭を洗う人は必ず頭を下げ腰を曲げているので、反対のことを思うまったいと申し上げてもだめなんでしょう。主上は勃鞮をお許しになってと、一次、「」といと申し上げてもだめなんでしょう。主上は勃鞮をお許しになってと、一次、「」といと申し上げてもだめなんでしょう。主上は勃鞮をお許しになっているので、反対のことを思うではないのでしたらおいとまします」

守衛は急いでその話を文公に報告した。

「わしが間違っていた」

叩頭して罪を詫び話し始めた。 文公はそう言って急いで正装し頭須を招き入れて接見した。頭須は

「主上は呂、郤の残党がどのくらいいるとお考えですか」

「非常に多いんだろうな」

なお疑っています。ですから彼等を安心させる必要があります」(彼等は自分たちは重罪だと思っていますので、恩赦をいただいても

「何か言い策はあるのか」

いたりして、主上が昔の恨みにこだわっていない事を知れば、次第に疑される時、臣を御者にお使いになれば、国中の人がこれを見たり噂を聞した。わたしのこの重罪は国中の誰もが知っています。もし主上が外出「臣が主上の財産を盗んだため、主上は旅で飢餓にお苦しみになりま

「そなたが言ってくれなければあやうく無慈悲な父親という悪名を

れませんでした

いを解いていくでしょう」

「なるほど、わかった」

文公は彼の進言に従って、巡視という名目で頭須を御者にして城内を

回った。呂、郤の残党はこれを見て密かに、

ま仕官できているんだから大丈夫のようだな」 「頭須といえば君主の蔵のものを盗んだ大罪人だ。 彼でさえ以前のま

それ以降デマはピタッと止まった。文公は以前のまま頭須に倉庫を管

理させた。

文公にはこのような度量があったので晋国の安定を図ることができ

たのである 文公は公子の時にすでに二度妻を取ったことがある。最初の妻は徐嬴

で彼女は早く亡くなった。次に偪姞を娶り一男一女があった。男子は驩、

機会を見て文公にそのことを話しした。文公はたいそう驚いた。 氏に養育を頼み、その後衣食の歳費は欠かさずに支給してきた。ある日 人とも幼かったので蒲に放っておいたが、頭須が二人を引き取り蒲の遂

思っていたぞ。それで今何処にいるんだ、どうしてもっと早く言わなか ったのだ 「わしはずっとあの二人は戦火の中で死んでしまったものとばかり

列国を周遊され、行かれる先で女性を贈られましたのでお子様も多く、 公子がいらっしゃっても主上がどうお考えになるか分からず申し上げら 『母は子を以って貴し、子は母を以って貴し』と申します。主上は

残すところであった」

の妻とし、趙姫いと呼ばせた。 て帰らせ、懐嬴を二人の母親とした。そして驩を太子に立て、伯姫を趙衰 そう言って、直ちに頭須を蒲へ遣り遂氏に手厚い礼をして二人を連れ

時に季隗を送り届けてきた。文公は季隗に年を聞いた。 翟君は晋侯が位を継いだことを聞き、祝賀の使者を派遣してきて、同

「お別れして八年になり、もう三十二才になりました」

「幸いまだ二十五年はたっていないな」

と冗談を言って笑った。

かせてくれた斉姜に心から感謝した。

斉孝公も使者を遣わして姜氏を送ってきてくれた。<br />
晋公は自分に花開

押ししたからこそ今日のあなたがあるのね」 「あなたと一緒にいたくなかったのじゃないのよ。でもあの時強く後

譲りたいと言う。そこで、宮中の位を改めて、斉女を夫人にし、翟女を 懐嬴はしきりに二人を褒め称え、どうしても二人の女性に夫人の地位を 次に懐嬴をその次とした。 文公は斉、翟の二人が昔から賢徳の女性であった事を懐嬴に話した。

うに言った。 趙姫は季隗が翟から帰ってきたと聞き、夫の趙衰に叔隗母子を呼ぶよ

事にしているんだよ」

「殿からそなたをいただいたのだから、翟の女の事は二度と考えない

「そんな薄情な事わたしは聞きたくないわ。わたしの出がたとえ高貴

19 趙姫 「ない」でなく
晋多が
ない
周と同姓

趙氏に

「ない
で

がので

趙姫と

言ふ

う法が有りましょうか」 かもお子さんもあるし。新しい方に気を使いすぎて古い方を捨てるとい の出であったとしても、叔隗さんは先にあなたと結婚した方ですわ。し

それでも 趙 衰は口ではふんふんと言いながらも態度を決めかねてい

趙姫は宮中へ行って文公に会ってこの件を話した。

に何とか仰って下さい」 しないんです。わたしは愚妻という悪名を残したくないんです。父上夫 「夫に叔 隗さんを呼んで下さいと言うんですが、どうしても呼ぼうと

文公は翟に使者を送り叔隗母子を迎えた。趙姫は正妻の位を叔隗に譲

ったが趙衰は認めない。趙姫はなお言う。

で嫡子にしてやってください。わたしは当然側室に替ります。どうして 後の序は乱してはなりません。盾も年長でしかも賢才と聞いていますの 「彼女の方がわたしより年長ですし先に結婚されています。長幼、 前

衰は仕方なく趙姫の言う事を文公に話した。

もお聞き頂けなければ宮中に帰るしかありません」

母で賢婦人)でもどうする事も出来ないね」 「わが娘がそこまで正妻を譲ると言うのであれば、周 太任 (周文王の

弓や馬車を御すのにも長けていて趙衰が大変可愛がっていた。後に趙姫 はこの時十七才、意気軒昂で行動は理にかなっており、詩書にも通じ、 叔隗も固辞したが文公が趙姫の気持ちを話して諭したので拝受した。 盾 に、同、括、嬰という三人の子が生まれたがその才能は盾には及ばなか 文公はそう言って叔隗母子を呼び出し叔隗を正妻に盾を嫡子とした。

った。

史官は趙姫の賢徳を称えて次のように言っている。 下に置き 趙姫自ら季隗の下に就く。謙譲の美徳を君子はこれを師 害されし。 一方 貴き身分も高い位も自ら落し わが子同、勝も盾の 褒姒は申后を追出し伯服を愛し 宜臼を怖れ遂には人を害し自らも 陰性昂じれば嫉妬に燃えて夫を惑わし 驕慢となり嫡子簒奪を図る。

とす。 これ文公の娘成季 (趙衰) 2の妻なり

魏犨、狐射姑、先軫、顛頡の順に表賞した。第二等としては、欒枝、郤溱上下をつけた。第一等の中では、趙袞、狐偃を最高とし、狐毛、胥臣、上下をつけた。第一等の中では、趙袞、狐偃を最高とし、狐毛、胥臣、 投降した者を功第三とした。三等のうち各等級の中で功労の軽重により 逃亡に随従したものを功第一とし、復国に協力したものを功第二とし、 さて、晋文公は復国の論功行賞を行うために群臣を集め三等に分けた。

世人べつとげき を賜わった。また、罪なくして殺された狐突のために晋陽の馬鞍山に廟 先蔑、屠撃等が続いた。封地を持たない者は封地を賜り、封地のあるも で最高とし、以下、土会、舟之僑、孫伯別、祁輔の順に賞した。第を最高とし、以下、土会、舟之僑、孫伯別、祁輔の順に賞した。第 のは増封された。別に河に投げた璧の代わりだといって狐偃に白璧五対

告を認める」という詔勅を出した。 さらに国門(都の城門)に、「功労ある者で賞に漏れている者の自己申 小臣壷叔が申し出た。

と呼んだ。

を立てて故人を称えて偲んだ。後の人はこれにちなんでその山を狐突山

をたまたま気がつかず、ついに彼のことを訊ねなかった。

うか こち走り回りました。居ては寝食にはべり、出ては車馬の準備をし、一 中に臣が漏れておりますが、臣に何か不始末があったのでございましょ 時もお傍を離れた事がございません。逃亡に随従したものに対する賞の 「臣は蒲城の時から主上にお仕えしご一緒に足をすり減らしてあち

「せっかく申し出てきたのだからはっきり説明してやろう。仁を以っ

次で、三賞の後にそなたたちへの賞も行うから待ちなさい」 即ち上賞は徳に対する賞であり、次賞は才に対する賞、その次の賞は功 もせず身を挺してわしを護ってくれた者にはその次の賞を与えたのだ。 ないように策略を以ってわしを輔弼した者に次の賞を、矢や石をものと てわしを教導し真にわしを啓蒙した者に上賞を与え、諸侯に恥ずかしく に対するものである。走り回ってくれたご苦労や普通の男の努力はその

**壷叔は納得して恥ずかしそうに引下った。** 

ていたが、文公は彼等の功労を思って咎めはしなかった。 かかわらず自分等より上に賞されたのに不満でぼそぼそと恨み言を言っ 勇兼備だと自負して、趙衰、狐偃は文官で口だけで仕事をしているにも ので受賞者はみなたいへん喜んだ。ところが魏犨と顛頡だけは自分は才 文公は大盤振る舞いをして輿を担ぐ者たちにもあまねく賞を行った

母に仕えた。晋侯は群臣を集めて論功行賞を行った時、子推が居ないの 姿が見えたので心底軽蔑し彼と同列にいる事を恥じて、一度朝賀に参列 頑固で妥協を許さない性格である。 黄河を渉るとき狐偃が功をのさばる した後病気と称して家に引きこもり、清貧に甘んじ自分で靴を編んで老 もう一人介子推であるが、彼は重耳の逃亡に随従してきたが、とても

> 老母は台所でこの話を聞いて子推に言った。 勅の掛札を見たので介子推に教えてやった。子推は笑って答えなかった。 ころ、国門に掛かった『賞に漏れたものは自己申告を認める』という詔 隣人の解張が子推が賞に漏れているのを心から不満に思っていたと

なるではないか」 配は要らなくなるし、お前も靴を編むなど苦しい生活をしなくても良く だからその功績はたいへんなものじゃないか。どうして自己申告をしな いんだい。少なくとも幾らかの粟米は頂けるだろうから朝夕の食事の心 「お前は十九年も苦労をし、しかも自分の腿を切って主上を救ったの

はこれが天意だと認識しないで功を争っていますが、わたしは天のなさ なかったので天が彼らから国を奪い殿にお与えになりました。家臣たち った事を自分の功績だなど恥ずかしくて言えません、そんなことならむ 「献公のお子は九人いますが殿が一番賢明な方です。恵公懐公は徳が

しろ靴を編んでいたほうがましです」

ておいたほうがいいのではないかい」 「わたしは何も要求しない事に決めましたのでお会いしても仕方が

「禄をいただかなくても主上にお会いして腿を切った功労を申告し

ありません」

は光栄じゃ。それじゃ混濁の世をきっぱり捨て深山に入って隠居しよう 「おまえは本当に清廉な子だね。お前の様な清廉な子を持ってわたし

かね」 子推は喜んで、 「わたしは昔から山は高く谷の深い綿山が好きなんです。そこへ行き

ましょうか」

と言って、母親を背負って綿山に入って深い谷に庵を結び、草衣木食

かし解張だけはこれを知っていて、一首の詩を作って朝門に掛けた。近の一生を過ごす事にした。隣人も彼が何処へ行ったか知らなかった。し

臣がこれを文公に届けた。

を流浪す。 勇ましき竜あり、悲しきかな住みかを追われ、数蛇これに随い天下

今竜、淵に戻り安住を得たり、数蛇みな安住の穴を得たりしも、た中に一蛇あり、竜の食無く飢餓の時、自ら腿を切りて献上せり。

だ一蛇、穴を得ず野中に泣く。

「これは介子推がわしを責めている詩だ。以前、衛を過ぎた頃食うも文公はこれを見て非常に驚いて、

い。ターマン)のことへものに論功行賞の時子推のことを漏らしてしまっってくれたのだ。それなのに論功行賞の時子推のことを漏らしてしまっのがなくて苦しかったとき、子推は自分の腿肉を切ってわしの飢えを救

た。取り返しのつかない過ちを犯してしまった」

「子推の行き先を申し出たものは官吏に登用する」店なかった。と嘆き、直ちに使者を出して介子推を呼びにやったが、すでに子推はと嘆き、直ちに使者を出して介子推を呼びにやったが、すでに子推は

てくるだろう」

解張が申し出た。

と言って隣家の人々に彼の行方を訊ねた

「そなたが申し出てくれなかったら、すんでのところで子推の功を忘えてしまうのを心配して、代わりに詩にして申し出たものであります」親を背負って綿山の奥深い谷間へ入って行きました。あの方の功労が消親を背のでは、子推殿は賞を求めるのを恥じて、隠遁するために母に、の詩は子推殿が書いたものではなくわたくしがあの方の気持ち

し と言って解張を下大夫に任じ、即日、解張を先導にして文公自ら子推良 れてしまうところだった」

を探しに綿山へ入って行った。

数人の農夫がやってきたので文公は自ら彼等に訊ねた。しく帰ってくるだけで子推の行く方は杳としてわからない。

処へ行ったかはわかりません」いましたが老婆に水を飲ませたあとまた登っていきましたよ。その後何

「数日前、一人の男が老婆を背負ってきてこの山の裾の方で休憩して

文公は山の下に車を止め四方に人を出して数日探したが見つけるこ

及とはできなかった。

文公の顔に怒りの色が見え、

親孝行だと聞いている。もし山に火をかけたら母親を背負ってきっと出「子推はどうしてわしをこんなに恨んでいるのだろうか。子推は大変

「逃亡中はみな一緒に苦労したんだ。なにも子推だけじゃないよ。こと解張に言った。それを聞いて魏犨も毒づいて言った。

から、火にあぶりだされて出てきたら思い切り恥をかかせてやる」んな所に身を隠し殿に長い間逗留させて無駄な時間を使わせているんだ

来ようとはせず柳の樹の下で母子抱き合って死んでいた。兵士が母子のて数里にわたって燃え広がり三日間燃え続けた。しかし子推は遂に出ててこで兵士に山の前後周囲に火をつけさせ、火は風を呼び猛烈に燃え

骨を探し当てて知らせると、文公はこれを見て涙を流し、綿山の麓に葬

2 紙銭 死者または鬼神を祭るときに焼く紙製コインやそのために 作た紙幣

梁) を命じることを伝えた。 文公は礼を尽くして拝命した。 叔興は襄王

周襄公は太宰周公孔と内史 叔 興 を使者として文公に侯伯 (諸侯の棟)

図り国は非常によく治まってきた。

し、刑を簡潔に税を薄く、通商を盛んにし来客を大切に、弱者の救済を

文公は論功行賞を終え、国政の大幅な見直しを手がけた。賢能を登用

今の禁火は寒食の習い

焚かれる紙銭は年々盛んなり

綿山に高く上る煙は子推の気骨 介山の祠はその忠賢を表す 腿を切り君に捧ぐその赤心 禄を辞し身を焼く堅きその志操 轡 を取って十九年 | 天涯までも流浪を支えて駆け巡り り祠を立ててこれを祀った。山の周りの田をその祠の田として農夫に毎 に復命して、

年の祀りを担当させた。更に自らの過失を忘れないために、綿山を介山

と改名した。後世の人は綿山の上に『介休』という石碑を立てた。介子推

山を焼いたのは三月五日の清明節のころであった。子推が火で死んだ

ここに休むという意味である。

「晋侯はきっと諸侯に覇を称えると思われます。 大変素晴しい人物で

す

Lまうほうもつ を大将に、堵兪弥を副将にして、再び滑討伐兵を挙げた。衛文公と わらず衛について鄭の言う事は聞かなかった。鄭文公は怒って、公子士泄 た。滑伯はその力に畏れ講和を申し込んだ。鄭軍が引揚げると滑は相変 い者を陵辱し、滑伯が鄭につかずに衛についたと言って討伐の兵を挙げ 周 方 睦は鄭を周に訴えた。周襄王は滑を解放させるために大夫遊孫伯 この頃、鄭文公は楚に臣従して中原諸侯とは交流せず、力を頼んで弱 襄王はそれ以後斉を離れて晋と親しくするようになった。

めない食事をする習慣ができた。その後次第に三日まで減ったが、現在 ため、人々は彼を偲んで火を使わないようにし、一ヶ月のあいだ火で暖

(明清代現在) でも太原、上党、西河、雁門の各地では毎年冬至から百五

を鄭にやった。鄭文公は使者が着く前にこれを聞き、 「鄭と衛は同様に扱うべきではないか、何故王は衛に厚く鄭に薄いの

がある。これはみな子推を祀るのためのものである。

柳の枝を挿して子推の霊魂を招き、野祭を行い火を焚き紙銭を焼く習慣 いい、清明節の前日を寒 食 節として、この日になると家々では門口に 日の日干飯を用意し冷水で食べる風習がある。これを禁火または禁煙と

釈放した。孫伯は捕えられた時すぐ側近を周に帰し襄王に報告させた。 と怒鳴って、国境で孫伯を捕えて拘束し、滑を破って凱旋してやっと 「鄭はのっけから朕を馬鹿にしたな、今に見ておれ、この仕返しは必

ずやってやる」 襄王は腹に据えかねて群臣に意見を求めた。

「誰か鄭に報復する策のある者はいないか」

大夫類叔と桃子の二人が進み出て、

すれば威力が増大いたしましょう」 す。問責のために出兵しても勝つのは難しいと思われます。翟から借兵 ころがありません。昨今荊蛮(楚)の力に頼って王臣を虐待しておりま 「先王(桓王)が鄭に敗れて(繻葛の戦い)以来、鄭は王に対し憚ると

61

と進言すると、大夫富辰があわてて反論した。

鄭は道を外れているとはいえ子友(鄭伯友)の子孫で天子とは兄弟です。 「それはだめです。『身内の話に他人の口を挟ませるな』と申します。

えません。そういう蛮族を利用して同姓を倒そうとするのは小怨を晴ら はならない事です。 翟は戎 狄 豺狼といわれ我われと同類とはとても言 武公は東遷に功があり、厲公が子頽の乱を平定し、その功はみな忘れて すために大恩を失う事になり、臣には百害あって一利なしという風に見

頽 叔、桃子は、それに対し更に、えます」

蔡 叔が原因ですが、鄭の横暴も管、蔡と変りません。翟は周に仕えてま 「昔、武王が商を討伐したとき、九夷(蛮族)が集まってきて加勢し

じゃありませんか」 だ礼を失した事はありません。順をもって逆を誅す、これは正当な方法

伐するよう説得させた。 と反論すると襄王はこの意見を取って、頽叔、桃子を翟にやり鄭を討

檪 城を攻め落とし、軍を置いてこの城を守り、使者を二人の大夫につ 翟君は喜んで王命を奉じて巻き狩りという名目で突然鄭に侵攻し

けて襄王に戦勝報告をさせた。 襄王は大変喜び

「翟の功績は大きい。朕はいま中宮をなくしたばかりだから翟君の娘 爾びん)風中の詩「東山。これは周成王年少のため周公が摂政の

て平定した内乱管察の乱がテーマ。

蔡叔等(武王の兄弟が紂王の子武康と共に謀反を起こし、周公が3年かけ

→第四回注45

13

と結婚するのはどうだろう」 と類叔、桃子に相談した。

隗は翟君の実娘でまだ嫁いではいませんから求婚は可能です」 で、前の叔隗とは咎如国の娘ですでに晋侯に嫁いでおりまする。後の叔 っています。翟君には二人の娘がいてどちらも叔隗と言ってとても美人 「翟人は『前の叔 隗、後の叔隗ともに 玉 よりもなお光り輝く』と歌

がまたそれを諌めて言った。 は叔隗を周へ送り出し、襄王は彼女を後継の中宮にしようとしたが、富辰 二人がそう言うので襄王は喜び再び二人を翟に遣って求婚した。 翟君

身分で蛮夷の女性と結婚なさるのは如何なものでございましょう。翟は 功があった上に姻戚となればこれらを恃み将来が憂慮されます」 「大王が翟の功労をねぎらうのは結構でございますが、天子というご

が襄王は聞かず叔隗を王后にしてしまった。

中将士と一緒に原野を駆け回り何の拘束も受けていなかった。襄王に嫁 じていた。翟君が巻き狩りに出るときは何時も連れて行ってもらい一日 持ち合わせていなかった。翟国にいた時は一日中馬を乗りまわし弓に興 し、宮中の深奥に入るというのは、籠の鳥、檻の中の獣と同じで非常に さてその叔隗であるが、顔は美しいけれど賢徳とか貞淑という美徳は

生趙盾『春秋左氏伝では僖公23年趙世家と同り 以少女妻趙衰、『史記 趙世塚 翟伐咎如 得二女 翟以少女妻重耳 長女妻趙衰而 と晋世家で記述に矛盾がある。『史記 晋世家 晋侯の妻は妹の季隗。第37回注146参照趙衰の誤りか。 狄伐咎如 得二女 以長女妻重耳

復帰させたという、いわくつきの貴人である。今日の巻き狩りでは手腕大夫富辰も兄弟の仲を修復するよう説得したので襄王はしかたなく彼をその後恵后が再三襄王のところへ来て許してやってくれととりなすし、

窮屈であった。

ある日、

せいただけないでしょうか」
りもう窮屈で悶え死にそうです。憂さ晴らしに大々的な巻き狩りをお見りもう窮屈で悶え死にそうです。憂さ晴らしに大々的な巻き狩りをお見と許してくれました。このように一日中宮中にいては、手足はだるくな「わたくしは幼い頃から馬に乗って狩りをするのが好きで、父もずっ

腹に張られた幕から襄王と隗后が坐って見物していた。王は隗后の歓心史に日取りを決めさせ、大挙して北邙山へ巻き狩りに出かけた。山の中襄王は可愛いと思い始めた叔康は原願いなので希望に答えてすぐに太襄王は可愛いと思い始めた叔康は

を買うために

場合は褒美はなしとする」輌、十の獲物を捕えた者には一輌を褒美として与える。獲物が十以下の輌、十の獲物を捕えた者には一輌を褒美として与える。獲物が十以下の

軍を呼込んで周を討とうとしたがこれにも失敗して斉国に出奔していた。と知らせた。王子、王孫、将士たちはいい褒美を取ろうと、狐や兎をと知らせた。王子、王孫、将士たちはいい褒美を取ろうと、狐や兎をと知らせた。王子、王孫、将士たちはいい褒美を取ろうと、狐や兎をと知らせた。王子、王孫、将士たちはいい褒美を取ろうと、狐や兎をと知らせた。王子、王孫、将士たちはいい褒美を取ろうと、狐や兎をと知らせた。王子、王孫、将士たちはいい褒美を取ろうと、狐や兎をと知らせた。王子、王孫、将士たちはいい褒美を取ろうと、狐や兎を

その他の人々も獲物の数によってそれぞれ褒美を頂いた。 を発揮して一等になった。 襄王は非常に喜びすぐに三輌の車を与えた。

しきりに褒め称えた。襄公に聞いて彼が皇族の一人だと知り密かに敬慕随后は王の傍にいて、甘公の非凡な才能容貌、人並みはずれた弓術をえている。

いただけないかしら」
「日はまだ高いわ、わたしも一度狩をして体を動かしたいの。お許し

襄王は彼女を喜ばせて気を引きたいのが本意だから許さない理由は

の念を抱き、襄王にねだった。

でい。将士たちに狩場を整理させた。 関后は刺繍の着いた王后の着物を に箙を掛け手には朱色の弓を持って非常に均整の取れた装束であった。 に箙を掛け手には朱色の弓を持って非常に均整の取れた装束であった。 に箙を掛け手には朱色の弓を持って非常に均整の取れた装束であった。 に筋を掛け手には朱色の弓を持って非常に均整の取れた装束であった。 に筋を掛け手には朱色の弓を持って非常に均整の取れた装束であった。 に筋を掛け手には朱色の弓を持って非常に均整の取れた装束であった。 に筋を掛け手には朱色の弓を持って非常に均整の取れた装束であった。

女班の中に武芸を誇る者あり 将軍達の人気独り占め

お見せいたしましょう」
ら来たものですからみな騎馬には慣れています。大王様の御前で騎馬をら来たものですからみな騎馬には慣れています。わたしの侍女たちは翟か「馬車より騎馬のほうが機動力があります。わたしの侍女たちは翟か

隗后が馬に乗ろうとすると襄王は、 王后の騎馬に随った。 というので襄王は良馬を選ばせて用意させた。 たくさんの侍女たちが

「ちょっと待ちなさい」

といって、一族の諸卿たちにたずねた。

「臣が参りましょう」 誰か騎馬に自信があって王后を護ってついて行ける者はいないか」

名乗り出たのは甘公であった。彼が随いて来てくれるというのは隗后から

に駆け、太叔も遅れないよう馬を飛ばし、山の中腹を回った所で二頭の 前で自慢の手腕を発揮した。隗后が馬に鞭を当てると馬は空を飛ぶよう いて行った。隗后は太叔の前でいいところを見せようとし、太叔も隗后の が一隊となって先を駆けていった。甘公は名馬に跨り離れないように随 としては願ったり叶ったりである。侍女たちは王后の前後取囲み、数騎

馬は頭を並べた。 **隗后はたずなを緩めて甘公を誉め、** 

ておりましたが、今日はじめてお見せいただきました 「王子の素晴らしい才能は早くからお聞きし久しくお慕い申し上げ

と言うと太叔は馬上で身を起こして敬礼し恐縮して言った。 「臣の馬術は未だ勉強中で、王后の万分の一にも及びません」

か、あなたにお話が有ります」 「太叔殿、明日の朝、太后の宮殿へご機嫌伺いにいらっしゃいません

向けて二本の矢を放って二頭の大鹿を倒し、隗后も一頭を射当て衆人喝 せをし甘公がそれに軽く頷きそれぞれ馬のたずなを引いて馬首を返した。 そう言っているうちに侍女たちの数騎がやって来たので、隗后は目配 途中、折りよく坂道に鹿の群れがとび出してきたので、太叔は左右に

「王后お疲れさん」

采の中を駆け戻った。

を終えた。料理官がその場で調理をし、襄王はそれを皆に分け与え楽し も二頭の大鹿を献上した。諸将兵士たちはもう一度狩をして、巻き狩り

といって幔幕を出て出迎えた襄王に隗后は射止めた鹿を献上し、太叔

く飲み且つ食って散会した。 翌日、甘公帯は入朝して昨日の褒美のお礼を言って、その後、ご機嫌

と目配せをし、二人でそっと近くの部屋に入った。男女のふれあいの後 た。彼女は予め賄賂を使って随いて来ている宮侍を買収していた。太叔 伺いということで太后宮の恵后の部屋へ行った。 隗后はすでにそこにい

「度々ここでお会いしたいわ」

二人は互いに離れがたくなってしまった。

「王に疑がわれますよ」

「わたしがちゃんとやるから心配しないで」

子であるし、事が重大な問題なので口には出さない。恵后も気が付いて いて宮侍につまらぬことをしゃべらないよう注意していた。 隗后の宮侍 恵后の宮侍はこの事をよく知っているが、太叔は恵太后が愛している 64

まで密かに宮中で過ごしており、知らぬは襄王ばかりなりであった。 はみな貰うものは貰っているので間諜役になっていた。太叔は宵から朝 太叔には兄ありてこその 嫂なり 襄王は弟を愛し妻を守れず

一朝巻狩で私通の密約成り 始めて後悔す翟女を中宮にせし事を

また襄王が太叔を召し戻して自ら災禍を招いた事をそしる詩がある。 簒奪の性は改めがたし<br />
殺さずば遠ざけるべし

門に入れて噛まぬ虎なし、襄王は正に夢の中の人

かりの賄賂を使いこの効果で内侍だけでなく宮門の守衛をも抱きこみ、くなり次第に人目を避ける警戒心も薄れてきて少しづつ露見しだした。隗后は若者でないと満足できず、襄王の寵愛があるとはいえ五十才ではとても気が乗らず、しばしば別室で寝ていたのである。太叔は少しばおよそ、善事をなさんとする気持ちは日ごとに縮んでいくものだが、およそ、善事をなさんとする気持ちは日ごとに縮んでいくものだが、

「太叔は太后の愛子であり、周王が崩御すれば太叔が王になる。くださりものもあるのだからあまり監督してもしようがないじゃないか」と思わせ、朝も夜も、延べつ幕なしに自由に出入りしていた。その夜は胸襟を開きゆっくり酒を楽しんでいたが、不覚にも酔っ払って小東を手篭めにして楽しもうとした。彼女は隗后を畏れて服を脱いつで逃出した。太叔は怒って抜刀し彼女を追かけて殺そうとした。小東はびっくりたまげてなんと襄王の寝室へ泣いて駆け込み、太叔がこれにあわせて歌った。すだと宮中で見たことを襄王にしゃべってしまった。襄王はこれを聞こうだと宮中で見たことを襄王にしゃべってしまった。襄王はこれを聞こうだと宮中で見たことを襄王にしゃべってしまった。寝を持ちないというという。くださいまでは、おれば太叔が王になる。くだちがよりものもあるのだからあまり監督してもしようがないと宮中で見たことを襄王にしゃべってしまった。東王はこれを聞こうだと宮中で見たことを襄王にしゃべってしまった。東王はこれを聞いるがはないにないがある。くだと明むのもあるのだからあまりと思いる。

さて太叔の命如何なりますか、次回のお楽しみ。

晋文公 信義を守り原邑を降す周襄 王 乱を避け鄭へ行き

叔を手打ちにしようと走って中宮へ向かった。が、途中ふと、襄王は宮女小 東の話を聞きカッとなってすぐ枕もとの宝剣を取り太

「太叔は太后が非常に可愛がっているので、殺してしまったら外部の「太叔は太后が非常に可愛がっているので、殺してしますい。ここは暫く我慢して明日実情を確認した後、隗后のい。しかもあいつは武芸も達者だから、もし不遜にも剣を持ってかかっ人は彼が何をしたか知らないから、きっとわしを不孝者と見るに違いなんが彼が何をしたか知らないから、きっとわしを不孝者と見るに違いなだろう。その方が穏便だな」

侍に太叔の消息を探らせた。と考え直し、フーと一息はいて剣を投げ出し、寝室に帰って腹心の内と考え直し、フーと一息はいて剣を投げ出し、寝室に帰って腹心の内

そうです」
「太叔殿は小東が大王に訴えて来たのを知って宮中から出て行った

「宮門を太叔が出入りしていた事をどうしてわしに報告しなかった

出奔した。恵太后は驚き、精神的に参って寝込んでしまった。 翌朝、襄王は中宮の侍女を拘束して尋問した。最初は言い渋っていたでな穴から食べ物を給するようにした。太叔は事がばれたので翟国へ小さな穴から食べ物を給するようにした。太叔は事がばれたので翟園へがさな穴から食べ物を給するようにした。 最初は言い渋っていた 翌朝、襄王は中宮の侍女を拘束して尋問した。 最初は言い渋っていたのだ。それにしてもわしも無防備だったな」

類叔、桃子は隗后が王后を廃されたのを知り驚いて、たいまく、とうし、かどう

「最初に鄭を討とうと言ったのは我われだし、隗氏との結婚を賛成し

翟君を巻き込んでいるに違いない。もし翟が問責の兵を挙げて来たらど 来るぞしかも太叔が翟に出奔したのでどうせあることないことを言って たのも我われだ。突然彼女が退けられたのを知ると翟君はきっと咎めて

う弁解すればいいのだろう」 と、すぐに大急ぎで軽馬車を疾駆し太叔に追いつき、

「翟君にお会いになったらこれこれ・・・」

頽 叔と桃子が先に城に入り翟君に会った。 と打ち合わせた。一日足らずで翟国に着き、太叔は郊外に車を止め、

れました。隗后さまが太后のところへご挨拶に行かれそこで太叔殿とお は姫様がお美しいという事を知って自分が取って正宮(王后)に立てら 「はじめは我われは太叔殿との結婚を考えていました。ところが周王

すが、これを宮侍が誹謗して訴えたのを周王は軽率に信じてしまって、 会いになって、偶然太叔殿が昔話などをして話が長引いてしまったので

国母にすれば、これはまことに貴国の義挙ということになります」 軍をお借りして王城に攻め込み、太叔殿を王に擁立し、王后を救出して れし、太叔殿を追放したのです。まさに背徳、忘恩の王であります。一 貴国が鄭を討って下さったご恩も配慮しないで、 王后を廃し冷宮にお入

翟君はこれを信じて訊ねた。

「太叔殿は何処におられる」

「現在城外でお待ちいたしております」

ので、翟君は大変喜び、ただちに五千の騎兵を選んで大将の赤丁に命じ 翟君は結局太叔を入城させた。太叔が婿舅の礼をもって翟君に会った

> にし三百乗の戦車を率いて城を出て迎撃した。伯貫は翟兵が勇猛な事を 下に迫ってきた。襄王は怒って、卿士原伯貫を大将とし、毛衛を副将 せるため大夫譚伯を使者として翟軍へ派遣した。赤丁は使者を殺し王城 襄王は翟軍が国境に迫ったと聞き、太叔が内乱を起したのだと説明さ

て頽叔、桃子と一緒に太叔を奉じて周室を攻撃させた。

上に天子の旗を立てて、太叔に変装させた兵士にその台の上で歌舞を楽 強攻策では効果が無いのをみて一計を案じた。翠雲山に高台を建てその 突撃しても入れず、また、連日戦いを挑発したが応じてこない。赤丁は 知っているので戦車を繋いでトーチカのようにして防いだ。赤丁は何度

を率いて山の左右に伏せて、周軍が来れば台上からの大砲の音を合図に しみながら酒宴をやらせる。 一方、 頽 叔、 桃子にはそれぞれ一千の騎兵 一斉にとび出す。さらに息子の赤風子に命じて、騎兵五百を引連れ周陣

軍を率いて後方で後詰をする事にし、それぞれ段取りが整った。 逃げて翠雲山まで誘い込めば功ありとした。赤丁自身は太叔と一緒に大 営へ行き惰弱を罵倒して辱め怒らせ、敵が陣を出てきたら負けを装って

げんはくかん 赤風子は五百の騎兵を率いて挑発を行なった。 原伯貫は塁に登って様子を見ると人数が少ないので、すぐに出て行こ

るのを待って攻撃をしかけるべきです」 「翟の人は詭計が得意ですから自重して、相手がだらけて懈怠して来

うとしたが、毛衛が引留めて、

と忠告した。正午時分になると翟軍は皆馬を下りて地べたに坐って、

大声で馬鹿にして叫んだ。

える。こんなヘボ大将しか使えないとはねえ。 投降もできず戦う事もで 「周王というのは無道の殿様と聞いたが部下の使い方も知らんと見 脱ぎ雑兵にまぎれて逃げようとした。ところが、ある兵が

「将軍はここにおられたのですか」

ずして壊乱してしまった。原伯貫は手の施しようもなく、刺繍の上着を車は通れない。活路を開けと命じたが兵士たちは慌てて肝をつぶし戦わ

きず、一体何をしようというのかね」

切ってとび出した。金の兜に刺繍の上着、手に大刀を持って車上に立っ原伯貫は堪忍袋の緒が切れて、営門を開かせた。百余りの戦車が堰を中には横になって馬鹿にしている者もいる。

「ものども、早く馬に乗れ!」

ている人すなわち原伯貫である。赤風子は、

馬を返して又数合戦うことを繰返し次第に翠雲山に近づいてきた。赤風いものもいた。周軍はみだりに馬を奪って自ら陣形を乱した。赤風子は急に西のほうへ逃げ出した。兵士たちの中には馬に乗るのが間に合わなと命じ自らも迎撃にかかった。十合も渡り合っただろうか、赤風子は

子は馬も武器もほとんど捨ててしまってほんの数騎だけで山の後方へ逃

に伝令を出した。

「この野郎、殺してやる」 繍の傘の下で太叔が座って賑やかに簫を吹き鼓を打って酒を飲んでいた。原伯貫が頭を上げると山上に飛竜の赤旗がへんぽんとひるがえり刺 げ込んだ。

急いで車を返そうとしたが、来た道はすでに翟兵に乱木で塞がれていて込んできて原伯貫軍は包囲されてしまった。罠にかかったことを知って左手から類叔、右手からは桃子がそれぞれ鉄騎を率いて怒涛の如く突っごろと落ちてきた。どうする間もなく、谷あいから一陣の砲声が響き、ごろと落ちて車で山中に駆け入ろうとすると突然山上から木や石がごろと言って車で山中に駆け入ろうとすると突然山上から木や石がごろ

者を出して周王に報告し増援を要請した。 毛衛は懸命に守りを固める一方、使て翟軍の戦利品となってしまった。 毛衛は懸命に守りを固める一方、使いたのである。赤丁の大軍が来たときはすでに大勝利で、車馬、武器全翟兵を指揮して追い二十数名を捕獲したが思った通り原伯賞もその中にと叫んだため、頽 叔がその声を聞きつけ、原伯賞ではないかと思ってと叫んだため、頽 叔がその声を聞きつけ、原伯賞ではないかと思って

たら毛衛も捉えることができると思います」
「伯貫が捕えられたので毛衛は胆を潰しているはずです。夜襲をかけ

原伯貫は頹叔に捕えられ縛られて太叔に献納され営倉に監禁された。

頽叔はさらに

と提案し、太叔も了解し赤丁に指示した。赤丁はその案に沿って密かれている。

や葦をのせて火をつけた。すぐに火は延焼し陣営全体に火が回り周軍はを率いて、鋭利な斧で戦車を繋いだ鎖を切って陣営に侵入し、戦車に芦をの夜、三鼓を過ぎた頃(夜半十一時過ぎ)、赤丁は自ら千人余りの歩兵

ろちょうど太叔の一隊と出会って、当るところ敵なしである。毛衛は小型車で後方から逃げようとしたとこ壊乱した。頽叔、桃子はそれぞれ精騎を率いて勢いに乗って攻め入り、

と阻まれ、毛衛が泡を食って振り返ったところを太叔に一突きされ車「毛衛何処へ行く」

周王は二将が捕えられたことを聞き、

から落ちた。翟軍は大勝し王城を包囲した。

と後悔して富辰に嘆いた。富辰は、「卿の忠告を聞かなかったためにこんな事になってしまった」

「翟の勢いは盛んでとても防ぎ切れません。どうか大王には一時国外

67

へ退避願いたく存じます。 諸侯がきっと義を唱えて復国を助けてくれま

と国外避難を提言した。 それに対し周 公 孔は、

戦は可能です。そんなに簡単に社稷を捨て諸侯に身をゆだねるべきで 「王軍は敗れたといっても、百官がその気になればまだまだ城を背に

と進言した。召公過は更に反論を加えた。

はありません」

「強行論は危険です。 今回の問題のもとは叔 隗にありますから、 大王

は先ず彼女を誅殺して、城を堅く守り諸侯の救援を待てば万全といえる

は危険な状態だし、朕は暫く位を退き太后のお気持ちをお慰めしよう。 もし人心が勤王の心を忘れてなければ、諸侯の義軍を待つ事ができよう」 「朕の不明によって自ら今回の災いを招いてしまった。太后のご病気

そこで周、召二人に

と国人の誇りを恐れて王城にはいないと思う。二卿は兵たちを慰撫して 「太叔がここへ来るのは隗氏のためだから、彼女を手に入れたらきっ

城を堅守し朕の帰りを待って欲しい」 と指示し、二人は叩頭して拝命した。

襄王は富辰に下問した。

「周と土地が隣接しているのは、

鄭

衛、陳であるが、行くなら何処

が安全だろうか」 「衛、陳は国力が弱いのでやはり鄭へいらっしゃるべきでしょう」

一臣が大王に鄭へ行かれる事をお勧めする理由はまさにそこにあり 「朕は翟を使って鄭を討たせたのだ。鄭君は朕を恨んでないだろうか」

ます。鄭公の先祖は周王室に功績が有り、子孫はそれを忘れておりませ いるのを見れば鄭は必ず周に救援の手を差し伸べ、大王が鄭にいらっし ん。大王が翟に鄭を討たせた事で不満はありますが、翟が周と交戦して

やれば鄭君は大王を恨むような事はなく喜んでお迎えするでしょう」 これを聞いて襄王は意を決した。富辰はさらに、

とどうしようもありません。臣が家兵を率いて翟と決戦しますのでその 「大王が翟の包囲を抜け出たとわかって翟兵が大王のほうに向かう

間に避難なさってください」

め込み、翟兵の注意を引寄せた。襄王はその隙に簡師父、左鄢父ら十数 人と共に城を出て鄭に向かった。 と言って、忠義によって子弟一族数百人を集め城門を開き翟の陣へ攻

身も重傷を負って頽叔、桃子に出遭った。 富辰は赤丁と激しい戦となり、翟兵の死傷者は甚大であったが、辰自 「あなたの忠諌は天下周知の事です、この戦いで死ぬ事はありません」

ず、こんな事になってしまいました。わたしがここで戦って死ねばきっ とお分かりになっていただけるでしょう」 と二人は富辰を慰めて言った。 「わたしはしばしば王に諌言致しましたがお聞きになっていただけ

富辰はそう言って再びしばらく修羅の中で奮戦し力尽きて一族郎党

三百人と共に戦死した。 夷を以て中華を凌辱はこれ愚策 更に夷女を娶り自ら淫禍を求む

忠諌聞かれず死戦あるのみ 富辰の忠義千秋に聞こゆ

富辰の死後やっと翟は襄王が王城を抜け出てしている事を知った。そ

る事は全くなかった。原伯貫は原城へ逃げて行った。

一方、襄王は王城を逃げ出して鄭へ向かっていたが、内心ではまだ鄭

せよと叫んだ。 のとき城門が再び閉じられたので、太叔は原伯貫を釈放し城門外で開門

周、召二公は城の上に立って太叔に、

る心配がありますからお開けすることはできません」 「本来開門してお迎え致したいのですが、翟兵に城に入って掠奪され

王城に入り、先ず冷宮へ行き隗后を開放しそれから恵太后に拝謁した。 けて彼らをねぎらうという約束で赤丁もこれを承知した。太叔はついに と答えた。太叔は赤丁に翟兵は城外で駐屯するよう頼んだ。国庫を開

儀もしないで先ず宮中で隗后と久しぶりに会った喜びの宴会を行った。 太后は太叔に会いその喜びようはなく感極まって亡くなった。 太叔は葬

井戸に身投げして死んでいた。ああ、哀れなり。

小東を探して殺そうとおもったが彼女は可愛そうにそれを恐れてすでに

それからやっと太后の崩御を発表した。 廷に臨み祝賀を受けた。また、国庫を開き翟軍に大盤振る舞いを行い、 翌日太叔は、太后の遺命と偽って自ら王となり、叔隗を王后とし、朝

国人はこんな詩を歌った

言うも穢し恥知らず追放するのは誰か 君がやらねば俺がやる 夕に母を喪い朝には嫁取り 嫁は嫂 臣下の分で王后を娶る

耽った。王城内の国事は全て周、召に任せ、王は名ばかりで臣民と接す の謀反を恐れ、隗氏と一緒に温に移り住み、宮室を大改修し日夜歓楽に 太叔は国人の歌を聞き人々が自分に心服していないことを知り、彼等

> 多く一名竹川といい、公館はなかった。襄王は土地の人に鄭への入り口 の気持ちがわからず心配であった。一行は氾に行き着いた。そこは竹が

を訊ね、農民封氏の草堂に宿を借りた。

「あなたさまはどういう官職のお方ですか」 「わたしは周の天子だ、国で内乱が起こり難を避けてここへ来たのだ」

封氏は驚いて叩頭して失礼を詫び、

「弟が赤い日が草堂を照らす夢を見ましたが、正夢で、貴人をお迎え

する事に成りました」 そう言って弟に鶏をつぶして黍粥を作らせた。

「弟さんとはどういう人ですか」 「わたしの腹違いの弟で、同居して一緒に農作業や炊事をして継母を

養っております」

しは位は天子でありながら同母の弟からこんな災難を受けており、 「そなたたち農家の兄弟はこんなに仲良くしているというのに、 わた

たたちには遠く及ばないなあ」 と言ってため息をつき寂しそうに涙を流した。大夫左鄢父が

(管、 蔡の乱)。 そうごお苦しみになる事はございません。 急いで諸侯に 「周公は聖人といわれていますがやはり骨肉の争いがございました

この難局を訴えれば諸侯は放ってはおくことはありません」 使者を出そうとした。概略以下の通り。 そういうので、襄王は早速手紙をしたため斉、宋、陳、鄭、

衛の各国

侯に告ぐよろしく朕を助けよ。 朕は、母の寵子である弟帯に追われ国を出て鄭国の氾にいる。諸

さらに簡師父が進言した。

百里奚、公孫枝等の諸賢がいて国政を担っており、晋は趙衰、狐偃、胥臣ひゃくりけい こうきんし これ しょしん 「現在諸侯の中で覇者を志しているのは秦と晋です。 秦には蹇 叔、けんしゅく

に勤王を勧めるでしょうが、その他の国では望み薄だと思われます」 等の諸賢が同じく国政を担当しています。彼等はきっとそれぞれの君主

鄭の文公は襄王が氾にいるというのを聞き 襄王はただちに簡師父を晋へ、左鄢父を秦へ使者として派遣した。

「天子はやっと翟より鄭だとわかったようだな」

と笑って、即日大工を氾へ遣って宿舎を建設させ、自ら出かけていっ

公に会って慙愧にたえなかった。 魯、宋各国もまた挨拶に使者をよこし て器具等をチェックしおろそかにする様子は全くなかった。襄王は鄭文

それぞれ食料等を献上したが、衛文公だけは何の応接もなかった。魯大

夫臧孫辰、字文仲がこれを聞いて嘆息して

がなくなれば水は涸れてしまいます。衛侯が生きていけるわけがありま であり、水でいえば水源に当ります。幹がだめになれば木は枯れ、水源 「衛侯は間もなく亡くなりますね。諸侯にとって王は、木でいえば幹

翌年春、やはり 臧 文 仲の言った通り衛文公は亡くなり、世子鄭が立っ せんよ」 と言ったが、それは襄王十八年(紀元前六三四年)の十月のことである。

方簡師父は襄王の命を奉じ晋へ行った。晋文公は狐偃の意見を聞い

て成公となった。

を忘れかけています。この際襄王の復国に協力し太叔を討って、民に殿 晋は君主が何度も代ったため、民はそれが当たり前と思って君臣の大義 「昔、斉桓公が諸侯を会盟できたのは尊王を前面に出したからです。

す。もし晋が協力しなければ秦がきっと協力するでしょう。そうなれば 周を補佐した功労、武公が晋を中興した功績ではみな尊王の功によりま が天子に二心なきことを知らしめるべきです。文侯(周東遷時の晋侯)が

覇業は秦に帰することになります」 文公は太史郭偃に亀卜で占わせた。 「大吉です、これは黄帝の阪泉の戦い(蚩尤との伝説上の戦い)と同じ

吉兆です」 「どうしてわしがやらなければならないんだ」

だ王は昔の帝と同じく、叔帯には必ず勝ちます」 「周王室は衰えたりと言えども天命は改まってはおりませんから、ま

「もう一度筮で占ってくれないか」

動き、下が『兌』上が『離』の『睽』の卦に変わった。 その結果は下が『乾』上が『離』の『大有』の卦が出て、第三の爻が

偃は易の結果を見て、

疑いなしです」 いうことです。これは天子の恩光が晋国に照らされるという事で、大吉 ので『乾』が『兌』の変わったということは天が日の光を沢に照らすと 『乾』は天を意味し『離』は日を意味します。『兌』は沢を意味する

その補佐とした。文公は狐偃、欒枝等を率いて左右軍と連携を取り合っ 趙衰を左軍の大将、魏犨をその補佐とし、郤溱を右軍の大将、顛頡を と判断した。文公は大変喜び大観閲を行って、軍を左右二軍に分け

した。周に多額の賄賂を送り晋侯として天子のお墨付きをもらた 25 晋武公 翼 嫡系 と曲沃 庶系 に分かれいたものを庶系の武公が一の 晋に統

績の分け前を取られないように使者をよこしてわが軍を止めに来たので

「晋君は大義を独り占めして、諸侯を随えようとしています。殿に功

穆公がそう言うと、蹇叔、百里奚たちが口をそろえて言った。

すでに黄河の西に集結し日ならずしてを渡るだろうという情報を得た。 出発前河東の責任者から、秦伯が自ら大軍を率いて王室救援のために

て進軍できないでいるんです。殿がこの戎、狄に賄賂を送って勤王のた 狄の領地があり、秦は未だ彼等と交渉がないため反抗される事を心配し 河を渡ってから東への道が通じていないからです。軍が通る道には戎や 「秦公には勤王の気持ちがありますが、河向うに軍を止めているのは、

軍はきっと撤兵すると思います(この紛争は姫姓の周朝の内紛故、同姓である

って、我軍がすで進発しているので秦軍には謝絶いたしますと言えば秦 めに道を貸してくれと頼めばきっと承諾します。秦のほうへは使者を送

晋が平定を担当し、異姓の秦に対し謝絶と言った。北京金盾社校注)」

戎、狄へ遣る一方、胥臣を黄河の西の秦公への使者とした。 狐偃の提案に文公も同意して、狐偃の子狐射姑に賄賂の品を持たせて

胥臣は穆公に拝謁して文公の意向を伝えた。

遠征のご苦労をお掛け致す事はないかと存じます」 に代わりまして出陣いたしました。十分成算はございますの、ご主君に 君の心配でもあります。すでに国内の問題は片付きましたので、ご主君 「天子は国外に亡命されご苦労されています。君侯のご心配はわが主

晋君が大義の兵を挙げられたというのであれば、静かに朗報を待つこと と思って、天子のご難をお守りするためにここまで軍を進めてきたが、 「わしは晋君が即位されたばかりだから、兵を集めるのも大変だろう

> ないので、戎、狄に道を塞がれるのが心配なのだ。晋公も政権を握った す。このまま軍を進めて共に天子を迎えるべきではないでしょうか」 勤王が大切な事だという事はわからないではないが、<br />
> 東道が開けて

せ、穆公は撤兵して帰国した。 ばかりだから大功がなければ国を治めづらかろう。彼に譲ってやろう」 そこで公子 縶 を周の使者左鄢父につけて氾へ派遣し襄王に挨拶をさ

東南で駐屯した。守将蒼葛が郊外に出てねぎらった。 胥臣が秦軍撤退を復命したので、晋軍は進軍して陽樊

(現河南省済源

文公は右軍将軍郤溱らに温を包囲させ、左軍将軍趙衰らを襄王の迎え

に氾へやった。

襄王は四月王城に戻り、周、召の二公に迎えられ入朝した。 温の人々は周王が復位したと聞き、よってたかって頽叔、桃子を攻め

出門を許さない。太叔は剣を抜き数人を切り倒したところへ魏犨が追い 車に乗せ門を抜け出して翟国へ行こうとしたが、門衛たちは門を閉じて 殺し、城門を大きく開いて晋軍を受け入れた。太叔帯は大急ぎで隗后を

「謀反人、何処へ行くのだ」

ついた。

「いつかきっと十分に報いるから、城から出して逃がしてくれないか」

「天子にお聞きして、いいとおっしゃったら情けをおかけいたしまし

よう

太叔は怒って剣を取って突いてきたが、魏犨はその車に飛び乗って一

刀の下に切り倒した。兵士が隗氏を捕えて連れてきた。

と言って兵たちに命じて矢を乱射した。花のように美しき夷女、太叔 「この色狂いの女め、お前なんぞ生かしていても何の役にも立たぬわ」

兄を追放 兄嫁盗み南陽に拠り ただ半歳の歓びに死す帯との歓楽はたった半年、哀れ今日万箭の下に死す。

淫逆に速き報いあらざれば 天下に綱常復すこと無し

魏犨は二人の死体を持って郤溱に報告した。

たんだ」
「生け捕って天子へお届けすべきだったのに、どうして殺してしまっ

部溱は大息をついて、二人の死体を神農川の辺に葬り、温の人民の慰手で速やかに誅殺することを望まれていますよ」 「天子もご舎弟の事ですからご自分で手をかけれれるのを避け、晋の

とした。文公はそれを謝絶して言った。朝見し勝利を報告した。襄王は大変喜び酒宴を設け手厚い褒美を贈ろう朝見し勝利を報告した。襄王は大変喜び酒宴を設け手厚い褒美を贈ろう

ただければ、臣は地下において永久に王のご恩に浴する事ができます」だ、私の死後、隧道を掘って埋葬する事を(王の礼による葬儀)お許しい「臣重耳、恐れ多くて天子のご褒美をいただくことはできません。た

たので文公は王の恩に感謝し辞去した。民衆は老幼をつれて晋公がどん寒王はそう答えて、畿内の温、原、陽樊、横茅の四つの城市を増封しの大功については朕は絶対に忘れないからどうかわかってもらいたい」 (大王が決められた上下の礼制は重要で、朕としては自分のために尽にた正が決められた上下の礼制は重要で、朕としては自分のために尽

れがある。だから部下に任せず自ら行く事にしたのである。れがある。だから部下に任せず自ら行く事にしたのである。と問の卿士原伯貫の封地だったけれど、彼が戦に破れ功が無かったのでと周の卿士原伯貫の封地だったけれど、彼が戦に破れ功が無かったのでと周の卿士原伯貫の封地だったけれど、彼が戦に破れ功が無かったのでと周の卿士原伯貫の封地だったけれど、彼が戦に破れ功が無かったのでと周の卿士原伯貫の封地だったけれど、彼が戦に破れ功が無かったのである。れがある。だから部下に任せず自ら行く事にしたのである。れがある。だから部下に任せず自ら行く事にしたのである。

な人かと争って街中をうずめ『斉桓公の再来だ』と喜んだ。

へた。 類頡は櫕茅へ、欒枝は温へいったが共にその守臣は酒食をもって出迎

一方魏犨が陽樊へ行くと、守城責任者の蒼葛は城の上から、

王臣だ、言う通りに引き渡すわけにはいかん」いくらも無い。そのうえにまた四城を持って行くのか。わしも晋と同じ「周は岐、豊を放棄(平王が遷都の功に報い秦に与えた)し余った土地は

魏犨は怒って、城を包囲し、と言って、民衆を指揮して武器を持たせ城に登らせた。

「早々に投降しろ。さもないと城が落ちた時は皆殺しだぞ」

と大声で叫んだ。

ば、ここで殺し合う事ができるか」内、畿内の民衆は王族でなくても王の親戚が多い。晋も周の臣下であれ内、畿内の民衆は王族でなくても王の親戚が多い。晋も周の臣下であれば、四東は刑をもって威を示す』ここは畿

魏犨はその言葉が気になって文公に使者を出した。文公は蒼葛に手紙

四邑の地は天子から賜ったものであり、わたしは天子の命に背くを書いた。

ものではありません。将軍が天子のご親戚等の事がご心配でしたら

叔父 天子が同姓の諸侯を呼ぶとき叔父或は伯父と呼んだ

83

したらお聞きいたしましょう。 どうぞお連れになってご帰国下さい。なお将軍のお考えがおありで

蒼葛は手紙を受取り、城中の民衆に、 魏犨は文公から攻撃を緩めて陽の人々を移転させるよう命ぜられた。

村に移った。魏犨は境界線を確認して接収を終え帰国した。 と命じた。大半のものが出て行きたいと言い蒼葛は彼等を引きつれ軹 「周へ帰りたいものは出て行き、晋につこうと思うものは残れ

さて、文公と趙衰は原へ出向いたがこちらはどうであったろうか。 原伯貫は皆に

「晋軍は陽樊を包囲して民衆ともども皆殺しにした」

とデマを流したので、原の人は死守を誓った。晋はそこを包囲したの

でなかなか落ちない。

いのでしょう。信を示して戦わずに服させるのです」 「民衆が従わないのは、きっと何か理由が有って我々を信用していな

と趙衰は判断した。

「信を示すにはどうしたらいいんだ」

「兵士達に三日間の食料を持たせて城を三日攻めさせ、もし落ちなけ

日の分しか無くなってしまったと報告してきた。 れば包囲を解くと命じて下さい」 文公はそのように命じた。三日目になって軍吏が軍中の食料飼料は今

て、口々に文公に言った。 夜中になって、原城の何人かがそっと城壁から縄にすがって降りて来

「城中の民衆は陽樊の人々が晋軍の皆殺しに遭ったというのが嘘だ

彼の一族を河北へ移した。

解いて帰るつもりだったんだ。今日でまる二日だから明朝引揚げる。そ と分かって、みな明日夜城門を開いて晋軍を迎える事にしました」 「わしは元々城攻めは三日と決めていた。三日で落ちなければ包囲を

なたたちは誠意を尽くして城を守りなさい」 「原の者は明晩、城を明け渡す事に話をつけているんです。どうして

一日お待ちになってこの城を抜いてからお帰りにならないのですか。食

料の事でしたら陽樊は近いですから取り寄せられたら如何ですか」 と軍吏が進言したが、

う指令は皆知っている。これを一日延ばしたのでは信頼をなくしてしま 「信頼は国の宝であり、皆が拠り所とするところでもある。三日とい

う。原を得ても信を失ったのではとても民衆の支持はえられない」 文公はそう言って夜が明けるとすぐに包囲を解いた。原の人々は顔を

はないか」 「晋侯は城を失っても信頼を大切にするお方だ。これこそ君主の姿で 見合わせて

もこれを引留める事ができずしかたなく開城して投降した。 と言って、みな争って旗を降ろし城を抜け、文公を追い随った。原伯貫 どんなに死戦を誓っても 口先だけでは国は守れず

原去るも結局原は服したり

偽りはなお信義にしかず

届いた。文公は軍をそこに駐屯させ、軍を連れずに原城に入った。人々 は歓呼の声で迎えた。文公は原伯貫に会い、彼を王朝の卿士の礼で遇し、 晋軍が三十里進んだあたりで原の人々は追いつき、原伯貫の降服状も

### 文公は四邑の守将を決めて、

た、このことは決して忘れないぞ」
「そなたは一族の不正に組することなく欒氏と共にわしに服してき

兵を残し帰国した。そううって郤溱を温大夫とし、欑茅を兼務させた。それぞれに二千の

覇王への道の最初の仕事であるとした。後の人は周王の復国を義をもって助け、信義で原を抑えた事を文公の

さて文公が覇を称えるのは何時であろうか、それは次回のお楽しみ。

# 柳下恵 展喜に策を授け斉軍を撤兵させ第三十九回

#### 晋文公 衛・曹を討つ 柳下恵 用書に第を授る

晋文公は温、原、陽樊、櫕茅の四邑を接収し太行山の南に直通できる。

孝公は怒って、『斉国の威風を再び』を夢見て中原への出兵を群臣に諮っに参加しなかった事で楚とも溝ができ、諸侯の心は斉を離れて行った。会盟で署名をしなかったことで宋襄公とも気まずくなり、 更に盂の会盟の死以来、無虧を救援しようとした魯僖公を恨むようになり、 鹿 上のの死以来、無虧を救援しようとした魯僖公を恨むようになり、 鹿 上のこの頃、斉の孝公も天下に覇を称えようという気持ちがあった。無虧

「先君桓公は戦っていない日は無いほど連日戦いに明け暮れておら「先君桓公は戦っていない日は無いほど連日戦いに明け暮れておら、外の事を何にも知らずとても恥かしいと思っているがその報復は未だ済んでいない。現在魯は北は衛と結び、南は楚に通るがその報復は未だ済んでいない。現在魯は北は衛と結び、南は楚に通るがその報復は未だ済んでいない。現在魯は北は衛と結び、南は楚に通るがその報復は未だ済んでいない日は無いほど連日戦いに明け暮れておら、生活が、関が、

思われます」
「魯の方には救援態勢がありますから出兵しても勝利は難しいかと

上卿の高虎が答えた。

「たとえ勝てなくてもやってみれば諸侯の離合情況が掴めるではな

北鄙(北の辺境の町)を攻めようとした。 高虎の意見に対し孝公はそう言って、自ら二百乗の戦車を率いて魯の

ろの飢饉で戦どころではない。 辺境の守備兵がこの情報を聞きつけ魯侯に急報して来たが、このとこ

ば、どうしても勝負を決めようというものではないと思います」 と大夫臧孫辰が進言した。 「斉は例のことを恨みに思っているだけです。謝罪をしていただけれ

「誰か言葉巧みな者はいるか」

知識があり理屈の通った男でしたが、法の執行官で志を得られず官を辞 という)。この者は外向きは穏やかですが内面は気骨のある人で、該博な は子禽、官職は士師で封地は柳下にある者です(号は柳下、謚は恵で柳下 恵 ことなく斉に重きを置かれると思います」 して隠居しております。この者を使者にすればきっと殿に恥をかかせる 「推薦できるものが一人います。先君の時の司空無駭の子で展獲、字「誰か言葉ヹスそ者にりそえ」

使いの者に呼びに遣ったが展獲は病気で出られないと断った。 「柳下のようです」

「わしも以前からその者を知っている。今何処に住んでいるのかね」

上手ですから、彼に獲の家へ行かせて意見を聞かせたら聞いて来るでし 「子禽には従弟で喜という者がいます。官位は低いですが話が非常に

展喜は柳下へ行き、展獲に会って君命を伝えると、展獲は 「斉が魯を討とうとするのは桓公の覇業を継承したいからなんだ。そ

> 斉を追求すれば断わられる心配はなく、必ず引揚げるよ と喜に教えた。展喜は帰って僖公に、

もそも覇を称えるには尊王が大切だから、先王(周成王)の命令を出して

「斉を退却させるやり方がわかりました」

した。喜は北鄙へ行き、斉軍がまだ国境までは来ていなかったので迎え 僖公は斉軍をねぎらう贈物を車数台に積み込んで用意して展喜に渡 と復命した。

軍をねぎらう贈物を献上した。 「わが主君は君侯がおん自らわが国にご来駕なさるとお聞き致しま

は先ず崔夭に贈物をし、彼に本隊まで案内してもらって斉侯に謁見し、 に出た。汶南あたりで崔夭を先鋒とする斉軍の先行隊に出会った。展喜

ざいます」 して、貴軍をお労らいするようにと小職が命ぜられてまいったわけでご

りません」 「魯人はわしが兵を動かしたと聞いても恐れないのか」 「小人はあるいは怖がるかもしれませんが、君子は怖がる事は全くあ

本も無い状態で、何を頼りにそう強がりを言うのかね な勇猛な武官もいないではないか。まして今飢饉に見舞われ野に青草一 「そなたの国にはもう昔の施伯のような智恵ある文官も曹劌のよう」ははく

を誓わせました。この誓書は今も専用庫にあり太史の所管となっていま 王の弟周公旦の子)を魯にそれぞれ封じられ、周公と太公に犠牲を供えて 令があるだけです。 昔、 周の先王 (成王) が太公を斉に、 わが先君伯禽 (武 『子々孫々にわたって、共に王室を補佐し、両国は互いに争わない』事 「弊国は別に頼みにするものはありませんが、あるとすれば先王の命

君侯は即位されて九年になられますので、わが国の君臣は揃って斉国が て我が魯庄公と柯の誓いを行ったのもこの王命を奉じての事であります。 す。斉桓公は前後九回諸侯を集め会盟を催されましたが、それに先立っ

ら桓公の覇業は地に落ち、友好関係が仇になってしまいますが、我われ もし成王の命令を無視され、太公の誓いに違背されるようでありました 先君の覇業を受け継がれて諸侯と親睦を図って下さる事を願っています。 は君侯がそんなことをなさるとは思っておりませんので、恐れてはおり

孝公は展喜の話を聞くと、

するつもりはないと詹侯に伝えよ」 一わかった。そなたは帰って、わしは修好を望んでおり今後魯に出兵

と言って即日撤兵を命じた。

臧孫辰が柳下恵の賢才を知りながら魯侯に推薦しなかった事を非難

した詩がある。

臧孫この賢者に道を開かず 柳下恵士師のまま報われる事なし 北方に烽煙上り魯国危急の時 片言で敵を返す柳下の奇功

展喜は魯に帰って僖公に復命した。臧孫辰はこれを聞いて、

「斉軍は撤兵したといっても本根は魯を軽視しています。 臣に仲 遂

と言う。僖公はこれを許可し、公子遂を正使、臧孫辰を副使として楚

せたいと存じます。そうすれば数年は安泰でしょう」

てもらっていた。 「斉は鹿上の盟約を破り、宋は泓水の戦いを起こし両国とも貴国と

しては恨みのある国だと存じます。王がもし二国に対し問責の兵をお出 いたしす所存でございます」 しになるのでしたら、わが主君は王のために先駆けしてあらゆる努力を

て斉討伐の兵を出し、陽谷(現山東省陽谷)を取り斉桓公の子雍を封じ雍巫 (易牙)に補佐させた。申公叔侯に兵千人をつけて駐屯させ魯の後詰と 楚成王は非常に喜び、すぐに成得臣を大将にして申公叔侯を副将とし

し、成得臣は凱旋した。 令尹の子文はこの時すでに高齢で得臣に政権を譲ろうと願い出た。 楚

王は、

時その件は考えようじゃないか」 くれた。卿には宋を討って鄭の仇を晴らしてもらいたい、凱旋して来た 76 「わしは宋と斉には頭にきている。子玉(成得臣)がその斉に報復して

を誤る事はないと存じます」 「子玉の才は臣の及ぶところではなく、交代致しましても決して王事

援するだろう。晋と宋両国を相手にするには卿でなければ駄目だ。是非 卿に頼みたい」 「宋は晋についたばかりだから、楚が宋を討とうとすれば晋は必ず救

殿と一緒に楚へ行かせていただき援兵を頼み、斉に魯を見る目を変えさ 文は子玉の能力が王に目立つようにと考え、その日はおおざっぱに済ま そう言って子文に命じて睽で練兵、観閲、 軍法の徹底を行わせた。子

臧孫辰は前から成得臣をよく知っているので事前に楚王に話を通し せ一日かかって一人も処罰しなかった。 「卿は閲兵して一人も処罰しないでどうして兵に威厳を保てるのだ」

楚王が注意すると、子文は王にはっきり言った。

十九[

なければだめです」
「臣は才も力も衰えて昔の様には参りません。威厳を示すには子玉で

「子玉にはやはり将才がある」

群臣は子文が推薦できる後継者ができた事を祝って彼の家に集まっは安心して許可した。得臣は令尹に任ぜられ中軍の元帥となった。と大変喜び、子文がここで改めて子玉への政権移転を申し出ると楚王

この時文武の主要メンバーはことごとく集まったが、大夫爲呂臣だけ子文は酒をふるまい、やって来る者を款待した。

は少し体調を崩して出席できなかった。

宴会たけなわの頃

「外に殿にお会いしたいと子供が来ております」

と門番から連絡があったので入るよう指示した。その子は入って来て

若無人である。知る人ぞ知るこの子は蕎呂臣の息子の蕎賈であり年はや子文にきちんと挨拶をすると、すぐに末席につき、酒をのみ肉を食い傍

っと十三才であった。

は祝ってくれているのだ、そなたはどうして一言も祝いを言おうとしな「わしが国のために有能大将を推薦して地位を譲った事を大臣たち

こ、子では変こ思って刑ないのだ」

「皆さんは喜ばしい事とお思いのようですが、わたしはそうは思わなと、子文は変に思って訊ねた。

いのです」

「いったい何が言いたいのだ」

子文はちょっと不機嫌になった。

です。この軍をいるの方に奏っていまったら恐っく国は員夫を蒙る事こだけで退く事ができません。せいぜい副将がいいところで大将には不適

「子玉殿は勇猛ではありますが時 宜の判断に昧いといえます。進む

でしょうか。もし敗れなければその時にお祝をしても遅くはありません」あるようなものです。推挙して国が敗れる、どうしてこれが祝うべき事なるでしょう。『硬過ぎれば必ず折れる』。という言葉は子玉殿のためにです。 もし軍政をあの方に委ねてしまったら恐らく国は損失を蒙る事に

左右の者がそう言うと蔿賈は大笑いをして出て行った。これを機に大「子供のたわ言です、気にされる事はありません」

臣たちも解散した。

先軫が進言した。

晋文公は群臣を集め対応策を諮問した。

すが、楚が斉の谷(陽谷)を攻め取り宋を討伐しようとしているのは中「現在楚は非常に強暴です。しかも殿は楚に個人的には恩義がありま

28 「柔よく剛を制し、弱よく強を制す 『三略 上略 (柳に雪折れな)

名目を授けてくださったようなものです。 覇業を成すはこの一戦にあり 原の事件です。これは天が中原の災難を救えという、楚に対する戦いの

狐偃が進み出た。 「わしは斉と宋の不安を解消してやりたいのだが、いい案はないか」

国とも殿としては(亡命流浪の時に) 仇 怨 のある国です。もし曹、衛へ 「楚は曹を抱込み更に衛とは婚姻関係を結んだばかりで、この曹衛両

こそ兵を動かす事ができます」

討伐の兵を出せば、 楚は必ず宋から兵を移して救援に来るはずです。 そ

うすれば斉、宋は気が休まるでしょう」

よし

て堅守するように命じた。公孫固は命を受け帰って行った。 文公は狐偃の提案に同意して、その事を公孫固に話し、宋公に報告し

文公は兵力不足を心配した。趙衰は、 「昔から大国は三軍、次国は二軍、小国は一軍といいます。我国は曲 沃

魏、虞、虢の諸国を滅ぼし千里の地を開きました。今では我国は次国に で武公が僅かに一軍でスタートしましたが、献公の時代に二軍にして霍、

甘んずることなく三軍を持つ力があります」 と文公の心配を打ち消してそう言った。

「三軍を作っただけで使い物になろうか

逃げてしまいます。殿が軍の大検閲を行って礼の何たるかを訓示し、民 に尊卑長幼の序を知らしめれば使えましょう」

「それだけではだめです。民が礼を知らなければ兵を集めてもすぐに

「三軍を作れば元帥が必要だが誰が適任だろうか」 「将となる人は、勇猛より智謀の人、智謀より篤学の人が望まれます。

に服した。

智勇の人でしたら沢山いますが、篤学の士といえば臣の見るところ郤縠 す。徳義心があってこそ民を 慈 しむ事ができ、民を慈しむ事ができて もあります。民生に関しては徳義を根本に考え、兵事は民を根本としま ただ一人です。彼は五十数才で飽くなき向学心が有り、『礼』『楽』『詩』 『書』に精通しており、これらは先王の定めた四書であり徳義の源泉で

の将となり郤溱がこれを補佐し、祁瞞が大将旗と陣太鼓を管掌した。 が、文公の再三にわたる強い要請を断り切れず、同意し元帥に就任した。 吉日を選んで被廬で大検閲を行い上中下の三軍を作った。郤縠が中軍 文公はいい意見だとして、直ちに郤縠を元帥に任じた。彼は固辞した

と断ったので狐毛を上軍の将とし狐優をその補佐とした。また趙衰を 78 「臣には兄がいます。弟が兄を差し置くわけには参りません」 狐偃を上軍の将にしようとしたが、

下軍の将に任命しようとしたが、彼も、 「忠節という点では欒枝に及ばず、智謀という点では先軫にかなわず、

公の戦車の御者に、魏犨を車右に、趙衰を大司馬に任じた。 博識という点では胥臣の方が上です」 と辞退したので欒枝を下軍の将とし、先軫を補佐とした。 荀林父を文

できない者には教え、三度言ってできない場合は規則違反として刑を課 れ、若い者が前、年長者が後で、立ち居進退全て決められた規則がある。 郤縠が登壇して発令した。 太鼓が三度鳴り渡ると、 陣形の演習が行わ

になった。郤縠の厳しさと寛容が当を得ていたので将たちは皆進んで命 した。三日間演習を続けると見違えるほど変り思い通り指揮に従うよう

と元帥旗が真ん中から折れてしまった。みな顔色が変わった。鐘を鳴らして兵を撤収しようとした時、突然一陣の旋風が起こりなん

です。わたしは皆さんとは長く仕事ができないかもしれないが、殿が大「元帥旗が折れたという事は主将としての私の身に何かが起こる 験

らった。 とのから、 周襄王十九年(紀元前六三三年)冬十二月のことでれには答えなかった。 周襄王十九年(紀元前六三三年)冬十二月のことでれには答えなかった。 皆そのわけを聞いたが穀はただ笑うだけでそ事を成功させる事は間違いありません」

翌春、晋文公は郤縠に、兵を分けて曹、衛を討つのはどうかと相談しあった。

た。

状況から言えば曹も衛も弱小ですから軍を分けて攻めても問題はなく、「臣はその件についてすでに先軫と打合わせができています。現在の

攻めれば、曹伯は以前から民心を失っていますし、衛を破った勢いに恐ら河を渡り不意を突いて直接衛を突けばいわゆる『迅雷耳をおおう暇なら河を渡り不意を突いて直接衛を突けばいわゆる『迅雷耳をおおう暇なを攻込んで来るとは思わないでしょうから、我々がそっと南下して南かます。衛、曹は現在親密ですから必ず拒否するでしょう。衛は直接自分むしろ本当の強敵は楚です。曹討伐を口実に衛に道を貸してくれと頼みむしろ本当の強敵は楚です。曹討伐を口実に衛に道を貸してくれと頼み

「そなたはなるほど碩学の大将だ」れをなしていますから必勝疑いなしです」

衛へ借道依頼の使者を出した。 文公は大変喜び感心して、直ちに曹討伐のために道を貸して欲しいと

「昔、晋君が国外逃亡中にわが国を通ったとき、先君は礼を尽くさな

衛の大夫元咺は成公に願い出た。

は承諾すべきです。断りますときっと曹の前に衛を攻めて来ます」いで町に入れませんでした。今、道の借用を頼みに来ておりますがこれ

「曹と共に楚に服属しているんだから、もし曹討伐のためと分かって

というのじゃ」を怒らせても楚をたのむことはできるが、楚を怒らせて何を頼みにするを怒らせても楚をたのむことはできるが、楚を怒らせて何を頼みにするいながら道を貸すと晋の歓心を買う前に楚の怒りに触れてしまうぞ。晋

と言って衛成公はついに借道を承諾しなかった。使者が文公に復命し

「なるほど元帥の読み通りだ」

文公は南へ迂回を命じた。

黄河を渡り五鹿の野に出た。文公は、

と思わずさん然と涙を流した。諸将もともに悲しみにひたった。「ああ、ここは介子推が腿の肉を切ってわしに与えてくれた所だ」

我われは衛の城を落として殿の往年の恥を雪がねばならん悲しん

と魏犨が言うと、先軫も、でいる暇などないぞ」

文公は意気盛んなその申し出を許可した。 落としたく存じます、どうかお許し願います」 「武子 (魏犨の字) の言う事もっともです。臣はわが部隊だけで五鹿を

「俺も力を貸そう」

せ、林を通して見えるように山林や丘の高みの至る所に立てさせた。と魏犨も言い二将揃って進軍した。先軫は兵たちに旗をたくさん持た

魏犨はいぶかって先軫に言った。

「用兵の要諦は『敵の裏をかく』だというが、あちこちに旗を立てた

のでは兵がいる事を知らせるようなもので衛に準備させる事になりはせ

さっているから弱腰を見せてはいけない。まず見かけで敵を煙に巻こう るのではないかと心配している。わが殿は斉に継いで覇を称えようとな に鞍替えしたので国人は不満なんだ。だからいつも中原諸侯が攻めて来 「衛はもともと斉に臣従していたのに、近頃になって衛君が荊蛮(楚)

遠望すると山林に旗がいっぱい見えて兵力がどの位なのか全く分からな い。城の内外を問わず、住民は先を争って逃げ出して守備の役人たちも 一方、五鹿の民衆は、思いがけず突然晋軍が現れたので城に上がって と思っているのだ」

の一ばちで城を抜き文公に捷報を送った。文公は狐偃に、 これを止めきれない。先軫が城に近づいたときは守備の兵はなく、太鼓

に会った。

が、まさに今日それが現実になったな あのとき舅殿が農夫が出した土くれを土地を得る啓示だと言った

と、満面歓びの色で言った。

老将郤歩揚を留めて五鹿城を守らせ、大軍は更に進軍し斂盂に駐屯し

いに行った。 た。ここで元帥郤縠が突然病に倒れた。文公は大変心配し帳の中へ見舞

折れた予兆も有り、死は旦夕の事と存じます。殿にお話申し上げたい事 いたいと思っていましたが、天命はどうしようも有りません。元帥旗が

「殿から大変な優遇をお受けし、本来身命を投じて力を尽しご恩に報

「元帥どうぞ言って下さい、何でも聞くつもりです」

「曹、衛を討伐するのは本来楚を攻めるための予備工作です。 楚に勝

ると思います。斉と同盟が成れば衛も曹も畏れて講和を言ってきます。 結んでいただきたいのです。今斉は楚を恨んでいますから同盟には応ず 遠いけれど斉は近いので早速斉に使者を送り斉侯と修好をはかり同盟を

つには策略を使う必要があり、それは斉、秦と連合することです。秦は

そうして秦とも手を結ぶ、これが臣の楚を抑える戦略の全てです」 同盟を結び共に荊蛮を討伐したいと言ってやった。 文公は了解してすぐに斉へ使者を送り、桓公との生前の友好を話して

取られた谷(陽谷)を取り返したく、晋と結んで楚に対抗しようと考え となっていた。潘は葛嬴の子である。君主になったばかりなので、楚に この時、斉の孝公はすでに亡くなっていて、弟の潘が推挙されて昭公

ていた。晋侯が斂盂に駐屯していると聞き、すぐに衛の斂盂へ行き文公

して謝罪し講和を申し入れた。 衛成公は五鹿を失ったのを知り、あわてて寧速の子寧兪を晋軍に派遣 「衛はわしの借道依頼を蹴飛ばしておいて、この期に及んで講和を求

もりだ」 めて来てもとても本心とは思えない。わしはすぐにも楚丘に踏み込むつ

楚丘の城中では晋軍が間もなく攻め込んでくるというデマが伝わり大変 不安な状況であった。 \*\*\*\*||文公はそう言って同意しなかったので寧兪は衛侯にその旨復命した。||文公はそう言って同意しなかったので寧兪は衛侯にその旨復命した。

寧兪は衛成公に説得した。

城を出られたと知ればきっと楚丘に攻めて来る事はないでしょう。それ しばらく城を出て避難された方がいいのではないでしょうか。 晋は殿が 「晋はひどく怒っておりわが国人は恐れて震え上がっています。 殿は きか計った。

でもう一度晋に講和を求めれば、衛の社稷をまもることはできましょう」

なかった事もあってこんな事になってしまった。国人にまで累を及ぼし 「先君は逃亡中の公子に礼を失し、わしも又状況判断に暗く道を貸さ

て国に身を置くのも面目ない」

理に任せ、自分は 襄 牛 へ身を避け、同時に大夫孫炎を楚に遣わして 成公はそう言ってしかたなく、国事を大夫元咺と自分の弟の叔武の管成公はそう言ってしかたなく、国事を大夫元咺と自分の弟の叔武の管

だが今五鹿を切開く人は誰ならん 正にあの時の物乞いなり あの時必要なりしや賓客の礼 ましてや女や馬を贈るなど 救援を求めた。二月のことである。

り先軫を元帥に昇格させた。先軫の後任の下軍の補佐は、人の意見をよ った。人を付けて遺体を護送して帰国させ、後任は五鹿を取った功によ この月、郤縠が陣中で亡くなった。文公はその死を惜しんでやまなか

文公は衛国を滅ぼそうと思ったが、先軫はそれを引き止めて、

く聞くと趙衰が推薦した胥臣を任用した。

ています。むしろ軍を東に移して曹を討つべきです。楚が衛を救いに来 それに君主は無礼ではありましたが城を出て行き、衛国は我われについ けで、まだ両国の不安が解消したわけではありません。それを解決しな いで先に衛を取潰したのでは覇者として小国に対する義にもとります。 「元々我われは楚が斉、宋を攻めて来たからその危急を救援に来たわ

三月になって晋軍は曹を包囲した。曹共公は群臣を集めてどうすべ

た頃には我われはすでに曹にいることになります」

と言うと文公も納得した

**僖負羈が進言した。** 「晋君のこの度の軍事行為は 駢 脇 を見られた恨みの報復です。 非常

謝罪して和を請い、民を災難から救いたいと存じますが」 に怒っているし力はわが国と比較になりません。臣が使者となって参り、

大夫于朗は負羈を讒言して

「晋は衛を許さなかった。曹だけを許すとはとても思えん」

でお取り上げになってはなりません。先ず負羈を血祭りに上げあげてく 聞いています。今も自分で使者になると言っていますがこれは売国の計 「晋侯が逃亡中わが国へ寄ったとき、負羈は私的に食物を提供したと

ださい。臣には晋を撤兵させる計略があります」 と言うと曹共公はその意見を信じて、

て官を剥奪する」 「負羈は不忠ではあるが、代々の家臣であることを鑑みて死刑は免じ

と命じた。負羈は恩を謝して朝廷を去った。まさに、 『門を閉じ窓の外の月を見ず、庭の梅を相手に内弁慶』

である。

共公は于朗に訊ねた。

「晋侯は勝利に驕っています。偽の投降の密書を作成願って晋侯を城 「そなたの計略とはどんな計なのだ」

門に誘い出します。予め精兵に弓を持たせて城壁付近に隠し、晋侯を騙 して入城させたらすぐ門を下ろし一斉に矢を射れば失敗の恐れはありま

共公はそれに従った。

晋侯は于朗の投降書を受取り入城しようと思ったら、先軫が引止め、

す。臣に試させていただけますか」
「曹軍はまだ全く傷ついていませんから、偽の投降の可能性もありま

ずだがその夜はバタバタして慌しく本当の晋侯かどうかを確認しなかっ曹の多くの人は以前曹に立ち寄ったとき晋侯の顔を見知っているは

火災で玉石ともに焼け落ちたり)という事になっていたことだろう。

激しく城攻めを行った。
かった者が逃げ帰って晋侯に報告したので、晋侯は怒り心頭に発し益々確認してはじめて偽者と分かりすっかり興が醒めた。まだ城に入ってなた。于朗は晋侯は死んだと言って共公の前でさかんに自慢したが、翌朝た。于明は晋侯は死んだと言って共公の前でさかんに自慢したが、翌朝

于朗は再び提案した。

ます。即ち軍心揺動の計です」見ると戦意を失い、攻撃が緩みます。そのうち数日待てば楚が救援に来見ると戦意を失い、攻撃が緩みます。そのうち数日待てば楚が救援に来

共公はその案に賛成した。

に恨みと憎しみを口走った。 晋兵は城の上に次々と並べて竿に吊るされた死体を見て、悲しみ口々

「わが兵士の戦意がなくなるのが心配だ、どうすればいいかね」「おが兵士の戦意がなくなるのが心配だ、どうすればいいかね」

文公は先軫に訊ねた。

れますからその乱れに乗ずるのです」
営し、墓を暴くというのはどうでしょう。城中では恐れて必ず軍心が乱営し、墓を暴くというのはどうでしょう。城中では恐れて必ず軍心が乱「曹国の墓が西門外にあります。兵を半分に分けていただき墓地に宿

文公の許可を得て、

「これから曹の墓を暴く」

共公はこれを見て、部下に城の上から大声で叫ばせた。命じた。城内ではこの話を聞きつけ胸がつぶれるほど驚いた。地へ移動させ、翌日の正午までに墓の中の髑髏を掘出して提出するようと大声で軍中に指令を出し、狐毛、狐偃の部隊に鍬や鋤を持たせて墓と大声で軍中に指令を出し、狐毛、狐

先軫はこれに次のように答えさせた。「墓を掘るのはやめてくれ、今度は本当に投降する」

の墓を暴いて仕返しをしただけだ。お前等がちゃんと死者を納棺してわ上に磔にするような事をしたんじゃないか。我われは我慢できずお前等「お前たちがわが軍を騙して誘い込んで殺し、しかもその遺体を城の

が軍に送り届けたら引揚げてもいい」

「承知しました。三日時間をいただきたい」

共公は約束通り、城の上の死体を片付けて必要数の棺を用意して、「よし、三日以内に届かなければ、祖廟を辱しめても悪く思うな」

三日内に全て整えて車に乗せた。

た時、四方面から一斉に城内へ攻め込むという事にした。備させ四隊に分けて待ち伏せさせ、曹の連中が門を開いて棺を出して来先軫は一計を案じ、あらかじめ、狐毛、狐偃、欒枝、胥臣に戦車を準

決める

四日目になって、先軫は城に向かって、

と言うと、城の上から、 「今日は納棺した棺を我が方へ渡す日じゃないのか」

お渡しいたします」 「包囲を解いて軍を五里下げていただけませんか、そうすればすぐに

門が開かれ棺が四門に分かれて押出された。三分の一程が出た頃、突然 于朗は城を抜けて裏から逃げようとしたところを顛頡に捕えられ斬られ 車から跳び上がって城に登り共公の胸倉に掴みかかって縛り上げた。 てきた。曹公は城の上から迎撃したが、魏犨がそれを城外から見ていて は棺を載せた車でふさがれ急には門を閉める事ができず、晋兵が乱入し 砲声がバンバンと鳴り響き四方から伏兵が一斉に攻撃を仕掛けた。城門 と言う。先軫は文公に報告して軍を言う通り五里まで退げさせた。城

されたのだという。 たがって全て確認し拘束した。ただ、名簿の中に僖負羈の名が見えなか は曹の官員名簿を取り寄せて見ると乗車格以上の者は三百人で名簿にし 顛頡は于朗の首を献上し、 他の諸将もそれぞれの捕虜を報告した。 文公 った。説明によると僖負羈は曹君に講和を勧めて除籍され、庶民に落と 文公は諸将を連れて城に登り戦利品の報告を受けた。魏犨は曹伯を、

文公は曹伯を前にしてその罪を数え上げ、

で国が滅びないわけがない。本営に幽閉しておいて楚をやった後処分を でもない悪党を近づけて子供のようにはしゃぎ回っていた。そんなこと 「そなたはたった一人しかいない賢臣を用いる事ができず、逆にろく

> という命令を出した。 かけることを禁止する。もし僖氏の一木一草たりとも犯したものは斬首 が北門の傍に住んでいたので北門一帯について、『僖氏を驚かして迷惑を 賞に当てた。僖負羈には苦しい時に食事を差入れてくれた恩がある。彼 と言って、乗車格の三百人は全員死刑で、家財は没収し兵士の功労褒

した。胡曽先生の詩がある。 晋侯は諸将を分けて、半分を城の守りに、残りを引連れて本陣を出発 曹伯賢者を軽んじ虜囚となり 負羈施しにより誅殺を免れる

その場限りの便宜主義

今初めてその非なりしを知らされり

向がある。晋侯が出した僖氏保安命令を聞き ところで、魏犨と顛頡の二人は、元々功をたのんで勝手な事をする傾 「われら今日曹君を捕虜にし大将を斬ったのに殿からはお褒めの言 83

かない」 どれ程の事があるんだ。こんな事じゃ我われの正当な功の評価がおぼつ 葉は一言もない。僖負羈のやつ、少しばかりの飯を持ってきたからとて

殿にばれても首が飛ぶなんて事はないよ いつに馬鹿にされるぞ。今焼き殺して将来の不満を解消しておこうや。 「こいつが晋に仕えたら当然重用されるだろうし、我われはきっとあ

と魏犨は不満たらたらである。顛頡も調子に乗って言った。

「お前の言うとおりだ」

魏犨は酔いもあって勇躍楼門に跳び上がり火勢をものともせず僖負羈を 家を包囲し前後の門に火をつけた。火は勢いよく燃え上がり天を突いた。 二人は一緒に酒を飲んで真夜中になってそっと兵を連れて僖負羈の

捜し出して殺そうと軒を飛ぶように走っていた。 ところが焼けた垂木が にぶっ倒れた。そこへガラガラガラと天地が崩れるような轟音とともに バタンと落ちてきて、魏犨は足元のバランスを崩し地面に落ちて仰向け

焼け焦げた棟木がちょうど胸に落ちてきたからたまらない。痛いの何の って迫っている中を痛みをこらえて庭の柱をよじ登って屋根に跳び上が って声も出ず、ドバッと口から鮮血を吐き、周りの炎が火球のようにな

猛だといってももうへとへとになって思わず倒れこんでしまった。そこ になったがやっと焼け死ぬのだけは免れたようである。魏犨がいくら勇 りうろうろして何とか外に出た。着ている服全体に火がついて火だるま

せ、車に乗せて宿舎に帰って休ませた。

へちょうど顛頡がやって来て。空き地へ運んで自分の服を脱ぎ魏犨に着

ほとんど焼け落ちてしまっていた。僖負羈は家人を指揮して消火させた の家が火の海となっているではないか。急いで兵たちに消火を命じたが、 が起こったかと慌てて兵を引き連れ見に行った。ところがなんと僖負羈 一方、狐優と胥臣は城にいて、北門に火がついたのを見て軍中に異変

ことはできず本営に急報した。本営は城から五里程離れていたので夜中 た。狐偃と胥臣は魏犨と顛頡が放火した事を知って大変驚いたが、隠す てやっと鎮火した。僖氏の家人が数人死に近所の民家数十軒が焼け落ち 僖禄を抱いて裏庭へ走って行って池の中で難を逃れていた。 五更になっ 意識がなかった。 ていたが煙に巻かれて倒れていて、援け起こそうとした時はガス中毒で 彼の妻は「僖氏の後を絶やしてはいけない」と言って五才の男の子

> は五才の僖禄を抱いて泣き崩れた。 るとそのまま死んだ。 文公はため息をついて非常に悲しんだ。 負羈の妻 舞った。しかしその時はもう僖負羈は気息奄々、目を開き文公を一目見

文公は涙を流しながら、 「ご安心下さい、わたしがその子をお育てしましょう」

羈を葬った後、彼の妻子を連れて帰国した。 と言ってその場で僖禄を抱いて大夫に任じ、手厚い贈物を下賜し、負

曹に仕えて大夫となった。 に帰郷したいというので人をつけて送り返し、僖禄は成長するとやはり 後の話ではあるが、曹伯が晋に帰服した後、 負羈の妻は墓を守るため

この日、文公は司馬趙衰に命令違反で放火した魏犨と顛頡の二人を誅

殺するよう命じた。すると趙衰が

最近も大功を立てていますから、今回は赦してやったら如何でしょうか ととりなしたが、文公はなおも怒って言った。 「この二人は十九年間も逃亡生活に追随して苦労を共にした者です。

大夫はたくさんいる、もし彼らがみな命令に違背して勝手な行動をする らず、臣が臣たらざれば、何をもって国を維持できようぞ。功績の有る 遵守せざれば臣たらず、君命令を実行せざれば君たらず、君主が君主た ようなら、わしは今後命令を出せなくなるではないか 「わしが民衆の信頼を得たのは命令を実行してきたからだ。 臣命令を

火の首謀者は顛頡です。私は顛頡だけを見せしめに殺せばいいと思いま 出るものがございません、殺すには誠に惜しゅうございます。しかも放 「殿の仰せの通りでございます。しかし魏犨の勇猛な事は諸将で右に

じめてその実態を知った。即刻車で登城し、先ず北門へ行き僖負羈を見 に城中の火を見てもはっきり分からず、文公は夜が明け報告を受けては

す

うのだ」
「聞いたところ、魏犨は胸部に重傷を負っていて動けないらしいでは

ようでしたらどうかこの虎将の一命をお赦しいただき、いざと言う時にようでしたら殿のお言葉に従います。もし今まで通り戦場を駆け回れる「どうか君命での調査をお許し願います。もし彼が実際に助からない

り、趙衰を魏犨の調査に派遣した。
文公はわかったと頷いた。そして荀林父を使者として顛頡を呼びに遣

ご恩返しをさせたいと存じます」

さて魏犨の命、如何なりますか。それは次回のお楽しみ。

# 先軫 詭計をもって子 玉 を怒らせましい

楚晋城 濮で大戦

趙衰は晋侯の密命を奉じて魏犨を見舞いに行った。この時魏犨の胸の『きょう』

「客人は誰だ」

傷は重傷で、ベッドに臥せっていた。

「わしが死ぬか助かるかを探って処刑するかどうかを決めるつもり「趙司馬殿が車一台でお見えになりました」

なんだな」

魏犨は絹布を出させて部下に命じた。

「大変な傷ですから動かれないほうがいいんじゃないでしょうか」「わしの胸をこの布で巻いてくれ、わしは使者に会う」

「わしは傷なんかでは死なん、ぐずぐず言うな」

そう言って常の装束で趙衰に会った。

「将軍、具合は如何ですか。殿のご命令でお見舞に上がりましたが、

起きても大丈夫ですか」

ことは十分承知しています。でももしお赦しいただけますなら、余命をない訳には参りません。犨は自分のやった事が死罪に当たる事だという

「殿のご命令とは恐れ入ります。たとえ胸に絹を巻いてでもお会いし

と言って、三度前へ跳び、三度その場で跳び上がって見せた。命がけでご恩に報いたいと思っております」

「将軍、お大事に。殿にあなたの様子を報告しておきます」

帰って文公に復命した。

「魏犨は傷はありますが、跳んだり跳ねたりできますし、臣下の礼儀

文公は彼の車右の職を解き、舟之僑に代えた。将士たちは顔を見合わ

命懸けでご奉公いたしましょう」 もわきまえていて報恩を忘れてはいません。彼をお許しになればきっと せて口々に

んで必要以上に殺す事があろうか」 「違法者に対し法に照らした十分な見せしめ効果さえあれば、何を好

間もなく荀林父が顛頡を連行してきた。文公は顛頡を叱って詰問した。 「そなたは僖大夫の家に何故火をつけたのか」

ってしまいました。僖負覊が一皿の飯を持って来たくらいのこと、どれ 「介子推は自分の太ももを切って殿に差上げたのに焼け死ぬ事にな

ほどの事がありましょう。臣は僖負覊を介山の廟に捧げるつもりでした」

「馬鹿者、介子推は自分で退官したのだ。今はわしとは何の関係もな

そして司馬の趙衰に聞いた。

・頼頡は放火の首謀者である。命令に背き勝手にリンチを行った。こ

うというのである

れはどういう刑罰に当るか」

文公は軍正に刑の執行を命じた。軍正の命により刑執行官が顛頡を轅 「斬首であります」

門へ引き出し斬首した。その首は僖氏の家で負羈に供えてその霊を祭り、 更に北門に掛け、

と軍中に伝令を発し見せしめとした。 「今後わが命令に違背する者はこの通りである」

「魏犨も顛頡と共犯である。許すわけにはいかん、

「免官であります。立功により贖罪が必要です」

文公は更に趙衰に聞いた。

刑罰は何か」

度の君命違反で一人は誅殺、一人は免職だぞ。他の者ではとてもじゃな い。法は厳正無私だ、厳に慎まなきゃならん」 と言い合い、この事があった後二軍みな粛然として法を遵守した。 「顛、魏の二将は十九年も主君の逃亡に従った大功があってさえ、一

国を乱す者に法は厳正 私恩と公義 両立は難なり 大功も違命の罪は贖えず 負羈の恩何ぞ一夜の事にできようか

サンルラ 話変わって、楚成王は懸案の宋討伐のために出兵した。緡邑を取り、話変わって、楚成王は懸案の宋討伐のために出兵した。 踏んゆう

げ出した事を仔細に訴えた。救援が遅れれば楚丘も間もなく落ちるだろ 86 衛国の使者孫炎が危急を告げ、晋国が五鹿を攻落し衛君は 襄 牛 へ逃 能陽も包囲して、疲労を待って投降に追い込むつもりであったが、突然

とうえつじょう とうぼつ えんじゅく 整工は軍を二手に分けた。申、息二邑の軍を元帥成得臣に残し、 楚王は軍を二手に分けた。申、息二邑の軍を元帥成得臣に残し、 「舅殿が苦しんでいるとなれば援けざるを得ないな」

せ、楚王は自ら蔿呂臣、闘宜申等を連れて残りの軍を率いて衛国救援に 闘越椒、闘勃、宛春ならびに各諸侯を彼につけて宋の包囲を継続さ

成得臣の指示に従った。

残して帰り、陳将轅選、蔡将公子印、鄭将石癸、許将 百 畴 が残って 向った。諸侯たちも自分の国が心配になり、それぞれの大将とその兵を

楚王は衛に向かう途中で、

「晋軍はすでに曹に向かっています」

という情報を得て、それじゃ曹を救援しなければと協議している内に、

「晋はすでに曹を破り、曹公は捕えられました」

という報告が入った。楚王はこれを聞いて舌を巻いた。

「晋の用兵の速さは神業だな」

しかたなく申城に軍を止め、陽谷にいる公子雍と易牙らを呼び返し、

令を出し成得臣の軍隊も召喚させ、 陽谷を斉に返還し兵を引揚げ、申公叔侯に斉と講和させた。更に宋に伝

とても我々の敵ではない。ここは晋に譲歩した方がいい」 ている。六十を超え天運を得て晋国を手に入れ大晋国に作り上げた男だ。

「晋侯は十九年も国外にいて、艱難辛苦を十分味わい民情にも通暁し

と言って撤兵した。

しかし、成得臣は自分の才能をたのんで、 「宋は落城目前なのに、どうして逃がしてしまうのだ」

と諸侯たちに不平を鳴らした。闘越椒も同じ考えである。

得臣は使者を出して楚王に嘆願した。 「宋を討つまでしばしお待ち下さい、凱歌を歌って帰国できます。晋

法に服します」 軍が来たら決戦をお許し願います。敗れるような事があれば甘んじて軍

楚王は子文を呼んで聞いた。

はどう思うかね」 「わしは子玉を返したいんだが、あれは戦わせてくれと言うんだ。卿

「晋が宋を救援するのは覇を称えたいからです。晋が覇を称える事は

晋を避けると晋が覇者であるという事になってしまいます。しかも曹 楚には好ましくありません。今、晋に対抗できるのは楚だけです。 楚が

衛はわが同盟国ですが楚が晋を避けるような事になれば彼らは恐れをな

はなりません」 り、もし講和をして撤退するのであれば現在の南北の局面を失うことに させる事も考えられます。王が子玉に晋とは軽率に戦うなとお命じにな して晋につくかもしれません。いましばらく対峙して曹、衛の心を固め

させ、講和ができるようならできるだけ講和するように指示した。 楚王はその意見に従い、闘越椒に得臣が軽々に晋と戦わないよう諌め 成得臣は越椒の報告を聞き、すぐに引揚げなくてもよくなったのを喜

こび、宋に対し昼夜休まず愈々激しく攻撃した。

分だけで衛の救援に行き、半分を残し得臣の攻撃が益々激しくなったの 堅守するようという晋侯の話を聞いていたのに、楚王は軍を二分して半 宋公は最初公孫固から、曹、衛を討って宋の包囲を解くから頑張って

で慌てた。これを見て大夫門尹般は宋公に申し出た。

抜け晋君にお会いして救援をお願いして参りましょう」 れていない事をまだ知らないのではないかと思います。臣が決死で城を 「晋は楚が衛救援に行ったことは分かっていますが、宋の包囲が解か

尹般の要望で華秀老を補助者につけた。 かろうと、晋侯へのみやげとして蔵の財宝をリストにして渡し、更に門 宋公は彼に救援依頼を頼むことにし、頼みに行くのに手ぶらじゃまず

て城を出た。敵陣を通り抜け晋軍の行方を捜して二人はやっと晋侯に会 楚兵の寝静まった頃二人は宋公に別れを告げ、すきを窺い縄にすがっ

い涙ながらに訴えた。

どうかよろしく救援のほどお願い申し上げます」 伝来の宝器をお納めいただき、君侯に哀れみをお願い致しております。 「すでに落城は旦夕に迫っております。わが君は軽少ではありますが

# これを聞いて文公は先軫に言った。

行けば必ず楚と戦う事になる。郤縠が生前わしに、楚と戦うなら斉と秦「宋の事は急を要す。救援しなければ宋は滅ぼされてしまうだろうし、 好を図っているし、秦も楚とは何のあつれきもないから、共謀して楚を と共同で当るべきだと言っていた。斉に関しては楚は陽谷を返還して友

やろうと言ってもウンと言わないと思う。どうしたらいいだろう」 「斉と秦が楚と自主的に戦うようにさせる策があります」

「彼らに進んで楚と戦わせる妙計があるのか」

の使者を出します。楚がもし同意しなければ、楚は斉、秦それぞれとの しを頼ませるのです。二国は楚を動かせると思ってきっと楚にとりなし して、宋にそれを斉、秦に賄賂として贈らせ楚に包囲を解くようとりな 取って救ってやるというのは殿のお考えにそぐいませんから賄賂は辞退 「宋がわが国に送ってきた賄賂は非常に高額なものです。 賄賂を受け

てしまったら何にもならないではないか」 「それは分かったが、もし楚が承諾して、斉、秦が宋を楚に臣従させ 間に溝ができる事になります」

「そこにも、楚が斉秦両国のと斡旋を聞かない様にする策があります」

「楚に両国の要請を断らせる案まで用意しているのか」

よう

て楚を怒らせてしまうとわが国と協調しようと思ってなくてもせざるを 秦がどんなにとりなしをしても聞かなくなります。斉、秦が宋に同情し 土地の一部を宋に譲ってやれば、楚の宋への憎しみは益々強くなり、斉、 ので両国の土地はわが手にあり、いずれも宋と地続きです。この両国の 嫌っている国です。我われはすでに衛侯を追放し、曹伯は捕えています

「曹と衛は楚が非常に親しくしている国ですし、一方宋は楚が非常に

得なくなります」 文公は手を叩いてその案を褒めた。

とにかく哀願に徹する事にして、門尹般は秦へ、華秀老が斉へ行った。 献上させる事にした。両国に対し口裏を合わせ、君侯に会っている間は そこで門尹般が持ってきた財宝を二つに分けてそれぞれ斉、秦両国に

秀老は斉に到着し昭公に会った。

だきたく存じております」 宝物をお贈りさせていただくとともに、今後毎年朝貢を続けさせていた せん。もし貴国のお力でわが社 稷を保つ事ができましたら、先代伝来の 「晋と楚はまさに犬猿の仲で、この難局は貴国でなければ解決できま

「今楚君はどちらにいるのですか」

こうといたしません。そこで貴国にお願い申し上げる次第でございます」 執政権を握ったばかりですので、わが国を早く落そうと功にはやって退 「楚王は包囲を解いて申まで撤退していますが、令尹の成得臣が楚の

包囲を解こうとしないのであれば、わたしが貴国のために頼んでみまし 収しました。楚王には勝を貧る気持ちはないようです。令尹の成得臣が 「楚王は以前わが陽谷を取りましたが、最近返還され講和して兵も撤

って宋のとりなしをやらせた。 そう言って崔夭を使者として宋を攻めている楚軍へ派遣し、得臣に会

を使者として楚軍へ派遣し得臣に宋のとりなしをした。斉、秦両国は話 方門 尹般は秦へ行って華秀老と同じ事を言った。秦穆公も公子 繁 きょう きょう

し合いがあったわけでなく各自使者を出したことになる。門尹般、華秀

老は一緒に晋軍に帰って報告した。文公は、

い」
「曹、衛を滅ぼしたが各々の土地の宋に近い部分は晋が取る積りはな

16 と言って、狐偃に門尹般を連れて衛へ、胥臣には華秀老を連れて曹へと言って、狐偃に門尹般を連れて衛へ、胥臣には華秀老を連れて曹へ

て占拠してしまいました」 「宋の大夫門尹般と華秀老が晋の威を借りてわが国の土地を切取っいた。ちょうどその時、曹、衛の追放された守臣がつぎつぎやって来て、 育の崔夭と秦の公子 縶 は成得臣の陣内で宋のために講和の話をして

「宋の連中はお聞きの通り曹、衛を馬鹿にしています。こんな事でどと訴えた。得臣は激怒して、話し中の斉と秦の使者に言った。

せんな。悪く思わんで下さい」うして講和などできましょう。とてもこれじゃ講和のご意向にはそえま

崔夭、 公子 縶 はばつが悪くすぐに帰国した。

「楚将得臣は傲慢無礼な男ですからすぐわが国に戦いを仕掛けてくして帰国途中の二人の使者に晋の陣に立寄ってもらい二人を款待して、晋侯は得臣が斉、秦のとりなしを受入れなかった事を聞き、使者を出

と持ちかけた。二人の使者は了解して帰って行った。ると思います。ご両国に救援をお願いいたしたいのですが」

さて、成得臣であるが、将士たちに向かって、

と誓を立てて叫んだ。そこで宛春という将軍が献策した「曹、衛を復国するまでは絶対に撤兵せず」

「どういう計なのだ」
「わたしに干戈を交えることなく曹、衛を復国させる策がございます」

てくれたら宋の包囲を解くといえば戦いは終わり八方うまく治まるのでのためですから、晋に使者を出して、曹、衛君を赦し田地を返してやっ「元帥が使者を出して、晋が衛君を追放し、曹伯を捉えたのもみな宋

「晋が承諾しなければどうする」

はないでしょうか」

利と考えられます」

・
大学包囲を解くと宋に明言してしばらく攻撃を緩めます。宋は楚の「先ず包囲を解くと宋に明言してしばらく攻撃がら逃れ、逆さ吊りのような苦しみから逃れたい気持ちでいっぱい攻撃から逃れ、逆さ吊りのような苦しみから逃れたい気持ちでいっぱい攻撃がら逃れ、逆さ吊りのような苦しみから逃れたい気持ちでいっぱい

「誰を晋に遣るか」

「よろしければわたくしが参りましょう」

軍へ派遣した。宛春は文公に会って得臣の言葉を伝えた。得臣は宋への攻撃を緩め、宛春を使者として単車(一台の馬車)で晋

戻したいと考えております」
にくしも宋の包囲を解き、お互いの塗炭の苦しみを開放し友好関係を取のであります。もし君侯が曹、衛をもとに復していただけましたら、わのであります。もし君侯に申し上げます。楚の曹、衛は貴国の宋にあたるも

た。 音侯は終わりまで聞かず傍らの狐偃を見てかんかんになって怒鳴っ

「曹、衛の罪は国を滅ぼすほどのものではないので我が君も復活させ

ようとは思っています。まあしばらくこの陣営でご滞在いただき、我わ

狐偃は先軫に聞いた。 そう言って欒枝に宛春を宿舎へ連れて行かせた。 れが相談するのをお待ち下さい

「子載(先軫の字)殿は本当に宛春の要求をのむつもりなのか」

「どういう事です」

「彼の言う通りにはできないが、聞かないわけにもいかないでしょう」

に押し付けようとしているんですよ。もし彼の要求を承知しなければ三 「宛春がここへ来たのは子玉の奸計で、恩を楚のものにし、恨みを晋

国を棄てる事になりみな晋を怨みますし、承知すれば三国が生き返りみ

は怒りっぽい性格ですから、必ず兵をこちらに移しますよ。そうすれば ゆるしてやって楚との離間をはかり、宛春を拘禁してしまいます。得臣 な楚の恩恵だと思ってしまいます。 だからむしろ今は、そっと曹、衛を

宋の包囲は頼まなくても自然に解かれるという寸法です。もし子玉が宋 と講和を結んでしまえば宋を失う事になってしまいます」

少々引っ掛かるな」 楚の使者を拘束するというのは、どうも恩を受けたものとして道義上 「子載の計はなかなかいい。しかしわしは以前楚君の恩を受けている。

であります。殿が覇業を目指される限りそれは殿の恥でもあります。小 「楚は小国を併呑し大国を陵辱していますが、これは皆中原諸侯の恥

そういう晋侯に対し欒枝は厳しく忠告した。

さな恩に拘泥してていいのでしょうか」 一なるほど、<br />
卿に言われて目が覚めたよ。

そして彼の車で随従して来た者に、早々に戻って、

「宛春は無礼だったので拘禁した。成得臣を捉えたら一緒に誅殺する」

厳重に監視するよう命じた。

文公はそう言って欒枝に宛春を五鹿に押送させ、守将郤歩揚に預けて

文公は宛春の件を片付けてから、使いを出して曹共 公に言った。 と令尹に伝えよというと、彼らはほうほうのていで逃げ帰った。

と絶縁を宣告し晋に付くと言われるなら、直ちに曹にお返ししましょう」 なく、あなたが楚についている事を問題にしたのです。もしあなたが楚 「あなたをこのようにしたのは逃亡中の小さな過失を追及してでは

得臣への手紙の内容は以下の通り。 共公はすぐに文公に許しを請うて楚に絶縁状を書くことを承知した。

わたくしも二心を抱く事はございませんでした。 従する事に致しましたので、貴国にお仕えする事ができなくなりま した。貴国が晋を駆逐してわが国の安寧を図って下さっていれば、 わたくしは社 稷を保ち、死を免がれるために、止むを得ず晋に臣

文公は更に、 襄 牛 へ使者をやって衛成公に復国を許可した。成公は

非常に喜んだ。 寧兪は成公を諌めて、

と言ったが成公は諌めを聞かず、得臣に手紙を書いた。 「これは晋の離間の計です。信じる事はできません」

内容は概ね曹

伯のものと同じである。 方得臣は宛春が捉えられたとの報告を受けると地団太を踏んで烈

火の如く怒って大声で吼えた。 「重耳め、この死損ないのくそ老爺。楚にいた時はお前はまな板の鯉

と闘越椒が諌言した。

うちの使者を拘禁するんだ。わしが行って談判してくる」 て!昔から戦争中でも『使者は罰せず』が不文律じゃないか、どうして だったのに、帰国して君主になったと思ったら、おれを馬鹿にしやがっ

と怒鳴り散らしているとき

と兵から報告があった。 「曹、衛両国から元帥宛ての手紙が届いております」

晋の破綻状況を採って密書を寄越したのだろう。わが勝利の天助かもし 「衛侯も曹伯も国外にいるのにわしに手紙とは何だろう。きっと何か

ーッとなって怒りで頭の中が真っ白になった。 そう言って開けてみると、なんとそれは楚との離縁状ではないか。カ

「この二通の手紙もあいつが脅迫して書かせたのに違いない。こん畜

生、くそ老爺め、重耳!おまえとは金輪際不倶戴天だ。徹底的に戦うぞ」 と怒鳴って、全軍に宋から撤兵し重耳と戦うため軍の移動を命じた。 「宋がどこへ行こうがそんな事、晋をやつけてしまってから考えれば

も宋のとりなしに来た斉、秦は元帥が承諾しなかった事を不満に思って 戦うべきだとお思いならやはり大王にご報告された方がいいです。しか いますから、きっと晋に救援を出す事になるでしょう。我々が陳、 「大王に再三、『軽々に晋軍と開戦しないように』と言われています。

使いを出して、大王に将兵の増援をお願し、それから仕掛けるべきでし 鄭、許と力を合わせても、晋、斉、秦の連合軍には敵いません。国元へ

「じゃ、大夫に面倒かけるがひとっ走り行って来てくれないか、『速

きをもって貴しとなす』だ」

戦を願い出た。楚王は怒って言う。 「わしは戦いは慎むようにと言っておるではないか。 それとも子玉が

越椒は元帥の命を奉じて申邑へ行き、楚王に会って、増兵と晋との交

どうしてもやると言うのは絶対に勝てるという保証があるのか

楚王は怒りを解かず、結局闘宜申に西広の軍をつけて行かせた。 「元帥は前に、『勝利なくば軍法に服する』とおっしゃっています」

予測して大量の増援はしなかったのである。成得臣の子成大心は身内の ほど割いて闘宜申につけたにすぎない。楚王はきっと敗れるであろうと 東広に置いていた。楚王はその西広から精鋭とはいえない兵を僅か千人 楚軍は二広20に分かれていて、東広は左、西広は右で、精兵はすべて

兵を六百人程集めて助勢に行きたいと楚王に願い出て許された。

闘宜申と闘越椒は共に兵を率いて宋へ向かった。

得臣は援兵が少ないのが不満だったが、 「増援などなくても晋などに負けるものか」

向かった。正に先軫の策略が図に当ったのである。髯翁の詩がある。 と、大言を吐き、即日四諸侯の軍と話し合い宋の包囲を解いて晋軍に 得臣の志天を突くと 雖 も 先軫の掌中より脱すあたわず **睢陽の久しき包囲も未だ功成らざるに** 一時の怒りで群侯と戦う

睢陽は宋の都邑

得臣は西広の軍と成氏身内の兵を合わせて自ら中軍を率いた。 闘宜申

には申邑の軍と鄭、許両国の軍をあわせて左軍とし、闘勃には息邑と陳、 蔡二国の軍をあわせて右軍として、疾風迅雷の勢いで晋侯の陣営に迫り、

晋文公は諸将を集めて策を問うた。先ず先軫が答えた。

三箇所に分けて駐屯した。

「この緒戦は是非ものにしなければなりません。楚は斉と戦い、宋を

包囲し休みなく、軍旅は相当長引いて疲れています。ここは戦って絶対

に逃がしてはなりません」

すると狐偃が

軍を三舎 (約 36km) 退げます』と約束された事があります。ここで楚と 「殿は以前、楚君の前で、『他日中原で干戈を交える事があればわが

と言い出したので諸将はむっとして怒り出した。 (原伯貫の城を接収した時約束の期限に撤兵し原の人々の信頼を得た) うでもいいというわけには参りません。臣は楚を避けるべきだと考えま 戦えば信を失う事になります。原の民衆には信頼を大切にし、楚にはど

| 君侯が他国の臣を避けるというのは大変な恥辱だ。 そんな事できよ

きません。臣が申しますのは楚との戦いを避けようと言うのであり、子玉 「子玉は残忍な男ではありますが、楚君から受けた恩も忘れる事はで

を避けると言うのではありません」

「楚が追撃してきたらどうするんですか」

礼儀を失する事になり、我軍の怒りは盛り上がり、驕り高ぶった敵に我 できません。我われが退くのに楚が何処までも追って来るとなれば自ら 「我われが退却し楚も撤兵すれば、もう楚は宋を攻撃する事はとても

怒りをぶつければ敗れる事はありません」

「子犯(狐偃)の言い分もっともである」

文公は三軍に撤退を命じた。三十里退いたところで軍吏が、「すでに

一舎退がりました」と言ってきた。

「まだだ」

続けて 城 濮 (現河南省城濮。 この戦いを城濮の戦いという) という所まで来 さらに三十里退いたが、文公はまだ退却を止めず、九十里ほど退却を

ちょうど三舎に当る所なのでやっとここで宿営し馬を休めた。 この時、斉孝公は上卿国懿仲の子国帰父を大将に崔夭を副将にし、

を率いて、晋軍を加勢するために城 濮へ集まり駐屯した。宋はすでに また秦穆公は次男の小子憖を大将に白乙丙を副将にしてそれぞれ大軍

包囲が解かれ、宋成公も晋に感謝のために司馬公孫固を派遣しそのまま

方楚は晋軍が宿営を出て撤退したので非常に喜んだ。

晋軍に留めて加勢させた。

「晋の君主が我われ楚の臣下を見ただけで撤兵したのです。これは名

引けば戦かわなくても罪にはなりません」 誉な事じゃないですか。 晋が逃げ出したのですから、 これを口実に兵を

と闘勃が言うと、得臣は怒って、

るのだ。撤退するという事はやつらが怯んでいるという事だ。速く追 増兵してもらっているのに一度も戦わなかったのではどう報告す

と言って追撃の伝令を発した。

利用して要害に拠って陣を張った。 九十里進んだところで晋軍に遭遇した。得臣は地勢を配慮し山や沢を

「楚が要害を占めれば攻めるのが難しくなるのではありませんか。速

晋の諸将が先軫に言ったが、それに対して先軫は

く出て戦うべきです」

もありません」 子玉の目的は守りではなく攻撃のはずですから要害を占めても何の利点 「要害に拠るというのは本来固守の態勢です。遠くまで追ってきた

は山と河に囲まれた要害にありますから晋国を守ることは十分可能で、 勝てば諸侯に覇を称えることができます。たとえ負けたとしてもわが国 と言う。しかしこの段階では文公は楚と戦うことに疑念を持っていた。 「対峙して見たところではわが軍の勢が勝っています。戦うべきです。

楚はそれ以上何もできません」

と狐偃が言ったがそれでも迷って決めかねていた。

その夜文公は夢を見た。国外逃亡中の時の夢である。楚の国で楚王と

覚め、同じテントで寝ていた狐偃を起こし夢の話しをした。 けられて頭を殴られ脳を口で吸取られる夢である。文公は驚いて夢から 徒手で組み打ちをしている。力が入らず仰向きに倒され、上から伏せつ 「夢の中では楚に勝てず、わしは脳を吸取られたんだが、この夢はど

うもいい夢ではなさそうだな」 しかし、狐偃はめでたい夢だといって文公にお祝いを言った。

「これは大吉の兆しです。必勝疑いなしです

「何処が吉なんだ」

弱い物ですから殿が楚に脳をお与えになったのは楚が弱くなるという事 が下を向いているのは地に伏して謝罪している意味です。脳は柔らかく 「殿が仰向けになられたのは天の御照覧があるという事であり、楚王

> を意味します。これこそ勝利でなくて何を意味しましょうか」 これを聞き文公の気持ちは晴れた。

内容は次の通り 夜が明けると、楚の使者が宣戦布告書を届けて来た。 君侯の軍とのお芝居を戦車の手すりに凭れてごらん下さい。

見せていただきましょう。

狐偃はこれを見て 「戦争は真剣であるべきなのに彼はふざけていて不敬です。これでは

彼に勝ち目はありませんよ」

文公は欒枝に返書を書かせた。

わたくしは楚君の恩を決して忘れておりませんので、敬意を表して 大夫と対峙しないよう三舎退却いたしましたが、大夫がどうしても

お会いいたしましょう。 戦をご覧なりたいとおっしゃるのでしたら承知いたしました。 明朝

址。に登り晋軍を見た。若者と年長者の秩序は正しく進退は一糸の乱れ 計七百乗、精兵五万余で、それには斉、秦軍は含まない。文公は有莘城 楚の使者が帰った後、文公は先軫に再度軍の観閲をさせた。 戦車は合

「これは郤縠が遺していった教練の賜物だ。これなら戦える」

と文公は感心しため息をついて言った。

用意させておいて、軍を分けて狐毛、狐偃に上軍を率いて秦の副将白乙丙 先軫は、山の木を切らせて或る戦具(後に楚を撹乱させる道具となる)を

ではそれぞれ五千人をつけ左翼、右翼に後詰させた。さらに斉の大士会にはそれぞれ五千人をつけ左翼、右翼に後詰させた。さらに斉の大えた。先軫自身は郤溱、祁瞞と共に中軍を率いて成得臣と対峙し、荀林父えた。 先軫に と協力し楚の右軍の闘雪中に当て、欒枝と胥臣に下軍を率いて斉の副将と協力し楚の左軍の闘官中に当て、樂枝と胥臣に下軍を率いて斉の副将と協力し楚の左軍の闘官中に当て、樂枝と胥臣に下軍を率いて斉の副将と協力し楚の左軍の闘官中に当て、樂枝と胥臣に下軍を率いて斉の副将

を願い出たが、先軫から、するよう指示した。この時魏犨は胸の火傷はすでに癒えていて自ら先鋒するよう指示した。この時魏犨は胸の火傷はすでに癒えていて自ら先鋒軍の背後に回って待ち伏せさせ、楚軍が敗れたらすぐにその本営を占拠将国帰父、秦の大将小子憖にはそれぞれ自国の軍を率いて間道を通り楚

の退路を断ち、楚将を捕えてください」が有り、ここは楚と地続きになっています。将軍はそこで待機して楚軍が有り、ここは楚と地続きになっています。将軍はそこで待機して楚軍が有り、ここは楚と地続きになっています。

と命ぜられ魏犨は意気揚々と出発した。趙衰、孫伯糾、羊舌突、茅茂

す

晋軍は宣客の比こを軍は南こ事又った。 「軍の三軍はとしごし事ジとをに舟を用意して楚軍が輜重を積み込むのを待つよう命じた。翌日夜明け、等は文公を守って有莘山上で観戦する。 更に舟 之僑には南河に期限内

とこ。 晋軍は有莘の北に楚軍は南に陣取った。 両軍の三軍はそれぞれ陣形を整

大決戦の前の緊張がみなぎる中

と成得臣が伝令を発した。「先ず左右の軍進軍せよ、中軍はこれに続け」

りあてると喜こんで、一方、晋下軍の欒枝は楚の右軍が陳、蔡軍を先行隊にしている事を探

と言って白乙丙に攻撃を仕掛けるよう命じた。陳の轅選、蔡の公子印やつ等を挫いておけば右軍は攻撃する前に自壊してしまうだろう」「陳、蔡は怯んで動揺しやすいとひそかに元帥が言っていたな、先ず

突然後退し始めた。 は闘勃の前で功を立てようと先を争って出陣した。晋軍は交戦する前に

敗で累々とした死者は数え切れない。欒枝は部下に陳、蔡の兵士に扮装の類に命中したが彼は矢が刺さったまま逃げて行った。楚軍の右軍は惨略り跳ね上がって御者も抑えきれず、逆走し闘勃の後方の部隊にぶつかい、背し攻め入った。胥臣は斧で公子印を斬り落した。白乙丙の一矢も闘勃にし攻め入った。胥臣は斧で公子印を斬り落した。白乙丙の一矢も闘勃にが戦車の馬には全て虎の皮を被せていたので楚軍の軍馬は、恐慌に部隊の戦車の馬には全て虎の皮を被せていたので楚軍の軍馬は、恐慌に部隊の戦車の馬には全て虎の皮を被せていたので楚軍の軍馬は、恐慌に部隊の戦車の馬には全て虎の皮を被せていたので楚軍の軍が跳び出してきた。この両将が追撃しようとすると傍らから胥臣の軍が跳び出してきた。この両将が追撃しようとすると傍らから胥臣の軍が跳び出してきた。この

「右軍は勝利しました、中軍も早々に追撃し一挙に勝利を得るべきで

させて楚の旗を取り楚の陣へ遣り、

が北の方へ満天に埃を上げて逃げて行くのが見えるので大喜びで、と報告させた。成得臣は車の手すりに手をついて遠方を眺めると晋軍

軍に突撃して行った。狐偃が闘宜申を遮って数合打合っていたころ晋軍闘宜申は大旗を高く掲げ主将である事を意識して武者震いをして晋

と言って直ちに左軍に急遽追撃を命じた。

「晋の下軍破れたり」

鼓が響き、両側から先軫と都湊が跳び出してきて楚軍を両断した。逃げ軍は崩れたぞ」と叫び鄭、許の二将と一緒に全速力で追撃した。突然太の後方が大きく乱れたので、彼は車を返して逃げだした。闘宜申は「晋軍に突撃して行った。狐偃が闘宜申を遮って数合打合っていたころ晋軍

げ出たところで斉将崔夭に出くわしここでまた戦いとなり、馬車も武器が先に驚いて自壊した。闘宜申も防ぎようが無く懸命に切抜けやっと逃たふりをしていた狐毛、狐偃は車を再び返し楚軍を挟撃した。鄭、許軍

「なんだ小僧か。どんな能があるのか知らないが、わざわざわしに功

も全て投げ捨てなりふりかまわず歩兵に紛れて山中に這い込んで逃げた。 晋の下軍が偽計で北へ逃げた時、ものすごい土煙を上げてあわてて逃 だで行ったように見えたのは、実は先軫の命で欒枝が有莘山で切って用 だの左軍を欺いて功にはやらせ戦いに引きずり込んだのである。さらに 狐毛が偽の大旗を作ってこれを引きずりながら逃げたのでなおさら壊乱 して逃げているように見えた。しかも狐偃が負けたまねをして敵の追撃 を誘い、先軫はそれを見込んで、祁瞞に敵の挑戦には絶対に応じないよ う命じて偽の大将旗を立て中軍を守らせ、自分はすばやく陣の後方から 抜け出て敵の隊列の横から攻め込み狐毛狐偃と挟撃体勢を取って完勝し た訳である。これらは全て先軫が予定した筋書きだったのである。この 大況が詩にうたわれている。

軍を刺激しないように陣の外を回って逃げた。
と言って太鼓を打てと命じた。太鼓が鳴り響くと陣門が開かれ祁瞞がと言って太鼓を打てと命じた。太鼓が鳴り響くと陣門が開かれ祁瞞がと言って太鼓を打てと命じた。太鼓が鳴り響くと陣門が開かれ祁瞞がを上げさせるために来てくれたか」

闘越椒が叫んだ。

「そんな敗将を追う必要はない中軍に攻め入って先軫を捕えろ」

さてこの勝負如何なりますか、次回のお楽しみ。

馬に虎の毛皮の奇計にて 楚軍驚き逃げ散れり 臨機の用兵何と堂々たる 先軫の奇謀当るべからず

緒が切れそうになった時偵察の報告で十五歳の子供だと聞き、緒が切れそうになった時偵察の報告で十五歳の子供だと聞き、祁瞞は我優のして相手にしなかった。楚の中軍は二度目の太鼓を打ち鳴らし、成大心が将軍成大心を出陣させた。祁瞞は最初は先軫の命令を聞いて陣門を固守将軍成大心を出陣させた。祁瞞は最初は先軫の命令を聞いて陣門を固守を請から二度も注意されているので自重していた。しかし左右両軍がいず王から二度も注意されているので自重していた。しかし左右両軍がいず王から二度も注意されているので自重していた。しかし左右両軍がいず王から二度も注意されているので自重していた。しかした右両軍がいず王から二度も注意といる。

#### 整子玉 連谷城で自裁第四十一回 践土で会盟し盟主となる

荀林父、先蔑の両翼の後詰軍が来て、荀林父が闘越椒を食止め、先蔑が た。晋軍の兵は司令旗が見えなくなったので大混乱を起こした。幸い 闘越椒は大将旗が翩翻と風にはためいているのを見て強弓一箭射落とし | 整将闘越椒と小将軍成大心は祁瞞を追わず、中軍に攻め入った。

成得臣は進軍を命じ

成大心を防いだ。

「晋軍を全滅させるまでは撤兵はない」

て来て両軍入り乱れて乱戦になったが、欒枝、胥臣、狐毛、狐偃が揃っ と腕をまくって叫び、その手配をしている時、先軫、郤溱の兵がやっ

てみな集まり鉄壁のような包囲ができつつあった。成得臣はそこでやっ

椒は子文の従弟で体は熊か虎を思わせ、声は豺狼(山犬、狼)のようで、 したが、闘越椒が見当たらないので再び敵中へ飛び込んで行った。闘越 身内の家兵六百を率いて、父親成得臣を守りながら命がけで重囲を突破 に分断され包囲された。小将軍成大心は戟一本で神出鬼没、一騎当千の 鳴らした。晋軍の勢いには何ともしようがない。楚の将兵は十ヵ所以上 と左右両軍ともに破れたのを知り戦闘意欲をなくして急いで撤収の鐘を

「元帥は包囲を抜けました。将軍速く参りましょう」

晋軍の中を走り回り成家父子を捜していたところを折りよく成大心に出 弓術に優れ放った矢は外れたことがないという万夫不当の勇者である。

遭った。

出して包囲を突破した。 二人は兵を一つにし、それぞれ神威を奮って更に多くの楚の将兵を救

晋文公は有莘山上で晋軍の勝利を確認して、急いで先軫に伝令を出し

て各軍に、

恩を裏切る事になる。楚兵を追うのは宋、衛の国境までとせよ と伝えさせた。先軫は諸軍に追撃を中止させた。祁瞞は命令に反し陣 「必要以上の殺傷は両国の感情を損ねることになり、楚王からうけた

曽先生の詩がある。 門を開いて打って出たので収監されて後軍で処分を待つ事になった。胡

両軍交戦時に尚かくの如し 兵を三舎退け楚王の恩に報い 追撃戒めて楚軍を放免 平時に義に背きしは誰ならん

集まって来た。空桑辺りに来ると、突然砲声が連発し一軍が道を 遮っ 方を回って睢水の河岸を進んだ。闘宜申、闘勃もそれぞれ残兵を連れて 先軫の命により斉国帰父と秦小子憖が楚兵を追い散らして得臣の本営 を占拠し、輜重、飼料を奪取したのである。得臣は仕方なく有莘山の後 したが、斥候の報告では本営にはすでに斉、秦の旗が立っているという。 またとくした。まらだいした。とうえつしょ、原、蔡、鄭、許の四国は将兵を失いそれぞれ本国へ逃げ帰った。 成得臣は成大心、闘越椒と一緒に重囲を脱出し急いで本営へ帰ろうと

げだした。闘越椒は怒りの形相で、小将軍に元帥を守るように言って奮 残兵は弓の前の鳥のようにみな胆をつぶし魂も失せてしまいさっさと逃 はみな彼の神勇に一目置いている。今日険しい道でこんな敵に出遭い、 魏犨が以前逃亡時に楚にいた時、一人で獏を捕えたことがあり、楚人 てきた。旗には『大将魏』と書いてある。

どその時北のほうから馬を飛ばして、大声で叫びながら伝令がやって来 た。魏犨は水も漏らさない包囲の中で三将を相手に戦っていた。ちょう 起して一人敵対して戦った。闘宜申、闘勃もしかたなく彼を助けて戦っ

あります **楚将は放免し、逃亡時に款待を受けた楚王の恩に報いなさいという事で** 「将軍、戦いを中止してください。先元帥が主君のご命令を受けて、

魏犨はそれを聞き兵士たちに包囲を解くよう命じた。 「助けてやるから早く行け」

申、息の両軍は左右両軍に分かれていたが生き残ったものは一、二割に を点検すると、中軍は損失甚大とはいえ六、七割は残っていた。しかし、

と道を開くと、得臣らは一気に奔って連谷へ逃げ帰った。帰って残軍

過ぎず、悲惨極まりない状況であった 勝敗は兵家の常 戦場に永らえる英雄幾ばくぞ 禽獣驚き穴に飛び込み<br />
剣の光芒血肉を飛ばし

鬼火揺れて魂魄草に宿り。悲風颯々骨は霜を侵す 封侯の事 羨 む勿れ 一将功成りて万骨枯れる

得臣は慟哭して

「今回の出陣は楚国の国威を万里に広めるためであったのに、思いが

を連れて帰り楚王に会って自裁の許可を貰ってくるように言った。 けず晋の罠にはまり、功に逸り敗れてしまった。甘んじて罪に服そう」 この時楚王はまだ申城にいた。成大心を見て烈火のごとく怒り、 と言い、闘宜申、闘勃と共に自らを連谷に拘禁し、息子の大心に残兵

> す』と言ったんだ。事此処に至って何の話が有ると言うのだ」 成大心は跪き叩頭しながら、 「そなたの父はわしの前で『晋に勝たなければ甘んじて軍令に服しま

「父は許されざる罪である事を認識し、自決しようと致しましたが、

私が引き止め国法に従い大王のご処置をいただくようお願いに参りまし

と言うと、楚王は、

「楚国の法では『敗戦の将軍は死』ということになっている。

わしの剣を汚させる事なくさっさと自裁せよ。

出し、得臣に復命した。 と言うので、大心は楚王に宥恕の気持ちはないと見て、泣きながら退

ちに顔向けできよう」 「たとえ楚王の赦しがあったとしても、何の面目あって申、息の親た

得臣はそう言ってため息をついて、北に向き挨拶をして佩剣を抜き自

刎して果てた。 **藁賈は家で父親の蔿呂臣に訊ねた。**いりましん 「令尹が敗れたと聞きましたが本当ですか」

「本当だ」

「王はどういう処置をされたのですか」

「子玉殿は強情で傲慢ですから最高責任者には向きませんが、意志が 「子玉殿と諸将が死を願い出たので王はそれを許したよ」

るでしょう。今日敗れても他日彼なら必ず晋に報復できるはずです。父 強く不屈な人ですから補佐役として彼の智謀を発揮させれば、

上はどうして王に諌言してお引き止めにならないのですか」

#### 朝謀計に足を掬われ失脚死 剛は柔に如かず

成大心は父親の納棺埋葬を行った。闘宜申、闘勃、闘越 椒等は潘尩まだいと

のだ」

「父上は巫者 -| | | | | | | | | | の范矞似の言った事を覚えていらっしゃいます

「王の怒り方があまりにも激しかったので言っても無理だと思った

か

「何だったかな」

子西に『免死牌』(超法規の死罪免除特権)を一枚づつ与えました。王は怒 ことを忘れてなく即位の日に、矞似のいう事が当たらないように子玉、 っておられたので偶々その事をお忘れになっておられただけです。父上 人はみな非業の死を遂げるであろう』と言ったことがあって、 王はその 「矞似は人相をよく見る人で、王が公子のとき『王と子玉、子西の三

がその事を申し上げれば王は必ずお二人をお許しになります」 呂臣は直ちに参内し楚王に奏上した。

「子玉殿の罪は死に値しますが、王は以前彼に免死牌をお与えになっ

ておられます。今回はお許しになられては如何でしょうか」

楚王は愕然として

われなければ忘れてしまうところだった 「范巫矞似の言った事が現実になってしまうではないか。そなたに言

たところへちょうど免死牌が届いて命拾いをした。闘勃は子玉、子西二 ぎていた。左師将軍闘宜申も自縊したのだが体が重くて懸けた紐が切れ けさせた。しかし勅令が連谷に届いた時はすでに成得臣の死後半日が過 と言い、大夫潘尩と成大心に至急敗将全員死を免ずるという王命を届

得臣だけが助からなかった。 人の遺体を葬ってから自尽するつもりだったので幸い死を免れ、結局成 **楚の意気軒昂たる快男児** 雄図胸に気概は晋を呑む

> 事を知って 成嘉の二人を大夫に任じた。子文は官を辞して家にいたが得臣が敗れた 闘勃は襄城の長官に移された。楚王は得臣の死を哀れんで息子の成大心 帰り蔿呂臣を令尹に昇格させ、闞宜申を商邑の長官に左遷し商公と呼び、 について申城へ帰り、楚王に会い地に伏して死罪免除の恩に感謝した。

んだ。なんとも恥ずかしい限りだ」 「あの時蔿賈が言った通りになった。わしの見る目は子供にも及ばな

おじいさんに言ったんだが聞かなかった。 藁呂臣は長生きはしないと思 たが、これは闘一族を滅ぼす相なのだ。だから育ててはいかんとお前の たの叔父の越椒は生まれた時から熊か虎のようで、豺狼のような声だっ と嘆き、大量の血を吐いて寝付いてしまった。息子の闘般を呼んで、 「わしの死は旦夕に迫っている。そなたに一言だけ言っておく。そな 98

そなたは禍が及ばないよう彼を避けた方がいい」 絶えてしまうかもしれない。 わしの死後、 椒が国政を担当するようなら 彼が政権を担当すれば必ず非望(身分不相応な望み)を抱き闘氏の祀りが のはそなたでなければ越椒である。越椒は傲慢で簡単に人を殺す男だ。 う。勃も宜申もいい死に方はしない相をしている。楚の政権を担当する

成王は子文の功を考慮して闘般に令尹を継がせ、越椒を司馬に、蔿賈を と、諭してすぐに子文は亡くなった。その後間もなく鳶呂臣も死んだ。

工正(労働大臣)に任じた。

移した。営中に残された食糧飼料や輜重は膨大なものであった。斉、秦話変わって、晋の文公は楚に大勝した後、駐屯地を旧成得臣の本営に

「勝利されたのに塞いでおられるのはどうしてですか」の諸将が晋君にお祝いを言ったが文公は晴れ晴れしい顔はしていない。

と諸将が訊ねると文公は、

おれないぞ。彼の報復を考えておかなければならん」「子玉は決して人の下に甘んじる男ではない。一時の勝利に酔っては

と答えた。

て行った。宋の公孫固も帰国した。宋公は使者を派遣して斉、秦に感謝し戦利品の半分を彼らに分け与えた。二国の軍は凱歌を挙げながら帰っ斉の国帰父、秦の小子憖等が帰国の挨拶に来たので文公は援助に感謝

「上下の二軍が先に勝っていなければ楚に勝てたかどうか危なかっ先軫は祁瞞を文公の前へ連行し、命令違反を報告して処分を願い出た。

の意を表した。

た

)・ハー・5 と戦いを振返り、司馬の趙衰にその罪科をただし、斬って軍の見せし

と命令を発すると、三軍の将士はこれを見て震え上がった。「今後、元帥の命令に違反した者はこの通りである」

と物見の者の報告があった。 有莘に休養と軍の整備で三日間駐屯し引揚げを命じた。南河まで来る

文公は舟之僑を呼んだが彼もいない。舟之僑は元々虢国の降将だが「黄河に船が未だ揃っていません」

には大軍は帰途についたのである。前後たった六日で晋侯は黄河の岸に、南河へ船集めに遣らされたので内心不満であった。そこへちょうどに、南河へ船集めに遣らされたので内心不満であった。そこへちょうどまが重病だという報せが入ったので、晋楚の対峙はまだ当分続きすぐに妻が重病だという報せが入ったので、晋楚の対峙はまだ当分続きすぐに妻が重病だという報せが入ったので、晋楚の対峙はまだ当分続きすぐに妻が重病だという報生が入ったので、曹楚の対峙はまだ当分続きすぐに妻が重病であった。そこへちょうどまが重済では帰途についたのである。前後たった六日で晋侯は黄河の岸にには大軍は帰途についたのである。前後たった六日で晋侯は黄河の岸にには大軍は帰途についたのである。前後たった六日で晋侯は黄河の岸にには大軍は帰途についたのである。前後たった六日で晋侯は黄河の岸にには大軍は帰途に対している。

いくときっと隠してしまうと思います。手厚い褒賞を用意して募る方が「南河の住民は我われが楚を負かしたと聞くと皆恐れて、船を捜しに

間の船を集めようとしたが、先軫が引止めた。

戻ったが、結局河を渡るのが遅れてしまった。文公は怒ってあたりの民

効果的です」

「それはその通りだ」

にたくさんの舟が集まり、大軍は黄河を渡る事ができた。早速、軍門に懸賞の札を掛けると民衆は争って応募し、あっというま

文公は

うするか」
「これで曹、衛の恥は雪いだが、鄭の恨みは未だ晴らしていないがど

「殿が凱旋の途中、と趙衰に相談した。

は及びません」 「殿が凱旋の途中、鄭を通れば必ず向うからやってきます、ご心配に

文公は彼の意見に従った。

馬がやって来た。

行軍を始めて何日も経たない頃、東の方から貴人を護衛した一隊の人

「どなたでございましょうか」

と欒枝が訊ねると、

ので、天子が自ら三軍をねぎらいに見える予定でございます。私に事前「私は天子の卿士王子虎です。晋侯が楚に勝ち中原を安定されました

と言うので、欒枝はすぐに王子虎を文公に引き合わせた。に連絡するよう指示されて参りました」

「天子がわざわざ我々を慰労にお見えになると言われるが、帰国の途では、「天子がわざわざ我々を慰労にお見えになると言われるが、帰国の途では、「天子」というできます。

と文公が群臣に訊ねると、趙衰が答えた。中でありどのように接待申し上げればいいだろうか」

「ここから衡雍まではそう遠くありません。そこに践士(鄭国内、現河「ここから衡雍まではそう遠くありません。そこに践士(鄭国内、現河

行う事にすれば、君臣の礼儀を失するということはありません」を兼行で行宮を作って、諸侯を引率して天子の車をお迎えし朝見の儀を南省原陽県西南)という所があります。地形が広く平坦ですからそこに昼南省原陽県西南

晋軍が衡雍に向って行軍していると、途中で又一隊の軍隊に遭った。をお迎えするという期日を取り決め、子虎はそれを聞いて帰って行った。趙衰の意見に従い文公は王子虎と打合わせ五月の吉日に践土に周王

鄭伯の命を奉じて講和の特使として来たのである。 これは鄭国の大夫子人 九 で、晋軍に罪を問われて討伐されるのを恐れこれは鄭国の大夫子人 九 で、晋軍に罪を問われて討伐されるのを恐れ

文公は怒って、

と怒鳴ったが、趙衰はこれをなだめて、天子への朝見が終われば、必ずわしが軍を率いて鄭を討伐してやる」「鄭は楚が破れたのを聞いて惧れをなしただけで本心とは思われん。

「分回り出圧ことのい新まな温度」、なと怒鳴ったが、趙衰はこれをなだめて、

いに軍威を示す事ができました。これ以上鄭に多くを求めてわが軍を疲「今回の出征によって衛君を追放し、曹君を捕え、更に楚を破り、大

数か月軍を休ませてから討伐に出ても遅くはありません」許してやったら如何でしょう。もし又背くような様子が見えましたら、労させて何になりましょう。もし鄭伯が本当に帰順する挨拶に来れば、

資を送り届けて謝罪をしたので、文公は改めて鄭伯と友好の盟約を結ん鄭城へ遣って鄭伯と盟約を結ばせた。鄭伯は自ら衡雍へ出向き食料や物して狐毛、狐偃に自分の部隊を連れて践土へ遣り行宮を造営させ、欒枝にと進言したので、文公も和解を承知した。軍は衡雍で駐屯させた。そと進言したので、文公も和解を承知した。軍は衡雍で駐屯させた。そ

いなくなれば他の者は心配するに足らない、みな枕を高くして寝られる、がなかった。鄭伯が帰った後、文公はそっと家臣たちに本音をもらした。がなかった。鄭伯が帰った後、文公はそっと家臣たちに本音をもらした。がなかった。鄭伯との話の中で文公は子玉が勇敢で立派な将軍だと誉めると、鄭だ。鄭伯との話の中で文公は子玉が勇敢で立派な将軍だと誉めると、鄭

得臣の死して楚は更に一敗 連谷の 柩 哀れなり成得臣無鉄砲と言えど 将来の勝敗を誰か知る

様子はどんなものだろうか。さて、狐毛、狐偃は践土に明堂の規定にならって王宮を建てた。そのさて、狐毛、狐偃は践土に明堂の規定にならって王宮を建てた。その

『明堂賦』(李白作) をみれば明らかである。31

号令を発せば万国の諸侯朝見す<br />
前面三室<br />
総数九室<br />
太廟は中央<br />
赫々たる明堂<br />
国の太陽なり<br />
聳え立ち異域を鎮圧<br />
天子一たび

のではなり。 『明堂賦 は李白15才の作と言われる ( 但し以下は李旦『明堂賦 そのもをいう。 『明堂賦 は李白15才の作と言われる ( 但し以下は李旦『明堂賦 そのもず 明堂 古代 天子が大きな儀式を行 た場所 周代においては諸侯を朝見する場所

形一階は方形 これ即ち天地の奇偶の法に従う 臣下の席は夫々異 太室その中心にあり(扇扉三十六)窓七十二) 堂の左右に脇部屋あ 天子は春夏秋冬の初月は左房 終月は右房に住まう 二階は円

卿士は粛然と整列す。夜明けとともに高い冠を着用せし天子が出御 塞は外塀の左に整列す 朱の盾 玉の鉞等がびっしりと並び 無数 なり 三公は最尊で中央の階 侯爵は東の階東側にて西面し 伯爵 の旌旗入り交じり上下に揺れ動く 厳粛かつ荘厳な中 靄は晴れ 戎、夷は戸外の西東 蛮、狄は南北に立ち並ぶ 九采は外塀の右 四 は西の階西側で東面す 子爵は応門の東 男爵は応門の西に立ち

お返しするでしょう」

斧 展(屏風)を背に南面すれば 万国みな天子に帰順す

王宮の左右には数棟の公館も建てられた。これらの建設は昼夜兼行で

文公は諸侯に、五月一日に践士に集合せよと通知をした(この会盟を ヶ月たらずで完成させた。

率先してやって来た。魯僖公申は楚の友好国であり、陳穆公款と蔡庄公 であり、鄭文公 捷 は新たに帰服した国であることから、これらの国は 践土の会盟という)。宋成公王臣と斉昭公潘はいずれも以前からの友好国

には及ばない。ただ許僖公業だけは楚の属国として最も長いので晋に付 が、晋の機嫌を損ねるのを怖れて会盟に参加した。 小国 邾 、 莒は言う 甲午は楚と一緒に晋と戦った国でありこの三国は何れも楚の与党である

国は許されていたがまだ放免されていないので会盟には参加できなかっ 奔したままであり、曹孝公はまだ五鹿に拘禁されていて、共に晋侯に復 参加した事がないので迷った末参加しなかった。 衛成公鄭は 襄 牛 に出 こうとしなかった。秦穆公任好は晋と友好国ではあるが中原の会盟には

衛成公は晋が諸侯と会盟すると聞き、

た。

いないというに違いない。ここにいてはまずいぞ」 「会盟の案内状が衛に届いていないのはまだ晋侯の怒りが治まって

と寧兪に言った。

「いま徒に出奔しても誰が受け入れてくれましょうか。むしろ叔武殿

されるでしょう。そうすれば国も殿も安泰で、しかも叔武殿は真心が有 控えになって、叔武殿が践土の会盟参加を申し出れば、晋との同盟を許 って優しい方ですから位を取って代わる事はなく、機会を見て位を殿に に位を譲られ、元咺に補佐させるのがいいと思います。そうして殿はお

楚丘へ届けさせた。 要兪の意見に従って孫炎を使者にして叔武に国を譲るという君命を 101

衛侯は寧兪に訊ねたが寧兪も迷って答えられない。 「国を出ようと思うが何処が適当だろうか

「楚はどうかね」

侯と同盟を結んでいますから」 ていますから無理でしょう。陳がいいと思います。陳の穆公はすでに晋 「楚とは婚姻関係がありますが晋の仇敵で、しかも以前絶縁状を送っ

らが覇権を称えても、どちらかに頼る事ができるではないか」 だ誰も分からない。叔武が晋侯に帰順し、わしが楚を頼れば、将来どち ってくれるはずだ。それに晋楚の覇権争いは最終的にどちらが勝つかま 「そうじゃないな。以前の絶縁状はわしの本心では無く、楚王もわか

じめて寧兪の先見性に感心した。
され追い返されてしまってしかたなく陳に向かうことになり、そこではされ追い返されてしまってしかたなく陳に向かうことになり、そこでは結局衛侯は楚へ行くことにした。ところが楚の国境警備のものに罵倒

孫炎は叔武に会って衛侯の命令を伝えた。しかし叔武は、

ありません」
「わたしが国を守るのは摂政としてです。譲位をお受けするつもりは

と言った。そして孫炎に、

と衛侯に復命するよう言って、直ちに元咺と会盟に出掛けた。「晋侯に会ったら必ず兄上の復国の許可を要求する」

元明に

い言ってはなっていますというというではないお信じにならないでしょう」「「殿は疑い深い性格ですから、身内の者を孫炎に付けて遣らなければ

留めたのである。
に対する挨拶伺いであるが、実質的には元角を人質として成公の手元にに対する挨拶伺いであるが、実質的には元角を人質として成公の手元にと言って息子の元角を孫炎に付けて帰らせた。これは形の上では成公

「殿が復位できない事は明らかですから、国を譲られたことを国民に公子歂犬はそっと元咺に耳打ちした。

[7] さい ことでである。晋の後ろ盾があれば、叔武殿と共同しての方が晋もきっと喜びますよ。晋の後ろ盾があれば、叔武殿と共同してはっきり言って叔武殿を擁立してあなたが宰相になったらどうです。そ

衛国を仕切れますよ」

元咺がどうしても乗ってこないので歂犬は黙って引き下った。
ためです」
ためです」
ためです」
「叔武殿がどうして兄上の殿をを無視できましょう、わたしもとても

に会いに行ったと逆ねじ食わした。国行き、成公に元咺が叔武を君主に立て君位を認めてもらうために晋侯かもしれず、そうなれば罪は免れないと心配になった。そこでそっと陳かせしれず、そうなれば罪は免れないと心配になった。そこでそっと陳献犬は成公が復国したら、さっき自分が言った事を元咺が成公に喋る

よってお聞きようれたら如可です。なってお聞きようれたら如可です。であれば知っているはずです。彼をお呼びに父親がそういういい事は聞いていません。元角が殿のお傍にいますので、成公は半信半疑で、孫炎にこの事を知っているがどうかを訊ねた。

元角が問われたが、そんな事は絶対にないと言う。なってお聞きなられたら如何です」

寧兪は衛侯に、

はわたしをお信じになる事になるでしょう」頼む積もりなら、会盟には参加しないでしょうが公然と参加すれば、殿静を探らせる耳目の目的で謀反の準備工作です。もし晋侯に殿の復帰を彼が息子を殿の傍へよこしたのは、殿への忠義心からではなく、殿の動「元咺が殿を除こうと謀っているのは昨日今日の事ではありません。

古来富貴は靑庭魚く、忠豆孝子は冤罪を受け易し弟は優しく臣は忠 何故に歌犬の讒を信じたる

衛侯はそこでそっと践土へ人を遣って叔武と元咺の様子を伺わせた。

古来富貴は猜疑強く 忠臣孝子は冤罪を受け易し

三十里まで迎えに出て王宮へ案内した。 五月丁 未、周襄王が践士にお着きになった。晋侯は諸侯を引連れて 第 ∞ 専司征戦討伐権 天子に代わ て王の敵を征討する権限

礼が終わると、文公は、楚との戦いの戦利品である甲冑を着けた軍馬百襄王は大殿に上がられ、諸侯は拝跪して叩頭の礼を行った。挨拶の大

乗、歩兵千人、武器や衣類甲冑十数車を献上した。

襄王は大変喜び

います」 「斉侯が亡くなってから楚国が再び強大になり、力をかさにきて中原 「斉侯が亡くなってから楚国が再び強大になり、力をかさにきて中原

「臣重耳が楚の侵寇を殲滅できましたのはみな天子のご威徳によると言って文公をねぎらった。文公は再び拝礼叩頭して、

・\*\*-1 / 1。ものでございまして、臣の功などどれほどのものでもございません」

を通じて晋侯を方伯をに封じる命令を伝え、賞として大輅(天子の車)翌日、襄王は酒宴を設け晋侯をもてなし、上卿尹武公、内史叔 興 策

一缶と勇士三百名を下賜した。更に、りと百本の朱色の矢、黒の弓十張りと千本の黒の矢、それに祭祀用の酒とそれに乗る時の礼服、服飾品を一揃え、権力を象徴する朱色の弓一張

と言われ、晋侯はあまりの寵遇に再三遠慮したが結局お受けした。そ「晋侯に専司征戦討伐権『を授与いたしましょう」

こでそれを諸侯に発表した。

を主宰させた。晋侯は王宮の傍に会盟のための壇を築き、諸侯は先ず王引続き、襄王は王子虎に命じて晋侯を盟主に任命し、諸公の同盟集会

臨み会盟を司会した。、文公が先頭に登壇し、諸公がその後について順次宮へ行き天子に挨拶をしてから会盟の壇に集まった。 王子虎はその場に

元咺はすでに叔武の晋侯への拝謁を終わらせていたので、この日叔武登壇した。

は衛君の代理という事で会盟名簿の最期に署名した。

子虎は誓いの詞を読み上げた。

争なき事を誓う。違背者は神の誅殺を受け、その災いは子孫に及び、「ここに同盟した諸侯は、すべからく王室を尊崇補佐し、同士間の

先祖の祀りも絶えることになろう」

「王命、謹んで遵守します」

詩がある。 と諸侯は声を揃えて宣言しそれぞれ血を啜って互いの信頼を誓った。

今朝践土に会盟し 昔の葵丘に劣ることなし城、濮に大勝の旗翻り 王宮にて王に朝見す城、濮に大勝の旗翻り 王宮にて王に朝見す晋の君臣大功立て 方伯に封じられ諸侯の盟主

桓公末路に遺恨残すも、重耳は大志を実現せんがいる。

「むかし寧母の会盟で鄭の子華が父親に不義を働こうとして斉桓公と交代させようと思ったが、叔武は泣いてこれを断り、会盟が終わったあと、晋侯は叔武を襄王に会わせ、衛君に立てて成公会盟が終わったあと、晋侯は叔武を襄王に会わせ、衛君に立てて成公

いますようお願いいたします。兄は必ず君侯にお仕え申しあげます」
この事をお考えいただけるのでしたら、どうか兄鄭の君位をお認め下さに弟の武に兄に対し不義を働かせるような事をなさるのですか。君侯がに拒まれました。君侯は桓公の覇業をお継ぎになるお方です。それなのに拒まれました。君侯は桓公の覇業をお継ぎになるお方です。それなの

さて衛侯は何時復国なるのであろうか。それは次回のお楽しみ。

## 衛元恒、公館で訴訟を行う 周襄王 河陽で朝 見を受けばない かき ちょうけん

し参加者名簿に署名した事を急報した。 ところ、その者は実態をよく調べずに、元咺が叔武を奉じて会盟に参加 がた。衛成公は歌犬の言葉を疑って密偵を差向け、叔武の動向を探らせ がた。衛成公は歌犬の言葉を疑って密偵を差向け、叔武の動向を探らせ し参加者名簿に署名した事を急報した。 し参加者名簿に署名した事を急報した。

「叔武はやっぱり自立する気だな」

「元咺はわしに背いて自分の富貴のために新君を擁立しようと、わしと衛侯は怒って、

元角は弁解しようとしたが、成公はいきなり一太刀で元角の首を斬り

対に許さん」

「息子の生き死は運命だ。息子は殺されても叔武さまを背く事はでき元角の従者が急いで逃げ帰り元咺に知らせた。落としてしまった。まさに冤罪である。

と、涙を流して言った。司馬瞞はこれを見て、

心をはっきり見せた方がいいのではないですか」
「殿があなたを疑っているのであれば、官を辞して何処かへ逃避し真

と元咺に忠告したが、

「もしわたしが官を辞したら叔武さまは誰と共にこの国を守るので

の動向監視のために息子をよこしやがったんだな。おまえたち父子を絶 104

めに公儀を投出す事はできません、それは臣下の執るべき報国の道ではすか。息子が殺されたのは私怨であり、国の管理は公儀です。私怨のた

ありません」

うに言った。これが元咺の真骨頂なのである。 元咺はそう言って、叔武に晋侯に対し成公の復位を文書で願い出るよ

入国の日には、民衆がその威儀を見ようと年寄りや幼子を助けて道に出勇猛な戦士や武器が並び意気揚々と格別な一種の新しい雰囲気があった。さて、話変わって、晋文公は方伯を拝命して帰国し、その行軍の姿は、

「うちの殿様は英雄だ」

て、みな歓呼の声で軍の帰国を迎えた。

と口々に叫び人々は皆喜色満面であった。「これから晋は栄えるぞ」

十九年間流浪の人 一朝名声は青雲に上る。

艱難の末文侯の業績を継ぎ 楚を討ち斉桓公の覇業を継ぐ

(文侯…周東遷時勤皇で功労があり晋国の基礎を作った人)

文公は群臣から祝賀を受けた後、論功行賞を行ない、狐偃の功を第一文公は群臣から祝賀を受けた後、論功行賞を行ない、狐偃の功を第一

えんでもある。

番とし、先軫をその次とした。

「城 濮 の戦いでは策略を立て楚に打勝ったのはみな先軫殿の功績で諸将は不可解で文公に訊ねた。

「城僕の戦いでは、先軫は楚軍との交戦を主張した。狐匽は楚をはないでしょうか。どうして狐偃殿が第一の功なのでしょうか」

全うするのは万世の利益である。一時の功が万世の利益の上位に置かれ信を大切に考えた。そもそも戦に勝利する事は一時の功であり、信義を「城濮の戦いでは、先軫は楚軍との交戦を主張した。狐偃は楚を避け

これを引いてみな文公り判所これ最いた。さらこ、る事はないであろう。だからわしは狐偃を功第一としたのだ」

「奚斉、卓子の事件で亡くなった荀 息殿の忠節は称えるべきで、子孫これを聞いてみな文公の判断に心服した。 さらに、

という狐偃の進言を認め、文公は荀息の子荀林父を呼び出し大夫に任を取立て臣下の忠節を奨励すべきと考えます」

の看病だったので寛大な処置を願ったが、文公は、賞が終わってから司馬の趙衰に刑を聞くと死刑だという。舟之僑は妻貸が終わってから司馬の趙衰に刑を聞くと死刑だという。舟之僑は妻の看病をしていたが晋侯が来ると聞いて急いで一方、舟之僑は家で妻の看病をしていたが晋侯が来ると聞いて急いで

めに命令違反とは論外である」「主人に仕えるものはその身は顧みないものである、まして妻子のた

『賞罰明らかならざれば百事成らず』これが文公が覇業を成し遂げたゆす名な宿将ではあったが命令違反は必ず斬るという方針の下、全く許さ頼頡を斬り、次に祁瞞、今日は三人目の舟之僑を斬った。この三人は皆頼頡を斬り、次に祁瞞、今日は三人目の舟之僑を斬った。この三人は皆と言って斬首を命じ見せしめにした。結局文公は一連の戦役で最初に、

将兵ともにぐんと増え強きこと天下に並ぶものがなくなった。 中 行大夫に、先蔑、屠撃を左右行大夫に任じた。前後に三軍と三行、中 行大夫に、先蔑、屠撃を左右行大夫に任じた。前後に三軍と三行、軍を超えることがないように名を換えて『三行』を設置した。荀林父を軍を超えることがないように名を換えて『三行』を設置した。荀林父を軍を超えることがないように名を換えて『三行』を設置した。荀林父を軍を超えることがないように名を換えて『三行』を設置した。荀林父を

ある日、文公が朝廷で狐偃等大臣たちと曹、衛両国の扱いに就いて協

議していた時、侍従が衛国からの手紙を届けて来た。

「きっと叔武が兄の許しを頼みに来たのだろう」

o is 文公はそう言いながら手紙を開いてみた。内容は概略以下の通りであ

強く希望致しており、君侯の一日も早いご承諾をお待ちいたしておしくお願い申し上げます。衛国民はみな君侯とご交誼頂けることを願い申し上げますとともに、先君の復位をお認め下さいますようお君侯に衛国の社稷の存続に就きまして宜しく高配賜りますようお

いて新たに出直す考えであるという意味のことを言ってきた。 陳穆公も晋へ使者を遣わし、衛と鄭に代わって、彼らが過去の罪を悔

文公は返書を出して衛侯の復国を認めてやり、五鹿城を守らせていた

「太叔は君主となってかなり経っています。国人も彼に臣従している陳穆公も帰国を促した。すると歂犬が引止めて言った。

し、隣国とも同盟を結んでいますから、簡単には信じられないでしょう」

叔武は議場の東側で西向きに坐っていた。寧兪に気がつくとすぐに席を出掛けた。衛に着くとちょうど叔武は朝議中であった。議事殿に入ると衛侯は寧兪を先に楚丘へやって信用性を探らせた。寧兪はしかたなく

らないのですか」
「太叔殿は摂政なのに何故中央にお座りになって威厳をお示しにな

下りて迎え丁寧に挨拶をした。寧兪はわざと訊ねた。

「中央の君主の席は兄上の場所で、私はそばに座るのさえ恐れ多いと

思っています。どうして勝手に座れましょう」

「兪は今、太叔殿のお心がよく分かりました」

翼へよ刃式と目炎していませんのようではないです。というでは、1945年には、1945年では、1945年では、1945年では、1945年では、1945年では、1945年に

「前君が復帰すると、必ず同行していたものと居残っていたものに分寧兪は朝廷に出て皆の考えを聞いたが、百官から次々と意見が出た。寧兪は叔武と相談して六月 辛 未 の吉日に成公帰城を決めた。

君の意向をあなた達に伝えに来たのです。信じられなければ誓約しても「わたしは前君に随行したか残っていたかは問題にしないという前

ようがどうすればいいでしょう」

けられ、同行者は優遇され居残っていたものは睨まれることになるでし

「誓約いただけるなら何の疑う事もありません」いい」

皆がそういうので兪は天に向かって誓って言った。

あらば必ず神の罰を受けるであろう」を尽くし、君臣互いに協力して社、稷の保全に努めた。もしこれに違う者を尽くし、君臣互いに協力して社、稷の保全に努めた。もしこれに違う者「衛侯に随った者、留まって国を守ったもの、内の者も外の者も最善

「南から人が来れば朝であろうと夜であろうと直ちに入城させる事」て解散した。叔武は大夫長 牂に国門を管理させ、これを聞いてみな安心して、「寧子なら大丈夫だ」と口々に言い合っ

と指示した。

「叔武殿は成公に対し真心でお迎えしようとしておられます。何の悪寧兪は帰って成公に復命した。

意もございません」

散犬は非常に心配になった。前に言った中傷はどういうことになるん これを聞いて衛侯は叔武を十分に信頼する事が出来た。

だろう。成公が歂犬の言ってきた事が実態と異る事を知ったとき、騙し て誹謗してきた事を罰せられるのを恐れ、歂犬はまたまた衛侯に言った。

ん。約束の日より早く行って彼らの不意を突いたら安全に入城できると 「太叔と寧大夫は密約があって殿を害する準備がないとも限りませ

に不穏な動きがあれば除いておきたいと申出て許された。 

思います」

「すでに予定日を相談して決めていますので、帰国を早めるとなれば

国の人々がきっと疑心を抱くと思います」

寧兪がそう言うと、歂犬は声を荒げて、

「兪殿には殿が早く入城なさるとなにか都合が悪い事でもあるので

すか」

と、食いつくので寧兪もそれ以上は言わず、やむなく一言加えた。

お許しいただき城中の臣民にその旨話をして皆を安心させたいと思いま 「殿がもし直ちにご出発なさるのでしたら、臣が一足先に行くことを

思っているだけで他意はない」 「卿が城内の者の気持ちを思うように、わしも早く臣民に会いたいと

寧兪が退ったあと歂犬は、

そこで成公は直ちに御者をせかせて、全速力で帰国を急いだ。 「寧が先に行ったのは気になります。殿も早く出発されたほうがいい

寧兪は先に国門に着くと、 長 牂 は衛侯の使者とわかりすぐに門を通

「殿はもうすぐお着きになる」

うしてこんなに早いんでしょう。そういう事でしたら前もって叔武様に ご報告をお願いします。わたしは殿をお迎えする準備にかかりましょう」 と言い、

室兪は承知しては急ぎ去った。
ちょうどその時

歌犬が前

駆と 「約束では辛未の日でしたが今日は未だ戊辰です(三日早い)。どと寧兪が知らせた。長牂は、

「衛侯はすぐ後に見えている」

して早くも到着した。

た。この時叔武は自ら督励して小役人を宮室の掃除をさせ、庭で髪を洗 

っていた。寧兪が

殿がお着きになります」

び、未だ髪が乾かず髷を結う間も待てず、片手で洗い髪を握ったまま急 た。ちょうどそこへ突然前駆の車馬の音がしたので衛侯が着いたかと喜 いで走り出たところで歂犬の列に出会った。歂犬は、叔武を生かしてお

と報告すると驚きかつ喜び、帰国の日を早めた理由を聞こうとしてい

晩かった。ああ、可哀想な叔武 中し仰向けにのけ反って倒れた。寧兪が駆け寄って助け起こしたがもう

を見ていきなり弓に矢を番え叔武に向けて放った。矢は叔武の心臓に命 いて兄弟が会ったとき以前の事が話に出る事を恐れ叔武がやって来るの

元咺は叔武が殺された事を聞き驚き、大声で罵った。

**無道な暗君だ。罪なき人をむざむざ殺し、天がこれをお許しになる** 

わけがない。晋侯に訴えてやる。簡単には君位に就かせはしないぞ」 憎悪で泣き崩れ、すぐ晋国へ出奔した。髯翁の詩がある 君兄を思い懸命に国を守りしに 無情な矢真情を蹂躙 

ちにお迎えして入城していただくようにと指示を受けていると話した。 たのかとたずねた。長牂は叔武から早朝でも夜中でもお見えになれば直 成公が城下へ到着すると長 牂が迎えに来たので、どうして迎えに出

衛侯は安堵の溜息をついて入城した。 すると寧兪が涙ながらにやって 「やはり弟には他意はなかったのだ」

れた髪の乾くのもお待ちにならず洗い髪を握ってお迎えに出ようとなさ 「叔武様は殿がお帰りになったのを非常にお喜びになり、洗っておら

のです。臣も衛国の人々の信頼を失ってしまいました。死んでもこれを いました。ところが何という事でしょう、前駆の人に殺されてしまった

償う事はできません」

言わないでくれ」

衛侯は満面慙愧にたえず、 「わしはもう、夷叔(叔武)が冤罪だと分かっている、卿よそれ以上

たので道々謁見することになり、会う順序がまちまちであった。 と言って車を進め入朝した。百官はまだ衛侯が着いた事を知らなかっ

寧兪は衛侯を叔武の遺体安置所へ案内した。叔武は両目を見開きまる

で生きているかのようであった。

衛侯は叔武の頭を膝に乗せ手でなでながら、

と大声で泣いた。すると遺体の目はきらりと光り静かに閉じた。 「前駆を処刑しなければ太叔殿の霊を慰める事はできません」

めに死んでしまった。ああ、何ということだし

「夷叔、夷叔!わしはそなたのお陰で帰れたのに、そなたはわしのた

と画策したが結局寧兪の者に捕えられてしまった。 

「太叔を殺したのも殿の事を思っての事です」

しておきながら、その罪をわしに着せようというのか 「おまえは弟を誹謗し我われ兄弟の仲を裂いて勝手に罪無き者を殺

叔武が君主の礼をもって葬られたことを知って騒ぎは収まった。 人々は叔武が殺された事を聞き騒然となったが、犯人の歂犬が誅殺され と怒鳴って歂犬の斬首を命じ、叔武を君主の礼をもって厚く葬った。

には優しい声をかけ慰めて宿舎に留め、群臣を集め相談した。 差向け射殺した事を涙ながらに訴えた。文公はこれを聞くと激怒し、元咺 さて、元咺は晋国へ出奔し文公に会って、衛侯が叔武を疑って前駆を

わしは諸卿の力によって楚との戦いに勝ち、践土の会盟では天子も

盟に参加はしたがなお<br />
二心の疑いが<br />
濃く、<br />
衛は<br />
復国したばかりなのに<br />
勝 た。しかし秦は会盟に出席せず、許は欠席し朝見もなかったし、鄭は会 おいで下さり諸侯も臣従し、覇業は斉桓公に比肩できるほどにまでなっ

諸侯は必ず離れていくことになろう。諸卿にいい案はないか 度誓約をとり、随わなければ厳しく討伐を行うというふうにしなければ、 手に会盟に参加した弟を殺してしまった。これらをどうするか。もう一

先軫が進み出て、

「随わぬ者を討つのは覇者の職務です。軍備を整え君命をお待ちいた

文公は大変喜びすぐ彼を上京させた。

と言うと、狐偃は、

者に臨みます。王に朝見するのは大礼であります。王を軽んじる者を討 周王朝見の名目で諸侯を招集し、出席しなければ天子の名をもって欠席 せん。自分がやるべき事をやらなければ人を服させる事はできません。 威が必要です。天子にお出まし頂いたお礼の朝見が未だ行われておりま 「それはまずいでしょう。覇者が諸侯に対し何かをする場合天子の権

つのは大義であります」

と言った。趙衰はこれに懐疑的で、

と心配する。文公が理由を聞くと、趙衰は次のように進言した。 「子犯殿の言う通りですが、天子への朝見はうまく行くでしょうか」

配は無く、諸侯の負担も軽減できますし、温には叔帯が建てた新宮もあ てそこで朝見するのがいいと思います。そうすれば、猜疑を引起こす心 せん。むしろ、天子に温邑にご来駕いただき、我々が諸侯を連れて行って来る恐れがあります。そうなれば諸侯から侮られることになりかねま 諸侯を集めて京師に入れば必ず各方面を震撼させ、天子が疑って断わっ 「朝見の礼はもう長い間行われていません。強大な我国がたくさんの

と文公が懸念を示すと、趙衰は更に答えた。 「天子は温邑にお出でになるのを承知なさるだろうか」 りますので面倒な事がありません」

がどんなものかを確かめて参りたいと思います」 喜んでお受けなさるでしょう。 臣が使者として上京して、 天子のお考え 「天子は我国と親しくしたいというお気持ちは有りますから謁見は

> 趙衰は襄王に拝謁し叩頭して挨拶した後、本題を切出した。 「わが主君重耳は、大王にわざわざ践土までご来駕いただきましたご

恩をいたく感じておりまして、諸侯と共に京師に参上いたし、朝見の礼 う伏してお願い申し上げます」 を執り行わせて頂きたく存じております。何卒この件ご許可頂けますよ

と奏上した。襄王は何も言わず、趙衰に使者公館で休憩を取るよう命と奏上した。襄王は何も言わず、趙衰に使者公館で休憩を取るよう命

じ、直ちに王子虎を召して相談した。 「晋侯はたくさんの諸侯を引連れて入朝すると言うが、本心がよくわ

からない、どう言って断ったらいいだろう」

「臣が晋の使者に会って真意を探ってみて断るものなら断りましょ

子虎は退って、使者公館へ行き趙衰に会い入朝の件を話し合った。う」

子虎は次のように口火を切った。

お気持ちに沿わない結果になる恐れがあります。ですからこの件お考え 疑心を持ったりデマが飛んだりして、かえって晋侯の王に対する忠愛の 人も車も街に充満し、士民は見たこともないことですから、つまらぬ猜 す。しかしながら、京師に列国が集まるという事になれば、荷物も多く、 なさろうとしておられる事は、王室にとって誠に喜ばしい事でございま 「晋侯が諸侯に声をかけられ、長く行われていなかった朝見の大典を

す。わたくしが国を出る日にはすでに諸侯に温に集合して会盟を行う通 であるという事になってしまい、わたくしとしてもとても復命ができま 知を出しております。もし中止ということになれば王事に対し不まじめ 「わが主君が朝見を考えておりますのは本当に忠誠心からでありま

直し頂いた方が宜しいかと存じます」

せん」

「しからば、どういたしましょうか」

「わたしに策がありますが、申し上げてよろしいでしょうか」

いい策がおありでした是非お聞かせ下さい」

いました。しかも温は畿内の故地であります。天子が国内視察というこ 「昔は天子が時々地方を回って民情を視察されるという儀式がござ

とにして河陽(現河南省盂県西)にお出ましになられれば、我が主君が諸

如何でございましょうか」 にはならず、臣下としてのわが主君も忠敬の誠を尽くす事ができます。 侯を引率し朝見に上がります。そうすれば天子は王室の尊厳を失うこと

「子余殿の案は両全の策です。直ちに天子にお伝えいたしましょう」

まった。

日に河陽へ御幸し朝見を受ける事を約束した。 子虎は入朝して襄王にその旨を報告すると、襄王は大変喜び、十月吉

趙衰は文公にその旨を復命した。文公は諸侯に十月一日に温に集合し

天子への朝見を行う旨の通知を出した。 約束の期日には、斉昭公潘、宋成公王臣、魯僖公公申、蔡庄公甲午、

秦穆公は弁解して

秦穆公任好、鄭文公捷が次々と到着した。

で行けませんでした。今回は諸侯の後につかせていただきましょう」 「以前の践土の時は非常に遠くて時間的に間に合わないと思ったの

と言った。文公は喜んで感謝した。

陳は穆公款が亡くなって子共 公朔が即位したばかりであったが、晋の

衛成公は晋侯に咎められるのが分っているので行こうとしない。

力を恐れ、黒の喪服窓でやって来た。 邾 、莒の小国は言わずもがなであ

「殿が行かれずに罪を重ねると晋はきっとこれを口実にして討伐に

来るでしょう」 寧兪の説得で仕方なく寧兪、鍼庄子、士栄の三人を連れて参加した。

させた。 温邑に着いても晋文公は衛成公等に会わず、軍隊を出して彼らを監視

部で、晋、斉、宋、魯、蔡、秦、鄭、陳、邾、莒の十カ国が先ず温に集 許だけは今回も堅固な要害を頼み遂に晋の命令に従わなかったが、全

(河陽の会盟

子の入られた新宮へ迎えに行き礼を尽くして挨拶をした。 

は践土の時より更に厳粛なものであった。 物を貢納し、恭順な態度で襄王の尊顔拝謁の栄に浴した。この朝の朝見 翌朝十国の諸侯は着飾って整然かつ堂々と集合し、各封地の産物等贈

その 鄷宮の盛事は今は昔 今の郟鄏は名のみとなりて 虎は天を拝し素節を称え 龍は顔を垂れ恩光に浴す 衣冠済済河陽に集まり 天子の尊顔を拝謁

朝見が正典によらず、視察に名を借るも又止むを得ざるべし。

場の<br />
喪服<br />
喪中の<br />
服は当時通常白であるが<br />
今回の<br />
河陽の<br />
会は<br />
天子朝見が有るので白

33

は不適当故黒に染めた喪服とした

報告し、王子虎と一緒にその案件を審議する事の許しを請うて認められ朝見の儀が終わると、晋文公は衛の叔武が冤罪で殺された事を襄王に

) というではいくないかで見る。 対しています まったい 文公は王子虎を公館に招き主客の席を決め、王命をもって衛侯を召喚

した。衛侯は囚人服を着て現れ、衛大夫の元咺も着いた。

願いします」「君主と臣下は直接に論判する事はできないので、衛侯の代理人をお

いて全く離れない。鍼庄子が成公に代って元咺と論判する事になった。いて全く離れない。鍼庄子が成公は廊下で止められた。寧兪は衛侯の傍にと王子虎が言ったので衛成公は廊下で止められた。寧兪は衛侯の傍に

士栄が裁判官を担当した。

こし、どのように太叔に国家を守るための指示をしたか、その後元角、元咺は立て板に水の如く、衛侯が襄 牛 を出奔した時から話を説き起まだ。

太叔を殺した経緯を事細かく陳述した。それに対し鍼庄子は、

されたものであり、全く衛侯の責任ではありません」
「それは全て散犬殿の讒言によるものであります。衛侯はそれを誤解

と抗弁したが、元咺はそれに反駁して、

いいらざむ、からでないでは、これなど進引してからいっている。 この兄上をお思いになるお心をお察し申し上げ歂犬殿の話は断りました。言葉に従っていれば主君は衛国に復位できたでしょうか? 咺は太叔殿「歂犬殿は最初小生咺に太叔殿を擁立せよと申しましたが、もしその

を主君のもとへ行かせたのも元々真心の一端からでありますが、元角はば、歂犬殿の誹謗を鵜呑みにする事はなかったでしょう。咺が息子元角とえそうであっても、主君が心を広く持たれて太叔殿の話を疑わなけれところが思いもよらず彼は主君と太叔殿を離間しようとしたのです。た

そのまま太叔殿を殺そうとしたお気持ちにつながるものでしょう」罪無くして殺されてしまいした。衛君が元角を殺そうとしたお気持ちは

と言うと、士栄はそれを排斥して、

「そなたは太叔殿のためでなく息子が殺された恨みでその報復をし

と言った。元咺は臆せずにこれに論駁した。いるのかとい

ているのだろう」

公養を含てる事よできませた。太双毀が平矣こ己とりごと書が复国でき、国を守ることは公義であります。咺不肖ではありますが、私怨のために「咺が常に申している事ですが、子が殺されるという事は私怨であり、

るよう要求する手紙を出されましたがその原稿は咺が書きました。怨み公義を捨てる事はできません。太叔殿が晋侯に兄上のご主君が復国でき

が差しておられたのだと思って、後悔なさる事を期待しておりましたが、を持っていたとしたらどうしてそんな事ができましょう。主君は一時魔

士栄はまた同じことを言った。期待に反し太叔殿は更に冤罪を受けられる事になってしまいました」

おられましたました。太叔殿が歂犬殿に殺されたのは主君の意思ではな「太叔殿に簒奪の気持ちが無い事は主君はわかっておられて許して

元咺は続けて言った。

いのです」

貸したとしか言いようがないじゃありませんか」
ないこれに、大殿の殺しに手をみして彼に先駆を許したのですか、これは明らかに散犬殿の殺しに手をした罪で処断すべきでした。それをしないでどうして散犬殿の話を丸呑大殿が言っていることが嘘だと分かっていたはずですから当然主君を騙犬殿が言っていることが嘘だと分かっていたはずですから当然主君を騙犬殿が言っていることが嘘だとかかっておられたのなら、歌「主君が太叔殿に簒奪の気持ちが無いとわかっておられたのなら、歌

していますし太叔殿の葬儀も手厚く終え賞罰を明らかにしております。 君主に殺されても報復はできません。しかも衛侯はすでに歂犬殿を処断 「太叔殿が殺されたとは言っても彼は衛公の臣下です。 昔から臣下が うですね。衛侯鄭は天子の臣だから勝手に決めることはできないから、

元明はそれにも直ちに答えた

何ら罪を問われるすじあいはありません」

暴君を討ち民を安んじたものであります。まして太叔殿は兄弟であり、 衛侯は侯爵に過ぎず上は天子に、下は方伯(覇者晋文公)に服しており、 国を守った功労ある人で、関龍逢、比干の場合とは比べ物になりません。 等、<br />
紂の臣下でしたが忠良の臣が不正に殺されたのを目撃し義兵を挙げ の紂王は比干を殺したので武王が討伐しました。湯王も武王もそれぞれ

が何処から出てくるのでしょう」 桀、紂のように天子ではありません。それを全く罪がないなどという話

士栄は言葉を失った。しかし一息入れて又切り口を変えて口を開いた。 「衛君が問題あったとしても、貴殿は衛君の臣下である以上主君に忠

殿にご挨拶もせず復国のお祝いも申し上げないのはどういう考えなので 節であるべきなのに、どうして主君が帰国したらすぐ逃出したのですか。

しょうか」

めであります」 えも許さないものを、どうして咺をお許しくださいましょうか。逃げた のは命が惜しかったからではなく、太叔殿の無実をはらそうと思ったた 「太叔殿を補佐して国を守る事が君命でありました。主君が太叔殿さ

晋の文公は静かに双方の論争を聞いていて、王子虎に言った。 「士栄と元咺のやり取りを聞いていると、いずれも元咺に理があるよ

> 先ず衛臣の刑を決めましょう」 衛侯の随行者は全員斬首を命じたが、王子虎が次のように仲裁裁定案

二人の調停には非常に気を使っていたようですが、衛侯のように忠臣の を出した。 「私は、寧兪は衛の賢臣だと聞いています。彼は衛公兄弟である君臣

あります。鍼庄子はことの善悪を知って発言を控えましたので減刑すべ 裁判官の代行でありながらは論旨が明確でないので処罰を受けるべきで を聞かなかったために起きた事件で、彼には責任を問えません。士栄は 意見を聞かないのでは何ともなりません。今回の事件は衛侯が彼の進言

きか考えます。君侯のご決済をお願いいたします」 文公はその意見に従い、士栄を斬首、鍼庄子は足切りの刑、寧兪は無

する原告被告の審理結果をつぶさに報告した。 衛侯は檻に入れられ、文公、子虎が襄王のもと連行し、 衛国君臣に対

罪とした。

承服致しません。<br />
願わくは司寇にお命じあって刑を執行し天罰をお示し 「冤罪の状況からして、衛侯を死刑にしなければ天理も許さず人心も

下さいますようお願い申し上げます」

訟を起こしてしまったら上下関係が失われてしまいます。しかも訴訟の ず、訴訟は庶民の事案を扱いものと聞いています。もし臣下が主君と訴 『周官』(周 礼の一つ) では、君臣間、父子間の問題は訴訟事件にはせ 「叔父殿(姫姓の諸侯)の審理結果は明確ですが、法的には難しいです。

結果、臣下のために主君を死刑にしたらひどい本末転倒になってしまい

いよう考えるのです」
唆することになるのを心配するのです。朕は衛侯に対し恣意的にならな寒す。朕は衛侯を罰する事を恐れるのではなく、それによって反逆を教

文公は恐れ入り謝罪して、

く送って天子のご裁決をお待ち致します」「重耳、そこまでは考えが及びませんでした。衛侯は誅殺せずに京師

指示した。
て元咺を衛に帰国させ、現在の衛公鄭に代えて別な明君を立てるように
と言って、衛侯を公館へ連れて帰り兵士に元の通り看守させた。そし

元咺は衛に帰り群臣と話し合い、

「成公はすでに死刑が決まったので王命により賢君を選出いたしま

は適、字は瑕といい人柄も仁厚の人である。

と偽って公表した。群臣は皆異口同音に叔武の同腹弟を推挙した。名

治魔等の文武の大夫が新君を助け、衛国はあらかた固まりかけた。\*\*\*\*と言って早速公子適を戴し、自らは宰相となり、司馬瞞、孫炎、周 歌、と言って早速公子適を戴し、自らは宰相となり、司馬瞞、孫炎、 周 歌、この人であれば、『兄から弟』への継位で周礼にかなっております」

衛国の問題は如何なりますか、次回のお楽しみ。

### 第四十三回 おんどく

## 燭 武 城を降りて密に秦に撤兵を説く」とさくぶ 耽毒を逆用し衛侯の復国を図りねいゆ ちんどく

懣を除こうと思った。 「関東王は、諸侯の拝謁を受け洛陽への帰途についた。諸侯たちが河陽 で王を送ってきたところで、文公は先蔑に、衛侯を京師まで護送する まで王を送ってきたところで、文公は先蔑に、衛侯を京師まで護送する はいこの時衛侯は少し体調を崩していたので文公は医官の衍を はいこの時衛侯は少し体調を崩していたので文公は医官の衍を はいこの時衛侯は少し体調を崩していたの。諸侯たちが河陽

「十分に注意してやれ。失敗したら許さん」

に帰るよう指示した。と厳命し、先蔑には、さっさとやって終わり次第、衍と一緒に報告し

襄王が出発した後も文公は諸侯を残し、

に怠慢ということになります。皆さんと一緒に許に問責致したいと思いに、類陽は近くであるにもかかわらず来ない許を放って置くことは非常再度お見えになり、皆さんにはご多忙の中をお集まりいただきましたの楚について中原諸国とは友好な往来が有りません。天子が践土についでだいていて中原諸国とは友好な往来が有りません。天子が践土についで

ますが」

「君侯の命に従いましょう」

と提案すると、全員声を揃えて答えた。

けは晋を恐れて付いては来たが、元々楚王と姻戚関係にあったし、またはそれぞれの軍を率いて一斉に穎陽に向けて進発した。しかし鄭文公だ晋侯を盟主として斉、宋、魯、蔡、陳、秦、莒、邾の八ヶ国の諸侯

晋文公の曹君、衛君に対する処分はやり過ぎだという密かに不満も持っ 「十分な賄賂があればわたしが晋侯を説得して参ります」

侯獳は諸侯が許にいると聞いたので直接穎陽へ行った。 晋侯に謁見を と申し出たので曹公は彼を派遣する事にした。

求めたが、ちょうど文公は過労のために風邪にかかっていた。夢の中で

衛君を許して復国させると言いながら未だに解放していない。 両国をこ ていた。文公が逃亡中に自分だって礼を欠いている。晋侯は口では曹君、

んなに恨んでいるとしたら鄭のことだって忘れているはずがない。むし

上卿の叔詹は鄭伯が晋を裏切ろうかと逡巡しているのを見て、

ろ楚国と連絡を取って将来の逃げ道を残しておいた方がいいと考えた。 「晋は幸いな事に鄭を受け入れてくれているのですから二心をお持 うど太トの郭偃にその夢の吉兆を占わせているというところへ侯獳が 衣冠束帯の鬼神が出てきて飯をくれというからあっちへ行けと叱って追 い返したら、その後病状が悪化して起きられなくなってしまった。ちょ

ちにならないほうがいいです。でないと罪を追求され許してもらえなく 来合わせたのである。 侯獳は一車分の金帛を持って郭偃の屋敷へ行き、事情を話して鬼神の

さをばら撒き、祈祷をするというのを口実に晋文公に挨拶をして先に帰 と諌言したが鄭伯は聞かず、自国内に疫病がはやっているといううわ に・・・と具体的に方法を提案した。郭偃は請託の賄賂を受取り受諾し ことを口実に曹公を許してもらえるように頼み込み、これこれこのよう

た。(金帛… 黄金と絹織物 共に貴重な物品で賄賂や贈物に使われる)

陰極れば陽となり、 蟄 虫動き出す。 天下に大赦行えば、鉦鼓堂々たり。

蟄虫・・・冬ごもりの虫

問罪にやって来ます。わが主君は貴国の国威の方を尊重し晋を離れてま 「晋侯は、許国が貴国と昵懇である事に難癖をつけて、諸侯を率いて 公に献上した。

いりました と楚王に忠誠を示して言った。ところが、許が諸侯の兵が攻めて来た

国してしまった。そして密かに楚に使者を出し、

なりますよ

と楚に救援を求めたが、楚王は

「我が軍は晋に敗れたばかりで、今は晋と戦うつもりはない。晋が戦

いに飽きた頃講和を結ぶ事にしている」 楚成王はそう言ってついに許を救援しなかった。

諸侯の兵は水滴も漏らさないほど厳重に穎陽を包囲した。

この頃曹の共公はまだ五鹿城に拘禁されていた。晋侯の赦免の連絡が

こないので能弁の者を遣わして晋侯を説得させようと考えた。小臣の

「わしは祀りを怠った事はない。 鬼神はどんな罪でわしに赦しを求め

って殿に赦しを求めているのでしょう」

「夢とこの卦は符合しております。おそらく祀られていない鬼神があ

「これはどういう意味だ」

ているんだろう」

は会盟で邢、衛の異姓の二国を再興してやりましたが、殿は会盟を行っ 曹叔振鐸は周文王の子で、晋の初代唐叔は周武王の子です。昔、斉桓公 「臣の愚見では、これは曹公の事ではないかと考えます。曹国の初代 8 日に壁玉を含む

分の罪は死に当たると謝罪を表している(北京金盾出版社校注

古くは死者に壁を含ませる習俗があた。ここでは壁をふくみ自

せ、その霊を安心させる寛大な処置を取られましたら、鉦鼓を楽しめる 祀られなくなったといって、夢に現れたのでしょう。もし曹伯を復位さ はそのままになっています。同じ罪ですのに処置が異なっており、振鐸は 国を認めているのです。 践土で衛侯の復位はお認めになったけれど曹公 て曹、衛の同姓の二国を滅ぼしてしまいました。しかもすでに二国の復

ようになり病気など何の心配もございません」

の兵馬を率いて穎陽に駆けつけ、文公に会って復国の恩を謝し各国諸侯 に、檻の中の猿が再び森に帰ったように、感激し帰国するとすぐ、曹国 宋に割譲した土地も返してやった。曹伯は籠の鳥が大空に翔け上るよう ったようであった。即日、五鹿へ使者を遣り曹伯を曹の国君に復帰させ、 郭偃のこの話を聞いて文公は突然目の前が開け、病気も半ば飛んで行

襄王は、

「牢獄ではひどすぎるし公館では軽すぎる」

たので各国軍とともに包囲を解いて撤兵した。 し、大量の金帛を提供して各国軍隊をねぎらった。文公は目的を達成し 楚の救援がないとわかり両手を背で縛り口に璧玉を含み。、晋軍に投降 と協力して許国の包囲に就いた。文公の病気も次第に回復した。許僖公は 秦穆公は別れ際に文公と約束を交わした。

ときは秦も必ず援助し、互いに座視する事無く協力し合いおう」 「他日、秦が出兵する場合は晋は必ず秦を援け、晋が出兵の必要ある

帰国の途中で文公は鄭伯が又楚に寝返った事を聞き、怒りを爆発させ 二君はこの約束を確認してそれぞれ帰路についた

すぐ鄭を討ちに行こうとしたが

られたら如何でしょうか」 皆帰ってしまいましたから今回はお帰りになり、一年休息して後図を計 しゅうございます。しかも兵たちも長い戦役で疲れていますし、諸侯も 「殿はお体が平癒されたばかりですから無理をなさらない方がよろ

い出た。太宰の周公閲は衛侯を公館に監禁して反省させるよう申請した。 は叩頭して襄王に晋文公の考えを伝え衛侯を司寇の処置に任せるよう願 話変わって、周襄王は京師に帰り群臣のお祝いの謁見をおえた。 先蔑話変わって、周襄王は京師に帰り群臣のお祝いの謁見をおえた。 先表の と趙衰がなだめたので取止めて帰国した。

先蔑が押送して来て見張っている事もあり、彼らの考えを全く振り払**う** まぱる来は衛侯を助けてやりたかったが、晋文公が非常に憎んでいるし、王は本来は衛侯を助けてやりたかったが、晋文公が非常に憎んでいるし、 と言って、民間の空き部屋を拘留部屋に改造してそこへ収監した。襄

という事もできず別室に幽閉することにしたのである。これは表面的に

先蔑は医者の衍に何度も凶行を催促したが、寧兪が厳重に守っているた なく、口に入れるものは全て自分で毒見をしてから衛侯の前に出した。 は監禁ではあるが実は大変寛容な計らいであった。 寧兪はぴったりと衛君に付き随い寝起きも一緒で一歩も離れる事は

め手の下しようがない。衍はしかたなく実情を寧兪に話した。

やらなければわたしは必ず罰せられます。わたしが死罪を免れる方法を てついて参ったのは実は酖毒を使うよう命じられているのです。これを は罪ある者は必ず誅殺し、恨みには必ず報復なさる方です。衍がこうし 「晋君が強行に問罪しようとしている事はご存知の通りです。

115

教えていただけないでしょうか」

寧兪は衍の耳元でそっと言った。

も考えましょう。あなたのご主君はお年ですからむしろ鬼神を信じます。 「あなたが腹を割って言ってくれたのですから、わたしもあなたの事

あなたには十分な謝礼をさせていただきます」 って、神霊の話をもちだせばご主君はあなたを罪には問わないでしょう。 最近では占いの卦に従って曹君を許したと聞いています。薄い酖毒を使

かに宝玉を一箱届けた。

衍は先蔑に

寧兪は衛侯の命令だと言って衔に薬酒治療をするように言いつけ密

衍は承知して帰って行った。

「衛侯の死ぬときが来ましたよ」

薬を混ぜ合わせ色をごまかしたものである。

寧兪が毒見をしようとした と言って、酖毒を調合して甕に入れ衛侯に届けた。毒は薄くして他の

を吐き人事不省になり、薬の甕は地に落ち酖毒はまき散らかった。寧兪 ところで、衍が大きく目をむいて、突然大声を出して倒れて口から鮮血 が、衍は許さないふりをして衛侯に酖酒を注ぎ、衛侯が二口三口飲んだ

て気が付いたのでどうしたのかと聞くと、衍はそのときの情況を、 はわざと驚きいぶかって左右の者に太医を助け起こさせた。しばらくし 「酒を注ごうとすると、突然、身の丈一丈余りもあり頭が十斗枡ほど

ンマーのような武器)で酒甕を叩き落したので、わたしは肝を潰して気を て、『唐叔様の命を奉じて衛侯を救いに来た』といいながら、錘(大型ハ の神さまがいかめしい装束で天上から降臨されいきなり室内に入って来

失ったのです」

ら大変な事になっていた。貴様を生かしておく事はできん」 と説明し、衛侯の言う話と同じだった。寧兪は怒ったふりをして、 「貴様、我が殿を毒殺しようとしていたのだな。神の助けがなかった

先蔑がそのことを聞いて車を飛ばして見に来て、寧兪に言った。 と言い腕を振上げ衍を叩きのめそうとするのを側の者が止めに入っ

「ご主君は神のご加護がありますから今後は幸福が続くでしょう。帰

国して我が主君にこの状況を報告しておきます」

良くなった。先蔑と医衍は晋国へ戻り文公に復命した。文公はそれを信 衛侯が飲んだ毒は薄くて少量だったので毒害は軽微で病気もすぐに

衛侯毒殺の名目どこにあろう 医祈やむなく毒壜を割る 文公の烈火の怒りも 寧兪の計には如何するなし

じて医衍を許した。

使ったが死なずにしかも晋侯の問罪からも逃れる事になったことを耳に して、臧孫辰にたずねた。 ところで魯僖公は元々衛とは代々親しくしていたので、医衎が酖毒を

「できます」 「衛侯は君位に復位できるだろうか」

「どうしてそう言えるのだ」

めにします。しかし晋侯が刑を用いず密かに毒薬を使い、しかも医衍を は鞭を使います。そして死体を原野に捨てたり或いは街に晒して見せし 「およそ刑の執行手段は重刑は斧鉞を使い、次は刀鋸を、一番軽いの

許したのは明らかに衛侯殺しが評判になるのを避けるためです。衛侯を

ここで先蔑が進言した。

誰か諸侯が赦免を要求すれば晋侯は必ずそれに従います。もし殿が晋侯 殺せなかったのですからいつまでも周に置いておく事はないでしょう。

でしょうし、諸侯もわが国の高義を讃える事でしょう」 に要求して衛侯が再び国政を握る事になれば、益々わが国と親しくなる 僖公は喜び、臧孫辰を使者に立て、先ず襄王に白璧十対を献納して衛

の恨みもない」 「これは晋侯の考え次第だ。晋侯に異論がなければ朕には衛君には何 侯の赦免を願い出た。

ければ、参ることはできません」 臧孫辰がそう言うと襄王は十対の白壁を受取った。これはそれを許す 「晋侯にとりなしに参ろうと思っているのですが、大王のお許しがな

文公に会ってここでも白璧十対を献上して言った。 という明らかな意思表示である。そこで臧孫辰はすぐに晋国へ向かい、 「我が主君と衛侯とは兄弟の契りを結んでいます。衛侯が君侯の逆鱗

縮ですが、これをもって衛君をお許しいただきたく参上いたしました。 をお許しになられたという事をお聞きしましたので、まことに粗品で恐 に触れたことを非常に心配して心が休まる時がありません。すでに曹伯

とはない」

寧兪は腹心のものに、

「衛君は京師にいて、天子の罪人だからわしの勝手にはできん」

何卒よろしくお願い申し上げます」

になるでしょう」 天子に代わって諸侯に、衛侯の罪を許すとお命じになれば、王もお許し 一君侯は天子より専司征戦討伐権を授与されておられるのですから

「魯は衛と親しいので、魯の言い分を聞いてやって衛を許してやれば

行かせて二人で周王の許可を得させる事にした。 以上のような次第で衛 「国が晋に臣従する事になり、大きなメリットじゃないですか」 文公は魯の申し出を認め、すぐに先蔑を臧孫辰と一緒にもう一度周へ

成公は拘留を解かれ帰国した。 この時、元咺はすでに公子瑕を君主に奉じていて、 城は修築し、

このでは、できん、できん。元咺が兵を出して入城を拒む事を心配し寧兪と密かに相談した。 「周 歂 と冶廑は子瑕を擁立した功があるので卿の爵位を要求したが

認められず、内心不満を抱いていると聞いています。あの二人と手を結 周、冶の二人も孔父をよく知っていますので、もしこの孔達に殿の命令 う者と親交があります。彼は胸に経綸(国家経営の方策)を秘めた男で、 んで内応させる事は可能でしょう。臣は宋の忠臣孔父の後裔の孔達とい

を伝え、二人に卿の位を餌にして元咺を殺させる事ができれば、他の者 は恐れるには足りません」 「そなた内密によろしく頼む。うまくいけば卿の位をけちけちするこ

「衛侯は許されたけれど帰国するのが面目なく楚へ避難した」

というデマを流させた。 孔達の信頼を得るため彼に衛侯の直筆の手紙を渡し密かにこれこれ

といい含めて周漱、冶塵両人と結ばせた。 話を聞き、周歂、冶廑は相談し合った。

「元咺は毎夜必ず自ら城内を巡回しているから、伏兵を準備しておい

て急襲して彼を刺し殺す。そのまま宮中に押入って子瑕もやってしまい、

視して東門に差掛かるとの二人が一緒に迎えに出た。 宮室を清掃して衛侯を迎えたら、我われ二人の上に出る功はあるまい」 両家それぞれの家の者を集め伏兵の準備を終えた。黄昏時、元咺が巡

「お二人どうしてここに」

と元咺が驚いて聞くと、周歇が、

が、ご存知ないのですか」 というので元咺はまたまた驚いた。 「城外の噂では前君が国境を過ぎて間もなくお着きになるようです

「その情報はどこからのものですか」

たと聞いていますが、大夫はこれにはどう対応なさるおつもりですか」 「寧大夫が誰か使者を入城させて城内の諸臣に迎え出るように言っ

っている。前君が復位なさる道理はもうない」 「それはデマだ、信用しちゃだめだ。しかも新君主の体制はでき上が

「大夫は正卿ですから当然千里を洞察されていると思います。このよ

きたので随従のものは驚いて逃げた。 エイとばかりに一刀の下に元咺の首を斬り落とした。伏兵が一斉に出て うな大事を未だご存じないとは問題ですぞ」 冶塵はいきなり元咺の両手を捕え、元咺は抵抗したが周歂が抜刀して

周歂、冶廑は家兵を引連れ、道々大声で呼ばわった。

「衛侯が斉、魯軍を率いて城外に見えている。皆さん落ち着いて妄動

信半疑でどういう事なのかよくわからないが、皆袖に手をいれ静かに情 しないように」 人々はそれぞれ家の門戸を閉めた。これはお上の問題であり、みな半

報を待っていた。

衛侯直筆の文章を朝堂に掲げ、百官を集め衛成公を迎え入れ、ここに衛 公子適を捜したがもう見当たらなかった。宮中は騒乱の中に一夜が明け 室を出ところ、周歂にばったり出遭い、その場でばっさりとやられた。 てやっと適が井戸に飛び込んで死んでいるのが分かった。周歂、冶廑は んでいたが外で兵の声が騒がしいので、子儀は抜刀して様子を探りに宮 周 歌、治塵は宮中に乱入した。公子適等とその弟子儀は宮中で酒を飲います。

侯は再び君位に就くことになった。 後の人は寧武子(寧愈)が曲折を経て成公を復位させた彼の智術を称え

け合うことになったのは、衛成公が薄情ではあっても武子(寧兪の諡)に て来ても抵抗せずに臣下に下るように説得できておれば、正に両全であ た。しかしこの時、公子瑕(新君主)に国を譲るよう諭して、衛君が帰っ ったといえよう。位を取り戻すために周散、冶廑に弑逆を命じ骨肉傷付

寧兪結局骨肉の争い諌め得ず 残念なりその賢名は語り継がれず 先駆の一箭は正に冤罪<br />
更に新君を追落す井戸の中 問題がなかったとはいえまい。詩は嘆ずる。

んだ。 車で先行し廟門に差掛かった時、突然目の玉がひっくり返り、大声で叫 の位に封じ祖廟に報告することにした。ところがこの日の五鼓、周歇が 成公は復位後、吉日を選び太廟を祀り、約束どおり周歂、冶廑を卿

国のため忠節を尽くしてきたのに、汝は卿の爵位に目が眩みわしを殺し 「周歂!このこそ泥の小悪人め、蛇蝎の如き奸賊野郎。我われ父子はだかっ

の弟である。次の詩にも「新君を追落し井戸の中とある 適は暇 新君主の誤りか 適は敬公 成公より即位が 150 年程後の人の子 ・養け暇 を徴発するとなると中原の平安という趣旨にもとります。食料飼料は揃

「諸侯はもう度々兵を出しています。 ここで又鄭討伐のために諸侯軍

お前を見てどうおっしゃるかな。かく言うわしは上大夫元咺なり」 得意満面のようだが、今お前を太叔殿と子瑕殿のところへ案内してやる。 たな。我が父子は冤罪の怨みをもって黄泉にいる。着飾って太廟に臨み

て車の中で死んだ。 周漱はそういい終わると九穴(目耳鼻口両便口)から血を吐いて硬直し

冶廑は後からやってきてこれを見聞きして驚き、慌てて卿の正装服を

脱ぎ捨て風邪を引いたと言って引返した。

衛侯は太廟へやって来て改めて寧兪と孔達を祀りに陪席させた。朝廷

だ。このような不義を働き、終に一日も栄華を楽しむ事もなく永く人から 冶廑も病死してしまった。 哀れな周、 冶の二人は卿の位に目がくらんで 妙な死に方を知って無理にとはいわず辞退を認めた。一月もしない内に に帰ってくると冶廑が卿の爵位を返上を申し出てきた。衛侯は周歂の奇

唾棄される事になってしまった。何とも愚かな話ではないか。

元咺、子瑕の死を、すでに死んでいる周歂、冶廑のせいにして晋侯に陳 兪は孔達に譲った。結局孔達が上卿になり寧兪は亜卿になった。孔達は

衛侯は寧兪を自分を守り続けた功により 上 卿にしようと思ったが、

周襄王十二年(紀元前七〇八年)、晋軍は一年余の休息をとったので、文

謝の使者を送った。晋侯も本件を不問に付した。

公はある日の朝廷で群臣に下問した。 ついた。諸侯を集めて鄭を討伐したいと思うが、諸君はどう考えるか」 「鄭の無礼に対し未だ報復が終わっていないのに、今また背いて楚に

先軫が進み出て答えた。

っていますし将士も準備を整えご命令をお待ちしていまので、国外に援

助を求める必要はございません」

ある」 「秦君とは、軍を動かす場合は必ずお互いに助け合おうという約束が

を奪い取ろうとするでしょう、やはり我国だけで攻めるのがいいと思い

ます」 「鄭は我が晋とは隣接しているが、秦とは遠く離れているので、秦に

ろうとした必争の地です。もし秦国と一緒に鄭を攻めれば秦はきっと鄭

「鄭は中原の喉元に当り、故斉桓公も天下に覇を称えようと何度も取

はメリットはないんじゃないか」

文公はそう言って先軫の考えを押えて、使者を秦に送り九月上旬に鄭

の国境に集合する約束をした。

先年晋に亡命して来て晋に仕え大夫になっている。文公が即位してから 文公は出発に際し公子蘭を連れて行くことにした。蘭は鄭伯捷の弟で

の鄭攻撃にも彼を案内役にしようとしたが、彼は、 は彼が非常にまじめで忠誠心も強いので近臣として大変可愛がり、今回

伐に同行できない事をどうかご寛恕願います」 『君子は他郷にいても父母の国を忘れない』と申します。殿の鄭討

と断った。文公は

「卿は人の道の根本をわきまえた人だ」

大将孟明視、副将杞子、逢孫、揚孫等と戦車二百乗を率いて到着した。曹軍は先に鄭の国境に入っていた。秦穆公も引き続いて謀臣百里奚、 と誉め、蘭を東鄙に留め、彼を将来鄭君にと考えるようになった。

両軍兵を合わせ郊関を破り、そのまま曲洧(河南省扶溝県西南)に逼り、

通いよい後伐をないらった。 あてんは荒いこと、 PEL D-17よいでいって、鄭城の東側の氾南。『にそれぞれ駐屯した。 遊撃隊が日夜巡視し樵さえも水も漏らさない包囲網を作って、 晋軍は鄭城の西側の 函 陵に、秦軍は水も漏らさない包囲網を作って、 晋軍は鄭城の西側の 函

大夫叔 詹が口を開いた。 鄭文公は慌てて手も足も出ないでいると、通さない厳戒能勢であった。 鄭文公は慌てて手も足も出ないでいると、

ば、晋軍だけであれば恐れるには足りません」りません。しかし秦に雄弁な者を派遣して撤兵を説得させる事ができれりません。しかし秦に雄弁な者を派遣して撤兵を説得させる事ができれ

「適任者はいるのか」

「佚之狐ならできましょう」

鄭伯はすぐ佚之狐を呼出して秦公説得を命じた。

りません」
「私にはこの重任を担う力は有りませんが、わたしに代わる者を推挙りません」

「それは誰だ」

猫背で腰は曲り、ひょろひょろ歩く様子に居並ぶ大臣たちは密かに笑い鄭伯はすぐに燭武を召して入朝させた。見るとひげも眉も真っ白で、をもって彼に秦へ行く事を頼んでいただきたくお願い申し上げます」す。馬回りの官で三代の君主に仕えて未だ昇進した事が有りません。礼す。馬回りの官で三代の君主に仕えて未だ昇進した事が有りません。礼す。

いとある。本訳では春秋左氏伝に従いに統一する。も氾と沢の混用が見られる。北京商務印書館「辞源 にも氾と沢は古書中に混用が多。氾南 第58 回では原文では「氾南の背盟 とあり、中国の各出版社の東周列国志で

弱されていた。

燭武は鄭伯に拝謁し用向きを訊ねた。

なたに国政に参加してもらいたいと思っている」
「佚之狐がそなたを人並みはずれた雄弁家だと推薦するのだ。ご苦労「佚之狐がそなたを人並みはずれた雄弁家だと推薦するのだ。ご苦労「殿、この老臣をお召しになり、如何なる御用でございましょうか」

「臣は学問も才能もありません。若い頃でも寸功さえ上げる事ができず、今は年老いて筋力もなく、物を言えばぜーぜーと喘息の発作があるず、今は年老いて筋力もなく、物を言えばぜーぜーと喘息の発作があるず、今は年老いて筋力もなく、物を言えばぜーゼーと喘息の発作があるが、今は年老いて筋力もなく、物を言えばぜーゼーと喘息の発作があるが、今には学問も才能もありません。若い頃でも寸功さえ上げる事ができ

るべきではないでしょう」いま、殿があなたを用いようとなさっておられる。それ以上お断りにないま、殿があなたを用いようとなさっておられる。それ以上お断りにないま、一時というものは運命にゆだねられなかなか巡り会えないものです。

めに一肌脱いでくれまいか」

えて穆公のもとへ連行した。 と佚之狐も傍から勧めると、燭武はついに承諾して退出した。 と佚之狐も傍から勧めると、燭武はついに承諾して退出した。 と佚之狐も傍から勧めると、燭武はついに承諾して退出した。 と佚之狐も傍から勧めると、燭武はついに承諾して退出した。

「そなたは誰だ」

「老臣は鄭の大夫燭武というものです」

「何を泣いていたのだ」

「間もなく鄭が滅びそうなので泣いていたのです」

も、晋の恵公は以前黄河西の五城を君侯に譲ると言っておきながら、入

というのだ」 「鄭が滅びる事と我が陣営の前で泣いていたのとは何の関係が有る

は惜しむ価値が有りませんが、秦国の方は大変惜しい事です」 「臣は鄭の事を泣くと共に秦のためにも泣いていたのです。 鄭の滅亡

「我国の何が惜しいというのだ、ちょっと言ってみろ、理屈が通らな

ければ、お前の首は無いと思え」

りながら遠まわしに利害を説きはじめた。 と穆公は怒り出してそう言うと、燭武は少しも恐れず、二本の指を折げる。 紅き朝日は夜もい出、東流の黄河も西に逆流す。 話始まれば石像皆目を開き 泥人形も頷き出す

燭武は話し始めた。

タするのでしょうか びて秦に益する事が何か有りましょうか。無益であるばかりか秦にとっ ては大損です。どうして軍をすり減らし費用をかけて人のためにバタバ 「秦、晋連合軍の攻撃で鄭が滅亡に瀕している事は事実です。鄭が滅

「益なく損ありと言うがどうしてそう言えるのか」

自ら国を弱めることになり、実に智者は採らない愚策であります。しか 強くなれば相対的に秦が弱くなります。人のために土地を取って却って 国は晋が東にはだかり、南は周を隔てていますから、周、晋を越えてや て晋と組むのですか。秦と晋は隣接していて力も拮抗しています。晋が っと鄭じゃないですか。鄭が滅びても土地は全て晋のものなのにどうし 「鄭は晋の東で、貴国は晋の西で東西に遠く離れ千里の彼方です。貴

> る君侯が、やすやすと晋の術中にはまるのを見たので、『無益であるだけ 晋が秦を使おうとする意図は測りがたいものがあります。賢智で知られ の石とすべきです。君侯がいくら恩を売っても晋は頼むに足りませんし、 て虞に向けました。虞公は知恵が足らず晋を助けて自滅しました。他山 なっておられることでしょう。虞君から借道して虢を滅ぼし、戈を返し うと考えるはずで、心配は貴国に及びます。虞、虢の事を当然お聞きに に少しでも報いた事があったでしょうか。晋侯も復国以来兵力増強を図 国すると掌を反すように約束を破ってしまった事は記憶に新しい事です。 でなく大損であります』と申し上げ、門前で泣いていたわけであります」 っています。今日東を開拓するために鄭を滅ぼした後他日必ず西を拓こ 君侯は晋の数代にわたり面倒を見ておられますが、晋のほうは君侯の恩 穆公はしばらく静かに聞きながら耳をそばだて頻繁に頷き、

と言ったが、百里奚は、 「大夫の言われる事、いちいちもっともである」

ってはなりません」 「燭武の話は我われ両国の離間を狙っています、彼の話をお信じにな

を断ち秦国に臣従致します。また、東方に事有るときに、鄭国を通る場 と穆公を引き止めた。燭武はすぐに、 「もし包囲を解いていただけましたら同盟の誓いを立て楚との関係

用いただけます」 合、或いは食料等の供給が必要な場合、国外にある役所のつもりでご利

と念を押した。

穆公は大喜びで直ちに燭武と血をすすり誓いを立て、杞子、逢孫、揚孫
ぼくらう

ずそっと撤兵して帰国した(氾南の背盟)。晋の斥候がすぐに晋陣営に報 の三名の大将及び二千の士卒を鄭城の援護のために残し、晋に連絡もせ

告すると文公は激怒した。傍の狐偃は文公に秦軍追撃を願い出た。

文公は偃の申し出にどう答えたであろうか、それは次回のお楽しみ。

## 叔 倉 煮釜に拠って晋侯に抗し第四十四回

秦穆公は密かに鄭と盟約を結び晋を裏切って撤兵したので晋侯は烈 弦高 偽の君命で秦軍をねぎらい鄭を救う

「秦は未だ遠くへは行かないでしょう、偏師(主力でない一軍)をお借

火のごとく怒った。

はありません。一戦で勝てます。秦に勝ったら鄭は胆を冷やして攻撃し りして追撃させて下さい。秦軍は帰る気になっていますからきっと闘志

なくても投降して来るでしょう」

事ができたのだ。もし秦君がわしを援けてくれなかったらわしの今はな 122 と狐偃が進言したが、文公は首を振って、 「それはできない。以前わしは秦国のお陰でやっと社稷を手に入れる

城は落とせる」 君の当時のご恩に報いた。いわんや秦は親戚だ。秦の援助が無くても鄭 い。楚の子玉がわしに無礼であったが、それでもわしは三舎退却して楚

と言って軍の半分を函陵に向け今までどおり包囲攻撃を続けた。 鄭伯は燭武に下問した。

「そなたの力で秦軍を撤退させることはできたが晋軍は引揚げよう

すから、使者を出して公子蘭殿を迎え、講和を申し出れば晋はきっと了 としない、どうしたらいいか」 「聞くところによりますと、公子蘭殿は晋侯の寵を受けているようで

承すると思います」

肱の臣でとても手離すことはできん」

そう燭武が進言すると鄭伯は、

と燭武を派遣しようとしたが、石申父が、 「その使者は老大夫以外には務まりませんな」

と言い、直ちに貴重な宝物を携え晋営へ赴き晋侯に面会を求めた。 「燭武殿はお疲れでしょうから臣に代りに行かせて下さい」

会を許され丁重に挨拶のあと宝物を献上し鄭伯の趣旨を伝えた。 「わが主君は、荊蛮(楚の蔑称)は隣国ですから公然と関係を絶つ勇気

ございません。君侯の逆鱗に触れ、わが主君もその罪を認め、軽少では り、再び我々に二心無き事を監督するために蘭を帰国させていただきた 君侯のお側でお仕え申しておりますが、蘭の母国への気持ちに憐憫を賜 ありますが伝国秘蔵の品を献上に上がりました。わが主君の弟公子蘭が がありませんでした。決して本心から君侯の下を離れようとしたのでは

たければ二つの要求がある」 国が救援に来るまでの引き延ばし作戦ではあるまいな。 我軍を撤退させ を倒せないと思ったからだろう。ここで和解を求めてきたのはまさか楚

「そなたたちが我々と秦の関係を裂いたのは、明らかに晋単独では鄭

く存じます」

「どうかおっしゃって下さい」

渡す事。これを認めれば誠意あるものとみなす」 「まず、第一は公子蘭を世子として迎える事、もう一つは叔 詹を引

石申父はこの要求を持ち帰り鄭伯に復命した。 「わしには未だ子がないし、昔蘭に夢のお告げがあったと聞くから

世子に立てることは問題ないし国のためにもなる。ただ叔詹はわしの股

と鄭伯が言うと、叔詹は、

事になります。是非行かせて下さい」 せん。すなわち臣は命を惜しむ不忠の名を負い、殿には心配と恥を残す 晋国が臣を要求しているのですから、臣が行かなければ包囲は解かれま

『『主人の心配は臣下の恥、主人の恥は臣下の死である』と申します。

と強く要請した。

面

「行けば必ず殺される。それはどうしても我慢できない」 「殿は詹一人のために民衆が大難に遭い国が滅ぶのを見過ごされる

お積もりですか。一人の臣を捨てて民を救い国を守るのに何を心配なさ

るのです」 せきしんほ こうせんた 響伯は涙ながらに叔 詹を晋に遣ることにした。

石申父は侯宣多と一緒に叔詹を晋軍へ送って行き、 「我が主君は君侯の意を 畏 み二つの条件を承知いたしました。 ここ 123

す を我が国の世子と致しますがこれは貴国のご恩徳と認識いたしておりま に君侯のお裁きを受けるために叔 詹を連れてまいりました。また公子蘭

びに遣り、石申父、侯宣多を陣中で待たせた。 せきしんほこうせんたと
と
皆
侯
に
報
告
し
た
。
背
侯
は
大
変
喜
び
、
す
ぐ
に
狐
偃
に
公
子
蘭
を
東
鄙
へ
呼

一方、晋侯は叔詹を見て、大声で

「そなたは鄭国を掌握していながら主君に来客に対する礼を指導し

一つ目の罪である。 なかった事が第一の罪であり、盟約を結びながらまた二心を抱いた事が

ゆでの刑具として使われた)を用意させた。叔詹はそれを見ても顔色を変え と言って、左右の者に早速彼を釜ゆでにする大 鼎(古代足の無い鼎が釜

## ず、拱手して文公に言った。

「言うべきことを言わせていただいて釜に入りたく存じます」

「何が言いたいのだ」

らにはもう罪を問われる事はないが、今度裏切るともう許されな4」と説 度も言いました。温の会盟(河陽の会盟)では『晋国に臣従する事にしたか は賢明で側近も多才だから復国したらきっと覇業を成すでしょう』と何 「君侯がわが国へおいでになられた時、わたくしは主君に『晋の公子

んで殺されに参ったのであります。事態を正しく見通す事ができるこれ きことを承知していてここへ来る事に強く反対しました。わたくしはむ 政の臣に罪を押し付けようとされますが、我が主君はわたくしには罪な 得しましたが、残念ながら聞き入れてもらえませんでした。今、君侯は執 しろ『主君の恥は臣下の死である』と申しまして国を救うために自ら進

揃った臣下というものは晋の法律では釜ゆでの刑になるようですな」 るこれ勇、国のために身を投げ打つこれ仁であります。仁智忠勇が全て 智、国のために腐心するこれ忠、難局に臨みこれを真正面から受け止め

そう言って大鼎の取っ手の傍に立って、

と大声で叫び今にも釜に飛び込もうとした。文公はその姿を見てぞっ 「これより主君に仕えるものこの叔 詹をもって戒めにすべし」

として慌てて引きとめ赦免を命じた。

と言って手厚く礼遇した。 「わしは些かあなたを試してみただけです。 あなたは真の烈士です」

話し、叔 詹、石申父、侯宣多等には世子の礼をもって蘭に引き会わせ、」 しゅくせん せきしんほこうせん たいしゅいし 一日足らずで公子蘭が東鄙から呼び出されて来た。 文公は彼にわけを 一緒に城に帰した。

> と晋の間に隙間が生じる事になった。 晋秦婿舅の親しき共闘も 燭武の舌先三寸仲を割る

鄭伯が彼を世子に立てるのを確認して晋軍は撤退した。この時から秦

蝿頭の如き東道の小利を貪り 果なき 戦 を誰か知る

うは大変なもので、 それから間もなく、狐毛、狐偃も相次いで亡くなった。文公の悲しみよ 大量の血を吐いて死んだ。文公はその子魏顆を取立て爵位を継がせた。 この年魏犨は酒に酔って車から落ち、腕を折って胸の古傷がぶり返し

い。突然置いて行かれわしは右腕を失ってしまった。ああ何ということ 「わしが困難を脱して今日があるのは舅殿の力によるところが大き

だ と言って泣きあかした。それを見て胥臣が提言した。

会いになっていただけましょうか」 が、今一人、推挙申し上げたき大臣宰相になれる人物がございます。お 「殿は狐毛、狐偃という二人の逸材を亡くされ大変残念でございます

「それはどういう人物だ」

てであればなおさらの事でしょう。『人を敬う者は必ず徳あり』と申しま さえ客人に対する様に互いに敬い礼を尽していましたから、他人に対し 妻が帰ってから仕事に戻りましたが非常に勤勉な様子でした。夫婦間で から食事を執り、妻は傍でかしづいていました。ゆっくり食事をした後、 は両手で食事を捧げ、夫もきちんと両手で受取り、食事前の儀式をして 田で耕作していていました。その妻が彼に昼食を持って来ましたが、妻 「以前ご命令で使者に出て冀野で泊まったときの事ですが、ある男が

ましたら子犯に劣らないかと存じます」すので、名前を聞きますと、郤芮の子郤缺でした。もし彼を取立てられすので、名前を聞きますと、郤芮の子郤缺でした。もし彼を取立てられ

「その者の父親は大罪人ではないか、息子は大丈夫か」

父親が罪を犯したからといってその才能を野に捨てておくのは如何でし聖王禹の父親です。賢人か不肖の者かは親子関係とは無関係です。彼の「尭、舜に丹朱、 商 均 のような不肖の息子があり、鯀のような男が

「わかった、その者を呼び出してくれないか」

よう

でありましょう」であります。使者を出してお召しになるのが賢者を迎える方法連れ帰っております。使者を出してお召しになるのが賢者を迎える方法「他国へ逃げて敵国に仕官するといけないと思い、すでに臣の屋敷に

サッサラーヘのは胥臣の言葉に従い、内侍に正装させて郤缺を迎えにやったが、 文公は胥臣の言葉に従い、内侍に正装させて郤缺を迎えにやったが、

郤缺は丁寧に断った。

はとてもできません」 しいただいた上に、そのご好意に甘えて朝臣の皆様を傷付けるような事「臣は冀野の農夫に過ぎません。ご主君は父の罪にもかかわらずお許

軍の元帥に昇格させし郤缺にその補佐を命じた。 うに朗々と響く素晴らしい人材を一見して文公は大変喜びで、胥臣を下入朝した。郤缺は身の丈九尺(約 2m)威風堂々としており声も大鐘のよ人朝した。郤缺は身の丈九尺(約 2m)威風堂々としており声も大鐘のよりは再三君命だから参上してくださいと勧めるので郤缺も正装で

将ににした。従来三軍であったが二軍を加え全部で五軍にし周天子につを新上軍の将、箕鄭を副将にし、胥臣の子胥嬰を新下軍の将、先都を副文公は晋軍の二行を二軍に改め『新上』。『新下』の二軍とした。趙衰文公は晋軍の二行を二軍に改め『新上』。『新下』の二軍とした。趙衰文

ぐ軍制になり(天子の軍は六軍 … 6回注記エラー! ブックマークが定義されて

位し穆公になり昔の夢告げが現実になった。 周襄王二十四年(紀元前六二八年)、鄭文公捷が亡くなった。弟の蘭が即晋侯も昔の恩を思い起こし了承し、大夫陽処父を楚に表敬訪問に遣った。を聞き及んで非常に脅威に感じ 闘 章を使者として晋侯に講和を求めた。

いません。)、傑人を起用する事により軍政も基礎ができた。 楚成王はこれ

う彼らに手配を依頼し、まもなく一世の覇主晋文公は亡くなった。在位は辰嬴の子である。幼い黒臀は周天子に仕えさせ王室と親しくさせるよ素に、公子楽は陳に、それぞれ頼んで仕官させた。雍は杜祁の子で、楽秦に、公子楽は陳に、それぞれ頼んで仕官させた。雍は杜祁の子で、楽よう命じた。また、公子たちが国を乱すことにならないように、公子雍はよう命じた。また、公子たちが国を乱すことにならないように、公子雍は

枕辺に呼ばれ、世子驩を国主にし皆で補佐をして、覇業を譲る事がない

この年の冬、晋文公が病気に罹り、趙衰、先軫、

狐射姑、陽処父等がこやこ といいま

雪辱報恩は明快に 信賞必罰は偏らず河陽に天子迎え忠心示し 楚には城 濮戦で信義を示す艱難疾駆十九年 神龍古穴に戻りて大権を得る

その才天授のものなれど、賢臣の扶けの結果なり。

八年、享年六十八歳であった。

野に出た詞はつぎの通りであった。 世子の驩は、文公の葬儀を取り仕切り即位した。これが晋襄公である。世子の驩は、文公の葬儀を取り仕切り即位した。これが晋襄公である。世子の驩は、文公の葬儀を取り仕切り即位した。これが晋襄公である。世子の離は、文公の葬儀を取り仕切り即位した。これが晋襄公である。

鼠が西より出で来て我が垣根を越える。

するという事で、これは先君の魂が我われに知らせてくれたものであり 「数日内に西のほうから戦争の報せがあり我が軍がこれを撃退大勝

も軽くなり、行軍を再開した。先軫は、 と郭偃が解釈し群臣が柩に拝礼すると柩の中の声はやっと止まり、柩

と言い、密かに秦に人を潜入させ情報を探らせた。 「西というのはきっと秦国を指すのであろう」

命により鄭国の北門を守備していたが、晋が公子蘭を帰国させ世子にし 話し変って、秦将杞子、逢孫、 揚孫の三名は晋軍帰国のあと、穆公のょうそん

晋に投降するとはどういうことだ、全く無駄働きじゃないか」 「我らがやつらのために晋軍を防いでやっているのに、あいつらまた たのを知って

と怒り、この件を穆公に報告した。

なかった。 公子蘭が即位してからは、杞子等をあまり礼遇しなくなった。彼らは

これが不満で集まって相談した。 「われらのこうした国外での守備は何時終わるか分からない。 密かに

軍を出して鄭を襲うようご主君に進言し、我らも余得を手に入れて早々 に帰ることにした方がいいぞ」

もろ手を挙げて喜んだ。 三人が相談していた時、晋文公が亡くなった知らせが入ったのでみな 「これはお天道さまが我々の成功をご援助下さるという事だ」

と大喜びで、腹心を帰国させ穆公に報告させた。

すからきっと救援には来られますまい。それに鄭君は即位したばかりで 我々が内応しますから容易に鄭を取る事ができます。しかも晋は喪中で 「鄭は我々に北門の管理を任せています。殿が鄭を取りに見えれば

穆公はこの密報を受取り早速蹇叔、百里奚と相談した。二人は声を揃ぼくら

防衛準備は未だできていませんから、この機を逸すべきではありません」

えて反対した

とすれば鹵獲品(戦利品)程度です。時間をかけて千里もの遠きに兵を出 せば人の耳目を蔽う事ができましょうか。鄭が我が謀略を知り対抗措置 「鄭は千里もの遠くに有り、その土地を取ることはできません。利益

を講じたら労多くして功なしで、途中で不測の事態が起こらないとも限

穆公も胸の内では腹が立ったが、文公とのよしみも配慮し多くは言わ すれば甚大な損となることに手を付けるのは智なき事です。この三点か とり、人の喪に乗じて攻入るのは仁にもとり、成功しても利少なく失敗 りません。護衛をしている者がこんな謀略を提案するというのは信にも

らも臣は賛成しかねます」 穆公はむっとして

というのだ。鄭は苦し紛れに晋についたのだ。この機会に鄭を葬ってこ は天下に知られている。ただ晋侯が楚を城濮に破ったので覇業を彼に譲 ったに過ぎない。晋侯がこの世を去った今、天下の誰が秦に文句を言う 「わしは三人の晋君を立て、二度晋の内乱を収めてやって、わが威名

っているが春秋左氏伝僖公32年では「秦の大夫杞子となっている。本書では左氏伝が ※ 史記秦本紀では、の 密報を行 た者は「鄭の人が自国を秦に売ろうとする者 とな

利にあらずというのかね れと晋の河東の土地との交換を持ち出せば晋は必ず承知する。どうして

そこで蹇叔は言い方を変えて、

ような連中のいい加減な情報に惑わされてはなりません」 者を出して、鄭を攻められるか否かを探らせたら如何でしょう。杞子の 「もし、本当に鄭を攻めるおつもりでしたら、先ず晋と鄭に弔問の使

と説得したが、穆公は、

なたは耄碌して使いものにならん」 しまう。用兵は迅速が肝要なのに、座して好機を逸しろというのか。そ 「弔問に行ってから兵を起こしていたのではほとんど一年かかって

と言って、杞子の使者に、

「二月上旬、軍を北門に行かせるから内外示し合わせるよう。ぬかる

穆公は百里奚の子孟明視を大将とし、西乞術および蹇叔の子白乙丙。

を副将に任命し精兵二千余、戦車三百輌を率い一行は東門を出た。 出陣の日、蹇叔と百里奚は息子達を送りながら

「ああ、いまおまえの出陣の姿を見るのが最後かもしれない、生還し

と言って泣いた。穆公はこれを聞いて大変怒り、人を遣って、

たお前達に逢う事はできまい」

と咎めた。蹇叔、百里奚は声を揃えて 「どうして泣いたりするんだ、わが軍の気勢が挫けるではないか」

泣いているのです」 一般の軍隊に対してどうして泣く事がありましょう。 わが子のことを

白乙丙は父親がこんなに悲しんでいるのを見て、鄭攻めに行くのを辞

退しようと思ったが、蹇叔は、

だから辞退はできない」 そう言って、密かに厳重に封をした一通の書き物を渡して、 「我々は秦の高禄を受けてきており、そなたが死ぬのは個人的な問題

「ここに書いているようにやってみなさい」

しかし、孟明視は自らの実力を恃み、必勝を疑わず全く心配をしていな 白乙丙はそれを受取り、内心不安に惑い、悲痛な面持ちで出発した。 と言い付けた。

ことを願い出た。 地位の奉還を申出たが許されなかったので、重病だと言って銍村へ帰る 大軍が出発した後、蹇叔は病気と言って参内しなくなり、また執権の

百里奚は蹇叔の屋敷へ見舞いに行って、

お教えいただくことはございませんか」 きりしないんです。ここに残るにしても息子の事が心配です。兄上何か 「わたくしには今回の事に就いて細かい見通しや対処の仕方がはっ

と訊ねた。

河岸に舟を用意させ、逃げ帰って来た秦兵を受入れて帰還させてやって 「秦軍は今回はきっと敗れる。賢弟、密かに子桑(公孫枝)に言って、

欲しい。きっと、きっとだよ」 「兄上のお言葉、直ちに実施いたします」

百里奚は承知して帰った。

穆公は蹇叔の田舎へ帰る決意が固いので、黄金二十斤(5kg)

、絹の反物百束を贈り、群臣と共に郊外の関所まで見送った。

百里奚は公孫枝の手を握って、蹇叔の言葉を伝えた。

行ったのです。将軍、絶対に内密に実施願います」 「兄上は他の人ではなく、忠勇憂国の士である子桑殿あなたに託して

「かしこまりました」

彼は了承し自分で出かけて行って船の準備を行った。

に見せてもらいに来た。手紙を開けてみると二行の字が書かれていた。 置きの妙計が有るものと思い、或る夜、陣営に落付くと白乙丙のテント さて孟明視は白乙丙が彼の父親の密書を持っているのを知り、取って 険しく慎重を期すべし。私は此処でお前の遺骨を拾う事になろう。 今回の戦いは、鄭は心配なきも、要注意は晋である。崤山の地勢は

これを見て孟明視は 「ちぇっ、縁起でもねえ」

三元帥は十二月丙戌日に出陣して、翌年正月に周の北門を通過した。 と、さっさと出て行った。白乙もそんな事になるとは思わなかった。

「天子がおられる。軍事中だから謁見はできないが、かならず尊王の

孟明視はそう言って、将士に兜を脱ぎ下車して歩き天子に敬意を表わ

気持ちを表すよう」

ずに跳び乗り先を急いだ。孟明視が皆が褒蛮子のようであれば何事かな 前哨 隊の 准 将 褒蛮子は蛮勇で都門を通過するとすぐ戦車を止めずよう伝令した。 るときの殿は勇者が勤めるが、本来行軍において殿は卑怯者に見られる。 に飛び乗れないやつは 殿 につけ」と口々に言い出した。破れて撤退す らざらんと褒めたので皆褒蛮子に負けるかと真似をして将士たちは「車

> ピードで走り去りあっという間に見えなくなった。 だから三百の戦車は皆車を止めず飛び乗って、乗るや否やものすごいス 襄王は王子虎と王孫満に秦軍を見にやったが、早々に行き過ぎました」

と復命し、王子虎は、 「秦軍がこんなに強健だと、誰も相手にはなりませんね、これじや鄭

もきっと助からないだろうな」

笑いをしただけで何も言わなかった。襄王は孫満にたずねた。 と、ため息をついて言った。王孫満はこの時まだ若年だったが、含み

「そなたは何か感じたのかね」

かも車に飛び乗るというのも非常に軽薄な行動です。軽薄ということは 表して過ぎる事になっており、兜を脱ぐだけでは礼を失しています。し 周礼では天子の門を通過する場合は兜を奉持し軍を戒めて忠勤を

がやられることになると思われます」 智謀が少ないという事であり、礼を失するという事は乱を生じやすいと いう事であります。今回の戦いは恐らく秦軍が敗れ、人を倒すより自分

染みに出遭った。両人はお互いに雑談を始めた。 に行く途中、黎陽の港近くで秦国から来たばかりという蹇他と言う昔馴 ので市井にうずもれていた。今日も数百頭の肥えた牛を引いて都へ売り 愛国の精神と災難を防ぐ策略を持っていたが、推薦する人がいなかった た。弦高もそういう連中の一人である。彼は商人ではあるが非常に忠君 愛がっていた頃から、鄭や衛の商人が周へ牛を売りに来て暴利を得てい ところで、鄭国に弦高という牛を売る商人がいた。昔王子頽が牛を可

「最近秦では変った事はないかい」

でございますので、どうかご了祭願います」

「鄭君が我が軍を労うと言われるが、国書がないのはどうしてですか」

兵したよ。 もうすぐ着くんじゃないか」 「そうだな、秦は鄭を攻めようと三元帥を派遣して十二月丙戌日に出

弦高は大変驚いた。

に走らせて至急防御準備をするよう知らせ、一方では肥えた牛を二十頭 いていながら助けずに滅びでもしたら何の面目が有って故郷に帰れよう」 ふと一案が浮かんだ。早々に蹇他と別れ、一方で部下を夜を徹して鄭 「鄭はおれの父母の国だ。突然の災難、聞かなきゃそれまでだが、聞

に乗って、秦軍を迎えに行った。 選び、残りを宿に預け置いて、その二十頭を軍を 労 うみやげに小型車

弦高は道をさえぎって大声で叫んだ。 滑国(姫姓、現河南省偃師)の延津でちょうど秦軍の前哨隊に出遭った。

前哨兵が中軍に報告すると、孟明視は驚いて、 「鄭国の使者でございます。お目通り願います」

偽りの伝言を孟明視に伝えた。 知ったのだろう。ま、とにかく来意を聞こう」 と思って、弦高を呼び車の前で会った。弦高は鄭君の伝言だと言って 「遠路使いをよこして来たようだが、鄭がどうしてもう我軍の情報を

が起こり、貴国のお叱りを受けてはと、日夜緊張して警戒している状況 けており、防衛の苦労は耐えません。警戒をおろそかにして不測の事態 届けに小職を遣わしました。弊国は大国に挟まれ常に他国から侵略を受 聞きしまして、敬意を表し遠路の行軍をおねぎらいするために粗品をお 「我が主君はご三方の将軍がわが国へ軍を率いていらっしゃるとお

> 次第でございます。伏してお許し願います。決して他意はございません」 を失してしまう恐れがありますので、小職が口頭で指示を受けて参った いうのを聞きまして、国書の作成を待っておりますとお迎えに出る時機 孟明視は小声で弦高に耳打ちし、 「我が主君は、貴軍が十二月丙戌日に出陣され、進軍が非常に早いと

と言って延津で進軍を停止するよう命じた。弦高は感謝して退がった。 西乞術と白乙丙はその意図が分からない。 「我々が今回来たのは滑国の事であって鄭国には関係ないのです」

「どうして延津で駐屯するのですか」

落ちないし鄭城を包囲するには兵力が足りない。滑国は我々に対する防 当以前から準備ができていると考えられる。こうなれば鄭城は容易には ったのだが、鄭はすでに我々の出発の日まで知っている。という事は相 「我軍が千里の困難を越えて行くのは鄭の不意を突くという考えだ

備が全く無いので、この機に滑国を攻め取って収穫が得られたら、殿に

命と偽って秦軍をねぎらって三元帥の計を潰してなければ、滅びたのは た。このとき秦の元帥の眼中には全く鄭はなかった。もし弦高が鄭君の め落とした。滑公は翟国へ逃げて行き、秦軍は好き放題根こそぎ略奪し 報告するにも無駄に軍を動かした事にはならないではないか」 その夜の三更に中上下三帥を三路に分け、連携をとりながら滑城を攻

滑国ではなく鄭であったばずである。

千里疾駆の軍残忍なる狼の如し

小国滑何ぞ秦の鋭気を削ぎ得よう

弦高の事前の機転なかりせば
鄭の滅亡免れしや

さて一方、鄭穆公は商人弦高の密報を十分には信じられなかった。二滑は落城し君主は復国かなわず、秦軍退去後、衛国に併合された。

果たして彼らは戦車、武器、飼料食糧等、戦いの準備万端整え武者震い月上旬、使いを客館に遣って密かに杞子、逢孫、揚孫の行動を探らせた。

「あなと方こよ浸明こっこり戈国こ留まっていこごきましこが、皆最驚いた。 老臣の燭武にみやげを持たせて彼らのところへ遣った。、して、秦軍が来れば門を開く手はずもできていた。 使者の復命に鄭伯は

られます。あちらに合流されたら如何です」でしょうか。貴国の孟明視殿他の大将方が今周と滑の付近に駐在しておの身ごしらえができているようですが、何処かへ行かれるおつもりなの方の接待のために野の鹿も採り尽くしました。すでに非常に厳しい警戒方の接待のために野の鹿も採り尽くしました。すでに非常に厳しい警戒

杞子は驚いた。

できなくなってしまった」逆に罪を問われる事になる。鄭にいられないどころか秦に帰ることすら逆に罪を問われる事になる。鄭にいられないどころか秦に帰ることすら、「我われの謀略はばれてしまったらしい。秦軍が来ても内応できず、

鄭穆公は弦高を軍尉 (武官の最上位) に登用し、その後鄭に平和が戻っ

さて、晋の襄公であるが、曲沃の柩安置所で喪に付している時、

のか分からない」
「秦の孟明将軍が秦軍を率いて東進しているが、何処へ向かっている

対応を協議した。

を詳しく把握しており、これを晋君に説明した。 先軫はすでに秦軍の動静を探って秦君が鄭を襲おうとしている計画

先軫の計略とは如何なるのもであろうか、それは次回のお楽しみ。

#### 第四十五日

# 先元帥 甲冑を脱ぎ翟軍に突入し自裁す野襄公 喪章をつけて秦を破り

公に建策した。 中軍の元帥先軫はすでに秦軍が鄭を襲う計画を知っていた。そこで襄

ます。ただちにこれを攻撃すべきです」
これは郭偃の占に出た『鼠が西より来たりてわが垣根を越える』であり、「秦公は蹇叔、百里奚の諌めを聞かず、遠路鄭を襲おうとしています。

しかし欒枝がこれに反対した。

いのに攻撃をしかけるというのは先君に対し如何なものでしょう」「秦国には先君が大変御恩を蒙っています。まだ恩返しもできていな

先軫はこれに対し、

が亡くなった時、同盟国はすべて弔問に来ましたが、秦は弔問に来ない「わたしがこう申し上げるのは、先君の遺志を継いだものです。先君

す。先君も地下できっと怒っておられることでしょう。それに秦と晋はだけでなく、国境を越えてわが同姓国に攻入るなど無礼にも程がありまって、アー・アー・アー・アートリント

本来約束が有って両国の軍隊は同じ行動を起こす事になっていましたが、

恩を感じる必要はないでしょう」はおして知るべしです。彼らが信義を無視するのですからこっちも何も鄭を攻めていた時秦は我々を裏切って帰ってしまいました。信義のほど

と主戦論を説くが、欒枝はなおも、

行き過ぎではないでしょうか」 「秦はまだ我々の国境を侵犯した訳ではないし、攻撃を仕掛けるのは

と慎重である。先軫はさらに、

「秦が先君を擁立したのは我国のためを思っての事ではなく、自国の「秦が先君を擁立したのは我国のためを思っての事を見ません。彼らは鄭を取るだけに終わらず我国にも牙です。やらざるを得ません。彼らは鄭を取るだけに終わらず我国にも牙を向けて来ましょう。『一日譲れば百年の禍根を残す』事になり、今秦をを向けて来ましょう。『一日譲れば百年の禍根を残す』事になり、今秦をを向けて来ましょう。『一日譲れば百年の禍根を残す』事になり、今秦をを向けて来ましょう。『一日譲れば百年の禍根を残す』事になり、今秦をを向けて来ましょう。『一日譲れば百年の禍根を残す』事になり、今秦をを向けて来ましょう。『一日譲れば百年の禍根を残す』事になり、今秦をある。

と強硬論を主張する。そこへ、趙衰が心配そうに口を挟んだ。

礼に反する事にならないだろうか」
「秦はやはり打つべきですが、今殿は喪中です。喪中に兵を起こせば

も行かせていただきたいと思います」
を行かせていただきたいと思います」が、強敵を倒し社稷を守るのはもっと大きな意味での孝行であるとは言い、強敵を倒し社稷を守るのはもっと大きな意味での孝行であるとは言い

先軫は襄公に墨縗望で軍を指揮いただくようお願いした。胥臣等多くの大臣たちも先軫の考えに賛同した。

と襄公が訊ねると、先軫は指折り数えて答えた。「秦軍は何時頃どのルートで帰ってくると考えられるのか」

戦には向きません。往復に四ヶ月以上掛かりますから、初夏には澠池(現「秦軍はきっと鄭に勝てないと思います。遠征軍で軍勢も少なく長期

四程の麻布を繚ぐいった。これに墨を塗った線を付けた服装を墨穣ぐい、喪中に出。 墨穣 当時親が死ねば 3 年間の喪に服したが、その時喪服の胸に付けた 20 × 15

陣する場合の服装である

ちこち車が通れないほど狭くなっていて、三頭立ての車の通過はそのま は秦軍が帰りに必ず通る道で、樹木が生い茂り岩石が峨々と聳え立ちあ 崤山と言う山が東崤山、西崤山と三十五里はなれて二つ有ります。ここ 河南省澠池)を通過するでしょう。澠池は晋と秦の境に当り、その西には

「元帥の用兵にまかせる」

網打尽にできます」

までは無理な所です。ここに伏兵を置いて不意を襲えば秦軍の将兵は

り倒し秦軍の帰路を塞いでおいて西崤山に伏せ、梁繇靡の子梁弘とり倒し秦軍の帰路を塞いでおいて西崤山に伏せ、梁繇靡の子梁弘と明正兵五千を預け予め樹を切命じた。それから、狐偃の子狐射姑と韓之よ。 狐鞫居に兵五千で崤山の右にそれぞれ伏せ、秦軍が来たら挟撃するよう

それぞれ部隊を分けいずれへも援護できるように準備して大敵を屠る準 等の宿将は襄公と一緒に崤山から二十里ほど離れたところに陣営を張り、 ように東崤山に待ち伏せさせた。先軫と趙衰、欒枝、胥臣、陽処父、先蔑 まりには兵五千を率いて秦軍が来たら通り過ぎるのを待って追撃させる

鄭を襲う事ができなかったのでその贖罪の積りである。夏四月初旬行軍 備は万端整った。 一方、秦軍は二月中旬に滑国を滅ぼし戦利品を満載して帰路に就いた。

は澠池へやって来た。

白乙丙は孟明視に注意を促した。、

が重々慎重を期するようにと言っていた所です。軽挙は避けなければな 「ここから澠池を通って西に行けば、まさに険しい崤山の道です。父

りません

しかも崤山を過ぎれば秦に入る、家郷はすぐそこだ。急ごう、何を心配 「我われは千里の道を駆けてきたものだ、恐れることなど何もない。

してるんだ」 と孟明が言うので西乞術も注意を促し、

ります。もし晋が伏兵を用意していて突然とび出して来たらどうします」 と言ったが孟明はなおも、

「たとえ虎のような威力があっても慎重を欠けば大失敗の恐れがあ

「将軍が晋をそんなに恐わがるのなら、わしが先に行く。もし伏兵が

孟明が第二隊、西乞術が第三隊、 いたら自分で撃退してやる」 白乙丙が第四隊となって、各隊一、二

と、突然山のくぼみから太鼓の音が響き一隊の車馬が跳びだしてきた。 車を飛ばして澠池を駆け抜け西に向かって進発しだ。東崤山口まで来る 褒蛮子は常に重さ八十斤(20kg)の方天画戟を振り回し、自称天下無敵、

里程の距離を置いて進軍した。

車の上に立った大将が道を遮り褒蛮子に呼ばわった、

「秦の孟明か、そなたが来るのを待ってたぞ」

我こそは晋国の大将莱駒なり」

「そういうそなたは誰だ、名を名乗れ

お前のような聞いたことない兵卒がわしの行くてをはばむとは生意気な。 欒枝か魏犨を呼んで来い、やつなら少しは遊んでやってもいいが、

早く道を開けろ、ぐずぐずしてたらわしの一撃でお陀仏だぞ」

すぐに突き返した。莱駒はさっとかわしたがすごい勢いだったので、車 莱駒は怒って長戈を構えて相手の胸を突いた。蛮子は軽々とかわして 名な狭くて険しい山道がつながり、馬車の通行ができなくなった。斥候

れた。莱駒はその神わざを見て思わず賛嘆の声を上げ、の横木に突き刺さった。蛮子がグイッと絞ると横木はバリッと二つに折

「やはり孟明だ、噂はうそじゃなかったな」

と言うと、蛮子は

の相手をするわけがないじゃないか。さっさとどけ、後から元帥の軍隊「孟明元帥配下の准将褒蛮子とは俺の事だ。元帥がお前のような鼠輩・『まかり』

がやってくるが、お前なんぞ問題じゃない」

「准将でこんなすごいやつだったら、孟明はどんなのか計り知れん」と笑いとばした。薬駒は驚いて胆を潰した。

と思い大声で、

と思い力声で

と叫び、戦車を一方へ寄せ褒蛮子の先行隊を通した。「行かせてやるから我が軍に手を付けないでくれ」

褒蛮子はすぐ孟明のところへ報告の使者を出した。

て一緒に進発した。

に誉めると、梁弘は笑って、さて、薬がは兵を引連れ梁弘のところへ行き褒蛮子の勇猛をさかんさて、薬師は兵を引連れ梁弘のところへ行き褒蛮子の勇猛をさかん

が上 天 梯、 堕馬崖、 絶命岩、 落魂谷、 鬼愁 窟、 断雲谷等という有い。兵を抑えて妄動せずに彼らが行き過ぎた後追撃にまわれば完勝だよ」「鯨や蛟龍といえども鉄の網にかかってしまえば龍に変身はできな「鯨や蛟龍といえども鉄の網にかかってしまえば龍に変身はできな

の褒蛮子はずっと前へ行ってしまった。孟明視は、

と言って、将軍たちに馬を車から離し、甲冑を脱いで馬を牽き、「蛮子はもう先へ行ってしまった。伏兵はいないと見える」

な思いをして進んだ。いは車を推させるよう命じた。歩きづらい道なき道を隊伍をなさず大変

「行く時も崤山を通ったけれどこんなに大変とは思はなかったのに

そんな事を言う者がいたが、理由はある。進軍の時は鋭気に乗り、晋帰りはどうしてこうなんだろう」

も一度晋軍に会っている。いくら力があってもやはり伏兵が気になり心も疲労困憊である。それに滑国のたくさんの戦利品で荷物も重く、しかので苦労を感じなかったのだが、今は、千里の行軍の後であり、人も馬にはばまれることもなく、馬車は軽快に、歩くのも余裕を持って通った

End Not The Control of the Control

阻は問題だが追撃のほうは問題ではない。各軍に少し行軍を速めるよう「我われらが困難を極めてきた道だから晋軍も同じはずだ。前方の険

と問題にせず、自分が後方を断って追撃兵を防ぐからと言って白乙丙にいえばいい」

を前へ進ませた。

「乱木が道を塞いでいて人も馬も通れません。どうしましょうか」堕馬崖を過ぎ絶命岩に近づいたところで前方で皆が大声で騒ぎだし、

と指示を仰いできた。

と退却を命じた。

上もある紅旗が立っていて旗には『晋』の一字が見え、旗の下は木が乱 王避雨処』という五文字が彫られていた。この碑の側に竿の高さ三丈以 と思いながら前に出て見ると、岩の傍らに一本の碑が立っており、『文 「乱木は何処から持ってきたのだろう、やはり前方に伏兵ありか」

「これは疑兵の計だ。此処まで来たからにはたとえ伏兵があろうとも

勇気を奮って前進するしかない」

雑に積み上げられていた。

将軍が立っている。狐射姑(字賈季)である。彼は大声で、 白乙丙が突撃のための武器を用意させ、ふと見ると岩場の高所に一人の 遠くにきらめく旗が見えた。だが敵軍の数はどの位か全く分からない。 秦軍が乱木をやっと片付けたとき前方から雷のような太鼓の音が聞こえ、 れていた伏兵が皆秦軍が来たのを知り一斉に跳び出すことになっている。 晋軍が予め仕組んでおいた暗号だった。紅旗が倒れると回りの岩陰に隠 紅旗を倒し乱木を取除き前進を再開した。ところがなんとその紅旗は 「お前らの先鋒の褒蛮子は捕まえてここにいる、助けたかったらさっ

さと降参しろ」 と呼ばわった。褒蛮子は勇気をたのんで軽卒に前進し敵の仕組んだ落

し穴に落ちて捕えられ囚人車に入れられていた。白乙丙は驚いて西乞術

いくら千軍万馬がいても軍を整えて交戦する場所がない。そこで、 片側は切立った岸壁反対側は万丈の谷で、ここがいわゆる落魂谷である。 と主将孟明に報告しこれからのことを協議した。ここは道が非常に狭く 「ここは戦う場所ではない、 一旦全軍を東崤の広い所に戻して決戦す

る

後のことはそれからだ」

は兵たちに両側から山谷を越えて出口を探すよう命じた。 見えた。秦軍は堕馬崖をこえる前にまた引返さざるを得なくなった。熱 晋軍の梁弘、莱駒が率いる五千の兵が退路を次第に攻め上げてくるのが いほうろくの上の蟻のように東へ西へうろうろするばかりである。孟明 んざく。やっと堕馬崖まで戻ったら、引き返す方向に旗が無数に連なり、 白乙丙は命令を受け軍馬を返したが、道々ずっと鐘太鼓の音が耳をつ

その時左の山の上で鐘太鼓が鳴り響き、左方から一隊の晋軍が現れた。 「大将先且居これにあり。孟明早々に降参しろ」

逃げ回って三々五々山谷に入り込んだ秦兵は晋兵に皆殺しにされた。 の旗が立った。孟明視は万箭を受けたように頭の中が真っ白になった。 右の方では谷の向うでドーンと砲声が響きこだまがかえり大将胥嬰

前後左右から晋兵に迫られ孟明等三元帥は進退極まった。孟明視は白乙 み上げられた柴に硫黄等の引火物を撒いて火を付けたところである。炎 孟明は西乞、白乙と一緒に又随馬崖に引返すと、晋将韓子輿がそこに積います。 せいきつ はくいつ は天を突き真っ赤に輝いて燃え上がった。 後方には梁 弘の軍が到着し、

ができれば、殿に報告して報復の兵を出して欲しい。それを見てあの世 を着替えてそれぞれ逃げてくれ。万一幸いにも一人でも秦に帰り着く事 「君の父上のお考えは正に神業だね。今まさに絶体絶命だ。君たち服

で鬱憤を晴らさせてもらうよ」 <sup>-</sup>われ等は死ぬも生きるも皆一緒です、 たとえ脱出できても何の面目

あって一人故国へ帰れましょう」 西乞術、白乙丙は泣いて生死を共にすると誓った。

134

秦軍の将兵は全て捕縛されるにまかせざるを得なかったた。渓流は血に しにして散りじりになってしまった。孟明ら三人は手の施しようもなく、 そうしているうちに、ふと見ると部下たちは車も武器も道に放りぱな

う。(この戦いを崤の戦いという) 千里の雄心一朝灰燼に帰し 西崤より再び帰ることなし

汚れ、山路には死体が横たわり、逃げおうせた者は全くいなかったとい

先且居等の晋将は東崤の麓に集合し、三元帥ならびに褒蛮子を囚人車せんしよきよ 晋師奇計を誇るべからず 蹇叔は事前に見通し涙せり

呼の声に揺れた。 晋襄公の本陣へ押送した。襄公は墨縗(喪服)でそれを受取り、全軍歓 に乗せ、捕獲した捕虜や車馬、並びに滑国から略奪して来た戦利品等を

と訊ねた。 襄公は先ず三元帥の名を聞き一方へ移し、次に褒蛮子とはどんな男か

とし穴に落ちていなければ捕えるのは難しかったと思われます」 と梁弘が答えた。襄公は驚いて、 「准将ですが、大変勇猛な男で、莱駒が一度は敗れています。 もし落

「そのような男であれば生かしておくと後々心配だ」

と言って莱駒を呼んで、

「そなたは前にこの男に敗れたらしいが、今日はわしの前でその男の

と命じた。薬駒は褒蛮子を庭の柱に縛り大刀を執って斬ろうとした。 「貴様はわしに負けた男じゃないか、わしを斬れるわけが無い」

蛮子が大声を発すると霹靂が起こったようにビリビリと陣幕が震え

首を落として恨みを晴らすがよい」

拾い、蛮子を一刀で切倒し返す刀で首を落とし晋侯に献上した。 た。狼瞫という小 校 (低級武官) が横でそれを見ていてサッと先に刀を と引き千切れた。薬駒は驚いて大刀を落し、蛮子がその刀を拾おうとし た。蛮子は力をふりしぼりエイとばかり両腕をつっ張ると縄がぶつぶつ

瞫は晋侯に礼を言い主君直々の抜擢と思い先軫元帥に挨拶をしないで 晋侯はそう言って、その場で莱駒を罷免し狼瞫を車右に抜擢した。狼

「莱駒の武勇は小校にも劣るようだね」

行ってしまった。先軫は彼に不満を持った。

ਖ਼ਰਵ 金明等の三人は絳都へ帰って太廟に祀ってから処刑しようと思っていた。 柩 に秦を破った事を報告をしてから埋葬を行うことにし、襄公は軍装 翌日、襄公と諸将は凱歌をあげて軍を返し、葬儀途中の曲沃へ帰った。

元々秦国の人で、孟明視等三人の将帥が捕われていると聞き、助けてや 喪服のままで葬儀を執り行う事によって戦功を彰かにした。 この時襄公の母親の嬴氏も曲沃にいて葬儀に参列していた。彼女は

りたいと思い襄公にわざと聞いた。 「我が軍が大勝し、孟明等を捕虜にした事を聞きました。おめでとう。

「いや、まだです」

ところでもう処刑は終わったのですか

ればいいのよ。そうすれば恨みを解消して、友好関係を続けることがで しても益する事はないでしょう、むしろ秦国に返し秦君の誅殺にまかせ 憎しみに変えてしまったわ。秦君もこの三人を骨髄に徹するほど怨んで らは功に逸りやたら戦争をしたがって両国の積上げてきた友好関係を いると思うのよ (「怨み骨髄に徹す」 語源 史記・秦本紀)。 晋で彼らを処刑 「秦と晋はお互いに婚姻を通じて何代も仲良くやってきたのよ。孟明

き、大変いいことじゃないかしら」

「あの三人は秦で権力を握っている連中ですから、せっかく捕えたの

「けれども『敗将は死』と決まってるわ。楚が敗れた時も成得臣は死に逃がしたら後々不安を残すことになります」

のだから、敗将なんかこちらの手で殺すのは情けが無さ過ぎはしないかが秦に捕えられた時、秦君は彼を送り返して我われに礼を尽くしているを賜ったし、秦だけその軍法が無いなんてことはないわ。それに昔恵公

してしまった。と気が弱くなってその気になり、有司(司法官)に命じ三人を赦し秦に帰と気が弱くなってその気になり、有司(司法官)に命じ三人を赦し秦に帰襄公は初めは納得できなかったけれど、恵公を許してくれた話になる

れたものを吐き出し、かんかんに怒ってすぐに襄公に会いに行った。 先軫は家で食事中に襄公が三人を赦免したという事を聞いて、口に入

おっしゃるので、そうしたよ」「母上が彼らを秦に帰してあちらで処刑してもらったほうがいいと

「秦の捕虜は何処にいますか」

けて怒りをぶつけた。 先軫は怒りのあまり君臣の礼を抑え切れず、襄公の顔につばを吐きか

たもんだ。虎を山に放したようなもので後で悔いても取り返しがつかんやっと捕えたものを、女の片言に惑わされてとんでもない事をしてくれ「ちぇ、このガキが、こんな事も分からんのか。将士が千辛万苦の末

事ですぞ

詫びて諸臣に問いかけた。

襄公は、はたと大変な事をしたことに気がつき、顔の唾を拭いながら、

ょうしょほでいた。誰かあの三人を追捕するものはいないか」

陽処父が手を挙げた。

「将軍、慎重に頼みますぞ。追捕できたら功一等です」

先軫は彼を激励した。

唾を拭い無礼を赦すこの度量 正に覇業を継ぐはこれ襄公女の浅慮将士の功を逸し 先軫の怒気天を突く

さて、孟明ら三人は大難は脱したが、

と道々話合っていた。黄河の岸辺に来たが船は一隻も無い。っ手を差し向けてくる恐れがある。そうなれば万事休すだ」「黄河を渡る事ができれば助かるが、渡れなければ晋君が後悔して追

「ああ、天に見放されたな」

生きて帰れば この敗戦を必ず功で報いん 檻の猿檻より脱し 籠の鳥籠より出づる 整っな歌いながらやって来た。

孟明はその歌を変に思い呼んでみた。

「ご老人、わたしたちを渡してくれないか」

「秦の人は渡してもいいが、晋の人は渡さん」

「わし等はその秦の者なんだ。早く渡して欲しい」

「あなたは崤山で敗れた方では有りませんか」

「そうなんだ」

行ったところに大きな船を用意しております。早くそちらのほうへいら もなります。この舟は小さくてたくさんは乗れません。前方へ半里ほど っしゃってください」 「わたしは公孫将軍のご命令で舟支度をしてお待ちしてもう何日に

そう言うとその翁は棹を反して飛ぶように西へ去っていった。

孟明たち三人は裸足で舟に乗込み、棹をさして舟が岸を離れたばかりの 間一髪、岸に一人の将官が馬車を駆けてやってきた。大将陽処父である。 矢頃の半分ほどの所に停泊しており先ほどの翁がそこから呼んでいる。 \* 15 | 三人は河に沿って西へ半里足らず行くと、なるほど大船が数隻岸から

「将軍!ちょっとお待ち下さい」

孟明たちはびっくりした

いるのを見て一計を案じ、自分の三頭立ての馬を解いて、襄公の命だと 直ちに陽処父は河岸に車を止め、孟明たちがすでに船中の人となって

いうことにして

の意味で将軍にこの良馬をお贈りせよと命じられお届けに参りました。 「わが主君が将軍に車の用意して差し上げなかった事を恐縮し、

どうかお納め下さいますよう伏してお願い申し上げます」 陽処父の本音は孟明を騙して岸に上げ、馬を受取ろうとした時に捕え

ようとしたのである。孟明もやっと網を抜け出した魚、金針を脱却した

のに戻っては危ないと用心し、舳先に立ち陽処父に向かって稽首

(叩頭 り

の礼して、丁寧に感謝の言葉を返した。

「ご主君のご恩によりお助けいただき感謝に耐えません。どうしてこ

ていただけましたら、三年後に必ず自ら拝領に参りましょう」 の上良馬までいただけましょうか。この度帰国して我主君に死罪を赦し

悶々として帰城し孟明の言葉を襄公に報告した。 に出てしまっていた。陽処父は手中の物をとり逃がしたように落胆し 陽処父は更に何か言おうとしたが、船は水夫が懸命に漕ぎすでに中流

先軫は憤然として進言した。

撃をかけて彼の考えを打ち砕いておくべきです」 て報復するという事です。負けたばかりで士気が落ちている今、先制攻 「彼が言う『三年後に拝領の物をもらいに来る』というのは晋を討っ

襄公も同意して秦討伐の計画を協議した。

う情報を得て満面に喜色を表わして喜んだ。側近の者達は口をそろえて、 もままならなくなったが、数日後今度は三人とも釈放され帰国したとい 話変わって、秦穆公は三帥が晋に捕えられた聞き、心配と怒りで寝食 「将兵を失い国を辱めた孟明は死罪が相当です。 昔楚では成得臣を誅

ます」 殺し三軍の戒めといたしました。今回の孟明も軍法に照らすべきであり

表敬

と言ったが、穆公は、

「わしは蹇叔、百里奚の諌めを聞かず災いを三帥に及ぼしてしまった。

悪かったのはわしであり他の者に罪はない」

そう言って喪服に着替えて郊外まで出て三帥を迎え哭いて哀悼の言

葉を述べ、再び三人を軍の責任者に任命し益々礼遇した。

百里奚は

「わが父子が再会できたことは望外の事です」

奚の後任に繇余、公孫枝を左右の庶長に任じた。と言ってこれを機に老齢を理由に引退したので、穆公は蹇叔、百里と言ってこれを機に老齢を理由に引退したので、穆公は蹇叔、百里

「翟国の君主白部胡が国境を侵してすでに箕城を過ぎました。早急にへ突然国境警備から、

援軍をお願い致します」

と言って来たので襄公は驚いた。

「翟とは何も問題は無かったのにどうして攻めて来るのだろう」

「先君文公が翟に逃亡していた時、翟君からは二人の隗氏(季隗、叔隗)、先軫がそれに答えて、

送り届けるなど配慮を怠りませんでした。それにもかかわらず先君はごな厚遇を受け、帰国されてからも、祝賀の使者をよこし、二人の隗氏ををわが君臣の妻として贈られ、十二年もの長きにわたり礼を尽くし大変

継承すると、彼は自分の力を恃む好戦的な男で、我国の葬儀の混乱に乗何もおっしゃいませんでしたが、老君主が亡くなり息子の白部胡が位を在世中翟に一度もお礼をなさった事がありません。翟君は旧情を思って

たに翟の撃退をお願いします」 (先君は王事に忙しく、私恩を顧みる暇が無かったのです。翟国が喪に乗じて攻めて来たとなるとこれは我々の敵です。子載 (先軫の字) あな

じて討伐にやってきたものです」

襄公は先軫にそう言ったが、先軫は何度も断った。

「臣は秦将が釈放された事を一時憤慨して殿のお顔に唾を吐いてし

いただき誰か良将をお選び下さい」礼を失した者は元帥の任に当る事はできません。どうか私の職をお解きまい大変ご無礼致しました。『民を治めるはただ礼あるのみ』と申します。

卿をおいて誰ができよう、どうかお願いします」ているのでわしは何とも思っていない。いま翟を抑える事ができるのは「卿のしたことは国を思う義憤であり、忠心から出たものだと分かっ

先軫は止む無く命を受け退出し、

「本当は秦軍と戦って死にたかった。まさか翟軍の手にかかって死ぬ

と大息をついて言ったが、誰も彼が言っている内容を理解できなかっ

晋襄公は先に絳都へ帰った。

「誰か先鋒をやろうというものはいないか」
先軫は中軍の帳に入り諸軍を点検し諸将に聞いた。

「わたくしにやらせてください」

挨拶がなかった彼に不満があったところに、先鋒を志願して来たので思見ると車右に抜擢されたばかりの狼瞫である。先軫は抜擢後も自分に

わず怒りが爆発し激しい口調で叱った。

く謙遜も気持ちもない。わが配下に人がいないと愚弄するのか」という事で重用されたにすぎん。敵の大軍が来ているのだ、そなたは全という事で重用されたにすぎん。敵の大軍が来ているのだ、そなたは全

ばらく待っていてくれ。きっと目に物見せてやる」

「君の高邁な考えにはとてもかなわないな」

は何故それを阻もうとなさるのですか」
「わたくしは国家のために尽力しようとお願いしているのです、元帥

に立とうというのだ」
「有能な者はいくらもいる。お前はどれだけの能力が有って諸将の上

友人の鮮伯が変に思って聞いた。、 用いようと思った。狼瞫はしょげて恨みたらたら退出した。道で遭った用いようと思った。狼瞫はしょげて恨みたらたら退出した。道で遭ったと言って強引に下ろし、狐鞫居が崤山で敵を挟撃した功があったので

こんなところでぶらぶらしてるんだ」
「元帥が敵撃退の将軍を選抜していると聞いているが君はどうして

してくれないんだ」の怒りに触れてしまったんだ。諸将の上に立つ能力はないと言って採用の怒りに触れてしまったんだ。諸将の上に立つ能力はないと言って採用「国家のためと思って先鋒を願い出たのにどういう事なのか先軫殿

それを聞いて鮮伯は非常に怒って、

死んでもそのほうがすっきりするよ」ちの家兵を集めて奴を殺して胸のつかえを晴らそうじゃないか。たとえちの家兵を集めて奴を殺して胸のつかえを晴らそうじゃないか。たとえ「何という事だ、先軫は君の能力を嫉妬してるんだ。どうだい君とう

と言う。狼瞫は、

だと思うに違いない。却って彼の嫉妬を正当化してしまう事になる。しんだら人は彼がおれを使わなかったのはつまらない人間だったから当然はわしに力が無いと思い用いなかったのだから、もしわしが意味なく死かない。おれは殿に力を認めていただいて車右に抜擢されたのだ。先軫殿かない。おれはだめだ、男は死ぬにも名分が必要で名分のない死は蛮勇でし

鮮伯は感心して狼瞫と肩を並べて帰った。

後の人は、先軫が狼瞫を使わなかった事を詩のなかで批判している。

功績あるも用いざれしは何故なるや 古来忠勇は冤罪を受け易し勇者狼瞫敵将斬る事孟賁"の如く 車右に抜擢されしは君恩による

遇しそれぞれ陣を敷き戦闘態勢を整えた。 
を後詰として四百乗の戦車を率いて絳都北門を出発した。 
箕城で両軍遭さて、先軫は息子先且居を先鋒、欒盾、郤缺を左右軍、狐射姑、狐鞫居

先軫は諸将を呼び集めそれぞれに策を授けた。

谷あいに誘い出し、出てきたところを伏兵が一斉にとび出し翟主を捕えを分けて左右で待ち伏せせよ。且居は翟と戦い、負けたふりをして広い適したところであり、両側は樹木が多く伏兵も置ける。欒、郤両将は兵「箕城は大谷という広い谷あいの盆地にあってまさに戦車の戦いに

る。狐氏の二将はその後ろにいて翟兵が助けに来るのを遮る」

彼がさっと突然放った矢が白部胡の顔に命中しのけ反って落馬し兵士た誰もそれを止められなかったが、彼が谷口まで来ると一大将と出遭い、

<sup>4</sup> 孟賁 古代伝説中の勇士 生き生の角を引き抜 たといる

ちが取押えた。射た大将は新たに下軍の長を拝命した郤缺であった。矢 は頭を貫通していて白部胡は即死した。郤缺はそれが翟主だとわかり首 の首級を取ろうとしたが、依然怒ったように目を見開き生きているよう

級をとって中軍に報告した。先軫は中軍の陣営にいて白部胡を捕えた事

を聞き、天を仰いで、

「晋侯万歳!晋侯万歳!

軍務机に残し、誰にも告げず腹心数名だけの戦車一輌で敵陣に突っ込ん と繰返し高らかに声をあげ、筆と紙を取って、一通の奏上文を 認 め

出てきたところに突然一輌の敵戦車に出遭った。彼はただの誘いの兵だ 白部胡の弟の白暾はまだ兄の死を知らず、ちょうど兵を率いて応戦にはくまし

ち、目を見開き目尻も裂けんばかりに顔を真っ赤にした。白暾はこんな まくり、あっという間に三人の将官と二十数名の士卒を斬殺し、自分は 大声を発し雨のように飛んでくる矢もかまわず左右に切込み縦横に切り く者がいないのが分かり、弓部隊に一斉射撃を命じた。先軫はまた一声 意気込みを見た事が無く驚いて数十歩下がってよく見ると敵は単車で続 ろうと気にもしないで突っかってきた。先軫は長鉾を肩に担ぎ大声を放

は適当なところで、 が入らない。しかも先軫は厚手の鎧を着ていたので矢も通りにくい。先軫 一点の傷も受けていない。翟の弓手は先軫の勇に驚き手がなえて弓に力

ようになって死んだが、死体はなおも直立して倒れなかった。白暾は彼 してしまったがもう敵を震え上がらせたからこれ以上殺す事はない、よ しここで死ぬことにしよう」 と、自ら鎧兜を脱ぎ捨てた。一瞬の内に体中無数の矢が当り、針鼠の 「敵を殺さなければわしの勇猛さが分からないだろうから、無駄に殺

で凛として人をおびえさせた。それが誰かを見知っているものがいて、

「これは晋軍元帥の先軫だ」

と言ったので、白暾は驚いて、率いる部隊を整列させて亡骸を拝し、

「まさに神人だ」

と感嘆し、

か。よろしければ倒れていただきたい」 「我国へお連れしてお祭りをさせていただいてもよろしいでしょう

と言ったが先軫の亡骸は依然として微動だにしない。白暾は言葉を変

「晋国へお帰りになりたいのでしたら返しいたしましょう」

と言うと、亡骸は自分の戦車の上に倒れた(この戦いは箕の役とよばれる)。

先軫の遺体がどの様に晋へ送り帰されたか、それは次回のお楽しみ。

#### 西土人回

### 秦穆公 崤谷で遺骨を葬る 鹿の 臣 宮中で父王を弑し

翟主白部胡が殺された事を逃げ帰った敗軍兵が弟白暾に報告した。白できしゅはくぶこ

暾は涙ながらに

きこならず、やっぱりこしな事こなってしまった」。「『晋には天佑があるから討つのは無理だ』と言ったのに兄上はお聞

議し、

中軍に届けに行ったが元帥が居ない。陣を守っている兵士が、一方、郤缺が白部胡を討取った功の報告するため諸将と一緒に首級をと言って、先軫と白部胡の遺体交換の交渉に晋軍へ使者を出した。

ま出て行かれ、何処へ行かれたかは存じません」「元帥は戦車一輌だけで『陣門を厳重に守備せよ』とおっしゃったま

奏上文には次のように書かれていた。と言う。先且居は心配になって机の上を見ると一通の奏上文があった。

る事になります。功有って賞を行わなければ何を以て立功を勧奨で有る者に賞を行わない事になり、もし受ければ無礼の者に功を論ず後封賞の沙汰があると存じますが、もしこの封賞を受けなければ功として任用いただきました。幸にも戦いには勝利いたしまた。このを行ったにもかかわらず、ご寛大にもお赦し下さり臣を引続き元帥臣中軍大夫先軫謹んで申し上げます。臣下の分際でご主君に非礼

す。そういう事で臣は翟軍に討入り敵の手を借りてご主君に代り非を問えましょうか。功罪の対応の紊乱は国家のために憂うべき事できましょう。無礼者に対し功を認めたのでは犯罪に対し何を以て罪

って、

し上げます。
化りを務める事ができます。臣軫、死に臨み非礼を顧みずお願い申代りを務める事ができます。臣軫、死に臨み非礼を顧みずお願い申礼の罪を罰します。臣の子且居には十分将としての才略があり臣の

「父上は翟軍に死にに行ったんだ」

べようとした。 郤缺、欒盾、狐鞫居、狐射姑等は必死に引き止めて協」 且居は大声で泣いて、すぐにも戦車で翟軍に乗込んで父親の行方を調

という事になった。 「先ず、使者を出して元帥の生死を探ってから兵を進めるべきである」

ひとしきり泣いたが、翌日軍前で相互に遺体を出して交換する事に取りきを問うと遺体交換の事であった。且居は父親の死が本当だったので又ちょうどその時翟主の弟白暾の使者が来たという報せが入った。用向

翟の使者が帰った後、先且居は、決めた。

さないんだ 「お前等は我われを馬鹿にするのか、どうして全身の揃った遺体を返

と言うと、先且居は部下を使って、

「全身の遺体が欲しければ自分で大谷へ行って転がっている死体の

中から探して来ればいいじゃないか」 と言わせると、白暾は真っ赤になって怒り、大斧を振り上げ翟の騎兵

に号令をかけ攻め込んできた。 晋軍は車でトーチカのような壁を作っていたので何度突入して来て

構えて飛び出して来た。狐射姑である。白暾はそれを見てすぐに彼と戈 そこへ晋軍の中から突然太鼓が鳴り響き陣門が開いて一人の大将が戈を も突き破れない。白暾はどうにもならず気持ちだけで声にもならない。

軍は後から後から押し寄せて来て、翟兵の死者は数知れない。狐射姑は 包囲されはじめた。白暾は晋軍の数と勢いを見て急いで馬を反したが晋 を交えたが間もなく左から郤缺、右から欒盾がやって来て両翼の兵士に

白暾を見定め逃がすまいと懸命に追った。白暾本陣が混乱するのを恐れ 刺斜里の方へ逃げた。狐射姑は逃がすまいと追った。白暾は振返り、馬

の向きを変えてたずねた。

か 「将軍のお顔はよく存じております、賈季 (狐射姑) 殿ではありません

「そうだ」

時かまたお会いできたらと存じます。わたくしは白部胡の弟の白暾です」 二年間おられ浅からぬお付き合いでした。今日はお情けをいただき、何

「将軍一別以来お変わりありませんか。お父上とご一緒にわが国に十

狐射姑は昔の話を持ち出され、もだしがたく

れないほうがいいでしょう」 と言って車を返し本営に帰って来た。晋は勝利したが白暾を捉えるこ

「お見逃しいたしましょう。 早々にご帰国なされ。ここには長くおら

とができなかったので誰も言葉が少なかった。

が葬儀を行ない君主を継いだ。 その夜、白暾は密かに撤兵した。白部胡には子がいなかったので白暾

は先軫の死を悼み自ら死装束に着替えさせると、両目が開いて未だ生き さて晋軍は凱旋し襄公に拝謁し先軫が残した奏上文を手渡した。襄公

生きとした感じであった。 襄公は遺体をなでながら、

れた文面に忠愛の気持ちが溢れている。決して忘れまい」 と言って、柩の前で先且居を中軍の元帥に抜擢すると先軫はやっと目 「将軍は国の事を思って亡くなられ、その英霊は永遠です。書き残さ

を閉じた。後の人は箕城に廟を建てて先軫を祭った。

襄公は郤缺が白部胡を討取った功を称えて、 「そなたは父親の過ちを十分償った。だから元の父親の封地をそなた

に返してあげよう」 と言って冀城を封地として彼に与えた。そして胥臣にも、

「郤缺を推挙したのはあなたの功です。 あなたの推薦がなければ缺を

登用する事はできなかった」

と言い先茅の地を与えた。諸将は襄公の妥当な論功行賞に感服した。

さて、許、蔡は晋文公が死ぬと又楚と同盟を結んだ。晋襄公はただち

と言って闘勃を引き止めた。闘勃もそれを悟り、

「孫伯(成大心)の言う事もっともだ」

救援を命じた。泜水(河南省魯山県叶県を経由し汝水に流入)まで来ると河 に陽処父を大将として許、蔡討伐軍を出した。楚成王は闘勃と成大心によった。

る見るうちに年末になり食料もなくなってきた。陽処父は撤退したいと ある。晋軍は楚に遮られて進軍ができず対峙して二ヶ月近くになる。見 を取り、一本の河を隔てて両軍の拍子木の音がお互いに聞こえる状態で 向こうに晋軍が見えた。 楚軍は河辺に陣を取った。 晋軍は泜水の北に陣

である。そこで楚軍に使者を出して、闘勃に次のように伝えた。 も思ったが、追撃が懸念されるし、楚を避けて人に笑われるのもしゃく

ります。速やかにご決定願います」 もありません。処父は準備をしまして将軍のお答えをお待ちいたしてお 戦闘を開始願いたい。進むも退きもしなければ軍費の無駄であり何の益 るのでしたら、貴軍を一舎退げて我われに河を渡らせていただいてから をお待ちし決戦いたしましょう。将軍の方では河を渡らないとおっしゃ 戦うおつもりでしたら、我われは軍を一舎(畑)退げ将軍が河を渡るの 『来る者は怖れず、怖れる者は来ず』と申します。将軍が我われと

て、 と闘勃は怒ってすぐに河を渡って決戦しようとすると、成大心が慌て 『晋はわしが河を渡れないと馬鹿にしているのか』

我われが主、彼らが客となり有利です」 軍を退げ晋の方に渡らせるべきでしょう。そうすればわが領地ですから 出すつもりです。渡河半ばに攻められたら我軍は進退極ります。ここは 「晋を信じることはできません。一舎退げると言うのは我われを誘い

> せることにした。 使者は帰って陽処父に復命した。

と言って、全軍に三十里退げて軍営を敷くよう命じ、晋軍に河を渡ら

処父は楚が軍を下げた事を聞き、言い方を変えて全軍に

「楚の闘勃将軍は我われ晋軍を怖れて河を渡れず逃げて行ってしま

った」 と指令し、すぐ全軍に伝わった。処父は更に伝令した。

寒くなるので一旦帰国し休息して出直すことにする」 「楚は逃げて行ってしまったから河を渡る理由もない。 年末になると

闘勃は軍を三十里退却させて二日待ったが晋の動きが見られないの 直ちに晋軍は撤兵し帰国した。

ところで楚成王は以前、長男の商臣を太子にしようと思って闘勃に

で探らせると、撤兵してしまったという事だったので彼も帰国を命じた。

意見を聞いた事がある。その時闘勃は、

「楚は代々兄弟のうち年少者が継嗣になり年長者は不利でした。しか

忍です。今愛されて世子にお立てになり、後日罷免なさるようなことに も商臣殿の相は目は蜂のように鋭く声は狼のようにすごい声で性格は残

商臣は闘勃が自分を世子にするのに反対したと聞き恨みを抱いていたの なれば、国の乱れの元となります」 と諌言したが、成王は聞かず商臣を世子に立て潘崇を補佐役とした。

で、闘勃が蔡救援に行って戦わずに帰って来た機会をとらえて

と成王に中傷した。 成王はそれを信じて闘勃に会いもせずに人を遣っ 「闘勃は陽処父から賄賂をもらって晋軍を避けたのです」

は自ら成王の前に出て叩頭し涙ながらに撤兵の状況を縷々報告した。て剣を渡し自刃を命じてしまった。闘勃は釈明もできず自刎した。成大心

であるとすれば罪はむしろわたくしの方にございます」「賄賂をもらったなどという事実は全くありません。撤退した事が罪

「卿には責任は無い。わしも後悔しているんだ」

愛するようになると商臣を廃して職を世子に立てたくなり、そう考えるこの時から成王は太子商臣を疑うようになった。、その後年少の職を

と商臣の謀反が大変心配になり、口実となる過失を見つけて彼を抹殺し

EA-PT 宮人はそれを耳にして外にしゃべった。商臣は容易に信じられず大夫ようと考えるようになった。

「その話がうそか本当か調べる方法があります」

の潘崇に相談した。

「王の妹羋氏は江国に嫁していますが、最近里帰りしてしばらく宮中「どんな方法だ」

彼女は怒らせるときっと秘密をばらしますよ」格ですから、太子が丁寧に食事に招待しわざと粗略に扱って怒らせます。でいますから必ずそのことを知っているはずです。彼女は怒りっぽい性

食事を出すのも自分は席を立たず料理人に出させ、侍女に酒を注いでひ羋氏を商臣は慇懃に迎えた。酒が廻ると次第に羋氏に対して粗略になり、商臣はその計に従い潘崇と一緒に彼女を招待した。 東宮へやって来た

「そんな事だから王がそなたを殺して職に継がそうとしてるのですにしようとしなかった。羋氏は非常に怒り机を叩いて怒鳴った。そひそ話しをしたりして、羋氏が二度ほど話かけようとしても全く相手

ょ

関連はこうでのように謝ったふりをしたが羋氏は聞かず車に乗って、 商臣は恐縮したように謝ったふりをしたが羋氏は聞かず車に乗って

「職殿に北面して仕えることがおできになりますか」商臣はその夜のうちに潘崇に状況を話し、自衛策を相談した。

「兄として弟に仕えるなどできるものか

ませんね」 「頭を下げて人に仕えることができなければ他国へ逃げるしかあり

商臣はどうしてもそれ以外の策を要求した。「頭を下げるか、出奔するかこの二つ以外に策はありません」「縁故か何か理由が無ければ恥をかくだけだよ」

「一つ策がありますが、簡便ですが我慢してやりきれるかどうか」

「生死の瀬戸際だ、何だってできる」

と潘崇は耳元でそっと言った。
「禍を福に転じるには大事を決行以外にはありません」

「よし、それをやろう」

近衛兵を手配し夜半に宮中で変事が発生したと言って王宮を包囲し

潘崇は剣を持って力士数人と伴にいきなり成王のところへ行った。周

囲のものは驚いて逃げ散った。

「卿よ、何事ぞ」

子にお譲り下さるようお願い致します」でございます。国の人々は新王を望んでおりますので、どうかみ位を太でございます。国の人々は新王を望んでおりますので、どうかみ位を太

「すぐに位は譲るが、命は助けてくれるのか」

熊掌

能の掌 古来非常な珍味とされている 者名のに時間がかかる

成王は狼狽してたずねるので、潘崇はきっぱり言った。

「君主が亡くなって新しい君主が立つもので、国に二人の君主はあり

えません。どんな王でもお年を召せば必ず亡くなられます」

はない」ができ上がって食ってからにしてくれないか。そうしたら死んでも恨みができ上がって食ってからにしてくれないか。そうしたら死んでも恨み「いま料理人に熊 掌 を料理するように言付けたばかりだからそれ

も何も言わなかった。

「はないです。 こうこうにいるのでしょう。 臣が手を掛ける前にご自裁願らの助けを待とうとしているのでしょう。 臣が手を掛ける前にご自裁願

「熊掌は煮えるのに時間がかかります。あなたは引延しを図って外か

潘崇は厳しい声で言い、束帯を解いて王の前に投げた。

成王は天を仰ぎ、

1. 「闘勃よ、そなたの忠言を聞かなかった自業自得だ、又何をか言わん

2

と叫んでその帯で首をくくった。羋氏は、

「兄が死んだのはわたしのせいだわ」

前六二六年)十月丁未日の事であった。 と言って彼女も首をくくって死んでしまった。周襄王二十六年(紀元

天これを許さず潘崇を遣わす 愚にもこの期に及び熊掌を求む昔成王兄熊囏を殺し 今日商臣父を殺し叔父の冤を晴らす

彼に太子の部屋を賜った。令尹闘般らは成王が殺された事を知っても誰になった。これが楚の穆王である。潘崇を太師とし各長官を監督させ、商臣はその父を殺して、急死という事で諸侯に訃報をしらせ、自ら王

商公闘宜申は成王の変を聞き、葬儀に参加するだろうと言っていたが、(成得臣)、子西(闘宜申)はいずれも横死するだろうと言っていたが、帰は司馬闘越椒に捕えられ殺された。巫者范矞似が、楚成王と子玉帰は司馬闘越椒に捕えられ殺された。巫者范矞以が、楚成王と子玉はないと、子はいという名目で郢都に駆商公闘宜申は成王の変を聞き、葬儀に参加するという名目で郢都に駆商公闘宜申は成王の変を聞き、葬儀に参加するという名目で郢都に駆

結局それが事実となった。

たのに、先王の意志を成就させられなかった事を残念に思っている』と「子揚(闘般)は『親子で楚の国政を掌握し先王から莫大な恩顧を受け闘越椒は令尹の位を望んで穆王に、

常々人に言っていますが、それは公子職を君主に擁立しようとの気持ち

な備えが必要です」が殺されてしまったので不安に駆られ陰謀を図る恐れがあります。十分からです。子上(闘勃)がいれば子揚は彼と相談するでしょうが、子上

はできないと断った。穆王は怒って、

穆王は疑念を持って闘般に命じて公子職を殺させようとしたが、闘般

「そなたは成王の気持ちの方が大切なのか」

と言って自ら銅錘(ハンマー風の武器)で殺した。公子職は晋に亡命し

尹になり、蔿賈が司馬になった。その後穆王は子文の功績を想って穆王は成大がを令尹としたが彼もほどなく亡くなり、結局闘越椒が令ようとしたが闘越椒に追われて郊外で殺されてしまった。

闘克黄を箴尹(巻の官 君主を諌める)に抜擢した。 克黄は字を子儀といい、とうこくら しゅいん

闘般の子、子文の孫である

晋襄公は楚成王が死んだ事を聞き趙盾(趙衰の子)にたずねた。

「ついに楚は天の嫌うところとなったのだろうか」

及ぼすのではないかと心配です」 したほどですから他の者には推して知るべしです。臣は楚が諸侯に禍を 「成王は横暴ではありましたが礼法を教化しました。 商臣は父親を殺

が現実のものとなってきた。 滅ぼし、さらに陳、鄭を攻め中原を騒がしはじめた。まさに趙盾の心配 数年を経ずして穆王は四囲に出兵し、先ず江国、その後六国、蓼国を

復の兵を挙げるのを憂慮し、毎日遠方まで物見を出して探らせていた。 西乞、白乙とともに戦車四百乗を率いて晋に向かった。晋襄公は秦が報 穆公に、晋討伐軍を挙げて崤山の敗戦の報復をしたいと願い出て赦され、 話し変って、周襄王二十七年(紀元前六二五年)二月、秦では孟明視が

秦が攻めて来ていると聞くと笑って、

やった。 ら私兵を率いて微力を尽くしたいと願い出たので先且居はそれを許して で出て晋軍を迎え撃つ事にした。大軍が出陣しようとした時、狼瞫が自 と言って先且居を大将、趙衰を副将、狐鞠居を車右に任命し国境ませんとます。 「秦が『良馬を拝領』なに来たぞ」

て主君からの良馬をお受け取り下さ」とかけた言葉に孟明が返した言葉 8 3 年後良馬を拝領に来る」孟明が「崤の戦」に大敗し囚われたが幸運にも捕虜を 脱し逃げ帰る時。追手の陽処父が既に黄河の船上の孟明を呼び戻すために「船を返し

> と言って直ちに西へ進軍し、彭衙(現陝西省日水県東)でやっと秦軍に「秦が来るのを待つよりこちらから出て行くべし」 晋軍の出発のとき孟明等は未だ国境に達していなかった。 先且居は、

出遭い、両軍はそこで陣立てを行った。狼瞫は先且居に、

せて下さい」 日は功名には拘泥しないで以前の恥を雪ぎたいと思いますので力を試さ 「昔、先元帥に勇猛じゃないという事で任用されませんでしたが、今

先且居が車の高所に上がり秦軍の乱れを見て直ちに大軍を突入させた。 向う所敵無しで秦兵を大いになぎ倒した。鮮伯は白乙に殺されたが、 孟明等は防ぎきれず敗走した。 狼瞫は救出されたが体中に傷を受け大量 と言うが早いか、朋友の鮮伯ら百人と共に一直線に秦陣に斬り込み、

の血を吐き翌日死んだ。

晋軍は凱歌を歌って帰朝した。且居は襄公に、

もって西郭に葬り群臣みな葬送に参加させた。こういうところが人を奮 起させ才能を発揮させる襄公のいいところである。 と彼の功績を称えた。これを聞いて襄公は狼瞫を上大夫に対する礼を 「本日の勝利は臣の力ではなく狼瞫の力によるものであります」

史臣は狼瞫の勇猛を詩で称えている。 黄泉で再会しこれを知らば、先軫頭を下げるらん 用いられずとも妄りに怒る事なく 軽身敵に威を示す 壮なり狼車右 敵を斬ること鶏を割く如し 一死以って宿意を示し 秦師は為に壊滅す

孟明は敗れて帰国した。彼は死を覚悟していたが、穆公は意外にもこ

よう命じた。

労の迎えを出し、相変わらず国政を彼に託したのである(この戦いは彭衙の責任を自分が被り孟明等を全く咎める事なく前回と同じく郊外まで慰 の役とよばれる)。 孟明視は感激すると共に恥かしく思い、益々国政に

を糾合して秦国に攻入り、江と彭衙の二邑を取って凱旋した。昔、郭偃

もが孟明が晋軍を怖れているからだと思った。ただ一人穆公だけは彼を 孟明視は晋の攻撃を防ぐ軍隊の発動を要請しなかったので、周囲の誰

「孟明は必ず晋に報復する、今は時機が熟していないだけだ」

と群臣を静めた。

「今回恥を雪ぐ事ができなければ帰って来ない覚悟でございます」

と誓った。穆公も、

て民衆にあわせる顔が無い」 「わしも三度も晋軍に敗れ、

には十分な金を贈ったので将士はみな感激し士気は高くみなぎっていた。 と言い、五百乗の戦車を精選し吉日を選び出陣した。従軍兵士の家族

妻公はまた先且居に命じ、宋の大夫公子成、陳の大夫轅選、鄭の大夫婦と日軍の厳しい訓練を行い、大挙晋攻撃を期した。 しかしすぐその冬に晋 まで秦軍に三勝しそれが現実となったことになる。 が文公がなくなった時に占った卦の詞に『三撃三傷』とあったが、これ 励み、同時に家財を処分して戦没将士の家族の救済を行った。そして毎 深く信じて疑わず群臣に、 軍は蒲津関を出た。孟明は黄河を渡ったところで船をすべて焼却する 翌年五月、孟明は兵士の補充も訓練も完成したので、穆公に出兵を要 今回の出征を成功させなければ、帰国し を攻め落とした。 というので襄公は各部署に堅く守って戦うなと命じた。 「秦は重なる敗戦に怒りを発し今回は国の浮沈を賭け必死の覚悟で

穆公はいぶかって理由を聞くと、孟明は、

知らせ、軍心の必死の気持ちを奮い立たせるためです」 を焼却したのは、将士達に勇猛邁進あるのみで退路は断たれている事を たので士気が衰えています。勝てば何も河を渡る心配は要りません。船 と説明し穆公も承知した。孟明は自ら先鋒となり長躯攻め込み王官城 「軍は勝とうという気力がなければ勝てません、今まで何度も失敗し

議論は出兵して迎撃するかどうかに集中した。趙衰が進言した。 諜報が晋都絳州に届いた。晋襄公は家臣を大集合し対策を協議した。

ません。強硬にぶつかるのは避けて少し譲った方がいいと考えます。少 来ていると考えられます。しかも君主直々に出陣しており容易ではあり しやりたいようにやらせておけば治まるでしょう」 147

先且居も、

ときではなく、子余(趙衰)殿の言うとおりだと考えます」 まむ』の勢いがあります。戦が続き戦禍に苦しんでいますので今は戦う の敗戦を強く恥じていますし、三帥は皆大変な勇猛揃いで『討ちてし止 「窮鼠猫を噛むといいますし、しかも相手は大国です。秦君は今まで

秦将繇余はこの状況を見て穆公に

じた将士の遺骨を収集すれば雪辱になりましょう」 「晋は我々を怖がっています。この威勢に乗じて崤山へ行き国難に殉

晋軍には一人も出遭わなかった。秦軍は、堕馬崖、絶命岩、落魄谷等で と提言した。穆公はその意見に従って、軍を東崤に駐屯させた。途中

痛哭したので、三軍はこれに感動し涙せぬものはなかった。髯仙は詩に穆公は喪服を着て酒を注ぎ英霊を祭った。孟明視等の諸将は地に伏して遺骨を集め草を敷き、谷間の静かな所へ埋葬して、犠牲の牛馬を供え、

遺骨の埋葬は快挙に非ず「崤山険阻といえど本来戦死あるべきや曽て諫める二老は出師を泣く」今日その兵士を泣くは何ゆえぞ

なり穆公を「西戎の覇主」と称えた。史臣はこの穆公の心広き行為をみなり穆公を「西戎の覇主」と称えた。史臣はこの穆公の心広き行為をみ戎族の間に檄を飛ばし朝見を促して応じなければ攻撃することにしたら戎族の間に檄を飛ばし朝見を促して応じなければ攻撃することにしたらだうかと進言した。赤斑は孟明が勝ったと聞いて恐れをなし、檄文を一見て直ちに西方の二十数カ国を従えて朝見し、土地を献上して属国とどうかと進言した。赤斑は孟明が勝ったと聞いて恐れをなし、檄文を一ところで秦軍が晋に何度も破れていた頃、隣国の西戎主赤班が秦が弱ところで秦軍が晋に何度も破れていた頃、隣国の西戎主赤班が秦が弱ところで秦軍が晋に何度も破れていた頃、隣国の西戎主赤班が秦が弱ところで秦軍が晋に何度も破れていた頃、隣国の西戎主赤班が秦が弱といる。

て『千軍は得易く一将は得難し』と評したものである。

穆公の威名が周都に達し、周襄王は尹武公に、

穆公は孟明を疑わず任用し続けたので、亡くなって覇王と言われた。

(「千軍易得一将難求」『通俗編』 武功 )

えるか」
「秦は晋に匹敵し、その先祖は皆王室に功績がある。昔重耳が中夏(中「秦は晋に匹敵し、その先祖は皆王室に功績がある。昔重耳が中夏(中

とたずねた。尹武公は、

の恨みを買う事はないと考えます」
「秦は自ら西戎の覇主となっており、勤王と言う点においても晋には「秦は自ら西戎の覇主となっており、勤王と言う点においても晋には「秦は自ら西戎の覇主となっており、勤王と言う点においても晋には

さてこのあと如何なりますか、次回のお楽しみ。

と答えたので襄王はそれに従った。

4 冊封 冊書(皇的)命令書の一種を以て封爵を授ける事

#### 第四十七回

# 趙盾 秦に違背し霊公を立てる弄 玉 簫を吹き鳳凰に乗り

秦場公は二十カ国を并合しついこ西戌の覇者となっ

気持ちが孟明視に向いているのを知り、老齢による引退を申出た。

聡明になった。 笙 を吹くのが好きで誰に習ったでもなく独力で上手には女が満一歳になった時、習慣に従って大皿に色々な物を乗せてその子に随意に取らせたところ、その玉を取りこれで遊んで放そうとしない。の原石が献納されこれを磨かせると深い緑色の透明な美しい玉になった。話し変って、穆公には幼女がいた。ちょうどこの子が生まれた時、玉話し変って、穆公には幼女がいた。ちょうどこの子が生まれた時、玉

 高台にあったのでまたの名を鳳台ともいった。

ために多重の小楼を建ててここに住まわせこれを鳳楼と名付けた。楼は吹くと鳳凰の声のごとく響き渡った。穆公はこの娘をとても愛し彼女のなった。穆公は工匠に例の碧玉を加工させ笙を作らせた。弄玉がこれを

望は有りませんわ」

見つからなかった。穆公は八方手を尽くし捜したが希望に添う人はとはっきりと言った。穆公は八方手を尽くし捜したが希望に添う人は

笙と相和してあるいは高くあるいは低く消入るかのように流れてきた。透き通る音色は微風に乗って流れていった。ふと、ほのかに別な音色がぶ空をぼんやりと眺めていた。月が鏡のように明るいので侍女に香を焚ぶ空をぼんやりと眺めていた。月が鏡のように明るいので侍女に香を焚ぶ空をぼんやりと眺めていた。月が鏡のように明るいので侍女に香を焚ぶ空をぼんやりと眺めていた。月が鏡のように明るいので侍女に香を焚ぶった。

玉笙を枕辺に置き、無理に寝ようとした。うとうとしていると、西南のよりと空を眺めていた。いつの間にか月は傾き、香は尽きていた。彼女はながら窓にもたれて何か持っていた物を無くしたような気持ちでぼんやながら窓にもたれて何か持っていた物を無くしたような気持ちでぼんやながら窓にもたれを聞き不思議に思って吹くのを止めてそれを聞こうとすると弄玉はそれを聞き不思議に思って吹くのを止めてそれを聞こうとすると

「私は太華山はの主神です。天帝の命で私はあなたと夫婦になる事に凰の背に乗った美少年が天から降りてきて鳳台に立ち弄玉に声をかけた。に輝いた。と、頭に羽冠を頂だき身には鶴の羽毛の着物を着て美しい鳳方向に空が開け、雲に映えた五色の光彩がさっと射し込み、真昼のよう方向に空が開け、雲に映えた五色の光彩がさっと射し込み、真昼のよう

つになって宮、商・相和して耳に心地よくその和音に陶酔した。そし鳳凰が翼をひろげて鳴きながらひらひらと舞い、鳳凰の声と簫の音が一腰から赤玉の簫を取出し鳳台の欄干にもたれて吹き始めた。美しいなりました。ちょうど仲秋の明月にお会いできたのは宿縁です」

「笙が上手で私と合奏できる方をぜひ探して欲しいの、他には特に希 \*宮 商 五音階 107 回注 432 の一つ。中国音楽 日本音楽の基調をなす五の音か 山があるので太華山とも呼ばれる 太華山 華山 五房 一つ。一般に西岳いう。 陝西省華陰県南 華山の西に小華

て思わず彼に訊ねた。

「これは何の曲ですか」

《華山吟》の第一曲だよ」

「教えていただけますか」

「夫婦の約束をしたのだから当然教えてあげるよ」

かりにときめき、はっと目が覚めた。・・・ 夢だったのである。 まるで と言いながら前へ寄って弄玉の手をとった。弄玉の胸は張り裂けんば

本当に目の前であった事のようである

もとづき夢の中の様子を絵を描かせ、孟明視にその絵を持たせて太華山 「行かせた。ある村人が絵を見ていきさつを聞き、指を指して、 翌朝、弄玉はこの夢を穆公に話した。穆公は画工に命じて弄玉の話に

に澄み渡り聞く人の心を落ち着かせ、寝るのも忘れさせてしまいます。 変った人がやって来て、 庵 を結んで独りで住んでいます。 毎日下山し しかしどういう人なのかは分かりません」 て酒を買って独酌し、夜になると必ず簫を吹いています。簫の音は周囲 「山上に明星岩という懸崖がありますが、そこに七月十五日から一風

と孟明視に答えた。

をいただき羽毛の着物を着た若者がいた。 玉 貌 丹 唇、立ち居振舞いは孟明視は太華山に登り明星岩へたどり着いた。 果たしてそこには羽冠

名前を聞いた。 上品で飄々として俗離れしている。 孟明視はこの人はきっと仙人だと思い、近づいて拱手の礼をして彼の

らなる五音音階高い方から羽

徴 角

商客のお客と商

「私は姓は 蕭 名を史と申します。 あなたはどなたですか。 どういう

「私はこの秦国の右庶長百里視です。わが主君に笙をよくする愛娘が

こ用件で見えたのですか

てお迎えに参ったのです」 にご造詣が深いとお伺いし、わが主君がお会いしたいと、私に命じられ いて、この笙に合せる事ができる婿殿をさがしています。あなたが音楽

るほどではございません」 「私は音階が少し分かる程度で、他に取りえはなくご命令をお受けす

孟明は先に穆公に会い、事の次第を報告してから彼を引き合わせた。 と孟明視が言うと、蕭史も強くは拒まず一緒に宮城へ行った。 「ご一緒いただき主君にお会い下さればお分かりいただけます」

蕭史は鳳台に端座している穆公に拝謁した。

の段階で三分は気に入ったので、彼に席を与えてたずねた。 穆公は蕭史を見て姿が瀟 洒 で世俗を超越した非凡なものを感じ、そ 「臣は山村の匹夫でございますので、無礼の段何卒お許し願います」

「あなたは簫をよくされると聞いていますが笙もおできになります

か 「簫だけで笙はできません」

と蕭史は淡々と答えた。

いませんな」 「笙ができる人を捜しているのです。簫と笙は別物ですから娘とは合

を遣わして穆公に言った。 穆公はがっかりして孟明視に目くばせして下がらせた。 弄 玉 は侍女ぼくら

「簫と笙は同類の物です。お客人が簫がお上手なのであれば、試しに

150

吹いてもらってから判断することになされば如何ですか」 穆公はそれもそうだと思ってすぐ蕭史に簫の演奏を頼んだ。

が飛来して鳳台の傍の木に集まり、たくさんの鳥が声を合せて鳴き合っ まり、第三曲になると空に一対の白鶴がひらひらと舞い、数番 の孔雀 き始めるとそよそよと清風が起こり、第二曲に入ると彩雲が四方から集 によって人々の目を悦ばせる希代の珍品であった。 蕭史が第一曲目を吹 蕭史は赤い玉簫を取出した。その玉簫はその温潤で柔らかい紅い輝き

穆公は大変喜び、弄玉も帳の中からそっと覗いて、

と非常に喜んだ。 「此の方だわ、私の心に思っている方は

穆公は更に笙と簫の来歴をたずねると蕭史は朗々とそれに答えた。 「笙は『生』につながり、女媧が作った物でそれは『発生』を意味

しその律は太簇です。簫は『粛』につながり伏羲氏が作った物で『粛清』 を意味しその律は仲 呂 セです」

穆公は興味を示し更に詳しい説明を要求した。

さが異なり鳳凰の羽根ようで、その音色は鳳凰の声のように美しい音色 願います。 伏羲氏 ga 発案したもので竹を並べて作ったものです。 竹の長 **一臣ができますのは簫ですので簫に限って申し述べます事をお許し** 

( 太簇以下六音、陰の六呂 仲呂以下六呂。 日本の邦楽では壱越 断金 平調 勝絶 \* 太簇 仲呂 音楽が十二律の一つ。十二律は音名 五音は音階 中国では陽の六律 共に泥をこれて人を作たという "女媧 伏羲 中国古伝説」の女帝 伏羲とは兄弟とも夫婦とも 人首蛇身 伏羲と

下無 双調 鳧鐘 黄鐘 鸞鏡 盤渉 神仙 上無の十二音

の簫とは異なります」 にしました。長い物を簫、短いのを管と呼びます。ですから今の簫は昔 もいい音です。また、後に簫管が多管で煩雑なので、一管だけの竪吹き を作らせました。これも単純な形ですが、音色が鳳凰の鳴声に似たとて います。その後、黄帝が伶倫に昆渓へ竹を採りに行かせ横に七孔の『笛』 大小総称して簫管といいます。通し管になっているのを『洞 簫』とい 尺四寸です。小さい物は『頌 簫』といい十六本で長い管は一尺二寸。 です。大きい物を『雅簫』といい二十三本の竹管を並べ最も長い竹は

穆公がどうして珍しい鳥を呼ぶ事ができるのかと問うと、

て来るのです。 昔帝 舜 が 『簫 韻』という簫の曲を作曲し演奏した時も しい音色が出ます。鳳凰は鳥の中の王様ですからたくさんの鳥が集まっ 「このように簫は簡単になっても音は変らずやはり鳳鳴のように美

と答えた蕭史の立板に水の如き受答え、大きく明瞭な声に、穆公はま

ですから他の鳥が集まっても特に不思議な事ではございません

盲目の楽官には嫁がしたくはない。あなたの妻にさせたいのだが すます彼が気に入り、蕭史に言った。 「わしには可愛く思っている 弄 玉 という音楽をよくする娘がいるが、

「わたくしは元来山野の人里離れたところに住んできた者で、とても

なたの簫の音は天地に響き渡り万物を感動させ、笙よりも更に非凡です 王侯のような高い身分には自信がありません」 娘は以前から笙を吹ける人を夫にしたいと強く希望していたが、あ

設営してくれた良縁ではないか、是非承知してほしい」 ばらしい。それに娘にも夢告げがあり今日はちょうどその仲秋だ。天が

蕭史はそれ以上断わる事もなく感謝して受けた。 穆公が太史に結婚の

吉日を調べさせた

楼に入りその夜成婚した。若い夫婦が意気投合したのは言うまでもない。と太史もいう。 蕭史は湯あみして新しく下賜された衣冠に着替えて鳳「今夕は仲秋。上に月円満、下に人円満。正に今日が吉日であります」

第に穀物を食べなくてもよくなった。蕭史は弄玉に簫曲『来鳳』の曲を時たま数杯の酒を飲むだけであった。弄玉も彼から導引術で学び、次の、政治には関与しようとせず、毎日鳳楼にいて、調理した物は食べず、翌日穆公は蕭史を中大夫に封じた。蕭史は朝廷にその名を連ねたもの

教えてやった。

「わたしは本当は天上界の仙人で、人間界の史籍が散乱しているからを理しろと天帝のご命令に従って人間界に下りて来たんだ。周宣王十七年五月五日に、周の蕭氏の家に蕭三郎として人間界に延生し、宣王の人は史籍記載に功があったとしてわたしが典籍の遺漏を補完したので、周に降りてきて百十数年になる。上帝は私を太華山の主神に命じられ、そにたと宿縁あって簫の音色を仲立ちに結婚した。しかしもう長くは人間世界には居られないんだ。龍鳳が迎えに来たので、天上へ帰らなければ世界には居られないんだ。龍鳳が迎えに来たので、天上へ帰らなければ世界には居られないんだ。龍鳳が迎えに来たので、天上へ帰らなければ世界には居られないんだ。龍鳳が迎えに来たので、天上へ帰らなければ世界には居られないんだ。龍鳳が迎えに来たので、天上へ帰らなければ世界には居られないんだ。龍鳳が迎えに来たので、天上へ帰らなければ世界には居られないんだ。

「もう仙人になったのだからこれからは人間世界の家族の感情はも弄玉は父親に別れを言おうと思ったが、蕭史は引止めた。

そう言って蕭史は赤い龍に乗り弄玉は紫の鳳凰に乗って鳳台から飛てないのだよ、はっきり捨てなきゃ」

ここにより、「東龍」という語源はここにある。 (明・清時代の言葉で現立派な娘婿を『乗龍』という語源はここにある。 (明・清時代の言葉で現び立っていった。

翌朝、内侍が二人のことを穆公に報告した。穆公は暫らくぼんやりとこの夜、太華山の頂上で鳳凰が鳴く声が聞こえたという人がいた。代では古語のようである)

しだってこれまで戦って得た山も河も、破れ靴を捨てるようにきっと簡「神仙の事はやはり本当に有るんだな、もし龍鳳が迎えに来たら、わ

して、溜息をつき悲しそうに、

は明星岩に祠を建てて祭り、今もこれを『蕭女祠』と言っており、祠のと言い、太華山を訪ねさせたが、杳として跡はわからなかった。穆公単に捨ててしまうだろう」

中から時々鳳凰の声が聞こえるという。

龍は天路を走り 鳳は秦の関所を越えてゆく 大粒を捨てどんどん登る雲霞の中 (火粒 調理した穀物)火粒を捨てどんどん登る雲霞の中 (火粒 調理した穀物)水道を捨てどんどん登る雲霞の中 (火粒 調理した穀物)

身は往きて帰らず 時に簫の音のみ聞こえ来し

8

導引術 中国古代の腹式呼吸と手足の屈伸を合わせた一種の養生法

した。南北朝時代を代表する詩人で謝霊運と並び称され「鮑参軍集がある。 鮑照、南北朝宋の人。前軍参軍の書記らたため鮑参軍ともいわれ江陵の乱で戦死

弄玉は秦家の娘 蕭史は仙境の童子また江総º1も次のように詩う。

満月来たらば鳳は楼を後に天空へ去る

佳人美少年相期して 紫煙の中へ飛去りぬ 束縛離れ笑み浮べ 愛の言葉を交わしつつ

夫に封じて厚遇した。

夫に封じて厚遇した。

大に封じて厚遇した。

大は共に賢徳兼ね備え、人々は『三良』と称し、穆公は彼らを大い、三人は共に賢徳兼ね備え、人々は『三良』と称し、穆公は彼らを推薦した。 三人は共に賢徳兼ね備え、人々は『三良』と称し、穆公は被馬と推薦した。 三人は共に賢徳兼ね備え、人々は『三良』と称し、穆公は被馬と推薦した。

仙境へ行かれたのだと考えた。在位三十九年、享年六十九歳であった。 程(月宮)に遊んだが、突然骨まで沁みる肌寒さを感じ目が覚めた。風邪った。夢の中で蕭史と弄玉が鳳凰に乗って彼を迎えに来て一緒に広寒宮った。夢の中で蕭史と弄玉が鳳凰に乗って彼を迎えに来て一緒に広寒宮った。夢の中で蕭史と弄玉が鳳凰に乗って彼を迎えに来て一緒に広寒宮った。夢の中で蕭史と弄玉が鳳凰に乗って彼を迎えに来て一緒に広寒宮った。夢の中で蕭史と弄玉が鳳凰に乗って彼を迎えに来て一緒に広寒宮った。 周襄王の三十一年(紀元前六二一年)二月

> 穆公が最初に娶った晋献公の娘が生んだ太子罃が即位した。すなわち 東公である。穆公は雍の地に葬られ、当時の西戎の習慣に従い百七十 秦康公である。穆公は雍の地に葬られ、当時の西戎の習慣に従い百七十 大を殉葬し、その中に子車氏の三人も入っていた。人々はこれを哀れ 大。『黄鳥』の詩を作った。それは『毛詩 国風』。に載っている。穆公 が三良を殉死させた事は後世の人から、あたら賢者死なせ後々のことを が三良を殉死させた事は後世の人から、あたら賢者死なせ後々のことを が三良を殉死させた事は後世の人から、あたら賢者死なせ後々のことを が三良を殉死させた事は後世の人から、あたら賢者死なせ後々のことを が三良を殉死させた事は後世の人から、あたら賢者死なせ後々のことを が三良を殉死させた事は後世の人から、あたら賢者死なせ後々のことを が三良を殉死させた事は後世の人から、あたら賢者死なせ後々のことを が三良を列死させた事は後世の人から、あたら賢者死なせ後々のことを が三良を列死させた事は後世の人から、あたら賢者死なせ後々のことを が三良を列死させた事は後世の人から、あたら賢者死なせ後々のことを でいないと非難を受ける事になった。ただ、宋の蘇東坡(蘇軾)は穆公

て、庶弟の公子楽を陳に仕官させた。この年、趙衰、欒枝、先且居、胥臣話し変って、晋襄公の六年(紀元前六百二十一年)、子の夷皋を世子に立話し変って、晋襄公の六年(紀元前六百二十一年)、子の夷皋を世子に立

古人は望まず、今人の感傷を。

窓 毛詩は詩祭ごと。『詩経 国風の秦風に「黄鳥の詩がある。「交交黄鳥 棘于止い というのでした(『史記 田僧列伝的 この 有息百主の 英傑なり 彼の 墓穴を前にして恐れ震えり 蒼き天よ なで 後劉邦の 呼びかけに食客 二人と投降しようとしたが途中で自刎してしまった。劉本の後劉邦の呼びかけに食客 一人と投降しようとしたが途中で自刎してしまった。劉本の後劉邦の呼びかけに食客 一人と投降しようとしたが途中で自刎してしまった。劉本の後劉邦の呼びかけに食客 一人と投降しようとしたが途中で自刎してしまった。劉本は彼を厚く葬った。その食客 一人と投降しようとしたが途中で自刎している。劉本は後の職分の権がある。「交交黄鳥、棘手止いるみ殉死した(『史記 田儋列伝

りょうえきじ きていほ せんと 階が空いた。翌年軍を夷に大集合し、二軍を廃し元の三軍に戻し、士穀と階が空いた。翌年軍を夷に大集合し、二軍を廃し元の三軍に戻し、士製と 等の老臣達が相前後して亡くなった。相次いで四卿が亡くなったので位 

の元帥、趙衰の子趙 盾をその補佐、箕鄭父を上軍の元帥、荀林父をそと進言したので、襄公もその意見に従い、結局狐偃の子狐射姑を中軍 せんから、にわかに大将にすると人心がついて来ない恐れがあります」 ません。しかも士穀は位はまだ司空で梁益耳とともにまだ戦功がありま

狐

. 趙の両家が晋には大功がありますからその子を外すことはでき

馬臾駢が 先蔑を下軍の元帥、先都をその補佐とした。ところが狐射姑は

「『師(軍)は和ありて勝利あり』と申します。この三軍の元帥はみな

成得臣は強引驕慢のためにわが国に敗れました。他山の石とすべきだと ご相談なさりながら謙虚になさった方がいいのではないでしょうか。楚 新しい方ではなく代々の重臣の方々ばかりであります。虚心に皆さんに

と諌言すると、射姑は怒りを爆発させ、

考えます

「わしの号令が始まったばかりではないか、匹夫が兵士の心を緩める

ようなつまらぬことをぬかすな」 ・ こうこう できる せんこく といって百回の鞭打刑に処したため、人々は狐射姑に不満を募らせた。 方、士穀、梁 益耳は先克に登用を阻まれた事を知って彼を恨んだ。

先都も上軍の元帥になれなかったのでやはり憎んでいた

太傅陽処父は使者として衛国へ行っていたので本件には関与してな

かったが、帰国して狐射姑が元帥になったことを聞き密かに襄公に進言 「狐射姑は柔軟性に欠け民心を得られていないので大将の才がある」。

した。賢者を尊び有能なる者を用いるべしと国法にもございます。元帥 その子の盾と付き合って彼が賢良かつ有能な人材である事がわかりま とはいえません。臣が昔、子余殿(趙衰)の軍に補佐として従軍した時、

を選ばれるのでしたら盾がよろしゅうございます」 襄公はその進言を採用した。狐射姑は未だ元帥を改易される事は知ら

ず、機嫌よく中軍を統率していた。 裏公は彼を字で呼び、(字で呼ぶのは敬意を含む)

今日からそなたが盾の補佐をするように」 **賈季 (狐射姑の字)、これまでわしは盾にそなたの補佐をさせたが、** 

と言い渡した。狐射姑は何も言わないで唯々諾々退出した。襄公は中

そのままである。趙盾はこの時から国政を担当し政令の大改正を行った 軍の元帥を趙盾に、狐射姑をその補佐とすると発表した。上軍、下軍は

なるのではありませんか」 「あんなにはっきりと言うと忠は忠ではあるけれど恨みを買う事に

と心配して陽処父にいう人があったけれど陽処父は 「国のためになるのならわたしは私怨に対し逃げ隠れはしない」

翌日、狐射姑は一人で襄公に会って詰問した。 と毅然と言った。

任せいただきました。ところが突然改易されましたが、臣と致しまして

ので人々は喜んで彼に従った。 一殿は父祖の微労にご配慮いただき、臣不肖にもかかわらず軍政をお

ら君主をお迎えしても親密さが増すわけではありませんが、秦からお迎

「そうではありません。陳は小国で遠く、秦は大国で隣国です。陳か

いたという事なのでしょうか、あるいは他に理由があるのでしょうか」は何が悪かったのか分かっておりません。父偃の功積が趙衰殿に劣って

と馬鹿正直に答えた。狐射姑はそれを聞いて黙って引下がった。適だと言ったから代えたまでだよ」「他でもない、陽処父が、あなたが民心を得ていないから大将には不

趙盾および諸臣を枕元に呼んで言った。
その年の八月、襄公は病にたおれ、臨終のまぎわに太傅陽処父、上卿と思聞正直に答えた。初身女にそれを聞いて黙って弓下かった

補佐し、隣国との友好を図り、覇業を失わないようにお願いしたい」とも永の別れとなる。太子の夷皋はまだ幼いので諸卿協力してよろしく持ちとしては負けぬものがあるが、如何せん我が命も長くはなく、諸卿「わしは父の覇業を受継ぎ、狄、秦を破って来た。まだ諸国に対し気

翌日、群臣は太子を君主に立てようとした。ところが趙盾は諸臣はこれを拝命すると間もなく襄公は亡くなった。

承いただくのは如何でしょうか」ておられ立派に成長されておられるので、この方をお迎えして大位を継ておられ立派に成長されておられるので、この方をお迎えして大位を継てるのは国として不利であります。杜祁様の子公子雍殿は現在秦に仕えてるかもしれない国家多難の時で、幼君を立「今は狄、秦が報復してくるかもしれない国家多難の時で、幼君を立

と趙盾に対抗したが、保がありません。お迎えするのに朝出発すれば夕方には着けます」保がありません。お迎えするのに朝出発すれば夕方には着けます」陳に仕えておられますが陳はわが国と友好関係にあり秦のように怨恨関

と提案した。群臣に反対はなかった。しかし狐射姑は、

お迎えすべきです」 えすれば秦の恨みを解き相互援助の関係を取戻せます。絶対公子雍殿を

出発前に荀林父が引止めた。子雍を迎えるために先蔑を正使とし士会を副使として秦国へ派遣した。子雍を迎えるために先蔑を正使とし士会を副使として秦国へ派遣した。と趙盾に否決され、議論は終わった。趙盾は君主死去の報告並びに公

「見至女権よ消毛が巴屋してる、「又乱など記しりようがない」つかなく反乱のもとです。 仮病を使って行くのを止めたらいかがです」「夫人も太子もおられるのに他国から君主を迎えるのは、 成功がおぼ

先蔑は無視して出発した。林父は友人に心配そうに言った。『現在政権は趙氏が把握してる、反乱など起こりようがない』

行ったまま帰ってこられないのではないかと心配なんだが・・・」「士伯(先蔑)とは同僚だから言わざるを得ないんだが、聞かない。

「狐と趙は同等のはずだが、今は趙あって狐無きが如くだ」一方、狐射姑は趙盾が自分の意見を採らなかったので、

させた。狐射姑はますます頭に来て、公孫、杵臼に命じ百人の家兵を従え途中で待伏せ公子楽一行を皆殺しに公孫、杵臼に命じ百人の家兵を従え途中で待伏せ公子楽一行を皆殺しにえにやった。直ぐその事を趙盾に知らせるものがあった。盾は食客のと怒り、君主擁立問題で一つの勝負に出てひそかに陳国へ公子楽を迎

ろう」
が機だ。盾が公子楽を殺したんだから、わしが処父をやっても文句なか好機だ。盾が公子楽を殺したんだから、わしが処父をやっても文句なか父は今城外にいて諸侯の会葬を取り仕切っているから無防備で刺すには (盾) に権限を持たせたのはもとはといえば陽処父なのだ。処「趙孟(盾)に権限を持たせたのはもとはといえば陽処父なのだ。処

と言って弟の狐鞠居と陽処父謀殺を相談した。

「この件わたしに任せてください」

鞠居はそう言って家人を伴い夜半に盗賊に扮して塀を越え処父の宿まっまっていくすずしに任せて、するり」

者がいて趙盾に知らせた。 追いついて殺し首にして帰った。陽処父の従者に狐鞠居を見知っている 舎に侵入した。処父はまだ明かりをともして本を読んでいた。鞠居はま っすぐ処父に襲い掛かり剣は肩を突いた。処父は驚いて逃げたが鞠居は

盾は信じないふりをしてその者を叱りつけた。 「陽太傅は盗賊に殺されたのだ。みだりに人を誣告するものではない」

十月、曲沃で襄公の葬儀を行なった。襄公夫人穆嬴は太子夷皋と共 そして処父の遺体を丁寧に葬った。九月中旬の事である。

に葬送を行なって、趙盾にいった。

いってこの子を捨てて他国から君主を迎えようとするのです」 「これは国家の大事でして、盾一人の私事ではございません」

宣子(盾の 諡 )は廟の中で大夫等に言った。 と毅然と言った。葬儀が終わって亡き君主を奉じて太廟に入った。趙

まいました。このままでは誰もが危険ですから彼を討たざるを得ません」 柩がまだ埋葬されていないというのに、狐鞠居は勝手に太傅を殺してし 「先君は賞罰をはっきりする事で諸侯に覇を称えられました。 先君の

して陽処父の首を探し出し遺体と縫い合わせて葬った。 狐射姑は趙盾に

そう言って狐鞠居を捕え司寇(警察)に渡して斬刑とし、家宅捜査を

て遂に翟国は滅びた。

て長 翟といわれていた。力は千鈞を挙げ、銅の頭、鉄の額というたい を頼った。 処父殺しがばれていたのを知り、怖れてその夜の内に出奔し翟国主白暾 \$197cmをの頃翟に僑如という背丈が一丈五尺 (3.4m) にもなるのっぽがいその頃翟に僑如という背丈が一丈五尺 (3.4m) にもなるのっぽがい

> 断し一計を進言した。 満天の霧が凍りつく厳冬である。大夫富父終甥は間もなく雪になると判 に攻入った。魯文公は叔孫得臣を元帥としてこれに当たらせた。 時は へんな石頭で石のつぶても全く問題にしない。白暾は彼を大将にして魯

ると僑 如は出て戦った。負けたふりをして逃げ出すと奮い立って追撃 全く判らなくなった。そこで富父終甥は一軍を率いて僑如の陣を急襲す けておいた。その夜果たして大雪になり地面を平に覆い穴を掘った後は そう言って要道に数箇所深い落とし穴を掘り草で蔽って上に土を掛 「長翟の勇猛は尋常でなく、知略によらなければ力では敵いません」

「先君にどんな咎があったのかしら。その嫡子に何の罪が有るからと よく落ち込んだ。叔孫得臣は伏兵を指揮し翟兵を散々蹴散らかした。終 き穴の際を通って逃げたが、僑如はその後を追って深い落とし穴に勢い して来た。終甥はしるしを残して来ていたのでちゃんと道の見分けがつ

ょうど長男が生まれたばかりだったので将来軍功を得るようにと叔孫 防風氏®の骨もこれ程ではなかったろうと皆驚いてしまった。 得臣はち **写えず** 甥は戈で僑如の喉を刺して殺し特大の車に乗せて帰ると、見た者は 僑 如と名付けた。この後、魯は斉、衛と連合して翟を討ち白暾は敗死し

げて行った。趙盾は、 狐射姑は翟が滅びてしまったので、赤翟の潞国へ大夫酆舒を頼って逃ニャニ

「賈季 (狐射姑) は父上と一緒に国外に逃亡し先君のお側で浅からぬ功

といる(国語魯子 で禹は彼を誅殺した。あまりに長身のため死体を車に載せたところいっぱいになった 防風氏 伝説の部落質点の名 夏禹が会稽山に諸神を招いた時 防風氏が遅れたの

の男たちを集めて出発しようとすると、彼らは、と言って曳騈に彼の妻子を潞国へ送り届けるように命じた。曳騈が家

に対して言った。 と声を揃えて言った。 と声を揃えて言った。 と声を揃えて言った。 と声を揃えて言った。 と声を揃えて言った。 と声を揃えて言った。 と声を揃えて言った。 と声を揃えて言った。 と声を揃えて言った。 と声を揃えて言った。

まったら元帥を怒らせる事になる。人の弱みにつけ込むは仁に非ず、人頼して下さっているからなんだ。届けろと言っておられるのに殺してし「それはだめだ。元帥が妻子を届けるようわしに託したのはわしを信

切に送り届け紛失したものは全く無かった。
東駢はそう言って狐射姑の妻子を車に乗せ、家財を細かく記載して大の怒りを買うは智に非ず」

射姑はこれを聞いて、

趙 盾 はこの時から臾駢の人柄を重視し重用しようという気になった。と大きくため息をついたものである。と大きくため息をついたものである。とったのも仕方がない」

さて、先蔑は士会と共に、公子雍を君主とするために秦へ迎えに行っまんで、

「父君は二人の晋君の即位に協力しましたが、わたしも公子雍殿を擁

秦康公はそう言って喜び、白乙丙に四百乗の戦車を預け公子雍を晋に立する事になり、晋の君主を代々わが国から出す事になりますね」

一方、襄公夫人の穆嬴は襄公の埋葬を終わって帰朝し、毎朝夷皋を胸げる。

送り届けさせた。

に抱いて朝堂に来て泣き、

「先君のご臨終の時この子を卿にしっかり補佐するように託されまと諸大夫に訴え、朝議が終ると趙氏のところへ行き趙盾に泣きついた。「この子こそ先君の御意の子です。どうして捨てられたのでしょう」

なら母子で死ぬしかありません」るのならこの子はどこへやるつもりですか。この子が君主になれないのした。亡くなられてもその言葉は耳に残っています。もし他の人を立て

えるのは間違いだと言い出した。 人々はこれを聞いて穆嬴を哀れんで趙盾を非難し、大夫たちも雍を迎

「士伯がすでに秦へ公子雍殿を迎えに行っている。なのに今更太子を

趙盾も悩んで郤缺に相談した。

立てるなんて言えるわけないんだが」

「それなら先に君主を決めておいて使者を出した方が名分が立つだ起こります。早急に使者を秦に送り士伯に止めさせるのが最良でしょう」「今幼子を捨て長男を立てた場合、後日幼子が成長すると必ず反乱が

やっと七才であった。

ろう

を擁して公子雍を送って黄河まで来ているというのである。大夫たちは、百官の朝賀が終わったところへ突然諜報から報告があった。秦が大軍

こちらが信義に反しているのだから秦に謝るべきではないかと言ったが、

ら軍を出して阻止するしかない」 いと決めたからにはもう敵国である。謝りに行っても聞かないだろうか 「公子雍殿を擁立するのであれば秦は賓客であるが、公子を受容れな

の将で副将兼務、先蔑が秦へ行っているので先都も下軍の将で副将兼務 は中軍を率い、先克を狐射姑の代りの中軍副将に起用し、荀林父を上軍 と言って、上軍の元帥箕鄭父には霊公を補佐して国都を守らせ、自ら

に晋軍へやって来た。盾が太子を君子に立てたことを話すると先蔑は目 公子を迎えに来ていると考えていて警戒をせず、先に先蔑が趙盾に会い すでに黄河を渡り令狐に駐屯していた。晋軍が来ていると聞いてもまだ、 とし、三軍を整え秦軍を迎え撃つため廑陰まで出て駐屯した。秦の軍は

を怒らせて、

して我々の入国を拒絶しようと言うのはどういう了見だ」 とかんかんに怒って袖を払って出て行き、荀林父に言った。 「公子をお迎えしようと言ったのは誰なんだ。今になって太子を擁立

「あなたの意見を聞かなかったためにこんな事になってしまったよ」

「あなたは晋の家臣ですのに、晋を捨てて何処へ行くんです」

人だし、秦は雍殿を補佐してくれている。とても自分から前言を翻し故 「わしは命令を受けて雍殿を迎えに秦へ行った限り雍殿がわしの主

国での富貴を望む事はできん」

と秦軍が攻めてくると思う。夜に紛れて秦を不意打ちすべきだ」 そう言って光蔑は秦軍へ帰って行った。趙盾は、 「士伯(先蔑の字)は晋に残らず秦に帰ったからには、明日にでもきっ

> 令狐の背信ともいわれる) もなく慌てて逃げ回った。晋兵は追撃し、白乙丙は必死で戦い死地を脱 秦軍は驚いて夢から醒めたが、馬に甲を被せることもできず戈を執る間 くませて粛々と進み三更に一斉に吶喊し、鼓角を鳴らして秦陣を襲った。 したが公子雍は乱戦の中で死んでしまった。(この戦いを令狐の戦いという。

人馬共に十分腹ごしらえをさせ仮眠を取らせ、夜なかに馬にバイをふ

「趙 孟(盾)はわしとの約束を破ったが、わしは秦に背く事はでき

先蔑はそう言って秦に亡命した。士会も、

「わしは士伯殿の部下だ、士伯殿が秦へ行ったのだから、一人晋に帰

ることはできない」

と言って秦軍に随いて秦へ行った。秦康公は二人を大夫に取立てた。 「以前賈季(狐射姑)が翟へ出奔した時、相 国は同僚の義によって彼

たいと思いますが」 と同僚ですから同僚の誼で、相国にならって彼らにも妻子を返してやり の妻子を送り届けてやりました。士伯(先蔑)、随季(士会)はわたくし

すぐに衛士に命じて両家の家族と家財を秦へ送り届けさせた。

「あなたの言う通りだ、わたしもそうしてやりたい」

胡曽先生が詩の中で言っている。

**髯翁も趙宣子が軽卒に公子雍をむかえようとしたために客を敵にして** 近年世間の人情は刻薄なるも 友誼に関してはどうであろう 誰が亡命者に妻子を届けよう 同僚思う強き友情あればこそ

しまった事を非難している。

158

客敵瞬時に逆転せり 趙宣の国家経営は如何なるものか 碁打てば必ず迷いは起るなり 嫡子有りて何ぞまた外に求めん

軍の元帥に昇格してから士穀、梁益耳は兵権を失ったので箕鄭父さえ趙 ところで、箕鄭父と士穀、梁 益耳は以前から大変親しい。趙盾が中相談し彼の田禄を剥奪した。蒯得はこの事を非常に恨みに思った。 先克は軍法に照らし斬ろうとしたが、諸将がとりなしをするので趙盾と を貪って無理に軍を進め、逆に秦軍に破れ戦車を五乗失ってしまった。 この一戦で各軍の将は皆捕虜を捕えたが、先克の部下の猛将蒯得は功

迎え入れる事にすれば、大権は我われの掌中に入るというものだ」 ないだろうから、我われが内応して趙盾に反旗をあげ夷皋を廃し雍殿を ど秦が大軍で公子を送ってきている。両軍が対峙すればすぐには解決し と話し合い、相談は纏まった。 鄭父が令狐の戦で留守を言い渡されたとき、士穀、梁益耳が集まり、 「趙盾は人無きが如くに将の登用罷免を勝手にやり過ぎる。今ちょう

盾に不満を持っていた。

さてこのあと如何なりますか、それは次回のお楽しみ。

### 晋五将 先克を刺して国を乱し 寿余 秦を欺き士会を迎える

れた蒯得もその不満を士穀に訴えた。 秦に亡命したことで趙盾を怨んでいた。敗軍の責任で先克に田禄を奪わ にはからんや、趙盾が秦を破って凱旋して来たのでますます憤懣がつの 部から反乱を起こして 趙 盾を引きずり下ろそうと思っていたのに、あ っていった。下軍の副将だった先都も、主将の先蔑が趙盾に裏切られて 箕鄭父と士穀、 梁 きょうとと まないほ しこく りょうえきじ こく りょうえきじ

をやっちまえば趙盾は孤立する。それにはまず子会(先都)を仲間にい 159 が完全にコントロールできるのは中軍だけだから、決死隊を作って先克 「先克は趙盾の後ろ盾を恃んでそういうことを平気でやる男だ。趙盾

れなきや」

と士穀がいうと

と蒯得はすかさずそう言った。士縠はそれを聞くと蒯得の耳元で、 「子会殿は主将(先蔑)を趙盾に売られてやはり怨んでいますよ」

「それなら簡単だ、これこれしかじか・・・。彼にそう言えば事は成

ったようなものだ」

と言うと、蒯得は喜んで、

「すぐに行ってそう言いましょう」

と言って先都を訪ねた。先都はすぐに、

「趙孟(盾)は士季(士会)を裏切り秦軍を破ったような信義の無い

男だ、一緒に仕事はできん」

と言い出したので蒯得は早速士穀の話を持ち出した。 「本当にそうなったらわが国は万々歳だよ」

先都は蒯得の話を聞くと喜んでそう言った。

が賊に襲われて殺されたと知って非常に怒り、司寇に五日以内に犯人を のを待っていて、隙を見て一斉に襲い掛かって刺し殺した。趙盾は先克 ため箕城へ出かけた。先都は家兵を箕城の外に伏せ、先克が通り過ぎる 冬が終わり新春になろうとする時である。先克は先軫の祠を参拝する

伝えた。盾は直ちに武装兵と戦車を集め、待機させた。先都はこれを聞 族滅亡の恐れがある大変な事だと驚いて臾駢に密告し、駢は更に趙盾に うそそのかした。梁益耳は酒に酔ってそれを梁 弘に漏らした。弘は一 逮捕するよう厳命した。 先都らは慌てて蒯得と相談し、士穀、梁益耳等に急いで事を起こすよ

かいとく きていな しこく 方が先に曳駢に命じて先都の家を包囲し、都を捉えて投獄した。梁 益耳、方が先に曳駢に命じて先都の家を包囲し、都を捉えて投獄した。梁 益耳 挙兵しようとした。趙盾は逆に使いを出して先都の謀を箕鄭父に知らせ、 蒯得は慌てて箕鄭父、士穀の四家の家兵を集めて先都を救出するために 反乱を起こすことになると言って躊躇して決めかねていた。 結局趙盾の 出すよう催促した。しかし箕鄭父は元宵節。の晋侯主催の酒宴に乗じて いて謀が漏れてしまった事を知り、急遽士縠のところへ行き直ちに兵を

いようだな 「趙孟がわしに参内を要請して来るという事は、わしは疑われていな 彼にその件で相談したいから参内してもらいたいと要請した。

鄭父はそう言って身軽な格好で参内した。

事を心配して、参内を要請するふりをしたものである。鄭父はそれが謀 元々これは箕鄭父が上軍の元帥だから衆をそそのかして乱を起こす

荀林父、郤缺、欒盾に命じてそれぞれ軍を率い分担し士穀、梁 益耳、蒯じきなりは、ばきらいるとと。 がは 趙盾は朝房(朝廷の控え室)で彼と先都の扱いを協議した。 一方密かに 得の三人を逮捕投獄させた。三将は朝房へ報告に来て、荀林父が大声で 計だとは知らず平然と参内した。

「箕鄭父、お前も反乱者の一味じゃないか。まだ牢獄に入ってないの

怒鳴った。

守っていて反乱に加担などしていない。揃いも揃ってどうしてわしを処 「わしは留守居役だったから、三軍が外に出ていたときは一人で城を

遅いわ。つべこべ言うな」 「先都、蒯得を待っているのかもしれないが、謀叛を起こすにはもう

刑しようというのだ」

投獄された事を聞き、霊公にたずねた。 幼いから趙盾の言うなりである。霊公が朝廷から戻ると襄夫人は五人が 趙盾はこれを霊公に報告して先都等五人を誅殺しようとした。 霊公は 箕鄭父も首をうなだれ投獄された。

「相国の処置はどういう事でございましたか」 「相国は、彼らの罪は皆誅殺にあたるといったぞ」

「これは彼らの権力争いで、殿の君位を簒奪しようというものではあ

だけを罰すればいいので、全員を殺す事は無いでしょう。近年老臣が次々 りません。しかも先克を殺した首謀者は一、二に過ぎませんから首謀者

翌日霊公は襄夫人の言ったことを趙盾に話した。は朝堂に空白ができて心配です。よくお考えになられますよう」なくなって人材が少なくなっている中で、一挙に五人も殺してしまって

反逆罪で処刑し、先克の子先縠を大夫に登用したので人々は趙盾の厳し盾はそう答えてただちに先都、士穀、箕鄭父、梁益耳、蒯得の五人を「大臣を勝手に殺すような者を赦すと後々の懲らしめになりません」

さに恐れをなした。

狐射姑は潞国でこのことを聞き驚いてつぶやいた。

ある日、潞の大夫酆舒が狐射姑にたずねた。「よかった。わしは死なずに済んだよ」

「趙盾と彼の父親の趙衰と比べたらどちらが賢人といえますか」める日、潞の大夫鄷舒が狐射妃にたずねた。

盾は真夏の太陽のようで人々は彼の厳しさに怖れをなしましょう」「趙衰は例えば冬の太陽で人々は彼の温かさを慕っていましたが、趙

「卿は宿将ですがやはり趙孟を怖れているのですか」

と酆舒は笑って言った。

大夫范山が進み出て意見を述べた。
大夫范山が進み出て意見を述べた。
諜報から新晋君が即位し趙盾が政権を独占し、諸大夫が互いに争って
諜報から新晋君が即位し趙盾が政権を独占し、諸大夫が互いに争って

れます」
きません。この隙に出兵し北方に攻入れば誰も阻むものはいないと思わきません。この隙に出兵し北方に攻入れば誰も阻むものはいないと思わば著は幼少ですし、家臣たちは互いに争っていて諸侯にまで目が届

穆王は喜んで、闘越 椒を大将、蔿賈を副将として戦車三百乗を率い

別に公子朱を大将、公子茷を副将として戦車三百乗を率いて息へ兵をすて鄭を攻めた。自らも両広の精兵を率いて狼淵に駐屯し後詰めとなり、

一方鄭穆公は楚が攻めて来ているという情報を得て、急遽大夫公子堅すめ陳を攻めさせた。

こで蔿賈はそっと越椒に言った。とで蔿賈はそっと越椒に言った。の子を、楽耳の三人に楚軍を食止めるため国境に派遣し、彼らには固守公子を、楽耳の三人に楚軍を食止めるため国境に派遣し、彼らには固守公子を、楽耳の三人に楚軍を食止めるため国境に派遣し、彼らには固守公子を、楽耳の三人に楚軍を食止めるため国境に派遣し、彼らには固守

「城濮での敗戦後、長らく鄭に兵を進めてませんので、鄭は晋の救援「城濮での敗戦後、長らく鄭に兵を進めてませんので、鄭は晋の救援

「誘い出すうまい策はあるか」

子玉(成得臣)の二の舞になる恐れがあります」

越椒はその案に従い直ぐに軍中に指令を出した。と聞くと、蔿賈はそっと耳元でひそひそと耳打ちした。

いるのではないかと心配し自ら督戦に行こうと考えた。しかし范山は楚この状態が狼淵の楚穆王に伝わると穆王は闘越椒が敵を見くびってと言い、越椒等は陣中で鉦太鼓を鳴らして毎日夜まで酒を飲み続けた。「食料がなくなりそうだから村のものを掠奪して食用にせよ」

と言って止めた。 といい報せが来ると思います」 といい報せが来ると思います。これはきっと計略でそのうちきっ

さて、公子堅等鄭軍の方であるが、楚軍が挑戦して来なくなったので

変に思い楚軍を探らせた。その報告によると、

酒を飲んでどんちゃん騒ぎをしてで鄭の輩は役立たずばかりで相手にな 「楚兵はあたりの村へ出て食料を掠奪しており、闘元帥は中軍で毎日

らん

と言っているという。公子堅は喜んで、

たのに違いない。楚将が酒を飲んで遊んでいるというのは気持ちが緩ん 「楚兵があたりを掠奪しているという事は陣中に食料が不足し始め

でいる証拠だ。夜襲をかけたら大勝間違いない」

というと、公子尨も楽耳も賛成した。 その夜、食事を済ませ公子尨は前中後三隊に分け順次攻入ろうと考え

「一挙に攻撃するには隊を前後に分けるより横に広げたほうがいい」

を指揮して一気に攻め込んだ。楚軍は全く抵抗がない。堅が陣中へ突入 うこうと輝き、 笙 に合わせた歌声が 亮 りょうと聞こえてくる。 堅は軍 と言うので三将は平行して進んだ。楚陣に近づくと前方に明かりがこ

驚いた、なんとそれは越椒に似せた藁人形ではないか。 して行くと楽人は逃げたが越椒だけは動かず坐っている。近づいて見て

しまった!罠だ」

と堅が叫び陣前に出てくると、忽ち陣の後方で大砲声が響き地を振る

わせ、一人の大将が突進してきた。

**蔿賈が率いる伏兵である。前方に蔿賈、後方に闘越椒と前後から挟撃さ** いかない内に前方にまた砲声が起こった。これは事前に用意しておいた 公子堅は逃げた。 尨、楽耳とも一緒になって必死に逃げた。 一里も行「われこそ闘越椒なり!」

> まった。 けようとしたが馬がつまずいたため戦車が転覆し結局彼も捉えられてし れ鄭軍は大敗を喫し、公子尨、楽耳は捕えられた。堅は懸命に二人を助

鄭穆公は大変驚いた。

群臣口をそろえて、 「楚の勢いは大変なもので、このまま投降しなければ早晩落城せざる

「三将は捕えられたし晋は救援に来ない。どうしたものか」

を得ません。晋だってどうしようもないでしょう」

と言うので、しかたなく穆公は公子豊を使者として楚軍へやり謝罪し

堅、公子尨、楽耳は赦されて鄭へ戻った。 闘越椒は楚王にお伺いを立て、王はこれを許可した。この結果、 公子

て講和を求め、臣従を誓った。

公子茷が捕えられた事を楚王に報告し、報復のための軍を願い出た。 **楚穆王は軍の帰国を命じた。帰国の途中、楚公子朱が、陳に破れ副将** 

穆王は激怒して、すぐ陳へ軍を向けようと思っていた時 「陳からの使者が、公子茷を送り届け、投降の上書を持って来ており

と連絡があった。書面の内容は以下の通り。

ます」

した。朔はこれを耳にし恐れ多く眠る事もできません。謹んで公子 わからない辺境の者が公子殿を拘束するという罪を犯してしまいま す。王がご教導のためにお見えになりましたにもかかわらず、事の わたくし朔は、王に拝謁申しあげた事も無き小国の主でございま

許しいただき、庇護をお願いいたしたく、この段何とぞよろしくご 殿を貴国までお届け申し上げます。併せて貴国の傘下に入る事をお

承諾いただけますようお願い申し上げます。

な男よの」
「陳公はわしの報復を怖れて傘下に入って来よったわ。機を見るに敏

日厥貉(現河南省項城県西南)で会盟する事にした(厥貉の会開)。

『はらばく
特でばく
特正は笑って、投降を許し、鄭、陳二国の君主と蔡侯に連絡し十月一

たという事がわかった。宋の大夫華耦と魯の大夫公子遂は陳、鄭を攻めると鄭はすでに楚に降り、楚もすでに兵を引揚げた後で、陳も楚に降っると鄭はすでに楚に降り、楚もすでに兵を引揚げた後で、陳も楚に降っ一方、晋趙 盾 は鄭が危ないという報せを受け、宋、魯、衛、許に使

「これはわしの救援が遅かったために二国を失ってしまったのであって、彼等には何の罪も無い。むしろ撤兵して国政に力をいれるべきだ」

たいと申し出た。 趙盾は

国政握り諸侯を牛耳るは誰ぞ 楚のやり放題を許したりそう言って兵を引き揚げた。髯翁は詩にして嘆いている。

鄭陳ともにすでに去る 中原の覇気はいずこにか

と楚王がたずねると、二人は声を揃えて答えた。「厥貉で会う約束なのに、どうしてこんな所にいるのかね陳侯と鄭伯朔は秋の末に息に集まり楚穆王を待った。

貉に来ているという連絡があったので、三人は厥貉へ車を急がせた。 穆王はそれを聞いてたいそう喜んだ。そこへ諜報から蔡侯がすでに厥でお待ちいたし、ご同行させていただきたく存じておりました」 「王からお約束をいただきましたので遅れないようあらかじめここ

> プニサニホニ゙ルントルー゙ーターター、 蔡侯は穆王を迎えて臣下の礼をもってまみえ叩頭の挨拶をした。 陳鄭

「蔡がこんなにへり下った態度をとるなら、楚王は我われを無礼だと

の二君はこれを見て驚き、

と密かに話し一緒に穆王に願い出た。思うかも知れんな」

です。これは討つべきではないでしょうか」

「王がここに見えておられるのに、宋はご挨拶にも参りませんが無礼

穆王は笑ってそれに答えた。

くなっていて、その子昭公杵 臼が君主を継いで三年経ち、小人と親し早くもその事は宋に報せが入った。この時、宋の成公王臣はすでに亡早くもその事は宋に報せが入った。この時、宋の成公王臣はすでに亡「わしがここに駐屯しているのは実は宋を討とうと思ってのことよ」

し、宋は大乱状態であったが、その後司寇の華御事が調停に入り、意諸謀反を起こし司馬の公子 卬 は殺され、司城(司空)蕩意諸は魯へ出奔み公族を疎外するという有様であった。そのため故穆公、襄公の与党が

を得たのである。華御事は宋公を説得した。こういう情況の中で、楚が厥貉に諸侯を集め宋をうかがっている情報

を原職に戻すことによって概ね平安に戻っていた。

し願いたく存じます。攻め込まれて講和を願っても間に合いません」ましたが宋だけがまだなのです。何卒、殿に楚王へ表敬の挨拶にお出ま『小、大に従わざれば国亡ぶ』と申します。楚が陳鄭を傘下に収め

後陣を担当し楚王に従って出かけた。穆王は巻き狩りに参加する諸侯に た。陳侯が先駆けとなって道を開き、宋公が右陣、鄭伯が左陣、蔡侯が を調えて猛諸の藪での巻き狩りを申し出ると楚王は大変喜んで承諾し 宋公は了解し、自ら厥貉に出かけ楚王に拝謁した。そして狩りの準備

に燻り出すようにいった。ところが車の中に火打ちが無かった。群れを見つけて追っていたところ深い穴に逃げ込んでしまったので宋公でいた。狩がしばらく続いた。たまたま楚穆王が右の陣に馳せ入り狐の払暁に出発し、火打石等火をつける道具を車に準備しておくよう指示し

楚の司馬申無畏が楚王に、

と言うので宋公の御者を三百回の鞭打ちに処し見せしめにして諸侯従者を罰するべきです」「宋公は命令違反です。君主は罰することができませんから代わりに

そのでは見り見さばなりできないになっている。このころ楚は最強且つ横暴で、闘越椒を斉、魯に遣って友好を図り、る。このころ楚は最強且つ横暴で、闘越椒を斉、魯に遣って友好を図り、の面前で宋公に大恥をかかせた。 周頃[44]

まるで中原の覇主気取りで晋もこれを抑えられない状態であった。

周頃王四年(紀元前六一五年)、秦康公は家臣たちを集め

弱まっている事は明らかだ。今晋を討たなければこれ以上の好機はやっになってしまったのに、晋はそれを抑えられない状態だから国力が相当で体制はまだ十分ではないはずだ。陳、蔡、鄭、宋みな揃って楚の傘下「令狐の怨み。" から五年になる。現在趙盾は大臣を何人も処罰した後

くと御者は、

白乙丙を副将、士会を参謀として戦車五百乗を率いて堂々と黄河をわたまらる。 康公は軍を大観閲し、孟明に留守居役を申しつけ、西 乞 術を大将、康公は軍を大観閲し、孟明に留守居役を申しつけ、西 乞 術を大将、と言うと、大夫たちはみな死力を尽くして戦うと誓った。

てこないぞ」

る途中の秦軍が

令狐の怨み

が、突然夷皋 霊公)擁立に変更した趙盾に裏切られ夜襲をかけられ晋襄公の没後、趙盾の要請に応えて秦在住の公子雍を晋に送り届け

たのでは、1950年本にし、谷缺を箕鄭父の代わりに上軍の元帥にした。記では、1950年軍の副将に変えて先克の後を埋めた。そして提弥明(史上軍の荀林父を中軍の副将に変えて先克の後を埋めた。そして提弥明(史趙盾はこの報せを聞き、直ちに対応策を考え、自ら中軍の元帥となりり東進し、羈馬を攻めこれを抜いた。

「そなたは若くてなかなか勇猛だ。しかし、まだ実地経験が十分でな将にして欲しいと頼んで来たので盾は、

盾に 趙 穿という従弟がいた。 先君襄公の愛婿でもあった彼が上軍の副

内に突然一輌の車が中軍へ飛び込んできた。司馬の韓厥が事の次第を聞軍は整然かつ堂々と 絳 城を出発した。晋軍が出発して十里も行かないとして成長した韓子興の子韓厥を霊公に推薦しその司馬に登用した。三として成長した韓子興の子韓厥を霊公に推薦しその司馬に登用した。三といて成長した韓子興の子韓厥を霊公に推薦してやった。軍中に司馬の軍で忠勤したいと再び願い出たのでこれは許してやった。軍中に司馬の軍で忠勤したいと再び願い出たのでこれは許してやった。軍中に司馬の

きさかっこよ去こよって听る!「軍の行列には自ずから決まりというものがある。勝手に乗り込んでと言う。韓厥は激怒した。「趙相 国が水筒を忘れたので命令により取りに来たのです」

「これは相国のご命令です」と厳しく言った。御者は驚いて、きたからには法によって斬る!」

「厥はかたじけなくも司馬を拝命している。相国殿よりも軍法に目をと泣きながら訴えたが、

164

向けざるをえない」

「相国がご推薦なさった韓厥の相国なきが如き振る舞い、これは恩と言って御者を斬りその車を壊した。上下の元帥は趙盾に、

と言うと、趙盾はちょっと笑って直ぐに韓厥を呼び出した。盾は報復を仇で返すものです。これは罷免すべきでしょう」

するつもりであろうと諸将は思った。

厥が来ると盾は席を立って挨拶をし、

『君に仕える者は偏私せず』というが、そなたは決して情実によっ

だ。これからもそのよう努めるように」
だ。これからもそのよう努めるように」

「将来晋の国政を担当するのはきっと厥だろう、韓氏の将来は明るいと励ました。韓厥はこれを聞いて感激して退出した。盾は諸将に、

ね

とも言った。

|| || 軍軍は河曲に駐屯した(この戦いを河曲の戦いという)。

「秦軍はこの数年力を蓄えて今回の戦いに望んでいますから、その勢臾駢が一策を進言した。

追撃すれば勝利は確実です」に限ります。持久力は無いはずですからそのうち引揚げます。その時にいは大変なものです。溝を深く掘って塁を高くし堅く守って戦わないの

趙盾はその案に従った。

おそらくこの堅守不戦は彼の案で、そのうちわが軍をだれさせようとい「趙氏は最近臾駢と言う者を抜擢しましたが、彼は深謀遠慮の男です。秦康公は戦おうにも相手が乗ってこないので士会に対策を訊ねた

う策だと思います。趙盾の従弟で先君の愛婿だった趙。穿という者がいま

きたと聞くとすべて公主と国人の我担互乗と客って印象で出た。白いられた。部缺と曳駢は共に相変わらず動かなかったが、趙穿は秦軍がやってた。部缺と曳駢は共に相変わらず動かなかったが、趙穿は秦軍がやって、ままり、まくい、白乙丙に戦車百乗をつけて晋の上軍に挑戦しを機に戦いの端緒が開かれるでしょう」

「飯と武器を持っているのは戦うためだ。 何故敵がやって来ても出撃

つけ詰め寄った。

しないんだ、上軍の連中はそれでもみな男か」

ではないのです」
「元帥には元帥の敵を倒すお考えをお持ちですが、今日はまだその時

いをして、堅守不戦の恥を雪いで来てやる」

しは秦など何も怖くなんかない、わし一人で秦軍へ殴りこんで決死の戦

「鼠野郎の何処に深謀があるというんだ。死ぬのが怖いだけだよ。わ

そう言って趙穿は再び戦車を駆り出し、

「心あるものはわしについて来い」

と大声で叫んだが、三軍誰も応じる者はなかった。ただ下軍の副将

胥甲だけは感心して、

「あの人は本当の好漢だ、協力してやらねば

趙穿の行動を報せに遣った。 と出て行こうと思った時、上軍元帥の郤缺が急いで部下に命じ趙盾に

盾は大変驚いて、

しかし、放って置くわけにもいかん」 「ばか者め、一人なんかで出て行ったら秦に捕まるに決まっている。

方とも可成りの死傷者が出た。 西乞術も趙 穿を挟み撃ちにしようとや趙 穿は秦の陣営に馳せ入って白乙丙の隊と交戦し、三十数合打合い双 って来たところへ、ちょうど晋の大軍が一斉に攻めて来た。両軍混戦を と言って三軍に命令を発し一斉に攻撃に出て秦との戦いが始まった。

好まずそれぞれ無勝負のまま鐘を鳴らして引上げた。

趙穿は帰陣し趙盾に文句を言った。

のにどうして突然鐘を鳴らしたのですか」 「わたしは独力で秦軍を破り、諸将の恥を雪ごうと思っておりました

を巡らしてからでなければならない」 「秦は大国だ、軽視してはいけない。秦を破るときはそれなりの策略

「策略、策略ともう何度もお聞きしました\_

話している所へ秦の使者が宣戦布告状を持って来たという報せが入

った。

に渡した。内容は次に通り 趙盾は臾駢に会うよう指示した。曳駢は使者が持って来た書類を趙盾

したくお願い致します。 両国戦士はみな戦闘能力を十分を残していますので、明日決戦いた

「謹んでお受け致します」

するのではないでしょうか。河口に伏兵を置いておき、彼らが河を渡ろ つき落ち着かず我われを怖れているようでした。恐らく今夜そっと撤退 「秦の使者は口では戦うような事を言っていますが、目は周囲にふら

うとするときに攻撃すれば完勝間違い無しです」

「そりゃ名案だ」

それを聞きつけ趙穿に言い、二人は軍門へやって来て大声で叫んだ。 趙盾は大変喜び、早速伏兵の担当者を決めようとしていると、胥甲が 「兵士諸君私の話を聞いてくれ。わが晋国は兵は強く将もたくさんい

河口に伏兵を置いて急襲しようとしている。これが大丈夫のやるべき事 る。西秦は我々と比較にならない。西秦と明日の決戦を約束したのに、

と思うか」

趙盾はこれを聞いて趙穿を呼びつけた。

秦軍はその夜の内に道を変え瑕邑(現河南省霊宝県東)から桃林塞(山西 趙盾と胥臣の軍門での話は秦の回し者に聞かれ秦康公に報告された。 「わしの考えはそういう事ではない。軍心を撹乱させるな」

省潼関以東)に出て逃げ帰った。

の婿であり従弟でもあるので特赦し、胥甲だけを罰し、官爵を剥奪し衛 趙盾も仕方なく撤兵して帰国し、機密漏洩罪を追及した。趙穿は旧君

国へ追放し誅殺はしなかった。

趙盾はそう言って胥甲の子胥克を下軍の副将にした。 髯翁は趙盾の処 「臼季(胥臣)の功を思うと甲を斬る事はできない」

置の不公正をなじっている

軍機漏洩は同罪なるに

「甲一人処罰を受ける」

た。後世の人は董狐を良中の代表と称讃する

れている人

相国の同族庇う処置 董狐wは是を何と見るらん

かゆう とうりんさい 周頃王五年 (紀元前六一四年)、趙盾は秦の捲土重来を恐れ、大夫詹嘉を周頃王五年 (紀元前六一四年)、趙盾は秦の捲土重来を恐れ、大夫詹嘉を **瑕邑に派遣し桃林塞を守らせた。** 

河曲の戦いは士会が画策したものですが、彼が秦にいる間は我われ

は枕を高くして寝る事ができません」

である。 協議した。この六卿とは趙盾、郤缺、欒盾、荀林父、臾駢、胥克の六人と與駢が言うと、趙盾も同じ思いで、諸浮にある別館に六卿を集めて

これにどう対処するか、ご意見を伺いたい 「現在狐射姑が狄におり、士会が秦にいて共にわが国を狙っています。

荀林父が口火を切った。 「射姑は国外で苦労していますので、召喚して復帰させ、子犯(狐偃)

殿の旧功に答えられたら如何でしょうか」 郤缺はそれに反対して言った。

ありますし、秦に出奔したのも彼の罪ではありません。狄は先の話です めとできましょうか。むしろ士会を戻すべきです。士会は従順で智謀も を殺した罪は許すべきではありません。これを許せば今後何をもって戒 「それはいけません。射姑は功績ある宿老の子孫とはいえ勝手に大臣

狐は事件後犯人の 追及もなく 実質宰相趙盾の 弑逆事件だとして 書き換え認めなか 君主を弑逆 と記した。盾は当時都におらず弑逆は不可能故書き直せと追 たが、董 謀る。 盾は国境まで逃げたが、 甥の 趙窈が 霊公を 弑逆す。 董狐は 史書に 『趙盾桃園で 董狐 野 史官 晋霊公は無道で趙盾が何度も直諌するが聞かず、逆に盾誅殺を

> を除くべきでそのためには彼に帰国を説得すべきだと思います。 が秦は差し迫っています。秦の攻撃を抑えるには先ず秦での士会の献策

ろう、彼を召し戻すいい案はないか」 「秦は士会を籠信しているから返してくれと言っても承諾しないだ

と趙盾が意見を求めると、臾駢が次のように進言した。

<sup>-</sup>わたくしの親しい者に先臣の畢万®の孫で寿余という魏犨の甥にな

ん。彼は情況を見て臨機応変の処置を取れる男で、士会を呼び戻すには る者がいます。封地は魏で世襲の爵位はありますがまだ職位はありませ

彼が適任と考えます」 と言って趙盾の耳元である案をひそひそと耳打ちすると盾は非常に

喜こんでその案に賛成した。

は喜んで迎え入れ、曳駢は密室に案内を請うて士会を呼び戻す策を彼に 「それじゃご苦労だが彼の所へ行って来てくれないか」

話し、承諾をとって趙盾に復命した。

翌朝、趙盾は霊公に

じられた大夫等)には現場へ赴いて監督させ、粗相があった場合は食邑を いと存じます。併せて、各邑を食邑に封じられている者(諸侯から邑を封 士の訓練をさせて黄河の岸に秦の攻撃を防ぐ砦を作らせ交代で守らせた 「秦は何度もわが国境を脅かして来ております。河東の邑宰。に、兵

® 邑宰 諸侯からその邑を与えられた大夫の家人で、その大夫から邑の管理を任さ として与えられた 59 畢万 魏6始祖 晋太子申生に従い耿 霍 魏三国を攻め亡ぼし献公より魏を封地

段よろしくご許可願い申し上げます」
剥奪することにすれば、みな心して防衛を督励するでしょうから、この

と奏上して承認された。趙盾はさらに、

- 1997年では最大の邑なので、最初にやらせて模範にさせれば他「魏邑が河東では最大の邑なので、最初にやらせて模範にさせれば他

令を聞き承知できないとして、 と言って魏邑の長魏寿余に命令を伝えるために呼び寄せた。寿余は命の邑もみな従わせることができます」

兵を置いて防ぐという事はとてもできる事ではありません」と百余里に亘っていて何処からでも河を渡る事ができますので漏れなくまして、かって軍を動かした事はありませんでした。まして黄河は連綿「主上のご恩を蒙りわが祖先の功によりこの大邑をお受けしており

と奏上した。趙盾は怒って、

らして処分する」
く三日以内に軍隊名簿を作って提出する事。もし再び逆らえば軍法に照く三日以内に軍隊名簿を作って提出する事。もし再び逆らえば軍法に照

いた。妻女が心配して何があったのかと尋ねるので、と厳命した。寿余はため息をついて退出し、屋敷に戻って悶々として

緒に秦へ行こう。士会殿を頼って」でにやれと言ったかわかるか。そなたは家財をまとめてくれ、わしと一でにやれと言ったかわかるか。そなたは家財をまとめてくれ、わしと一「趙盾が無茶苦茶言うんだ。わしに黄河を守れというのだが、何日ま

と言って家人に引越しの準備をさせた。

しようとしていると趙盾に密告した。趙盾はすぐ韓厥に命じて寿余の速やるとまで言い出した。その料理人は頭に来て寿余が晋に背き秦に出奔その夜痛飲して料理人に文句を付け彼を百回以上も鞭打って殺して

捕にやった。韓厥は寿余を逃がして妻だけを捕えて投獄した。

細にわたって訴えた。 舞余は夜を徹して秦国へ逃げ秦康公に会い、趙盾の専横を具体的に詳

「妻は捕えられて投獄され、 某 一人やっと逃げて投降して参りまし

康公は士会にこの男は信頼できるかと聞いた。

た

「晋人には詐欺的謀計が多いのですぐには信じられません。寿余が本

と士会が答えると、寿余は袖の中から魏邑の土地住民の台帳を献上し当に投降するのなら何か手土産が有るはずです」

て康公に言った。

「寿余をお取立ていただければわが食邑を献上いたします」

「魏は取れるかね」

をした。士会は秦に出奔はしたものの心はやはり晋にある。寿余がこう康公はまた士会にたずねた。寿余は士会に目配せをし足を踏んで合図

答えた。 するのはきっと特別の考えがあるのだと気付き、機転を利かせて康公に

怖れて投降しないのではないでしょうか」となっては両国は数年戦争状態で、城を攻め邑を取るのはただ力あるのとなっては両国は数年戦争状態で、城を攻め邑を取るのはただ力あるの「秦が河東の五城を放棄したのはいい姻戚関係があったためです。今

これに対し寿余は康公に言った。

168

と答え、黄河を指して誓いを立てた。秦の大夫 繞 朝 は、

れば、臣は必ず魏邑を貴国に帰順させましょう」 氏から臣に移っています。もしご主君が軍隊を率いて対岸から後詰願え 「魏の責任者は名目上は晋の臣 (大夫等) ではありますが実質的には魏

康公は振返って士会に言った。

と、西乞術を大将に、士会を副将にして康公自ら大軍を前進させた。ってもらいたい」「卿は晋の事をよく知っているからわたしと一緒に黄河の岸まで行

「河の東側に晋軍が駐屯していますがその意図がわかりません」河口へ来て営舎を設営し終わった頃、斥候の情報が入り、

「これはきっと魏の連中が秦軍がいるというのを聞きつけ防御のたと言う。寿余は、

康公は士会に寿余に同行するように命じた。士会は叩頭の礼をし、せば魏の責任者が抵抗する心配はございません」のです。もし東方の事情をよくご存知の方が私と同行して損得を十分論めに兵を出しているのでしょう。わたしが秦軍にいる事をまだ知らない

に切れません」では飛んですし我が家にとっても冤罪を受け、死んでも死ご主君にとっても無益ですし我が家にとっても冤罪を受け、死んでも死た場合、ご主君が臣のやり方にご不満で臣の家族に罪が及ぶ事になれば、し臣が諭して魏人が従えばそれは国家の幸せですが、万一従わず捕われ「晋の人は虎狼のようでどんな粗暴なことをするかわかりません。も

のままだ。もし晋に拘留された場合は必ず家族を送り帰そう」「ぜひ卿に行って尽力してもらいたい。魏の地が手に入れば賞は思いと言って断った。康公は士会が誤魔化しているとも知らず、

に見ないに、 そこは、 信用なさって、敵に謀臣を返してやるようなことをなさるのですか」ので、きっと帰って来ないでしょう。どうして寿余の話など軽々しくごので、きっと帰って来ないでしょう。どうして寿余の話など軽々しくご

と諌言したが、康公は、

「これはわしが決めたことだ、卿はもう何も言うな」

士会と寿余は康公に別れを告げ東に向った。 繞 朝 は急いで車で追いと言って聞かなかった。

「秦国に智謀のある者がいないと侮らないで下さい。殿が私の意見をかけてきて一本の皮の鞭を士会に贈って言った。

士会は恐れ入って 繞 朝 に感謝して馬を急がせた。さい。遅れると不測の事態が起きるかもしれません」

お聞きにならなかったのが残念です。この鞭で馬を急がせ早くお帰り下

史臣詩にいわく。

秦に名士なしと思う勿れ 康公わが進言を聞かざるなり。馬に鞭し 衣を翻し古道を追い 情を尽くして友に贈る長い鞭。

士会らは河を渡り東に向かった。

二人はどのようにして晋に帰還したのだろうか、次回をお楽しみに。

## 第四十九回 宋公子鮑 私財を投じて民に施し国を買い

斉懿公 竹林池で弑逆に遭う

ち上がって挨拶をした。 に若い将軍が一隊の軍馬を引連れ迎えに来るのが見えた。 彼は車上に立 

近寄って誰かと見ると相国 趙 盾の子趙 朔である。 三人は車を下り 「随季(士会)様、一瞥以来お変りございませんか」

互いに挨拶をした。

士会が趙朔に来意をたずねると、

も控えております」 と答えるやいなやドーンと砲声が響き、水流の如き戦車と龍の如き軍 「父の命令であなた様のご帰朝をお迎えに上がりました。後方に大軍

った。 馬の大軍が一斉に押寄せ士会と寿余を取囲み二人を晋国へ連れ戻して行

の晋の様子を康公に報告すると、康公は非常に怒って直ぐにも黄河を渡 康公は見張りを出して河の西から様子を見させていたが、その者がこ

り晋を攻めようとしたが、そこへ引続き報告があった。 「探ってみましたところ、河東には荀林父、郤缺の二将が大軍を率い

て来ているようです」

せないでしょう。引揚げるしかありませんね」 「晋にはすでに大軍の後詰があるようです。きっと我われに河を渡ら

そう言って西乞術は撤兵を命じた。

士会は秦に出奔して三年振りに絳城に入り感慨無量であった。霊公に 秦軍が撤兵したのを見て荀林父たちも晋に引揚げた。

会い地に伏して謝罪した。 「卿の罪ではない」

にも答え、霊公に願い出て十輌の戦車を賞として与えた。 霊公はそう言って咎めず士会を六卿に入れた。 趙盾は魏の寿余の功労

間もなく秦の康公は、

と言って士会の妻子たちを送り返して来た。 「黄河で誓った約束を守ってご家族をお返しいたします」

士会は康公の高邁な信義に感謝し、手紙でお礼を申し上げると共に、

康公も了承し、晋秦両国はこの後数十年間干戈を交える事はなかった。 民の休息を図り、周囲の平和を守るため、戦いを止めようと呼びかけた。

った。晋霊公八年の事である。

を集めた(新城の会盟)。会盟に参加したのは宋昭公杵臼、魯文公興、 陳霊公平国、衛成公鄭、鄭穆公蘭、許昭公錫我であった。宋、陳、鄭の る。趙盾は楚の国葬の間に、先君の覇業を継承させるために新城に諸侯 この頃、楚の穆王も亡くなり世子の旅が継位した。すなわち庄王であ

三国の君主はそれぞれそれまで仕方なく楚に従ってきた事情を訴え、趙 ただ蔡侯だけは従来どおり会盟に参加しなかったので、趙盾は郤缺に攻 盾はいちいち聞いて慰撫してやったので諸侯は皆晋に付くことになった。

撃させ、結局蔡も講和を求め同盟に加わった。

斉昭公潘も本当は新城の会盟に参加する予定だったが病気で会盟の

の尊敬を受けていなかった。斉桓公の妾、密姫の子の公子商人は元々君 ではあるが昭公の寵愛を全く受けていなかったし、世子舎も凡庸で人々ではあるが昭公の寵愛を全く受けていなかったし、世子舎も凡庸で人々 世子舎が即位した。舎の母親は魯の叔姫で昭姫という。昭姫は昭公夫人#55 期限に間に合わず出席を断念せざるを得なくなり、間もなく亡くなった。

を決行した。昭公は末年に公子元を衛から呼び戻し国政を任せていた。 ばらくその気持ちを外へ出さなかった。昭公が亡くなるのを待って大事 商 人 は公子元が賢良だったのでそのままでは人々の支持が得られない

位簒奪の気持ちが強かったが、昭公が寵愛して手厚く遇していたのでし

また一方では密かに命知らずを募集し朝夕に訓練を行い、出入りを自由 と考え、人心を得るため家財を傾けて民衆を救済した。借金を返せない 人には期限を延ばしてやるなど彼の義ある行為に感激するようになった。

れを占わせるとその卦に「宋、斉、晋の三国の君は皆謀反で死ぬだろう」 にして不時に備えた。 世子舎が即位した時、ちょうど北斗七星に彗星が現れた。 商 人がこ

商人はそう言って命知らずに命じて葬儀の幕の中で世子舎を殺し、元 「乱を治めるのはわしをおいて誰ができるというのだ」

人を遣り

が年長だったので、 「舎は君主としての威厳がなくて大位を継ぐには不適当だったので、

兄上に継いでいただくために今回の事件を起こしたのです」

と言ってごまかした。元は驚いた。

うしてわしに回してくるんだ。わしがそなたに仕える事はできても、そ なたはわしに仕える事はできないだろう。そなたが君主になればいい。 「そなたが君主になりたがっていたのはとっくに分かっていたよ。ど

> でもあった。 昭公夫人の昭姫は息子の非業の死を悼み毎日大声で泣き悲しんだ。

い病気を理由にその後参内しなくなった。ここが公子元のうまいところ

商 人は遠慮せずに君位に就いた。斉懿公である。元は彼の行動を嫌

わしは斉の一市民として天寿を全うさせてもらえたらそれで十分だ」

懿公もこれを聞き困り抜いて彼女を拘禁して食べ物も減らしてしまった。

昭姫は宮人に賄賂を渡してそっと実家の魯国へこの事を報告させた。

申し入れた。 匡王は単伯を斉へ派遣し調停させた。 単伯は懿公に に状況を訴え、天子の恩寵によって昭姫の拘禁を解いていただきたいと 魯文公も斉を怖れどうしようもなく、大臣の東門遂を周都へ遣り匡王

なるではないでしょうか」 禁なさるのです。彼女を魯へ返してやれば斉侯は心が広いとという事に 「彼女の息子を殺せば十分ではないでしょうか、どうして彼女まで拘

単伯は宿舎に戻った。昭姫を彼女の宮へ戻しておいて、単伯のところへ 痛い所を衝かれ急に顔色が真っ赤になり黙り込んでしまった。 仕方なく

と言った。懿公は弑逆の件は伏せたかったが彼が主殺しに触れたので、

言葉に逆らうことはできません。国母にお会いになって天子が魯国を大 「わが主君は国母を疎かにする積りはありません、ましてや天子のお

切に思っておられる事を話されたらいかがです」

思いもよらず懿公がやってきて大声で、 彼女は涙を流し泣いて縷々苦情を訴えた。単伯がまだ何も答えない内に

「単伯、お前はどうして勝手に国母と密会し、かりそめの行為に及ぼ

と単伯を誘い込んだ。単伯はそれもそうだと思い昭姫に会いに行った。

うとしたんだ、天子に訴えてやる」

て魯に対し出兵した。 と言って昭姫と単伯を一室に拘禁し、魯が天子に訴えた事にも頭にき

が許しておくであろうか。当時高、国という代々の宿老等朝廷に人は多た隣国に出兵しこれを陵辱し、凶悪なることその極みである。これを天 で、その凶悪な行為を見て見ぬふりをしたのであろうか。何とも嘆かわ かったのに、どうして公子元を奉じて 商 人の罪を追及しようとしない **懿公は、幼主を弑逆し、国母を拘禁し、天子の使者をも捕え、はたまいこう** 

君位を狙って弧主を欺き 先ずは私財を尽し民心を買う

しい限りではないか。詩にも歌われている。

朝臣恨みをこらえ 見て見ぬふりで凶人に媚びにけり

賄賂を持たせて斉に講和を申し出た。 た。魯は晋が結果として斉を討伐しなかったので、公子遂を使者として 開放しそれぞれ周、魯に帰したので周囲は円満に収まりそれぞれ解散し 議した。斉懿公は情勢の悪化を懸念し、晋に賄賂を贈り、単伯と昭姫を 宋、衛、蔡、陳、鄭、曹、許の計八カ国の諸侯を扈に集め斉の討伐を協 魯は慌てて季孫行父を晋へ派遣し急を告げた。晋の趙盾は霊公を奉じ

印、公孫孔 叔、公孫鐘離の三人とよく巻き狩りをして楽しんだものぎょう **六卿には任せず、祖母にも顔を向けず公族とは疎遠になり、政治に怠慢** で大変仲が良かった。昭公が即位してからはこの三人の意見だけを聞き、 の母であるとともに昭公杵日の祖母でもある。昭公が世子の時、公子 話し変って宋の国。宋襄公夫人王姫は周襄王の姉であり、宋成公王臣

> いが及ぶのを怖れて老齢を理由に官を辞した。昭公はすぐにその子の いと思い、その官を公子卬に譲った。司城(司空、宋の官)の公孫寿も災 で毎日巻き狩りに耽っていた。司馬の楽豫は宋はきっと乱れるに違いな して公子鮑を立てようとした。 昭公は穆、襄一族の力が強まるのを懸念 った。公子鮑は力で拒んだが、襄夫人はその後もあきらめず、昭公を廃 る程の美貌の持ち主である昭公の庶弟公子鮑を愛し、酒に酔って彼に迫 蕩意諸に司城の官を継がせた。 襄夫人王姫は老いて益々好淫で、 女に勝

が勝手に昭公の片腕を殺した罪を追求せず、蕩意諸を魯から呼戻し原職 とそりが合ったので、国内にいた諸卿と共に二族と講和をはかり、二族 で攻め殺した。司城の蕩意諸は怖れて魯へ出奔した。公子鮑は元々六卿 告したので二族はついに反乱を起こし、公子卬、公孫鐘離の二人を宮門 して公子卬等と謀って彼等を追い出そうとした。王姫が二族にこれを密

た家財を投じて遍く貧民たちを救済した。 位を簒奪できたのはそれによるところ大であるという事を知り、彼もま 公子鮑は斉の公子商人が庶民に施しをして民心を買い、彼が斉君の地

昭公の七年宋は飢饉に見舞われたが、公子鮑は自分の倉庫の穀物を出

につけた。

卿大夫たちにも月々贈物をした。同族には親疎の別なく吉凶の費用が掛 安否をたずねさせた。一才一芸に秀でた者は食客として優遇し、また公 国中の七才以上の者全員に毎月食料や布を配給し、さらに部下に彼等の しつくして貧者の救済に当てた。また、老人を敬い、賢人を大切にし、

かる時は惜しみなく援助してやった。

まったが、襄夫人が宮中の米蔵を開けて彼の施しの援助をしてやったの 昭公の八年宋は再び大飢饉になった。公子鮑の倉庫は空っぽになっし 華耦は彼等を率いて昭公を追った。

で、国を挙げて公子鮑の仁徳に感動しない者はなかった。宋の人々は親

熟したと見て王姫とこっそり相談して昭公謀殺の計画を立てた。 疎貴賎を問わずみな彼が国主になる事を望むようになった。鮑は時期は

彼を攻めなさい、必ず成功します」 杵臼の車が門を出たら公子須に各城門を閉めさせますから、そなたは 「杵臼(昭公)は近く孟諸の薮で巻き狩りをすることになっています。

と襄夫人が提案したので鮑もそれに従った。

き狩りの日が近づいたある日、襄夫人の謀略を聞きつけたので蕩意諸は 司城の蕩意諸は賢人の誉れ高く、鮑も以前から敬意を示していた。 巻

昭公に忠告した

なれない恐れがございます」 「都を空けて巻き狩りに行かれるのは好ましくありません。 お帰りに

閉めさせた。公子鮑は、司馬の華耦に命じ兵たちに次のように呼びかけ るとすぐに襄夫人は華元、公孫友を召して宮中に留め、公子須に城門を の財宝を車に積込み側近と伴に十一月孟諸へ出発した。昭公が城門を出 昭公はそう言って、右師の華元と左師公孫友を都の守りに残し、国庫 「奴が謀反を起したら都にいても難は免れることはできないだろう」

は力を合わせ無道の主君を除き、共に仁徳のある君主を戴こうではない 「襄夫人のご命令である。本日より公子鮑殿が国主になられる。 我々

> 命して後図をはかるべきだと説得したが、昭公は悔しそうに、 「上はお祖母さまから下は庶民までみなわしを恨んでいるとすれば、

故郷で死んだ方がましだ」 諸侯の誰がわしを受入れてくれるというのだ。他国で死するよりむしろ

と言って車を止めて食事にした。随ってきた全員にも十分食べさせた 昭公はみなに言った。

と一緒に死ぬ事は絶対にしないで欲しい」 銀珠宝はみな車の中にある。分配してそれぞれ逃げ延びて欲しい。わし みな長年わしに随いて来てくれたが報いるものが何も無い。ただ国の金 「今回の事はわしの個人的な問題であり、みなには何の関係も無い。

これを聞いてみな泣いた。

しましょう」 「殿こそ先にお逃げ下さい、追手があれば我々が身を賭して一戦いた 173

「その必要はない、徒に命を粗末にするな。わしはここで死ぬがそな

道の暗君だけを誅殺し、随従のものは赦免する』という襄夫人の命令を たたちはわしの事にかまわず速く逃げなさい」 そうこうしている内に華耦の軍がやって来て昭公を包囲し口頭で『無

伝えた。 とういしょ
昭公は回りの者に急いで合図をすると大半のものは逃げて行ったが、

蕩意諸だけは剣を持って昭公の側に立って離れなかった。<br />
華耦はもう一 度襄夫人の命令を伝え蕩意諸を呼んで説得しようとしたが、意諸は嘆息

昭公は道の半ばで謀反が起きた事を聞いた。蕩意諸は昭公に他国へ亡 兵士達は欣喜雀躍して「御意のままに」と言って皆その命令に従った。 選びます」 「臣下として主君の難儀を避ける事はできません、生よりむしろ死を

次に昭公を殺して、更に敢えて抵抗するものは全て斬り捨て御免となっ って闘おうとした。これを見た軍民達が一斉に跳びかかり、先ず蕩意諸を と言い、華耦が昭公に戈を向けようとすると蕩意諸は身を挺してかば

昔華督は<br />
殤公を<br />
弑し<br />
華耦今また<br />
凶行を助く

た。悲惨なるかな。史臣の詩がある。

賊子乱臣各種あり 薔薇と桃李が異なるように

宅すると心臓の痛みを覚えて急死した。 う事で国主に擁立した。すなわち宋文公である。華耦は朝賀を終えて帰 の大臣は一緒になって、公子鮑が仁厚であり庶民の支持も得ているとい 華耦は軍を引き上げ襄夫人に報告した。右師華元、左師公孫友等文武からう

任じ、また同母弟の公子須を司城にし蕩意諸の後任とした。 文公は蕩意諸の忠を称えてその弟蕩虺を登用し華耦の後任の司馬に

推戴する事を希望している事情をつぶさに説明し、数車に積んだ賄賂の 合し宋討伐を命じた。宋の右師華元は晋軍に赴き、宋の人々が公子鮑を 趙盾はこの弑逆事件を聞き、荷林父を大将にして衛、陳、鄭の軍と連

品で軍をねぎらい講和を申し出た。林父がこれを受取ろうとすると、鄭

うのではないでしょうか」 君を討たずに講和してしまったのでは乱賊をのさばらす事になってしま 「我われは鐘鼓を打ち鳴らして将軍に従って宋まで参りましたが、宋 穆公が、

と疑問を投げかけると、荀林父は、

片手落ちといわざるを得ません。しかも国民が希望して国が定まってい 「斉、宋は一つです。斉を許している現在、宋だけを討つというのは

るという事であれば何をかいわんやです」 と答えて宋の華元と講和を結び宋文公を認めて兵を引揚げた。 「晋は賄賂でどうにでもなる、名ばかりで頼りにならない国だ。これ

もできなかった。髯仙は詩に次のようにうたっている。 挙げるだろう。むしろ晋を棄てて楚に従って身の安全を図るべきだ」 鄭君はそう思って楚に使者を送り誼を通じた。晋もこれをどうする事

では再び諸侯に覇を称える事はできまい。楚の新王はやがて討伐の兵を

斉商 人 恙 なく宋鮑も君位安泰 何と中原に人なきや て義を討ち平和を守るこれぞ覇王 然るに出兵して逆臣を扶く

は情勢を危惧して仕方なく楚に亡命しその子孫はそのまま楚に仕官した。 でいてその封地の半分を有無を言わせず取上げてしまった。管仲の遺族 今、 邴氏の土地を全て没収し、 また、 管仲をも 邴原とぐるだったと恨ん その後商人はこれをずっと恨みに思っていた。舎を殺して国主になった 審理させた結果、管仲は商人の敗訴としその土地を邴原の物とした。 が在位の時から大夫の邴原と境界争いを起こしていた。桓公は管仲に 話を戻して、斉懿公 商人は生まれつき貪婪横暴な性格で、父親の種の かとしまれるとはないというしょうしょ

(1689) 士に墓をあばかせ遺骨を掘り出して足の骨を叩き切った。 邴原の子士に墓をあばかせ遺骨を掘り出して足の骨を叩き切った。 藤原の子 郊にあると知って、巻き狩りに出かける途中邴原の墓のそばを通り、兵 邴 歜 はその時懿公の側近として随いて来ていた。懿公は彼に、

懿公の邴原に対する恨みは晴れず、既に死んではいたけれどその墓が東

「そちの父親が足を切られたのは妥当だと思うかね、それともわしを

恨むかね」 とたずねた。邴歜は、

奪い取った田地を返してやり、父親の改葬の申し出も許してやった。 た骨はどうという事は有りません。どうしてお恨みなど致しましょう」 と答えた。懿公は大変喜び、父親の罪を償うに足る立派な子だとして 「父が生前刑罰を免れる事ができたのは望外の幸せでした。 この朽ち

妻もその中にいたので喜んで宮中に留めて帰さず閻 職を呼んで、 で中宮(諸侯の正妻)に新年の挨拶をするように命じた。 懿公は閻 職 の閻職の妻が美人だと言うと、さっそく、元旦に大夫は全員夫人同伴

の

いながら頭を上げ

<sup>えたよく</sup> 懿公は国内に広く美女を募り、日夜淫蕩に耽っていた。ある者が大夫

前は帰って別な嫁を取りなさい」 「夫人がお前の妻女を大変気に入って傍に置きたいといっている。お

斉の都城の西南の入り口に申という池がある。池の水は澄みきって水 と言った。閻職は怒髪天を突き物も言えなかった。

月、懿公は邴 歜を御者に閻 職を車右に乗せ申池へ避暑に出かけた。右 かこう くいもう そんしょく かいこう くいもう といところである。 五浴ができ、池の辺の竹林が濃い陰を作りとても美しいところである。 五

師華元は懿公に、

の二人はきっと殿に怨みを抱いているはずです。にも拘らずいつもお側 に置いておられますが、斉にはあの二人でなくとも人はいます」 と、そっと諌言したが、懿公は、 「殿は邴 歜 の父親の足を切り、閻 職の妻を取上げておられます。こ

「二人はその後ずっとわしに怨み事も言わないでやってくれている。

楽しんだ。

懿公は酔っ払って体が非常に暑くなって来たので、ベッドを 疑がわないでやってくれ」 と言って華元の忠告を聞かず、一行は申池に到着し、酒をのみ大いに

竹林の深みへ運ばせ涼を取って寝込んだ。 邴 歜 と閻 職 は申池で水浴び

頭を叩いたのである。 閻 職は俺を馬鹿にするのかと怒った。 邴 歜 は笑 現在の心境もわからずなかなか言い出せなかった。ふと一緒に水浴して 妻を奪われて恨んでいるということを知って相談しようと思ったが彼の いつも心に抱いていたが協力者が見つからず実行できなかった。閻職が いる間にいい考えが浮かんだ。そして竹を折ってわざといきなり閻職の

「女房を取られても我慢強いあんたが、ちょっとぶったくらいでどう

してそんなに怒るんだい」

と言うと閻職は反発した。

言えるね を叩き切られたんじゃないか。自分のことを棚においてよく人のことが 「妻を失ったのも恥には違いないが、あんたは墓の中の親父さんの骨

です」 かと心配で、それなら言っても無駄なことですからずっと黙っていたん 「実は話が有るんだが、あなたが恥を忘れてしまっているのではない

残念ながら力不足だから我慢しているだけだよ」 「誰も羞恥心の無い人なんているものか。忘れられるわけはけれど、

です。これは天が与えてくださった報復の絶好の機会じゃないですか。 「やつは竹やぶの中で寝ていますよ。ここにいるのは我われ二人だけ

逃すべきではありません」

睡していて雷のようないびきをかいており、内侍が左右で守っていた。 二人は体を拭き服を着て一緒に竹林に入って様子を見ると、懿公は熟 「あなたが大事を決行すると言うのならわしも協力しよう」

「殿は酔いから醒められるときっと湯水をお求めになるからお前た

と言って湯水をとりにやった。

ちその用意をしなさい

君位を簒奪してたった四年で寝首をかかれる事になってしまった。間も た。二人は死体を竹林の奥に埋め、首は池の中に捨てた。あわれ懿公は 閻 職は懿公の手を掴み、 邴 歜 が喉を絞め佩剣を抜いて首を落とし

なく内侍が湯を持って来たので彼らに、

心のある人だから元殿を君主に立てるべきだとおっしゃるのだ」 から我々に彼を誅せよとのご命令が有った。そして公子元殿が賢明で孝 と言うと随従者は唯々諾々と一言もなかった。二人は車に乗って帰城 「商人は君主を殺して位を簒奪した無道な男だから、先君があの世

戒のため殺すべきだと言ったが、国帰父はこれには同意しなかった。 速この事を上 卿の高傾、国帰父に知らせた。高傾は国帰父に二人を懲 し、思う存分酒をのみ高らかに歌を歌い互いに祝いあった。ある者が早

誅を加えたのです。彼らに罪をかぶせることはできないでしょう」 「主君殺しの罪人を我々は討伐できなかったけれど、彼らが代って天

二頭立て馬車に家人を乗せてゆっくりと南門を出て行った。家族等はは 邴 歜 、 閻 職の二人は酒を十分楽しんだ後、 車に家財を積み込ませ、

我々は何も怖れる事はないよ」 らはらして急がせるように言うが邴歜は、 「商人は無道だったから国民はみな彼が死んだのを喜んでいる、

と言ってゆっくりと楚国へ向け去っていった。 高傾と国帰父は群臣を集めて協議し公子元を国主に擁立した。即ち斉

恵公である。髯翁は詩に言う。

逆臣には遠計あり 何故仇人と同遊す 仇人を近づければ仇討ちは当然 天両人に仇討を許したり

いて彼女にも倭、 叔 肹 の二人の子がいる。 四人の中で倭が一番年長で し、悪と視の二人の息子がおり、正夫人の他に妾として秦公の娘敬嬴が 六年 (紀元前六二六年) に継位している。 文公は斉昭公の娘姜氏を夫人と 話し変って、魯文公名興は僖公の正夫人声姜の子で、周襄王の二十

は三桓(孟孫、叔孫、季孫)に政治を任せていた。孟孫氏の当主は公恵のた。しかし悪が正夫人の子だから文公は悪を世子とした。この頃魯あった。 という子がいた。文公は彭生を世子の太傅とした。季孫氏の当主は季友のという子がいた。文公は彭生を世子の太傅とした。季孫氏の当主は季友の 孫敖で穀と難という子があり、叔孫氏は公孫茲で叔仲彭生と叔孫得臣

子である季無佚で、行父という子がありこれが季文子である。魯庄公(文

脚し、仲孫氏、叔孫氏、季孫氏の三家が国政を担当する事になった。 なる。公孫敖は仲遂の機嫌をそこね国外で客死し、そのため孟孫氏は失 世代の上下で言うと、公孫敖と仲遂がまたいとこで季孫行父は一代下に たので東門遂ともいい、僖公の時から三桓と同様の権限を与えていた。 公の祖父)には庶子がいて公子遂、またの名を仲遂、屋敷が東門にあっ

敖は莒の己氏の娘戴己を娶り正妻とした。すなわち穀の母であり彼女 公孫敖失脚は以下の事情による。

娘をもらいに行った。 の妹の声己が難の母である。戴己が病没すると敖は女好きでまた己氏の

と莒側は言ったが敖は 「声己がいるのだから彼女を正妻にすればいいじゃないですか」

「弟の遂がまだ結婚していないので遂の嫁にしたいのです」

と説明したので莒人はそれを認めた。

公に訴え軍を出すことを願い出た。叔仲彭生は文公を諌めて、 れて帰った。仲遂は自分の妻を盗られた事を知って非常に怒りくるい文 の美しさに惹かれその夜なんと寝取ってしまって自分の女にして家につ いでに仲遂のために嫁を連れて帰る事にした。 鄢 陵 城で己氏を見てそ 魯文公の七年に公孫敖は君命を奉じて莒へ表敬訪問に行った。そのつ

寇』といいます。幸い寇ではありませんが乱の発端になります」 「それはまずいです。『国内で兵を起こせば乱、国外で兵を起こせば

こに住み着いてしまった。魯文公はこの時も不問に付し、敖の子穀に孟 うに京師へ行かずに香典を持って勝手に莒へ行き己氏と夫婦になってそ め切れず翌年主命を帯びて周襄王の葬儀に参列のため出かけ、事もあろ こもまたいとこも同世代であれば兄弟と呼ぶ)。しかし敖は己氏のことあきら 返えすよう命じたので、敖と遂兄弟は元通り仲直りをした(同族ではいと と言った。文公は公孫敖を呼出し仲遂の怒りを解くために己氏を莒に

の三条件を認めるならゆるしてやろう」 わち、参内しないこと、国政に関与しない事、己氏を帯同しない事、こ 「そなたの父上が帰国したいと言うのなら、 三つの条件がある。 すな を取り持った。仲遂は、

に帰りたいと伝えさせた。 穀は叔父の仲 遂 に父を許してくれるよう仲 氏を継がせた。その後敖は突然故国を懐かしく思い、使いの者を出し穀

持ち出してまた莒へ出奔した。孟孫穀は父親の事を心配しながら翌年病 束どおり門を閉じて外へ出なかった。ところがある日、家の財貨を全て 敖は帰心矢の如くで喜んでこの条件を認めた。 敖は魯に帰って三年間約 と厳しい条件をつけた。穀は使いの者にその旨を父親に伝えさせた。

> よう強く要請した。 り動けなくなって堂阜で亡くなった。孟孫難は父親の葬儀を魯でできる 文公がこれを許したので敖は帰国の途についたが斉まで来て病気にかか を全て文公と仲遂に献納して、子の難に帰国の許可を得るよう頼んだ。 た。間もなく己氏が亡くなり、公孫敖はまた魯に帰りたくなって、財産 死した。 穀の子仲 孫 蔑は幼少だったので孟孫難が後をついで卿となっ

世子の師傅である。叔孫得臣は度々兵権を握っていたので四家の内、自分は世代が一つ下るので何事も控えめであった。彭生は人柄が良く 結局仲遂と得臣が最も力があった。 ら余り権限がない。季孫行父は仲遂と彭生、得臣が叔父の世代の並びで 孟孫難は罪人の後を継いでおり、仲蔑が成長するまでの仮の当主だか

と保証を与えた。仲遂はこの話をきいて喜び公子倭を国主に擁立する 「もし倭を国主にできれば魯国は二人の共有にしましょう」 思い、多額の賄賂を使って仲遂とつながりを持ち、わが子倭を託して、

気になって、

叔孫得臣は賄賂に弱いから利用できる。

「叔仲彭生は世子悪の太傅だから仲間には加わるわけはないが、」

と思い、しばしば敬嬴からもらった賄賂の一部を 「これは嬴氏夫人がわしからあなたに渡してくれと頼まれたもので

教えを請うよう指導したので、得臣もその気になってきた。 す と言って叔孫得臣に渡し、公子倭に時々得臣の門をくぐって控えめに

サ いじ 周 匡 王 四年(紀元前六〇九年)の春、魯文公は在位十八年で亡くなり - 恵ようおう

世子悪が喪主となって君主を継承した。各国みな魯に弔問の使者を出し 斉の新君主恵公元は商人の暴政を反面教師として修好のため魯に使

者を出したところ、たまたま文公の葬儀に出席する事になった。

仲遂は斉の使者を見て叔孫得臣にいった。

使者を出すべきです。 これを機会に斉と相互援助協定を結び公子倭を立 ら弔問に来たのは先方に修好の意志があるものと見えます。是非答礼の 新しく公子元が即位しましたが就任祝いに行かないうちに先方のほうか 孝公の時にまずくなり商人のときになって仇同士になってしまいました。 「斉と魯は代々緊密で桓、僖両公は兄弟のように仲が良かったのに、

「そうだな、じゃ、わしも一緒に行こう」

てるのも一策ではないでしょうか」

そういう事で二人は揃って斉に向かった。

二人は斉へ行ってどんな事を相談してくるのだろうか、

# 第五十回 とん こうしゃ

趙盾 桃園で霊公を強諌す

文公の葬儀に会葬いただいた礼を言った。 仲 孫 遂と叔孫得臣は揃って斉へ行き新君即位の祝賀を述べ、併せていまするそれ、 こまくそんとしょ

挨拶が終わると酒宴になり話題が魯の新君のことになった。

が多いのにどうしてまたそんな名前をつけたのでしょうね」 「どうして悪という名なんでしょう。世間には良い名前をつけること

しました。しかし悪は先君に可愛がられることはなく、先君が愛してい 死の相があり君位は不可』と出ましたので悪と名付け邪気を圧えようと 「わが先君は初めての子だったので太史に占わせたところ、『非業の

以て接するので、国人はみな彼が君主になるのを希望していますが、嫡たのは長子の倭という子です。倭は賢明で親に優しく大臣たちに敬意を 18 子ではないので君位を継げなかったのです」

愛していたと言うのなら問題にはならないでしょう」 「昔から長男を立てて嫡子を立てなかった先例はあり、しかも先君が

立つ事になっています。わが先君はこの規則にこだわり公子倭をさしお は貴国と婚姻の誼を結ばせていただき、貴国にお仕えし毎年貢物を持っ もし貴国が弊国の賢明な君主との交代にご協力いただけましたら、我々 いて公子悪を君主にしましたが、国中みな非常に不満を持っています。 てご挨拶に上がる所存であります。決して二言はございません」 恵公はこれを聞き内心大変喜び、 「魯国は保守的で、先ず嫡子を立て嫡子がいない場合に始めて長子が

から協力することを約束しましょう」
「大夫殿、もしあなた方が貴国内を纏められるのでしたら、私も城外

遂らは帰国して季孫行父に話した。仲遂、叔孫得臣は恵公と血をすすって盟約を結び、婚約を決めた。

することはないだろう」 倭の内室に出したいと言っているんだ。こんなすごい後ろ盾の話を没に「晋の覇業は衰退し今は斉が復活してきている。その斉が嫡女を公子

どうして娘を跡継ぎの君主に嫁がさないで公子倭殿に嫁がせるのだろう「新君(悪)は斉侯の甥(悪の母は斉侯の兄昭公の娘姜氏)です。斉侯は

か

こ間ご近した

弟で後継争いをして、四代皆弟が兄に代っている。斉侯の頭には兄など娘を寄こすのだろうよ。姜夫人は斉昭公の娘だ。斉は桓公の息子たち兄原を保い公子倭殿が賢明だと聞いていたので公子と親しくなろうと

め息をつき、東門氏(仲遂の宅が東門あったのでこう呼ぶ)に二心ありと感と仲遂が言うので行父は黙ってそれ以上語らなかった。家に帰ってたいないんだよ。まして甥の事を思う気などあるわけがないじゃないか」

彭生はそう言って特に意に介さなかった。 「大位は既に定まっている、誰が二心を持つことができようぞ」 じ叔仲彭生にそっと報告した。

仲遂と敬嬴は密かに計画を固め、 厩 の中に勇士を隠し厩の係りに、

に子馬の毛色を見に行かせた。 すると突然勇士がとび出してきて棍棒でと宮中にうその報告をさせた。 敬嬴はすぐに公子倭、 悪および視を厩「素晴らしい子馬が生まれました」

悪を叩き殺し視も一緒に殺してしまった。

「しかしまだ太傅の彭生が健在だ。やつをやらなければ事が終った事

にはならんぞ」

公冉務人が以前から仲遂が内宮とつるんで怪しい謀略を企んでいる事を言ずるます。

仲遂はそう言って内侍に後継の君(悪)は生きている事にして仲叔彭

「太傅、参内なさってはなりません、いらっしゃればきっと殺されま聞いていたのでこの呼出しは怪しいと思って引止めた。

「ご主君のご命令だ、たとえ死んでも逃げるわけにはいかん」す」

なくて殺されたら何の意味もございません」「本当に君命でございましたらよろしゅうございますが、もし君命で

たが、彭生はその手を振りほどき車に乗り宮中へ入った。彭生は公冉務人の忠告を聞かなかった。務人は彭生の袂を引いて泣い

「ご主君はどちらにおられる」

と問うと内侍は嘘を言って、

と答え、厩へ案内した。厩に入るといきなりあの勇士達が跳び出して「宮中の厩で子馬が生まれましたのでごらんになりに行かれました」

敬嬴はつかいの者を姜氏のもとにやって、

来て殴り殺されてしまい死体は馬糞の中に埋められてしまった。

「ご主君と公子視殿はお厩で馬に蹴られてお二人ともお亡くなりに

死体はもう宮城の外に運び出されてしまっていた。と報告させた。姜氏は泣いて言葉にならず、急いで厩に見に行ったがからました。

だと分かったがハッキリとは言わず、ただそっと仲遂に言った。季孫行父は悪、視が死んだことを聞き内心これは明らかに仲遂の仕業

せん」「あなたがこんな酷いことをなさるとはどうしても思いたくありま

「これは嬴夫人のやったことで、わしは関与していない」

「もし晋がこれを聞いて討伐に来たらどうなさいますか」

だからと言って討伐に来るわけないよ」

行父は主君の死体をなでながら声を出して泣いた。

「大臣として大事を諮る必要がある。女のようにめそめそ泣いていて

仲遂に言われて行父は涙を収めた。叔孫得臣も間もなく駈け付け、兄どうするんだ」

「兄貴は主君に忠節を守って死んだ。これが兄貴の生き方だったんだ。

わしは兄貴とは違う、隠すなよ」

「これは立君を急ぐための措置です。公子倭は賢明な方だし長子でと言うので仲遂はそっと死体の場所を告げた。

から大位を継がれるには適任者です」
「これは立君を急ぐための措置です。公子倭は賢明な方だし長子です

である。百官みな祝賀の挨拶をした。百官もこれに従わざるを得ず、公子倭を君主に奉戴した。これが宣公

胡曽先生はこの状況を詩にして批判している。

外権内寵示し合せ 罪なき嗣君突然退場

笑止季文子の曖昧態度 熟考するも良謀なし

嫡夫人姜氏は二人の子が殺され、仲遂が公子倭を君主に擁立した事得臣は馬の糞の中から彭生の死体を掘り出し葬った。

用して宣公の母親敬嬴を夫人に昇格させ、百官がみなそれに迎合したの仲遂は宣公のご機嫌をとり、『母は子を以って尊し』という言葉を引を知って悔しさに泣き痴れて何度も失神と蘇生を繰り返した。

仲遂はこれを聞き使いの者を遣って引きとめた。

で、姜夫人は不安になり日夜泣き、側近に斉へ帰るため車を用意させた。

すから当然あなたさまに孝養をお尽くしになります。どうして他家で居「新君は夫人のお腹を痛めた方ではありませんが、夫人は嫡母さまで

候などなさろうとされるのです」

といい加減なことを言うと姜氏は怒鳴って

とめようとするけれど、神さまはお見通しよ。絶対にお赦しにならない。 ひどい仕打ちを受けなければならないのです。また騙してわらわを引き「遂よ、わらわ母子はどうしてそなたのような者に馬鹿にされこんな

大声で泣きながら天に向って叫んだ。姜氏は敬嬴に顔も合わせず宮門を出て行った。街の大通りを通る時、

に嫡子を殺して庶子を立てたのよ。これで魯のみなさんとはお別れね、の罪があったというのでしょう。みなさん、犬畜生のような遂は理不尽「神さま!子供たちに何の罪があったというのでしょう、わらわに何

道行く人はみなこれを涙しながら聞いた。この日魯の市場は彼女のた

二度と魯へは帰って来られないわ

彼女らが泣き叫ぶのを聞くのを嫌って離宮を造り、彼女ら母子をそちら し、冤罪で二人の子が殺された事を話し抱合って泣き崩れた。 斉恵公は めに店を閉じて哀悼を示し、姜氏を哀姜ともいいあるいは斉へ帰って行 ったから出姜とも言った。出姜は斉に帰り着き昭公夫人と母子の再会を へ移してしまった。出姜はそれ以後終に斉を離れる事はなかった。

たが肹がかたくなに断るので、友人がその理由をたずねた。 いにも行っていない。宣公は使いを遣って呼出し重用してやろうと思っ りて弟を殺し君位を簒奪したことを快く思わず、宣公が即位してもお祝 「私は決して富貴を嫌っている訳ではない、でも兄上に会うと、死ん

魯の宣公の同腹の弟 叔 肹 は忠実で正直な人柄で、兄が仲遂の力を借

だ二人の弟の事が思い出されて心が痛むんだ」

友人は、それなら外国へ逃げた方がいいんじゃないかと勧めたが 「兄上はわたしを捨てようとはなさらないし、わたしも兄上と別れる

事はとてもできない」

させた。肹は感謝したが使者に 宣公が役人を肹の様子伺いに遣ってついでに食料や反物を贈り届け 「幸いわたしはまだ餓えるような状況ではありませんから公費のお

と言って受取らなかった。使者が再三勧めたが

世話にはなれません」

「困った時はいただきに参りますから、今はお引取り下さい」

ないでしょう、無下に断るほうがかえってまずいのではないですか」 やないか。少し戴いて朝夕の食事の足しにしても清廉さに傷が付く事も と言ってどうしても受取らない。友人が 「爵禄を受けないという気持ちもわかるが、もう家には余裕がないじ

子孫である。

と忠告するが肹は笑って答えなかった。

晩灯下で草履を編み翌朝早く市場で売って幾らかの金にして生活の糧に 生計を立てているか分からなかったので、夜間に偵察させたところ、毎 サネリデはどうしても受取ってもらえないので仕方なく宣公に復命した。使者はどうしても受取ってもらえないので仕方なく宣公に復命した。 宣公は、彼の生活が苦しいはずだとわかっていたが、どのようにして

しているという報告があった。

いたが死ぬまで兄からは一寸の布も一粒の食料も受けず、終生兄の過失 いるのかもしれない。それなら彼の志を遂げさせてやる事にしよう」 宣公は溜息をついてそう言った。叔肹はその後宣公の末年まで生きて 「弟は伯夷、叔 斉が首陽山にわらびを採った故事にならおうとして

に対し一言も口にしなかった。 史臣はこれこそ真の高潔の人であると誉めたたえている。

くつ ここう いさぎ 賢なるかな叔肹 彼を思いて涙止まず

履を編み糊口凌ぐも公費は受けぬ 潔

周粟拒み蕨を食って死に甘んぜし伯夷叔斉 叔肹先賢を継ぎ久しく濁に染まらず

(一乳同枝=同母兄弟)

それにつけても東門仲遂の何と汚なき

一乳同枝も兄は頑愚弟は廉潔

年に叔 肹の子公孫嬰斉が大夫に取り立てられ、叔孫氏のほかに叔氏と いう姓ができた。後の叔老、叔弓、 魯の人々は叔肹の高潔を非常に称えたものである。それゆえ成公の初 叔輒、叔鞅、 叔 詣 はみなその

周匡王の五年(紀元前六〇八年)が宣公の元年にあたる。元旦の朝賀が

終わると仲遂は宣公に進言した。

います。あまり遅らせるのは如何かと存じますが」 「殿には奥方がまだおられませんが、以前に斉侯と婚姻の約束がござ

「そうだな。斉への使者は誰がいいだろうか」

「臣が約束した事ですから臣が参りましょう」

宣公は婚約を取決め結納を納めるため遂を斉へ遣わす事にした。遂は

はいきません。その機会に金を惜しまないで盟約の機会を斉侯にお願い を持って挨拶に行くという約束をしていますからそれを守らないわけに て認められるというものです。臣は斉侯と盟約を交わして毎年斉に貢物 わが国は大事変があったわけですから斉と会盟しておいてこそ諸侯とし 正月に斉へ行き二月に夫人姜氏を連れて帰り、密かに宣公に言った。 して、慇懃に臣従すれば両国は親密になり君位は泰山のように磐石なも 「斉と婚姻関係はできましたが、将来のことはわかりません。しかも

のとなりましょう」 宣公はその意見に従い婚姻の謝礼を述べるため季孫行父を派遣した。サネード 甚でございます。就きましては、軽少ではございますが、お礼と 諸侯に認められるか心配であります。もし君侯のご高配を得て貴 上げたく存じます。どうかご笑納願います。 致しまして先君が晋文公から譲渡されました済西の地を献上申し 国と友好関係強化のための会盟の機会を持つ事ができましたら幸 わが主君は、君侯のおかげさまで宗廟を守ることができましたが、

> と婿の私的な挨拶をしそれから互いに君主としての公式の挨拶を行った。 て魯に帰ってくると、 仲遂が魯の済西の土地戸籍台帳を斉侯に献上した。仲遂は会盟が終わっ

「これでやっと枕を高くして寝られるわい」

は共に出陣した。斉恵公は晩年になって魯侯の従順な態度に感じ入り済 かが斉にいない日は無いくらいで、斉の命令には従順に、兵を出すとき

とほっと安堵の声が出た。これより魯は君臣が常時斉へ行き、魯の誰

話し変って、楚庄王旅は即位して三年になるが政令は出さず毎日狩を

西の地を魯に返してやった。

りには鉦鼓が並べてあった。 が参内し庄王に拝謁したとき、庄王は右に鄭姫を、左に蔡女を抱いて周 死を恐れぬ者がいた。大夫の申無畏(『史記』 楚世家では伍挙)である。彼 るものは死罪』という告知板を朝門に掛けるありさまである。それでも 楽しみ宮中にいるときは日夜女たちと飲んで遊び呆けていた。『諌言をす

も何か言いたい事があるのか」 「酒でも音楽でもありません。郊外で臣に謎なぞを問いかける者がい

「大夫、ここへ来たのは酒を飲むためか、音楽を聴くためか。それと

たしました」 ましたがその謎がどうしても解けません。大王にお聞き致したく参上い

「なに、謎か。どんな謎だ、大夫が分からない謎がわしに解けるわけ

なりますが、その飛ぶのを見た事がなくその鳴くのも見た事がないとい 「一羽の大鳥がいます。極彩色で楚国の高い丘の上に棲息して三年に

約束の当日が来た。魯の宣公が先に着き続いて斉侯も到着し、先ず舅 斉恵公は非常に喜び魯君と五月に平州(斉国の地)で会うことにした。

うのですが、この鳥は何の鳥かというのです」

「わしはその鳥の事を知っておる。その鳥は尋常の鳥ではないぞ。三庄王は自分の事を言っていると分かったので苦笑いしながら、

と答えた。申無畏は挨拶をして退出した。『ばきっと人を驚かすだろう。まあそれまで待つんだな』年間飛ばなかったが一度飛べば天を突き、三年鳴かなかったが一度鳴け

見えない。大夫蘇従は我慢ができず庄王に会いいきなり大声で泣いた。 数日たっても庄王は依然として毎日酒を飲んで享楽を改める様子が

「蘇子よ、そんなに泣いて一体どうしたというのだ」

のでございます」 「臣が死んだ後、楚国もまもなく亡ぶだろうと思いますと悲しくなる

「そなたは何故死のうとしている。どうして楚が亡びそうだと言うの

まで朝政は堕落し楚の国はまもなく滅びます」を殺すでしょう。私が死んだ後諫言する人はいなくなり、大王の意のま「私は諫言を申し上げるつもりです。大王はお聞きにならずきっと私

庄王は突然顔色を変えて怒り出した。

っていてわしに諌言しに来るとは馬鹿なやつだ」「わしは早くから『諌言するものは死罪』と命じている。それがわか

蘇従は少しも引下がらない。

「臣は確かに馬鹿です。ですが大王の愚にはとてもかないません」

列伝にも斉威王と淳于影の間で「鳴かず飛ばずの謎がけ諫言の話がある。「鳴かず飛ばずの話に、 本来っと機会を待っ意味 なお 同じく『史記の滑稽』「鳴かず飛ばずの語源『史記 楚世家 なお史記では申無畏ではなく伍挙である。

圧王は益々怒って怒鳴った。蘇従は静かに言った。「大夫、それはどういう意味だ」

一時の快楽のために国家万世の利益を顧ようとなさらなければ、これはるでしょう。快楽はただ今の事ですが、禍は少し遅れてやって参ります。をざけていれば、外からは大国の攻撃を受け、内には小国の反乱が起き遠ざけていれば、外からは大国の攻撃を受け、内には小国の反乱が起きをは畏敬の念を持って臣従し常時朝見があり貢物は絶えずこれは万世に伏は畏敬の念を持って臣従し常時朝見があり貢物は絶えずこれは万世に大王は万乗の尊き方で、強大な国家を支配され、軍も精強です。諸

庄王は翻然と悟って立ち上がり、 います、王前で自刎し大王のご命令の厳粛なる事を知らしめましょう」なるでしょう。臣の忠言は終わりました。どうか大王の佩剣をお貸し願龍逢、比干に比肩する事になりますが、大王は将来匹夫以下の愚か者に能達す、むしろ忠諌により大王に死を賜れば忠臣の名が残り、に過ぎず、むしろ忠諌により大王に死を賜れば忠臣の名が残り、

愚かといわず何というのでしょう。臣の馬鹿は命を捨てれば終わる馬鹿

に従おう」
「大夫、わかった。大夫の発言は忠言である。わしはそなたの言う事

散させた。朝からの酒宴は止め施政上の命令を発し、内政を整備した後、では薦雪、「生活。」 くっぱん と言って諌言し続けてきた樊姫を夫人に立て内宮を仕切らせた。 朝廷をいっさい食わなかった。 内助に尽くした大変な賢女である」と言って諌言し続けてきた樊姫を夫人に立て内宮を仕切らせた。 朝廷と言って譲言している。 内助に尽くした大変な賢女である」をいっさい食わなかった。 内助に尽くした大変な賢女である」をいっさい食わなかった。 内助に尽くした大変な賢女である」をいっさい食わなが、 真獣の肉では蕎麦

対外的にも鄭公子帰生に命じて宋を大 棘に破り右師華元を捕え (大棘の

り、庄王は遂に中原に覇を競う気持ちになった。 捕えて帰り、翌年釈放してやった。これより楚の勢力は日毎に強大とな

で楚に対抗しようと考えていると 趙 穿が一計を献じた。 一方晋の上卿趙盾は、楚が日毎に強暴になって来るので、秦と結ん

べばこちらが有利な立場を占める事ができるでしょう」 てこの崇を攻撃します。秦が必ず救援に来ますからその時秦と講和を結 「秦に崇という秦にべったりの属国がありますが、少し兵をお借りし

として崇を侵略させた。 趙 朔 (趙盾の子) はこれを聞いて驚き 趙盾はこの案に従い、霊公の許可を得て戦車三百乗を出し趙穿を大将

れば、秦は怒りを増加させるだけでどうして講和などするでしょうか」 と引き止めた。しかし趙盾は 「秦と晋は本来根深い宿怨が有ります。今理由もなく秦の属国を攻め

「残念だがもう許可を与えてしまったよ」

と言って聞かない。朔は仕方なく韓厥に相談した。韓厥は僅かに冷笑

しながら趙朔の耳元に近づき、

うとのお考えです。本気で秦と講和しようと思っているのではありませ 「お父上の今回のご決定は穿を養成して趙氏宗家の力を強固にしよ

んよ と言う。趙朔はこれを聞いて黙って引下がった。

®大勢。戦に「羊粉。怨みという食物。怨の故事があるこの戦で華で将

軍に突 込み華元は簡単に帰生に捕えられた 史記鄭世家

撤兵した。趙穿はこの時から兵権を掌握するようになり、その後間もな を攻めて焦城を包囲した。趙穿は仕方なく焦の救援に軍を返すと秦軍も く臾駢が病没したのでその後任として趙。穿が上軍の副将になった。 驚いた事に秦は晋が崇を攻めてきたと聞いても救援に来ず、 むしろ晋

岸賈らと弾弓(パチンコのように弾をつがえて発射する弓)で鳥を射て賭け れて下を眺めると街が一望できる。霊公は毎日ここへ登って景色を眺め、 り立てた 『絳 宵 楼』という三層の高楼を建てた。 朱塗りの欄干にもた のように咲き誇るこの花苑を桃園と名付けた。園の中に絵と彫り物で飾 植物を集めて植えさせた。 中でも桃の花が多く、 霊公は春、桃花が 錦 綉 る。屠岸賈に命じて絳州城中に花園を作り各地から名のある花、変った 孫である。阿諛迎合が得意で霊公はその阿諛を喜こび彼の言い成りであ もしなくなり屠岸賈という大夫を籠愛した。この男は屠撃の子、屠岸夷のもしなくなり屠岸賈という大夫を籠愛した。この男は屠撃の子、屠岸夷の く取立てる事)し大規模な土木工事を興し、遊びに呆けて国事には振向き この頃晋霊公は成長して、荒淫暴虐になり民衆を苛 斂誅 求 (税を厳し

人々が集まってきた。 をしたり、飲んで馬鹿騒ぎをしていた。 ある日霊公が芸人を呼んで楼上で色々な芸をさせていると、 園の外に

霊公は突然屠岸賈に、

に当たれば勝ち、肩に当ったら勝負なし、当らなかったら負けで罰とし て大升の酒を飲むという事にしよう」 「鳥を撃つより人を撃つほうが面白いじゃないか。賭けをしよう。目

と言い、早速霊公は右の方を、岸賈は左の方を撃つことにした。

十に羊肉を振舞 たが自分の御者の羊斟に与えのをうかりした。羊斟は怒て鄭 これを見よ」

184

避けることができず、ある者は頭に、ある者は額にあるいは目に歯に当 たので周りの者みなが一斉に撃った。弾は雨のように飛んできて人々は て大混乱となった。霊公は興奮して「いっそのこと全員で撃て」と命じ ぶに当たり、もう一つは左肩に当たった。驚いた人々は慌てて逃げ出し 弓を満月のように引絞ると弾は流星のように群がる人の一人の耳た

霊公は台上からこれを見て、弓を放り出し大笑いして岸賈に言った。 「わしは何度もここへ上がっていろいろな遊びをしたがこんなに愉

快なことは初めてだ」

聞くに堪えない。更に驚いて頭を抱えて押し合いへし合いつまずき倒れ

り怪我をして、父親を呼びあるいは娘を呼び阿鼻叫喚を呈し苦しむ声は

る者あり、慌てて逃げ回る様は見るに堪えない。

中ではつぎのようなことが言われた。 これ以後、人々は楼上に人が見えると桃園の前は通らなくなった。市

笑って出かけて 泣いて帰ることになる 

火のような真っ赤な猛犬が献納された。 霊公は近侍が罪を犯したら獒を ある時、周から霊獒という人の気持ちを解する身の丈三尺もある炭の

はいつも獒奴に細い鎖で犬をつながせ側に侍らせたので見るものはみな をする内庭または内裏に対し政治儀式を行う場所)を廃止し大夫たちに内寝 斤の羊肉を食わせていた。犬はこの小奴の指示をよく聞くようになり そそのかし噛み殺させた。ある小奴をこの犬の専任飼育係にし、毎日数 **獒 奴と呼ばれ中大夫の俸禄をもらうようになった。霊公は外朝 (私生活** (日常居住の部屋) に報告に来るよう命じた。 朝議の時や遊びに行くとき

> 趙盾を毛嫌いするようになっていった。 て民に親しむよう説得したが、全く耳を閉ざし聞こうともせず、却って 盾はしばしば諌言し、賢臣に礼を尽くし佞臣を遠ざけ、政事に目を向け 震え上がった。次第に列国は離心し人々の怨嗟の声が高まって来た。趙

叫んだが頭を下げるだけで来ようとしない。 盾は宮中にどうしてこんなものが有るのか変に思い、その二人の内侍を いた。すると突然二人の内侍が竹籠をかついで通用門から出てきた。趙 の入り口に残って国事について相談しながら互いに君主の無道を嘆いて ある日、朝議が終わり大夫たちが解散した後、趙盾と士会だけが内寝

て下さい。私たちは勝手に申し上げられません」 「あなたさまは相国様ですからご希望でしたらご自分でご覧になっ

「籠の中は何だ」

手足をばらばらにされた死体であった。趙盾は驚いて二人の内侍を追及 に人の片手が少し籠の外にはみ出している。籠の中をよく見るとそれは したが始めはどうしても言おうとしなかった。

というとその剣幕に恐れやっと話し出した。 「これ以上隠し立てするならお前等から先に成敗する」

になったのです。すぐに戻ってご報告しなければ今度はわれわれが罰せ たので、仕方なく御前に出しました。ところそれが生煮えだったので怒 ですが、急に酒の肴が欲しくなり何度も未だかまだかと催促して来まし って彼を殺し、バラバラにして我われに野外へ捨ててくるようにお命じ 「この人は料理人です。ご主君が彼に熊の足を煮るよう命じられたの

られます」

趙盾はますます疑惑を持ち、士会と一緒に籠を開けて見ると驚いた事

趙盾は内侍を放免してそのまま籠を担いでいかせ、士会に言った。 「殿は余りに無道だ、人の命を雑草かなんかのように考えている。こ

れでは国の滅亡が危ぶまれる。二人で諌言に行かないか」

でしたらお願い致します」 なくなってしまいます。わたしが先ず諌言してみましょう、それで駄目 「我われ二人が行って説得できなかったら、もう誰も後に継ぐ者がい

は遠くから諌言に来たのだなと感じて、 この時霊公はまだ中堂にいたので士会は直接霊公の前へ行った。霊公

「大夫何も言わないでくれ、わしは自分の過ちをわかっている。只今

から改めよう」 と機先を制した。士会は叩頭して、

過ちをお改めになれば賢君となり社 稷の幸せでございます。我われ臣下 賢人といえましょう。過ちを犯して改めなければ愚人であります。殿が 「人は誰でも過ちはございます。過ちを犯しても改める事ができれば

と致しましてもこれに勝る喜びはありません」 と言って退出し、そのまま趙盾に報告した。

「殿が本当に後悔していればすぐに実行するはずだが」

翌日霊公は朝議に出ず、また桃園へ遊びに行った。趙盾は怒って、

諫言しないわけにはいかん」 「こんな事では後悔なんかしているようには見えんな。今日こそ強く

車前に出て拝謁した。 そう言って、一歩先に桃園の門外へ行き、霊公の車が来るのを待って

と訝って言うと、趙盾は叩頭再拝して言った。 「わしは卿を呼んでいないのに何故此処に来ているんだ」

> れていきます。桀王、紂王が滅びたような災いが殿の身に及びつつありようにみだりに人殺しをなさっていますと民衆は恨みを蓄積し諸侯は離 ど、徳ある君の所業ではございません。人の命は非常に大切です。この 人を撃つ、あるいは少し過失のあった料理人を殺してばらばらにするな うのはかって聞いたことがございません。殿が犬に人をかませ、弾弓で 遊びは一身の遊楽に止まります。まして人を殺すのを楽しみにするとい の君は楽で自分が楽しむ』と申します。女性方との楽しみや巻き狩りの さいますようお願い申し上げます。『徳ある君は楽で人を楽しませ、無道

「微臣申し上げたきことがございます、どうかご寛容にお聞き届け下

や国が滅亡の危機に立たれるのを我慢できず、歯に布着せず申し上げて ます。臣が申し上げなければ誰が申し上げられましょう。臣は座して殿 いるのでございます。どうかご鳳輦をお返しになってくださいませ。そ

が国の危機は平穏に戻り、臣は死しても悔いはございません」 うして前非をお改めになり歓楽を控えられ人の命を大切になされば、わ

「卿、しばらく下がって、今日一日だけわしが遊ぶのを許してくれま

これを聞いて霊公は大いに恥じ入り袖で顔をおおって、

せんか、明日からはきっとあなたの忠告に従うから」 と言ったが、趙盾は体で桃園の門に立ちはだかり霊公を入れなかった。

すると屠岸賈が横合いから、

えたのですから、これからお帰りになったら面目ありません。しばらく で話されたら如何です」 融通を利かせてください。 政 の話は明日殿が朝議に出られた時にそこ 「相国の言われるのも尤もですが、殿は今日は何しろもう出かけてみ

明朝卿を呼ぶから話を聞かせてください」

と憎々そうに言った。
「国や家が滅びるのは何時だってお前のような輩が原因なんだ」

屠岸賈は霊公と遊んでいて興たけなわの頃、ふとため息をつき、

「どうしてそんなに嘆いているんだ」「この楽しみもこれが最後ですね」

「明朝きっと相 国が又うるさく言ってきて殿の外出を許さないでし

霊公は憤然と色をなして言った。

よう

ようがない、何とかあいつを除く方法はないものかね」うのは聴いたことがない。あの老いぼれがいるとわしはやりにくくてしうのは聴いたことがない。あの老いぼれがいるとわしはやりにくくてして苦から臣下が君主に従うものであり、君主が臣下に指示されるとい

なく遊ぶ事ができます」 でいますが、それを恩に感じて命を掛けて報いたいと言っております。っていますが、それを恩に感じて命を掛けて報いたいと言っております。 「臣の食客に鉏麑という者がいまして、家が貧しいので面倒を見てや

「よし、それがうまく行ったら、卿の功績は大きいぞ」

Xを削してもらったゝ。そなとは11gの門前こ替んでおって、皮は丘「趙盾は権力を独占し君主をないがしろにしている。晋侯の命令だ、その夜、屠岸賈は鉏麑を呼び出し酒食を与え、

と命じた。銀麑は雪のように冴えた匕首を携え準備万端怠りなく趙邸鼓に参内するからその時刺し殺すのだ、絶対に失敗は許されん」彼を刺してもらいたい。そなたは趙相国の門前に潜んでおいて、彼は五

の門外に潜伏していた。五更になるとそっと門口へ駆け寄った。重い門

と心配して忠告したが、盾は

待っているのである。 銀麑は驚いて門外に出てため息をついた。 がいる。 この人こそ相 国趙盾である。 参内には少し早すぎるので坐ってれて仔細を眺めていた。 堂上には正装して笏を持ち端然と坐っている人 赤々とついている。 銀麑は隙を見てそっと中門へ入って行って暗所に隠が大きく開き車が門外に用意されている。 邸内を見ると堂上には灯火が

ろうか」

「相国は私的な所でも恭敬な態度を忘れない真に民衆のための素晴らしい人だ。もしこの人を殺したら大衆のためには不忠である。君命をらしい人だ。もしこの人を殺したら大衆のためには不忠である。君命を

「拙者は鉏麑と申すものです。君命によりお命頂戴に伺いましたが、悩んだあげく門の前に立って大声で言った。

はこれを称えて言う。そう言い終わると門前の大きな槐樹の木に頭をぶつけて死んだ。史臣もお命を狙う人が有るかもしれません、どうかご用心下さい」忠臣を殺すに忍びずわたくしはここで自決いたします。わたくしの死後

身は槐樹の下に亡びしも名は永遠なり盾を生かし屠に不信を謝すくとと、 死を見る事帰るが如し壮士鉏麑 刺客の首魁なり

陰謀があるかもしれません」
「相国さま、今日は参内なさらないほうがよろしゅうございましょう。守衛は驚いて、鉏麑がこれこれと趙盾に報告した。盾の車右提弥明は、

ば失礼ではないか。死ぬも生きるも運命である、気にすることはない」 と言って、鉏麑をしばらく槐樹の下に浅く埋めて置くように指示して 「殿が早朝に話を聞いて下さるといっておられるのに参内しなけれ

参内し、何時もの通り挨拶を行った。 1

かとたずねた。 霊公は趙盾が生きているのを見て屠岸賈に鉏麑の件はどうなったの

んだと言う者がおりますが理由はよく分っていません 「鉏麑は行ったまま帰って来ていません。途中で槐樹にぶつかって死

「この計画は失敗だ。どうするかね

「臣に趙盾を除くのにもう一つ考えがあります。これは万に一つも失

敗はありません」

「どんな計だ」

を見せてくれるように頼みます。盾は必ず剣を殿に差し出すはずです。 後ろに武装兵を伏せて起きます。酒が三巡した頃、殿が趙盾に彼の佩剣 明日趙盾を宮中にお呼びになって酒を飲ませます。そして予め壁の

招いたと見るでしょうから殿が大臣を殺したという汚名は免れます。 如 にとび出して来て縛り上げ斬ってしまいます。外からは趙盾が自ら死を 主上をお助けしろ』と大声で叫びます。そうすればただちに兵士が一斉 その時臣が傍から『趙盾は君前で剣を外した。謀反の疑いあり、皆の者

「それは妙計だ」

何でしょう」

と霊公は大喜びしその案を採用することにした。

翌日、朝議の後、霊公は趙盾に、

「わしはそなたの直言に従って、家臣たちと親しみ、政治に精出し楽

きざはし(階段)を登るとき しみを控えることにした。そこでそなたをねぎらいたいと思う」 と言ってすぐに屠岸賈に宮中へ案内させた。車右の提弥明も同行した。

「ご主君が相国のために設けた宴であるから余人は上がらないよう

を運び酒が三巡した頃、霊公は趙盾に と屠岸賈がいうので弥明は仕方なく堂下で立って待っていた。 趙盾は挨拶をして霊公の右に座り屠岸賈は左に坐った。料理人が料理

っとはずして見せてくれませんか」 卿が佩いている剣は天下に名をはせた利剣だと聞いています。

下でこれを見ていて大声で叫んだ。 と頼んだ。趙盾は罠とも知らず剣を外そうとした。その時提弥明が堂

霊獒を放させ、紫の上着を追わせた。獒は飛ぶように走り宮門の内側で る事にはなりません。どうして酒を飲んで君前で剣を解かれるのですか」 て、昂然と堂に上り趙盾を守って階段を下りた。岸賈は獒奴を呼んで 趙盾ははっと気がつきすぐに立ち上がった。提弥明は怒気を露わにし 「君主と酒宴を共にする時は、三巡を過ぎれば座を立っても礼を失す

身に傷を受け力尽きて遂に死んだ。史臣讃えて言う。 守り、盾を急がせて逃がした。彼は一人止まって戦ったが衆寡敵せず全

怒り、壁の後ろに隠れていた兵士に盾を追撃させた。弥明は身を挺して **獒を捕えその首をひねると首の骨が折れ死んでしまった。霊公は非常に** 盾に追いついたが、弥明は千鈞でも挙げようかという力持ちで、両手で

君の獒 人を害し 臣の獒人を守る この二獒何れをとらんや 君に獒あり臣にまた獒あり 君の獒 臣の獒に如かず

と見ると一人の男がものすごい勢いで追いかけて来る。盾はぎょっと驚 趙盾は弥明が兵士達を防いでくれたお陰で先に逃れる事ができた。ふ

「相国さま、ご心配はございません。お助けに参ったのです」

とその男は言う。

「あなたはどなたです」

相国さま、桑の木陰で餓死しそうになった男の事をお忘れになられ

ましたか。 私はその時の 霊 輒です」

思って捕えたが、その男は飢餓で立つにも立てない状態だった。名前を で休憩を取った時、男が倒れているのを見つけた。刺客かもしれないと

それは五年前のことである。趙盾が九原山の巻狩りの帰りに桑の木陰

聞くと 「霊輒と申します。衛国に三年遊学し今日が始めての帰省ですが、飯

分を箱にしまい残りの半分だけを食べた。趙盾は変に思ってたずねた。 袋が空っぽになって三日間も何も食べていないのです」 と言うので盾は哀れんで飯と干し肉を与えた。輒は小箱を取り出し半

た。

「そなた、半分箱にしまってどうするのだ」

きていますので幸い母が生きていればあなた様からいただいたこのご馳 なりますので生きているかどうかも判りません。ほんの近くまで帰って 「実は、西門に老いた母親が住んでいますが、わたしが家を出て長く

走を母にも与えたいと思っています」 「そなたは大変親孝行だ」

与えると霊輒は感謝して去った。 そういう事があったのである。今も絳州に有哺飢坂という所があるがゆうほききか

この話にちなんだ名である。

その後霊輒は官人に応募してちょうど今回の兵士の中に選ばれたの

来たが、ちょうど趙朔が全家兵を集めて迎えに来たので助かってその車 負って走って朝門を出た。兵士達は提弥明を殺すと一斉に趙盾を追って の従者は事変を知って皆逃げてしまったので車も無い。霊輒は趙盾を背 で、何とか昔の恩を返したいと思いわざわざ助けに来たのである。

間にかどこかへ去っていなかった。 追って来た兵士たちは趙家の家兵た に乗った。 趙盾は霊 輒を呼んで一緒に乗せようと思ったが輒はいつの

ちを見て追撃する勇気は無かった。

趙盾は趙朔に、 「事ここに至ったからにはもう家には帰れない。ここから翟か秦に逃

げようと思う。身一つくらい何処ででも何とかなるだろう」 と言って、父子二人とも家に向かわずそのまま西門を出て西へ向かっ

趙盾は何処へ出奔する事になったのか、それは次回のお楽しみ

(ここでは提弥明と霊輒の二人の話になっているが、史記では示眯明という

人の話になっている

と言って箱に入れたものを全て食べさせ、別に飯と肉を飯袋に詰めて

### 楚庄王 闘椒を誅し絶纓大会を催す 一桃園事件を趙盾の責とし史簡に直筆

たのを喜び、村童がお師匠さんから離れたようにのびのびして、とうと 晋霊公は趙盾を謀殺しようとして失敗したが、彼が絳城から出て行っ

う宮中の家族を連れて桃園に住み着いてしまった。 趙 穿は西郊外での狩りから帰る途中ぱったりと盾、朔親子に出会っ

た。車を止めて話しを聞き、その事情がわかると趙穿は、 「叔父殿、、出国はしばしお待ち下さい。数日内に必ず消息をお届け

しますから、それから後のことを決められたらいかがです」 と提案し、趙盾はそれを承知した。

ことにしよう。十分自重して禍を重ねないように頼むぞ」 「そういう事ならしばらく首陽山で仮住まいして、良い知らせを待つ

趙穿は盾、朔父子と別れて絳城に帰った。霊公が桃園に住み着いてい

ると知ると、出向いて謁見し、心にもなく叩頭して謝罪し、 「臣穿、ご親類の名を忝く致しておりますが罪人の一族でございます。

お願い申し上げます」 とてもお傍にお仕えすることはできませんのでどうか罷免賜りますよう

霊公はこれを真に受けて慰めて言った。

とは関係ない。安心して職務についてください」 「盾は度々わしを愚弄し、実際のところ我慢できなかったのだが、卿

『人の主に立たれる貴人だけが音曲女色の楽しみを極める事ができ

趙穿は礼を言った後、さらに加えた。

そこにもっとたくさんの良家の女性をお集めになり、立派な先生をつけ んの女性がおられました。殿には楼台に広いお部屋があるのですからそ られ、帰国されたときは六十を過ぎておられましたがなお非常にたくさ 文公は国外に逃亡しておられたけれど、行かれる先々で女性を手に入れ 性が宮廷内に溢れる程いて夫人のほかに準夫人も六人もいました。先君 分にお楽しみになれないのではないでしょうか。斉の桓公は寵愛する女

る』と申します。殿は鐘鼓はあっても内宮の女性が不備で、これでは十

「卿の話はまさにわしの考えと同じだ。国中を廻って美人を探させた

て歌舞を教えさせれば次々とお楽しみになれるのではないでしょうか」

いが誰が適任だろうか」

「大夫の屠岸賈殿はいかがでしょう」

からます。 の容貌優れた未婚女性を選考し、一ヶ月以内に報告するよう指示した。 趙穿はこの公務出張の名の下に屠岸賈を霊公から離し、更に言った。 霊公は屠岸賈を専門の担当官として、城内城外を問わず、二十歳以内

寝ずの番を置きたいと存じます。よろしくご裁決をお願い致します」

「桃園の防備が一寸手薄ですから、軍中から精鋭を二百人ほど選んで

霊公は許可した。 趙穿は上軍に戻って二百人の兵士を選んだ。

たたちに桃園を巡邏させよとの仰せである。そなたたちにも家庭があろ 「主上は民衆のことをお考えにならず終日桃園で遊んでおられ、そな 「将軍、何のための派遣ですか」

期限も決まっていないんだ」 うが、あちらへ行けば風にも吹かれ野宿もあり苦労をかけることになり 「そんな無道な君主など早く死んでしまえばいいんだ。相国がおられ

干にもたれてそれを見ていた。趙穿は彼等に向かって、

たらこんな事はないよ」

「そなたたちとちょっと相談があるんだが、いいかい」

す 「将軍が我われを救って下さるとおっしゃるのでしたら、ご恩に着ま

わしはすぐ相 国をお迎えして、別な新君を立てようと思うのだがどうか しょうと言って袖を振るから、それを合図に楼上に攻め上り晋侯を殺す。 後十時前後)に園内に押し寄せる。わしは殿に賞を要求して来ているんで 「桃園は宮殿のようには深くも広くもないので、そなたたちは二更(午

\*\*\*\*\*\*\* に上がってこれを見ると、どれも精鋭ぞろいである。 霊公は大変喜びに上がってこれを見ると、どれも精鋭ぞろいである。 霊公は大変喜び 桃園の外に並ばせた。ある者がこの状況を霊公に知らせたので霊公が台 趙穿を引き留めて酒を振舞った。 兵たちはみな大賛成したので、趙穿はみなに酒食を出してねぎらい、

ね

いた。趙穿は、 飲んで二更になると外で突然喊声が上がった。霊公は驚いてわけを聞

楼に上がって霊公に、 ょう。一寸行って注意してきましょう、特に驚かれる事はございません」 して侵入して来ている。 趙 穿は彼等を落ち着かせ楼台の下へ連れて行き、 と答え手燭を出させて楼台を降りて行った。兵士二百人は既に門を壊 「あれはきっと夜回りの兵士が夜歩いていた者を追っているのでし

いといっているだけで、他意はないようです」 と報告した。霊公は内侍に彼等にも酒を出してやるように言って、欄 「兵士たちは殿が酒宴を開いておられるのを知っておこぼれが欲し

> 上がっていった。霊公は内心慌てて趙穿に、 と言うとサッと袖を払った。兵士たちは晋侯とわかって一斉に楼台を 「殿がそなたたちをねぎらって下さる。ありがたく拝領せよ」

「兵士たちが登って来るがどういうことだ。卿よ、彼等に言って速く

引下らせなさい」

と言ったが趙穿が、

「彼等は盾相 国を思って、殿に相 国を帰国させて欲しいと思ってい」

るのです」

公に突き刺さり即死した(霊公桃園事件)。周りの者は驚いて慌てて逃げ と答えると、霊公はそれに対して何か言う間もなく、何本かの戟が霊

散った。 「馬鹿殿はすでに処分した。他の者をみだりに殺すではない。わしに

ついて来てくれ。 相 国をお迎えに行き、朝廷に戻っていただくのだ」

なかった。民衆も長い間霊公を恨み続けていたので、その死をかえって ののいていたので、兵士が弑逆に至った時、誰も霊公を助けようとはし 晋侯は無道にも簡単に人を殺してきた。近侍たちは毎日死の恐怖にお

反で死ぬだろう』と予言があった(49回)が宋、斉、晋の三国の君は皆 七年前、彗星が北斗に入った時、占いで『斉、宋、晋三国の君主は皆謀 快く思い、誰もこれを趙穿の罪にしようとはしなかった。

まさにそれが現実となったのである。

怪む勿れ助け来る者なきを一弾を避け楼下に出掛ける人はなし 高殿の管弦未だ止まぬ時 楼下の兵乱入し 朱楼は血に染まる

侯が殺されたという報せを聞き驚き、すぐ趙穿の仕業だとわかったが大 屠岸賈はその時郊外に出て一戸一戸訪ねて美人を捜していた。 突然晋

声を出さずそっと屋敷に戻った。士会等は事変を聞いてすぐに桃園へ行 帰国し太廟に参り即位した。これが晋成公である。 成公は即位すると国政を趙盾に任せ、娘を趙朔の妻にした。これが

ったがもう誰もいなかった。 趙 穿は相 国を迎えに行ったのだろうと思

趙穿の弑逆の罪を消してやろうと彼に黒臀を迎えに周へ遣った。黒臀はいまだ。

庄姫である。

って桃園の門を封鎖し静かに帰りを待った。一日足らずで趙盾が絳城へ

を叔隗に譲って)臣は本来の身分を超え嫡子にしていただき、遂に中軍の 譲の美徳のある方で、臣の母子を翟から晋にお呼びになり(正夫人の地位 「臣の母は狄の女性(叔 隗)でしたが、君姫氏(趙姫、文公の娘) は謙

成人していますので官位をお与えいただきお仕えさせたいと存じます」 将となりました。君姫氏には同、括、嬰という三人の子がおりまして皆

「卿の弟をわたしの妹が気に入っているようです。ちょうどいいじゃ

と願い出た。成公は快く、

時霊公にはまだ子が無かった。

示し、直ちに大夫たちを集め誰を新君に立てるかついて協議した。 この ではないと口々に言い合った。趙盾は霊公を納棺し曲 沃に葬むるよう指 民衆はこれを聞き、相国の忠愛を称え、晋侯は身から出た錆で相国の咎 死体に覆いかぶさって、しばらく悲痛な声が園外に聞こえる程に泣いた。 帰って来て直接桃園へ行った。すぐ百官が集まってきた。趙盾は霊王の

ましたが皆はそれに協力しないで今日に至った。今回は慎重にお願いし 「先君襄公が亡くなられた時、 成長された雍殿にすべきだと随分言い ないですか、遠慮する必要はありませんよ」 と許可したので趙同、趙 括、趙 嬰を皆大夫にし、趙 穿は今までど 192

「国のためには判断力のある成長された君主の方がいいと思います。 おり中軍の副将とした。 趙穿はそっと趙盾に言った。 「屠岸賈は先君にへつらって気に入られていた男だから趙氏とは仇

彼を生かしておくと後々禍の恐れがあります」 の状態で、桃園のことでは趙氏を恨んで不満を抱いていると思います。

相国のおっしゃるとおりです」

と賛同したので趙盾は続けて提案した。

「文公のお子様がもう一人おられます。 お生まれになるときに母君の

趙盾がそう言って口火を切ると士会も、

るのだからむしろ同朝の者とは仲良くし、恨みを蒸し返さないようにし から、そなたももう罪人をつくる事は無い。わが一族は隆盛を極めてい 「もういいんだ、人々は今回の件をそなたのせいにはしていないんだ

なければならん」 趙盾がそう言うと趙穿もそれ以上何も言わなかった。屠岸賈も趙氏に

百官誰も異論を唱えるものはなく趙盾の案に賛成した。そこで趙盾は

恭順を示した。

黒臀と名付けられたと言われています。今、周に仕えておられ、お年も 夢に神が現れて黒い手でお尻を触られたという事で、それにちなんで

長じておられますのでわたしはこの方をお迎えしたいと思いますが如何

83

『董狐の筆』権勢に媚びず職務を全うする第 48 回 注 203

趙盾君主夷皋(霊公)を桃園で弑いす』とある。 た歴史書)を提出させて読んでいた。するとそこに明確に『秋七月乙丑、 ある日、趙盾は史館に足を向け、太史の董狐に会って史簡(竹簡に書い 結局趙盾は桃園事件をうやむやにしてしまったのである。 「太史、これは間違いだぞ、わしはあの時は河東に逃げ出していたん

いか 趙盾は驚いて董狐に抗議したが、董狐は怖れる事もなくきっぱりと言

った。

だ。絳城からは二百余里も離れていてご主君が殺された事がわかるわけ

がないじゃないか。どうしてわしのせいにするのだ。これは誣告じゃな

ないといっても誰が信じましょう」 ても下手人を討とうとはなさいませんでした。これであなたが首謀者で 「あなたは相国です。国境を越えて亡命した訳でもなく、都へ帰られ

「書き換える事はできないのか」

ます。首を斬られようとも書き直す事はできません」。 - 是々非々で事実をそのまま書く。 それでこそ信頼できる史書となり

名を残す事になってしまったのか」 と国外へ逃げておけばよかった、悔いても及ばぬ事だがこれで万世に悪 「ああ、史臣の権限は宰相よりずっと重いものだ。あの時いっそのこ

は公論の反対を怖れて認めなかった。 趙 穿は憤まんが昂じ背中に悪性 で仕えるようになった。 趙 穿は今回の功を恃んで正卿を望んだが、趙盾 このことがあってから趙盾は成公に対し臣下として益々恭順な態度

の腫れ物ができて死んでしまった。

その子趙旃は父親の職の継承を願い出たが趙盾は、 「後日そなたが功を立てたら大臣宰相も難しくはない。 それまで待ち

なさい」

たのは董狐の毅然とした執筆態度の効果だと褒め称えた。 と拒否した。歴史家達は皆、趙盾が趙 穿父子にえこひいきをしなかっ

凡庸史官は記事を書くのみ
良史はそれに批判を加える

例え首落つるとも 媚びて筆を曲げる事なし 穿が主君を弑し 盾がその罪を負う

卓然たり董狐

是非を論ずるに怖れなし

王弟瑜が即位した。これが定王である。 

掌しようとした。定王は大夫の王孫満に庄王を慰問させた。 渡って周の国境に侵入し、武力をひけらかして天子を威喝し、天下を分 定王元年、楚庄王は大軍を率いて陸渾の戎を討伐した。引続き洛水を

宝として現在洛陽にあると聞いていますが、九 鼎の大きさ形はどんなも「昔禺帝が九 鼎。を鋳造して、三代(夏、殷、周) に亘り相伝し伝国の のでしょうか、重いか軽いか、一度お聞きしたかったのです」 楚庄王は孫満にたずねた。

g 九鼎 夏の禹王が中華の力の州から銅を集めて作らせた鼎 夏 殷 周にわなて 天子を示す伝医の宝とされた。

「三代は徳をもって相伝しているのであって、鼎のある無しではあり

くても軽くなります。周成王は鼎の設置場所を郟鄏(洛陽の西方)に定め、ましたがその子孫の桀王が無道だったのであり、徳がなければいくら大きましたがその子孫の桀王が無道だったので鼎は商(殷)のものになりましません。夏の禹大帝の時、九牧(九州の長官)が献じた銅で九鼎を作りません。夏の禹大帝の時、九牧(九州の長官)が献じた銅で九鼎を作り

庄王はこれを聞いて恥入り、その後は周の天下を窺おうとはしなくなせん。どうして九 鼎の軽重をお聞きになるのですか」

その後三十代、七百年になりますが、周室の天命は未だ改まってはいま

すきま 整の令尹 闘 越 椒は庄王に権力を分散させられたのを不満に思い庄王をかいたとうきつしょう かいいんとうきつじょう

「楚の人材と言えば司馬の伯嬴(蘆賈)だけで、これに注意しさえす恃み、ずっと謀反の気持ちを持ち続け、皆みにいかと隙間が生じていた。彼は自分の能力と先祖代々の功労、人民の心服をすぎます。

よどに含くコニンという。ここでを重寸及こ寸車に分析、表とは物の数ではない」

庄王は闘越椒の謀反を知って昼夜兼行で軍を返し 漳 澨 (漳 水と沮

「伯棼(鬪越椒)よ、闘氏は楚国に代々大功有る家柄だ。例えそなたが構えて陣前に武威を見せ付けると楚兵はこれを見て皆惧れをなした。水の合流点)で軍威盛んな越椒軍と出遭った。越椒が弓を背に負い戟をする

赦すると共に王子を人質に出してもいいと伝えた。ところが斗越椒は声庄王はそう言って講和のために蘇 従 を遣わし、司馬を殺した罪を特わしを捨ててもわしはそなたを捨てようとは思わない」

おうじゃないか」 「おれは令尹なんかでいたくないのだ。赦免など必要ない、戦場で会

蘇従が帰った後、越椒は兵士に太鼓をたたいて前進を命じた。蘇従が口を酸っぱくして忠告したが取り合わなかった。

るがこれに応じて支えに入った。 戦しているのを見て急いで出て行った。するとそれに対し越椒の弟闘旗 これに対し越椒の子闘賁皇がこれに挑んだ。潘尫は楽伯が闘賁皇に苦 上きなとう 上きなとう 上きなとう 正王が諸将に向かって叫ぶと、大将楽伯がその声に応じて出てきた。 「誰か越椒を撃退できるものはいないか」

越椒は引揚げた。楽伯、潘匹も収軍の鉦を聴くと引揚げてきた。庄王軍 た。矢はバシッと太鼓の架台に当たった。庄王は追ら撥を鳴らして兵を収めた。 越椒は勇猛に追って来たが、 と見て車を派ばし直接庄王の方へ駆けて行き、弓を引きいてサッと射 と見て車を派ばし直接庄王の方へ駆けて行き、弓を引きいてサッと射 と見て車を派ばし直接庄王の方へ駆けて行き、弓を引きいてサッと射 と見て車を派はし直接庄王の方へ駆けて行き、弓を引きいてサッと射 と見て車を派ばし直接庄王の方へ駆けて行き、弓を引きいてサッと射 に正は自ら撥を持って太鼓を打ち鳴らし督戦した。 越椒は遠くからこ

侮りその実力をはかる意味に使われる。「鼎の軽重を問う の故事『史記 楚世家『春秋左氏伝 宣公三年 権威ある者を

夜になって、庄王が自ら軍営を巡視すると、あちこちで士卒が三々じりは豹の牙という非常に鋭利なものでみな舌をまいたものである。の矢を取ってみるとその長さは普通の矢の一倍半あり、やばねは鶴、やはこの一戦で大きな損傷を受け、皇滸まで退って軍営を築いた。闘越椒はこの一戦で大きな損傷を受け、皇滸まで退って軍営を築いた。闘越椒

庄王は各所に人を遣って、 五々集まりみな闘越椒の神箭を恐れこれでは勝てないと言い合っていた。 でになって、 原子が自ら軍営を巡視すると、あちこちで士卒か三々

「先君文王のとき、 戎 が非常に鋭利な矢を作ったと聞いたので人を「先君文王のとき、 戎 が非常に鋭利な矢を作ったと聞いたのではずっと廟堂の中にしまっていたのが、闘越椒に盗まれてしまった。しかしすでに彼はその二本を使ってしまったので明日は大丈夫だ」という嘘の噂をたてさせるとやっとみな安心した。という嘘の噂をたてさせるとやっとみな安心した。

と蘇従が驚いて公子側に言うと、側は、

と言って公子嬰斉と三人揃って夜庄王に会いに行った。考えが有ると思いますよ」「これは大王の計略だと思います。大王にお会いすればきっと別なお

「逆臣越椒の勢いは抜群だから、力で勝とうとしても無理だ、ここは

るようと命じた。 庄王はそう言って彼らに秘策を授け、これこれの要領で伏兵を準備す

翌朝、庄王は大軍を率いて撤退した。越椒は斥候からそのことを聞き

計略を使うべきである」

てて慌てて逃げて行った。反乱軍が追着いてきたのを見てかまどを捨の北側で朝飯を炊いていた。反乱軍が追着いてきたのを見てかまどを捨過ぎていた。越椒は一昼夜で二百余里進み清河橋まで来た時、楚軍は橋

大軍を率いて追撃にかかった。楚軍は昼夜兼行で撤退しすでに 竟 陵 を

「楚王を捕えてから朝飯だ」

って叫んだ。かけしんがりの潘尫の軍に追いついた。潘尫は車上に立って越椒に向かかけしんがりの潘尫の軍に追いついた。潘尫は車上に立って越椒に向いと越椒が言うので兵士たちは疲労困憊だったが空腹を我慢して追い

六十里ほど行って青山まで来ると楚将熊負羈に遭った。越椒はこれを潘尫の好意の言葉と思い彼を放っておいて先を急いだ。「楚王を捕まえたいんでしょ、何をもたもたしてるんです」

「楚王は何処だ」

「王は未だここまで来ていませんよ」

越椒は信用できず負羈に言った。

たと国を分け合おうじゃないか」
「そなたがわしを楚王に会わせてくれたら、わしが楚を取った時そな

ないですか、先ず飯を食って、それからじゃないですか」
「見たところあなたの兵士たちは腹をすかせて疲れ切っているじゃ

するとまた対岸から砲声が響き楚軍の一将が大声で叫んだ。したのである。斗越椒は驚いてすぐに河の深さを測らせて渉ろうとした。をず軍を南へ返した。 清河橋まで帰って来ると、橋は壊されていた、越きず軍を南へ返した。 清河橋まで帰って来ると、橋は壊されていた。 越越城は進軍を停め食事の用意をするよう命じた。 飯がまだ炊き上がら越越椒は進軍を停め食事の用意をするよう命じた。 飯がまだ炊き上がら

「楽伯これにあり。逆賊の越椒よ、早々に馬を下りてお縄を頂戴しろ」 りいたしません。でももし外れたら今度はわたしが射る番ですよ」

越椒は怒って河を挟んで矢を射させた. 越椒は内心そう言いながら三本目の矢を取って落ち着いて放った。 「やつが矢をよけさえしなければこの矢でやつはおしまいだ」

神箭養叔と呼ばれていた。彼は自ら楽伯に越椒と弓の力比べをしたいといま 楽伯の軍中に弓が得意な養由基という将校がいた。弓の凄腕の故に 「当ったり」

は弓の名手とお聞きしています。二人で橋脚に立って三本の矢をそれぞ 「河はこんなに広いのに無駄な矢を放っても仕方がありません。今尹 来ると大きく口を開けガシッと噛み止めた。結局越椒の三本の矢は全て 越椒は叫んだ。養由基は両足でしっかり立ち全く揺るぐ事なく、矢が

束しているから仕方なく大声で叫んだ。 養由基を倒す事はできなかった。越椒は内心慌てた。しかし男として約

れに向け射ち合って勝負しませんか.

「そなたは誰だ」

願い出て河岸に立って大声で叫んだ。

養由基は笑って言った。 「じゃ次はお前だ、三本ともはずれたら又わしの番だぞ」

「三本目でやっと当るのは初級者です。私は一本で必ずお命を頂戴い

「お前がわしと弓矢の試合をしたいというのなら、わしが先に三本射 たしましょう」 「大言を吐くからにはいくらか心得があるんだろう、とにかく早くや 196

越椒はそう叫び、

れ

すから矢を避けたりはしません

「三本はおろか、百本でもどうぞ。何を恐れましょう。わたしは男で

双方隊に戻りそれぞれ橋の南北に分かれて立った。

るがそれでもいいか」

越椒はそんな名は聞いたことないと馬鹿にして

「わたくしは楽伯将軍麾下の将校養由基と申します」

心中ひそかにそう思っていた。 「一本であたるものか、外れたら怒鳴りつけてやる」

事はできなかった。『焦るものは事を得ず、事を得るものは焦らず』 養 越椒が最初に第一箭を放った。しかし残念ながら養由基を河に落とす

知る人ぞ知る、養由基の矢は百発百中である。

彼は矢を取って、

「令尹殿、よくご覧あれ

り、ピッタリと狙いを定めサッと放った。養由基は体をちょっとかがめ と叫びバシッと弦を放った。が、矢は放たず空音だけ響かせたのであ

した。 越椒は弓の弦が放たれた音を聞き矢が来たものと思い左に身をかわ

「矢はまだここにありますよ、弓には掛けていません。矢を避けまし

「越椒殿、あなたはもう一本持っておられます。今度はもうかわした 「お前は言った事と違い身をかがめて矢をよけたな。男とは言えんぞ」 ると矢は頭をかすめてはずれていった。

落として、大声で次の矢を催促した。越椒は第二箭をキリキリと引き絞 由基は飛んでくる矢を見て弓の先で一払いしポチャンと難なく矢を水に

と言って郢都へ入城し、庄王に復命した。復命が終わると自ら司寇の

は料理を運び太史は音楽を奏でた。

「君は天である、天命を放棄することはできない」

たね。とても好漢とは言えませんね」

「躱されるのを心配する奴が好射手と言えるか」

に葬られてしまったのである。 いた。哀れ楚の令尹を数年勤めた闘越椒はいま、下級将校養由基の一箭 のが分からず今度はかわすことができなかった。矢は見事彼の頭部を貫 わした。由基は越椒がよけたのを見てすぐ矢を放った。越椒は矢が来る 由基は再び弓をいっぱい引き空音を鳴らせると越椒は今度は右へか

髯仙はこれを次のような詩にしている。 神箭将軍の挑戦を受け
越椒橋を隔て敗死せり 人生「知足」を最良とすべし 令尹貪心を以て王位を狙う

**闘賁皇は晋国に亡命し、晋侯は彼を大夫にして 苗 を食邑として与え** 的に叩き、しかばねは山をなし、血は河を真っ赤に染めた。越椒の子の たえて四散してしまった。楚将公子側、公子嬰斉は分かれて追撃し徹底 苗賁皇とよんだ。 闘家の軍は腹をすかせ疲労困憊のところ、主将が射倒されたのでうろ

げて郢に帰還した。 闘氏一族は位階年齢の大小にかかわらず 悉 く斬首 で、越椒が謀反を起したことを聞き、側近の者は国に入らないほうがい だけは、庄王の命で表敬の使者として斉と秦に派遣されていた。帰途宋 刑となった。しかしこの時、闘般の子で箴尹(王に諫言する官)の闘克黄

庄王は完勝し軍の引揚げを命じ、捕えた者は軍前で斬首し、凱歌をあ

下へ出頭した。

先祖の遺訓にも違える事になってしまいましたので死が相当でございま 祖父子文の言葉が現実になり不孝にも逆臣の一族という事になり、また じ逃げ出す事はできず、そのために越椒に殺されてしまいました。今、 他国へ逃避するようにと申しましたが、父は代々楚から受けたご恩を感 に違いない』と申しておりました。祖父は臨終の際にわが父(闘般)に わが祖父子文は『越椒には謀反の相があるからきっと一族を滅ぼす

す、逃げ隠れは致しません」

圧王はこれを聞き感心し、

彼のためにもその子孫を絶やす事はできん。克黄は決してその刑から逃 れようとはしなかった。これこそ忠臣である」 「子文は真に神人だ。しかも楚国に対する功績も大なるものがある。

いう意味で闘生と改めさせた。 と言って克黄の罪を赦して、原職に復帰させ、名も死して生を得たと 197

しばらく彼に国事を任せることにした。 し車右に任じた。令尹が空席になったので沈尹虞丘が賢人であると聞き 庄王は養由基の一箭の功を称えて、手厚く賞を下賜し近衛兵の大将と

ちも皆集まった。 漸台に酒を置き群臣を集め功を祝う宴会が大々的に催され王の妃た

- 鉦鼓に触らなくなって既に六年になる。 謀反人は片づき国はやっと

安定したので今日は諸君と一日ゆっくりと遊びたいと思う。今日の宴を 太平宴と名付けよう。文武身分の上下を問わず皆楽しんでもらいたい」 庄王がそう言うと皆感謝し席次に従ってそれぞれ席についた。 料理人

を注いで回らせた。みな席を立って彼女の酌を受けていたが、突然一陣 を点けさせて宴を続け、寵愛している許姫姜氏に、大夫たちみんなに酒 の風がサッと吹き抜け堂の燭台の火が全て消えてしまった。担当者が再 何時の間にか日は西の山に落ちたが未だ興は尽きないので、庄王は燭

りで彼女の袂を引いた。許姫は左手で袂の手を引き離そうとし、右手で

点火の用意をしている間に、ある者が許姫の美貌につい魔がさして暗が

男の冠の房を引きちぎったので男は驚いて手を離した。許姫は取った房 を持って庄王の前へ行き、耳元で言った。

か

な者がいまして、火が消えたのを幸いにわたしの袂を引くのです。わた しはその人の冠の房をちぎって参りました。早く灯をつけさせてお調べ 「大王さまのご命令で大夫の皆様へお酌しておりましたが、中に無礼

う命じて、全員に向かって言った。 庄王はこれを聞き、急いで火の担当者に火を点けるのをしばし待つよ

した。諸卿、みな冠の房を取って飲もうじゃないか。楽しもうと思うも 「わしは今日の宴会の初めに諸卿と無礼講で精一杯楽しみたいと話

袂を引いたのが誰か結局わからなかった。 のは皆房を取ってくれ」 百官がみな冠の房を取ってしまってから灯をつけさせたので許姫の

散会して宮室へ帰ると許姫はいきまいて庄王に文句を言った。

れましたのに、わたしの袂を引張った無礼者をお調べにならないで何を です。大王さまはわたしに家臣たちのお酌をさせて彼らには敬意を表さ 「『男女は互いにけがさず』と申します。君臣の間でしたらなおさら

以って上下の礼、男女間の礼を正せるのでしょうか」

醒めして、わしが最初に言った趣旨に反する事になってしまうではない の言う女の節を明らかにし、国士の心を傷つけたら家臣たちはみな興が かりをつけてまで続けたのだ。酒の上の失態は人の常だ。調査してお前 ないとされている。わしはみなに精一杯楽しんでもらいたかったので明

会は酒三巡を過ぎれば礼を失する事にはならず、宴は昼間とし夜は行わ

「これは女の口出しする事ではない。古い作法によると、君臣との宴

うになった。髯翁は次のように詩に詠っている。 庄王は笑いながら彼女をなだめた。後世この宴を『絶纓会』と言うよ

この時の犯人(唐狡)は後に庄王の恩に報いる(53回

暗中に袂を引く酔中の情 玉手は風の如く纓を奪えり

ある日、庄王が虞丘と国政について話合って夜半になって内宮へ帰っ 王の大いに飲めとの無礼講 養魚は水清きを喜ばず

「今日は朝廷で何がおありになってこんなに遅くなったのですか」

て来た。夫人の樊姫は、

ょ | 虞丘と政治の話をしていて何時の間にか遅くなってしまったんだ

「楚の賢者だよ」

「虞丘というのはどんな人なのかしら」

しら 「でもそれでは虞丘はまだ必ずしも賢者とは言えないのではないか

わ。わたくしは中宮として凡そ宮中に美しい者がいれば必ず王さまに引 「そなたはどうして虞丘が賢者ではないと思うのかね」 「臣下が主君に仕えるのは女が夫に仕えるようなものだと思います

に泣いて言った。

ものには限界があり、楚国には有能の士は限りなくいます。彼一人の智 まうというのは賢者とはいえないでしょう。そもそも一人の智恵という き合わせるようにしています。虞丘が王さまと政を論じ夜分になってし

るのではないでしょうか。こんなのが賢臣と言えるでしょうか」

恵で王さまと議論するというのは天下の無数の能力を覆い隠すことにな

庄王はなるほどと思い、翌朝樊姫の話を虞丘に言った。

**藁賈の子薦敖が賢者だとして、** 「臣の智恵ではそこまで気付きませんでした。すぐ対処いたします」

才があります」 「闘越椒の難を避けて夢沢に隠居しています。この人は大将、宰相の

と推薦した。虞丘が庄王に報告すると、 「伯嬴(蔿賈)は智謀百出の人だったから。その子であればきっと非

凡であろう、そなたから聞かなければ気が付かなかった」 蔦敖は字が孫<br />
叔なので人は彼を孫<br />
叔敖と呼んでいる。母親を守っ と言って早速虞丘と闘生に命じ夢沢へ行かせ蔿敖に参内を要請した。

て避難し夢沢に住み着き田を耕し自給生活をしていた。

きっと死ぬだろうと思った。しかしこの蛇をこのまま放っておいて後か ものは必ず死ぬ』という言い伝えがある。彼はその蛇を見て驚き自分は って、鋤でその蛇を殺し田んぼの畦に埋めて走って帰った。そして母親 ら来た人が見たらその人の命も危ない。 死ぬなら自分一人で十分だと思 ある日鋤を担いで出かけると田に両頭の蛇がいた。『両頭の蛇を見た

> しまいました。母上に孝養を尽くす事ができなくなってしまいます」 「蛇は今どこにいるんだい」

「後の人が見ないように殺して埋めました」

かきっといい事がありますよ」 人に及ばないように処置した事はいい事です。おまえは死なないどころ 「人に善の心があれば天は必ずお救い下さるよ。両頭の蛇の累が他の

それから数日して虞丘等が王命を帯びて彼を登用したいとやって来

「これは蛇を埋めたおかげだよ」

と母親は笑って言った。母子は虞丘に随いて郢都へ戻った。

庄王は孫叔敖に会うと一日中話をして、

「楚の国に彼に勝る卿はいない」

と大変喜び、即日令尹を委嘱した。しかし孫叔敖はそれを断った。

せん。大夫の皆さんの末席をいただければ幸いに存じます」 「田舎者が大政をお受けしてもとても人々を服せしめる事ができま

左にいる者は宿営準備を担当する。先鋒部隊は斥候隊として旗を前に敵 るよう 轅 (車の軸につけ牛馬とつないで引かせる2本の長い棒) を管理し、 討し軍法を作った。行軍時は軍の右にいる者は何時でも戦闘体制をとれ 叔敖は再二遠慮したが王命拒みきれず令尹を拝命し、楚国の制度を検 「わしは卿の力を十分わかっている。断らずに是非受けてくれ」

「両頭の蛇を見た者は必ず死ぬといいますが、わたしは今それを見て 突き追撃を断つ。近衛兵は左右二広に分け、各広それぞれ戦車十五乗と し、一乗は歩兵百人、後に遊撃兵二十五名をつける。右広は丑、寅、卯、

者の口出しは厳禁とし、後軍は精兵で 殿 をつとめ、戦いは敵の意表を

の有無を確認して対策を講ずる。中軍は軍の方針軍略策定を担当し他の

時から午後九時)を管轄時間とし、右広は毎日鶏鳴に出動準備に入り昼ま辰、巳の五刻(午前一時から十一時)、左広は午未申酉戌の五刻(午前十一

虞丘を中軍、公子嬰斉を左軍、公子側を右軍、養由基を近衛右広、屈蕩とはいて、「後十時から午前一時)巡回し非常時に備える事とする。また、で巡回し、その後は日没まで左広が代わって巡回する。内宮は交代で亥、で巡回し、その後は日没まで左広が代わって巡回する。内宮は交代で亥、

さらに池を築き水利を興し、灌漑して耕地を拡大したので民衆はみな彼明確にしたので三軍は厳粛になり、庶民もみだりに騒ぐ事はなくなった。を同左広の各大将に任命した。年四回閲兵する事とし、それぞれ職分を

たが、彼のやることが道理に適ってきちんとしているので、を尊敬した。楚の諸臣は当初庄王が叔敖を寵信するのを不満に思っていさらに池を築き水利を興し、灌漑して耕地を拡大したので民衆はみな彼

「こんな賢臣が得られたのは大変な幸運で正に子文の再来だ」

は子文の生まれ変わりのようであった。とみな感嘆したものである。むかし子文が楚を善治したが、この叔敖とみな感嘆したものである。むかし子文が楚を善治したが、この叔敖

た。楚の庄王は孫叔敖と相談して鄭討伐の兵を出そうと思っていた時、宋と公子帰生が国政を担当したがやはり晋楚どちらつかずの状態であっ宋と公子帰生が国政を担当したがやはり晋楚どちらつかずの状態であって四兵、鄭の穆公蘭が亡くなって世子の夷が即位し霊公となり、公子

「よし、これで討伐の名目ができたぞ」突然霊公が公子帰生に殺されたという報告が入った。

と庄王はほくそ笑んだ。

帰生は何故弑君におよんだのであろうか、それは次回のお楽しみ。

# 陳霊公 女の下着を着て朝廷で 戯 れる鄭公子宋 鑑賞味会で叛心を起し第五十二回

ある(帰生の方が宋より高位)。 公子帰生字子家、公子宋字子公、二人はいずれも鄭の君主一族の卿で

いう名の由来は普通食べ物を取るときに第二指を使うからである。宋の公に会いに行った。途中、突然公子宋の食指がぴくぴく動いた。食指と鄭霊公元年のことである。公子宗と公子帰生は早起きし誘い合って霊

食指が動くのをみて帰生は奇妙に思った。

「何でもないんですが、いつもこの指がぴくぴくするとその日は美味

しいものにありつけるんです。以前使者で晋へ行った時は、石花魚を食

のでしょうか」
前に食指が動いたんです。霊験あらたかですよ。今日は何が食べられるがたし、楚へ使いをしたときは白鳥と合歓橋を食べました。どちらも事

という内侍に出会った。と宋が言いながら朝門を入ると、急ぎ足で宰父(料理人)を呼びに行くと宋が言いながら朝門を入ると、急ぎ足で宰父(料理人)を呼びに行く

「どうして宰父を呼びに行くのかね」

であります。料理をさせて大夫の皆さんに召し上がっていただこうとお大 鼈 をご主君に献上してきたので賞を取らせて今堂下の柱につない「漢江から見えた客人が重さ二百余斤 (当時の1斤は概ね250g) もある

「やっぱり珍味な物がありましたね。この食指は嘘はつかないんです」っしゃって、今宰父を呼びに行くところなんです」

200

「卿たちは今日は何故そんなに嬉しそうな顔をしているのかね」せてにんまりとした。謁見した時まだその笑いのあとが残っていたので、なるほど堂下の柱に大きな 鼈 がつながれている。 二人は顔を見合わ

と我われにも廻ってくるだろうと思いまして、食指の霊験あらたかだとただいま堂下で大きな鼈を拝見いたしました。殿が召し上がった後きっは『食指が動くといつも美味しいものが食べられるのだ』と申します。

「参内して参る途中で宋の食指が突然ぴくぴく動き出したのです。彼

『食指が動く』の故事 「春秋左伝」宣公四年)可笑しくなったわけでございます」

霊公は二人をからかってそういった。ふたりは退出してきて帰生が宋「霊験あらたかかどうかはわからんぞ、わしが決めることだからな」

「美味いものがあっても殿からお呼びがなかったらどうする」

に言った。

んてことはないでしょう」 「みなに食べさせると仰っているのだから、わたしだけ呼ばれないな

生に笑って言った。 生に笑って言った。

諸臣みな集まったので、霊公は着席を命じた。、「殿がわたしを呼ばないことは絶対ないと思いましたよ」

「鼈の類はなかなか美味いものだ。一人で食うにはもったいないので」。 まっぽん

した。

みな感謝をして席に就くと、料理人が鼈がいい味に上がりましたと言「殿のお心に感謝の言葉もありません」

諸君と共に味わおうと思う」

って、先ず霊公に差上げた。霊公は口にして大変美味いと賞賛し、臣下

前に持っていった。を仰いだ。霊公は帰生にしなさいと言って、宰夫は最後の一碗を帰生のを仰いだ。霊公は帰生にしなさいと言って、宰夫は最後の一碗を離にするか指示もない公子帰生と公子宋である。料理人は最後の一碗を誰にするか指示後に来て二つの席に一碗分しか残ってなかった。しかもこの二人は他で

へのおすそ分けが始まり一人一碗ずつ下席から上席の順に分けていき最

たの食指もあてにならんのう」 (著卿全員に食べてもらおうと指示したのだがあいにく子公(宋)の

である。
と言って笑った。実を言えば、霊公がわざと料理人に言って一碗足りと言って笑った。実を言えば、霊公がわざと料理人に言って一碗足り

ポンの肉を一かけら取って食って、そのまま君臣の礼を忘れ霊公の前へ行って霊公の碗に手を突っ込みスッったものが自分だけ食べられなかったので恥ずかしさが怒りに変わり、

宋は帰生にすっかり自慢話をしていたのに、思いもよらずみんなに渡

とカンカンになって怒った。帰生たちは席を下りて、床に臥して慰留「宋め、不遜にもわしを馬鹿にしたな。あのそっ首切り落としてやる」と言ってそのままさっさと帰って行った。霊公は箸を投げ、「臣はいただきましたよ、食指の予言は当たったではないですか」

事でございます。殿に無礼を働く気持ちなど毛頭ございません。どうか「宋は殿との親しさに甘えて平等な恩恵が欲しくてふざけてやった

お赦し下さいますようお願い致します」

霊公は怒りが止まず、君臣共に楽しいはずの珍味を味わう会がつまら

なく終わってしまった。

帰生はすぐに宋の家へ行って主君が非常に怒っている事を知らせた。 「明日参内して詫びたほうがいいぞ」

にわたしを馬鹿にしたんだ。 自分の悪い事を棚に上げわたしに責任を押 「『人を馬鹿にする者は人から馬鹿にされる』と言うが、殿の方が先

「たとえそうであっても君臣の問題だから謝らないわけにはいかな

いじゃないか」

し付けているんだ」

が昨日の罪を全く詫びようとしなかった。帰生は見捨てておけず、 翌日二人は一緒に参内し、公子宋はいつものように並んで挨拶をした

たが、怖さの余り言葉になりません。どうか殿のご宥恕をお願い申し上 「宋は殿の碗に手を入れた失態を叱られるのを恐れ謝りに参りまし

「わしが子公(宋)を恐れていて子公はわしを怖れてはいないと言う

のか

誘って密かに言った。 「殿はひどく怒っている。殺されるおそれがあるから死を免れるには

機先を制するしかないと思うんです」

帰生はそれを聞き耳を覆って言った。 「畜生だって長く飼っておれば殺すには躊躇するものだ。まして一国

の君主だ、そんな軽々しく弑逆を口にするものじゃない」

「冗談ですよ、ここだけの話にしてください」

帰生が帰ると、公子宋は帰生に探りを入れ、帰生と霊公の弟公子去疾

が仲良く何度も行き来している事を知った。そこで朝廷で、 「子家(帰生)と子良(去疾)が夜な夜な密謀して、何事かよからぬこ

とを企んでいるようだ」

と大声で言った。帰生は急いで宋を静かなところへ引張って行った。

「何と言う事をいうんだ」

「わたしに協力してくれなければ先にあなたに死んでもらいますよ」

帰生は惰弱で容易に決断できずおそるおそる聞いた。

決行しあなたと一緒に子良(去疾)殿を擁立し、晋国に誼を通じれば、 「主上は無道です。鼈のひと事からも明らかじゃないですか。大事を「どうしようというんだ」

鄭はしばらく安泰ですよ」

帰生は一寸考えてゆっくり答えた。 「そなたの好きなようにしろ、秘密を漏らしはしないから心配するな」202

している時、守護する者を買収し夜中に腹心と斎宮に潜入して、土嚢で 宋は密かに家の者を集め霊公が秋祭で斎宿(物忌みして一夜を明かす)

霊公は曲解し衣を払って出て行った。宋は朝廷を出たあと帰生を家に 生は事情を知っていたが何もいわなかった。孔子の『春秋』によると、 霊公を生き埋めにして殺し、夢魔におそわれて急死したと発表した。帰

く帰生に課したもので、執政者たるもの中傷を怖れて謀叛に加担すれば、 「鄭公子帰生が君主夷を弑逆した」となっている。これは罪を宋ではな

いわゆる『任重きは責また重し』である。即ち孔子の筆法で人臣のあり

方を戒めたものである。

翌日帰生は公子宋と話合い一緒に公子去疾に君位継承を説得に行っ

去疾は二人の来意を聞くと驚いて固辞した。

国討伐の軍を出したが、晋は荀林父に鄭を救援させたので仕方なく軍を

を違える事は死んでもできません」無いし、年長者となれば公子堅を立てるべきです。わたしとしては順序無いし、年長者となれば公子堅を立てるべきです。わたしとしては順序

そこで二人は公子堅を迎えてに君主を継がせた。即ち鄭襄 公である。 とこで二人は公子堅を迎えてに君主を継がせた。即、公子発字子国、公子嘉字子孔、公子偃字子游、公子舒字子印、そのいい公子豊、公子羽、公子然、公子志である。 襄公は弟たちが共謀してはか公子豊、公子羽、公子然、公子志である。 襄公は弟たちが共謀してはか公子豊、公子羽、公子然、公子志である。 襄公は弟たちが共謀してはか公子豊、公子羽、公子然、公子志である。 襄公は弟たちが共謀して他日謀叛を起こすことを心配しそっと去疾と相談して、去疾だけ残してを見を追放しようとした。

すると去疾はこれを諌めて、

「先君(穆公)がお生まれになるとき母君が蘭の花を持った天子の夢をご覧になってご懐妊され、占いの結果『姫氏を繁栄させるであろう』をご覧になってご懐妊され、占いの結果『姫氏を繁栄させるであろう』を当覧になってご懐妊され、占いの結果『姫氏を繁栄させるであろう』を当覧になってご懐妊され、占いの結果『姫氏を繁栄させるであろう』を当覧になってご懐妊され、占いの結果『姫氏を繁栄させるであろう』を当前であるとおって先君に地下でお会いできましょう」

翌年鄭襄公元年、楚庄王は公子嬰斉を将として弑逆罪追及を口実に鄭し講和を求め国の安定を図った。周定王二年(紀元前六○五年)の事であし。みな鄭の国政に関与する事になり、公子宋を使者として晋に派遣した。みな鄭の国政に関与する事になり、公子宋を使者として晋に派遣と説得したので襄公もその意味を感じて弟たち十一人全員を大夫に

鄭、曹四国連合で陳討伐軍を出した。しかし途上成公が病死したので軍が楚と講和したと聞き成公に上申し、荀林父に成公を補佐させて宋、衛、翌年、晋では上卿趙盾が亡くなり、郤缺が中軍元帥を引き継いだ。陳移して陳討伐に切替えた。襄公は晋成公に臣従し黒、壌で盟約を結んだ。

去疾だけは憂色を隠せなかった。鄭襄公は変に思ってその理由をたずね晋郤缺が救援に出て楚軍を撃破した。鄭ではみな大喜びではあったが、同年、楚庄王は自ら大軍を率いて再び鄭討伐軍を柳 棼 に出したが、を引揚げ、世子孺を君主に立てた。すなわち晋景公である。

しょう」でも晋をあてにはできません。やがてまた楚軍が郊外に現れるで何時までも晋をあてにはできません。やがてまた楚軍が郊外に現れるで「晋が楚を負かしたのは偶然です。楚将泄は非常に怒っていますから

ると、

楚に対し講和を申出た。 事件を追及し公子宋を殺し、更に帰生の棺、遺骨を壊し一族を追放してた。ちょうどこの時公子帰生が病死したので、去疾は 鼈 事件後の弑逆と去疾は答えた。翌年、楚庄王はまた鄭討伐に出て穎水の北に駐屯し

どうかよろしくお願い申し上げます」を得て貴国と盟約を結ばせていただきたく強く希望いたしております。「すでに逆臣の帰生と宋を誅殺いたしました。わが主君は陳侯の仲介

これに関して次のような詩がある。「陳侯は大夫の夏徴舒に殺され、陳国は大乱になっています」ところが陳から帰った使者は意外な報告をした。

妖星北斗に入り三国の君主非業の死 陳侯も又夏舒の報復に遭う

さて陳の大乱とはこういうことである

が ひほうがん きょうけんようし 陳の司馬職で株林に封地があった。御叔の妻は鄭穆公の娘で夏姫とい ゕぎょしゅく しょうせい しょうせい しょうせい は身を賭して諌言するので陳侯君臣は彼には一目置いていた。 もう一人 だ。この人は軽佻浮薄で威厳はなく、酒色に耽り遊んでばかりで国政に 少西の字が子夏だったので御叔は夏を字とし、姓を少西氏とした。家は 夏御叔という大夫がいた。彼の父親の公子 少 西 は陳定公の子である。 **憚かることがない。泄冶という忠良実直な賢臣がいた。彼は問題があれ** ない奸臣を寵愛していた。三人は一緒になって淫乱な話に耽りあたりを は見向きもせず、孔寧と儀行父という酒色の間で鉦太鼓を打つしか能の 陳霊公平国は陳共公朔の子で周頃王六年(紀元前六一三年)に位を継い

名目で夏姫の家に泊まった。孔寧はちょっと頭を使って、先ず荷華に簪

ある日孔寧は徴 舒と郊外へ狩に出かけ、徴舒を株林に届けるという

た。賢くて色っぽく、夏姫に可愛がられていた。

となった彼女を誘惑する機会を窺っていた。夏姫に荷華という侍女がい かったのでその頃から夏姫の美貌を知っていた。だから何とかして寡婦 残し、自分だけ株 林に引揚げた。孔寧と儀行父は夏御叔と同僚で親し した。夏姫は徴舒を外部との交際もあるので勉学の教師をつけて城内に

う偉丈夫の夢を見て彼と交合し吸精導気の法を教わったと言うのであ る。彼女が十五才の時、星の冠を被り羽毛の服を着た天上の仙人だとい たようで、彼女を見た人はみな魂を奪われるという。更に奇妙な話があ 女ではない。驪姫、息嬌の美貌にに妲己、文姜の艶めかしさを合わせだっき、ぶんきょう なま つた。この夏姫は蛾眉鳳眼、杏瞼桃腮と表現されそんじょそこらの美 なるものを頂戴できればありがたき幸せに存じます」 た。儀行父は八方手を尽くして媚薬を求めて彼女を喜ばせ、彼女も孔寧 て夏姫のほうでもその気があったので荷華に彼との密会の段取りをさせ 利きを頼んだ。日頃から儀行父が背が高く鼻筋が通っているのを見てい せ付けた。儀行父も是非という事で、荷華に手厚い贈物を与え夏姫に口 際に錦襠(下着)をこっそり一着盗んで持ち帰り儀行父に得意そうに見 に倍して彼を愛した。 と儀行父が言うと夏姫は笑って 「錦襠は孔寧が盗んで行ったもので、わたしがあげたものじゃないわ」 「孔大夫は錦襠を賜ったそうでございますが、わたくしも何か記念に

嫁して長男 徴 舒(字子南)を生んだ。その子が十二才の時夏御叔が病死 私通し、三年も経たない間に子蛮は夭折したという事である。夏御叔に ろしく戦いのような技を使うのである。結婚前に鄭霊公の庶兄公子蛮と さか疎遠にならざるを得なかった。古詩がある。 大喜びでそれ以来夏姫と行父の交際は非常に繁くなり、孔寧の方はいさ とささやき、 着ていた青い羅襦(紗の短い上着)を彼に与えた。 儀行父は 「愛し合うと言ってもおのずから濃淡があるでしょう」

る。足らざるを補うその時の四十八手の妙は老いてもなお若く、素女。よ

と言い耳元で、

<sup>204</sup> 

鄭風の何と淫なる 桓武50の治世今は昔

男女は競って駆落ちし 町に日暮も夜明もなし

裳裾からげてさあ高飛びせん 垣根越え来る君を待つ 思い出す東門の 茜 野の蔓草を

青き衿が忘れえぬ 願わくは偕老までも (青衿…当時の学生服)

激流は堅き 柵 を作るなり

暴風雨に鶏騒ぐ時こそ密会に好都合

意地悪言って邪魔するな 多感の人は素晴らしきかな

き添って太鼓持ちをすればおれもちょっとうまいことできるし、儀大夫 はいわゆる『狐臭』(わきが) がある。 夏姫はきっと嫌うだろうから、付 美貌の噂は以前から耳にされ何度も彼女の事を口にされ非常に会いたが がない。が、ふと一計を思いついた。「陳侯は淫楽には目がなく、夏姫の 儀行父が親密な関係にあるのを知った。 嫉妬心が起こったが引離す方法 青い羅襦を孔寧に見せつけた。孔寧はそっと荷華にたずねて夏姫と て彼女との仲をとって差し上げれば感謝されるに違いない。しかも殿に っておられるが残念ながら未だに手を付けられていない。殿をお連れし 儀行父は孔寧に錦襠を見せつけられたので、今度は夏姫からもらった。

ます」

「この件は全面的に卿に任せる、よきに計らってくれ

ない美人だと話した。 そこで一人きりで霊公に会って世間話の間に夏姫が天下に二人とい のやつ余り通えなくなるだろう。いい気味だ、こりゃ名案、名案

突 鄭二代見の君主 の治世で鄭が有力で、た時代で 種式の治世、鄭宮の桓公 周宣王の庶弟鄭開国の君主、鄭英、武公 桓公の子 掘

わしも彼女の名は以前から聞いているが、年はもう四十になるんだ

ろう。いかに弥生の桃の花とはいってもその年じゃもう色移ろいにけり

常ではありません。一度お試しになればきっと魂も消えうせる事でござ しく、十七八の娘のようでございます。しかもあの時の妙技はとても尋 いましょう」 「いえいえ、彼女のねやの技術は大変なもので、容貌もいっそう若々

霊公は話を聞いているうちに思わず欲情に火がつき、顔が火照って来

「彼女に会う何か手立てはあるか。恩にきるぞ」

…・ますので臣が殿のお気持ちを夏姫に伝えさせましょう、必ずうまく行き 205 ず歓迎の席を設けます。彼女には荷華という情事に機転が利く侍女がい ころで、殿が早めに株林にいらっしゃるとさえおっしゃれば、夏氏は必 「彼女は株 林に住んでいます。そこは竹林で遊びに行くのにいいと

姫のほうでも積極的に、全て滞りなく準備できていた。 荷華にも例の件について夏姫に話を通しておくよう連絡しておいた。夏 遊びに出かけた。孔寧は事前に夏姫に準備をして待つよう手紙を出し、 霊公の頭の中は夏姫の事だけで、遊山は名目、実は『花より団子』で 翌日、外出準備をさせ、お忍びの服装で大夫孔寧だけを連れて株林へ

ある。少しばかり山に上りすぐに夏家に転がり込んだ。 夏姫は礼服で出迎えて大広間に案内し挨拶をして 「息子はあいにく出かけておりまして、殿様がお見えになる事を存じ

ないためお迎えも致さず失礼いたしました」

容貌はまさに天女であり六宮の粉黛もこれにまさる者は珍しいとさえ と言ったが、その声は若い鶯の囀りのような心地よい声であり、その るように言うが夏姫は遠慮して席には着かない。 に茶館では宴席の用意ができていて夏姫が席に案内した。霊公が隣に坐

思われた。

かせて申し訳ない」 霊公がそう言うと、夏姫も襟を整え敬意を表して、 「たまたま遊山に来て、気軽にあなたの屋敷に立ち寄りましたが、驚

きましたのでお召し上がりいただければ幸甚に存じます」 「殿様におはこびただき光栄でございます。粗酒を準備させていただ

「食事まで用意してもらって申し訳ない、特別な宴席は要りませんよ。

おたくには優雅な園亭があると聞いていますがそれを見せていただきた

せん。失礼の段前もってお詫び申し上げます」 「夫が亡くなってからは荒れ果てたままで久しく掃除もできていま

夏姫が順序を踏んできちんと応接するので霊公は益々可愛く思い、

「堅苦しい礼服は着替えて庭を案内してくれませんか」

月下の梨花の如く、雪中の梅花の如く、それはもう通常の美しさという と言うと夏姫は礼服を着替えて肌が見える薄い装いになった。なんと

夏姫は前に立って裏の庭園に案内した。面積は決して広くはないが、

ものを通り越している

もてなす宴会所となっている。左右に控えの部屋があり回廊で結ばれて 中に朱の欄干に刺繍の幕を引いたさっぱりとした茶館がありこれが客を 高松秀柏あり、奇岩名花あり、池沼の傍にあずまやも幾つかある。その いて内宮につながっている。園内に厩がありそこで馬も飼っており、園

の西方の空き地は射的場になっている。霊公が庭園を一廻りしている間

「ご主人が席に着かなければ始まりません」

と言って右に孔寧を坐らせ夏姫を左に坐らせた。

「今日は無礼講でゆっくり楽しもうじゃないか」

秋波を送った。霊公は酒に興じると痴情を帯びてくる。しかも傍らで孔った。世を飲んでいる間、霊公は目が夏姫から離れず、彼女もまた霊公に

が傾いても明かりをつけて更に盃を傾け、霊公は泥酔してとうとう席に 大夫が鼓で調子を合わせるので酒がどんどん進み思わず飲みすぎた。日

倒れこんでグーグー鼾をかいて寝てしまった。

孔寧はそっと夏姫に、

「殿は以前からあなたの美貌を慕っておられて、今日ここへいらっし

置して外のお付の者にもそれぞれ手配し休ませた。夏姫も夜具を整え自 はいかないでしょう」 やったのも実はあなたと楽しむ積りだったのです。それを無視する訳に と言ったが夏姫は微笑するだけで何とも答えない。孔寧はてきぱき処

分は香の風呂で沐浴し準備万端整え、荷華を霊公のそばに侍らせた。 しばらくして霊公は目を覚ました。

と声を掛けると、荷華が跪いて 「そこにいるのは誰か」

「侍女の荷華と申します。主母(夏姫)さまのご命令で殿さまのお目

覚めをお待ちいたしておりました」 と答え、酔い覚ましの梅湯を差上げた。

「これは誰が作ったのだ」

206

### 「わたくしでございます」

うことだね 「そなたが梅湯を作ってくれたということは、仲をとってくれるとい

荷華はわからないふりをして

まはどなたにお気持ちがおありですか」 「わたくしは仲をとるのは不慣れですが走り回る事は得意です。殿さ

十分な褒美を取らすぞ」 「わしはそなたの主母に心底惚れきったのだ、うまくやってくれたら

心配でございます。それでもおよろしければご案内させていただきます」 霊公は大変喜び、すぐに荷華に燭台を持たせて案内させ廊下をいくつ 「主母の体は少し変っていますので貴人に十分ご満足いただけるか

音が聞こえたので挨拶しようとすると、霊公はもう部屋の中だった。荷 も曲って内室に入って来た。夏姫は明りの下で独り待っていた。突然足

思って聞いた。 ようだが、交合の段になるとあたかも処女のようにかたい。霊公は変に 華が銀の燭台を差し出したが霊公は彼女には何も言わず、すぐ夏姫を抱 いて帳に入り衣を解いて床に入った。肌はなめらかで柔らかくとろける

を生んだ後も三日も待たずに元のように塞がってしまうのです」 「わたしは内視の法(古代養生術の一つ)の心得がありまして、子ども

「せっかく仙女に会えたのにやっぱりだめか」

は相手が一国の国主なのでいろいろな閨の技術を尽くし心にもなくあ にはとても及ばない。 しかも強い腋臭もあってどうもうまくない。 彼女

霊公は嘆いて言った。霊公のいちもつはもともと孔、儀二大夫のもの

れこれ媚びへつらったので、霊公も世に二つと無い珍しいものに遇えた

と満足した。

夜明けまで眠り、夏姫は鶏鳴を聞くころ霊公を促して起こした。 「そなたと寝た後は、わしには六宮など糞土のように思われるが、そ

夏姫は霊公が孔、儀が通ってきている事を知っていると判断した。 「隠す事はできません。わたくしは夫を亡くしてからは我慢ができず

なたはわしのことを少しは思ってくれているのかな」

れからは他の男性を入れることはいたしません。どうかお許し願います」 他の男性に身を任せてきましたが、殿様にお会いいたしましたので、こ

霊公はうれしそうに、 「そなたはわしにやったような事をいつもやっているのだろう、何も

隠す事はない」

と言うと、

なのです」 ・・・ 「孔、儀の二大夫がやもめを慰めるといって孤閨に闖入してきただけ 207

と夏姫は弁解した。霊公は笑って、

「道理で孔寧がそなたのねやの技術が大変なものだと言うはずだ。自

分で味わってなければわかる訳が無いからな

「どうかお許しねがいます」

れからもそなたとは度々会いたいが、わしのいないときはそなたの自由

「孔寧がそなたの美しさを話してくれたからわしも楽しめるのだ、こ

「殿様が度々おいで下さればいつでもお会いできます」

霊公が起きると夏姫は身に着けていた肌着を脱いで霊公に着せて、 「殿様この肌着をご覧になったらわたくしだとお思い下さい」

した。夜が明けて客殿に朝餉の用意ができていた。孔寧は従者を随えて と言いながら、荷華に命じて霊公をもと来た廊下を通って客殿に案内

わると霊公は孔寧が準備した車に乗って宮殿へ戻った。この日百官は陳 と、料理人が食事を出し、従者にも酒食を出してねぎらった。食事が終 伺候した。 夏姫が霊公を堂上に案内し、朝のご機嫌伺いの挨拶が終わる

止めて主君がどこに泊まったのかを追求した。孔寧は嘘も言えないので 議はやらないと言ってさっさと宮門に入っていった。儀行父は孔寧を引 侯が外泊したのを知って朝門に集まり朝の挨拶をした。霊公は今日は朝

事実を話した。儀行父は孔寧が殿に薦めたという事が分かり地団駄を踏

「こいつ、うまいことやったな、どうしてそなただけなんだよ」

いいじゃないか」 二人は笑いながら別れた。 「そう言うな、殿は非常に喜んでおられる。この次はそなたが行けば

してくれた事の礼を言った。それから儀行父を召して、 翌朝、霊公は朝礼が終り百官が解散した後、孔寧を召して夏姫を推薦

そなたたち二人で先に楽しむとはどういうことじゃ」 「夏姫とのあんなに楽しいことを何故わしに早く話さなかったのだ。

「臣らは何もいたしておりません」

と二人は声を揃えて答えた。

「彼女の口から直接聞いたことだ。何も隠すことはない」

ます。父が食する前には子が先ず食します。もしまずい場合は君にはお 例えば君がご賞味なさる場合にはかならず臣が事前に味見を致し

薦めできませんので」

と孔寧が言うと、霊公は笑って、

「そうじゃない。例えば熊掌だったら先にわしに食わせても大事ない

というと二人もおかしくなって笑った。

これが彼女がくれたものだ。そなたたちにも何かあるはずじゃないか」 「そなた達彼女と寝たんだろうが、彼女はわしに記念の品をくれたぞ、

そう言って肌着を脱いで見せた。

孔寧が言うと霊公は何かと聞く。孔寧は衣をからげて錦襠を見せて、 「これは彼女がくれたものでございます。臣だけではなく行父も持っ 「わたしにもございます」

ております」

行父は青い羅襦をぬいで霊公に見せた。霊公は大いに笑って、

と言うと霊公はお前のは何かと尋ねた。

59994 「わしら三人はみな証拠品を身に付けているんだな。 じゃその内一緒

に 株 林へ行ってみんなで彼女とやるか」

てきたので、ある正直な大夫が歯噛みをして、正装して朝門に駆け込み

霊公に直諌した。

「朝廷は厳粛なところです。 このような馬鹿な事では陳は近い内に滅

この正直な大夫とはいったい誰であろうか、それは次回をお楽しみ。

びてしまいます」

君二臣は朝廷で公然と卑猥な話をしていた。それが朝門外に聞こえ

# 楚圧王 諌言を聞き陳を復国させ

## 晋景公 軍を出動し鄭を敷う

で卑猥な話をするのを聞き、大夫泄冶は威儀を正して朝門をくぐった。 陳霊公と孔寧、儀行父の二大夫が夏姫がくれた肌着を身に付けて朝堂にまるとれい、ぎょうほ

孔、儀の二人は以前から正直な泄冶を毛嫌いしていた。 今日は事前の通

拶して逃げ出した。 霊公も彼を避けて席を立とうとしたが、 泄冶は急い 知もなくやってきたからきっと諌言に来たのだろうとさっさと霊公に挨

で霊公の前に進み出てその着物を引き、跪いて諌めて言った。

堪えない卑猥な話に耽り、朝堂は破廉恥で品位、綱紀を失っています。 ってはなりません。国中に貞操を失った女が増え、君臣は平気で聞くに 『『君臣は敬愛し男女は近づかず』と申します。殿、蛮族の風に染ま

臣の敬、男女の別が行われなくなれば亡国に向かいましょう。何卒お改 『君臣の敬愛、男女の別』はすでに廃れてしまっています。そもそも君

め下さいますようお願いいたします」

霊公は汗顔の至りで袖で顔を覆って、

泄冶が退出し朝門を出て来ると、孔、儀の二人は門外で様子を採って 「卿よ、それ以上言わないでくれ、わしはやったことを後悔している」

いて、泄冶が怒って出てくるのを見るとあわてて人ごみの中へ紛れ込ん

だ。泄冶はすぐ見つけ二人を呼び出し、

をして殿を誘い込み、それをみんなの前で言いふらしているが一体どう ようにするのが臣下の務めなのに、そなたたちは自分でろくでもない事 「殿が善い事をすればそれを皆に知らせ、まずい時は人目につかない

いう事だ。恥ずかしいと思わないか」

彼と別れた後二人は霊公に会って、泄冶が主君を批判して今後株林に と説教すると二人とも弁解できず素直に謝った。

行かさないようにしろと言われたと讒言した。

「そなたたちはもう行かないのか」

我々ではなく殿がいらっしゃらないようにと言っているのです。 「彼は臣下として殿を諌めているのでして我々には関係ありません。

「わしは泄冶がどう言おうとあの楽しみを捨てるわけにはいかん」

「そのおつもりでしたらこれからもまた泄冶の小言を聞かなければ

なりませんね」

「そなたたち泄冶にぐずぐず言わせない良い案はないか」 「泄冶に小言を言わせないためには口を塞ぐしかありませんね」

を殺れとお命じになれば、終生忌憚なく楽しめるようになります」 霊公は孔寧の返事に笑って言うと、儀行父が孔寧の言葉を継いだ。 「寧の考えは臣にはわかります。夫人の口も死ねば塞がります。泄冶

「そんなことわしにはできん」 「臣が刺客にやらせますがいかがですか」

「そなたに任す」

霊公は頷いてそう言った。

も孔、儀の計略だとは思わず陳侯の所業だと考えた。史臣は泄冶を称え 要路に潜ませて泄冶が参内するのを待って一気に刺殺させた。人々は誰 二人は朝門を出て相談した。そして多額の賄賂を使って刺客を雇い、

て詩を作った。

身死するとも名は高し 龍逢の血比干の心 勇敢なり泄冶 ただ一人直諌す 陳国徳を失い君臣淫に耽る 正装は女の下着に 朝堂は株林に

なった。それでも最初はやはり密かに行っていたが次第に大胆になって きた。国人は《株林》®の詩を作りそれを咎めている。 泄冶の死後、君臣三人は憚ることなくしょっちゅう株林へ行くように

株林で何をするぞ 夏南の処へ行くのです

株林はうわべだけ 夏南の処へ行くのです

(夏南は夏姫のこと)

言った。南から来たという意味である 徴舒の字が子南だったので、詩人は少し憚って夏姫とはいわず夏南と

に染まり、しかも夏姫がうまく三人の間を取りもち一婦三夫という馬鹿 陳侯は本来は暗君ではなかったが、孔、儀両人に誘われ破廉恥な行為

行くと聞く度にいつも口実を作って避けてきたので結果として汚いもの 事に胸を痛めたが相手が陳侯なのでどうしようもない。 陳侯が 株 林に 遊びに耽るようになりそれを何とも思わなくなってしまったのである。 徴 舒 は成長するにつれ、事情が分るようになり、母親のやっている

力もあり弓の達者でもあった。霊公は夏姫を喜ばせようと彼に父親の職 光陰は矢の如し。徴舒は十八才になった。背は高く偉丈夫に成長し、 都合であった。

を見ないできた。淫らな遊びに耽る三人にとっても徴舒がいない方が好

を継がせ司馬を命じ兵権を与えた。徴舒は感謝して株林へ母に報告に行

った。夏姫は大変喜び

「これはご主君のお情けです。国家を思い個人的な事は二の次にして

職務に精励しなさい」

に帰って宴を設け霊公を款待した。 夏姫は息子が席にいたので酒の相手 った。徴舒は父親の爵位の継承を許された事を感謝して、わざわざ株林 ある日、霊公と孔、儀の三人がまた株林へ遊びにいき夏姫の家に泊ま と言って息子を励ました。徴舒は母親に別れ朝廷に戻り政務に就いた。

聞いていた。すると霊公が儀行父に、 た。徴舒はその様子に嫌気がさし屏風の陰に隠れてそっと彼等の会話を は遠慮した。酒が回ると三人はいつものようにキャッキャとふざけだし

「徴舒は体ががっちりしていてそなたに似ているではないか。そなた

の子じゃないのか」

と言うと、儀行父は笑いながら、

「徴舒の両目はらんらんとして殿に非常に似ています。やはり殿のお

子さんでしょう」 と言う。孔寧が横から口を挟み、

り多すぎて夫人本人でさえきっと分らないんじゃないですか」 「殿と儀大夫は彼を生むには若すぎますよ。彼の父親が誰かなどあま

と言うと二人は手をたたいて大笑いした。

りは心頭に発し我慢の限界を超えた。 徴舒は聞かずもがなの事を耳にし、思わず羞恥と憎悪が湧き起り、怒 密かに母親の部屋に鍵を掛け勝手

「屋敷を固く包囲して、陳侯と孔、儀の二人を逃がすな」

口から抜け出して部下の兵士たちに、

<sup>88</sup> 株林 『詩経《陳風 株林 「詩経国風 平凡社東洋文庫 白川静訳を引用

案の定陳侯を追ったので孔寧、儀行父の二人は犬穴からやっと抜け出し

へ追って行くだろうと思い、西の射的場のほうへ逃げて行った。徴舒は亡くなった。孔寧と儀行父は陳侯が東に逃げたので徴舒はきっとそっち

した。徴舒は戎族の服装で利刀を手にし力のある家人数人を引き連れ大と命じた。兵たちは命令に随いわあっと喊声を上げ夏氏の屋敷を包囲

「速く淫賊を捕えろ

門から、大声で叫びながら突入した。

いたが、孔寧は外の物音を聞いて慌てて言った。霊公は相変わらずろくでもないことをしゃべり、飲みながらふざけて

胆があったようです。淫賊を捕えると言って兵を率いて攻め込んで来て「殿、どうもまずい事になったようです。徴舒が設けたこの席には魂

\_ 「前門は包囲されていますから後門へ行きましょう」います。 早く逃げなければなりません」

であった。 でもまだ内室に駆込んで夏姫に助けてもらおうという魂胆があったが、 のう来ていたので諸房の出入り口、近辺の道は熟知している。陳侯はそ のう来ていたので諸房の出入り口、近辺の道は熟知している。陳侯はそ のう来ていたので諸房の出入り口、近辺の道は熟知している。陳侯はそ のう来ていたので諸房の出入り口、近辺の道は熟知している。陳侯はそ

「暗君、待て

と今度は命中した。陳侯平国は諸侯となって十五年、哀れにも今日厩でしたので公は急いで外へ出た。そこへ徴舒が近づいてきて再び矢を放つは厩に逃げ込み隠れて矢から逃れようとしたが馬が驚いて一斉に騒ぎ出徴舒は叫びながら弓をつがえ陳侯に向けて射たが当らなかった。陳侯

徴舒は陳侯を殺してしまったので兵を率いて入城し、陳侯は酒を飲ん家には帰らずそのまま楚へ亡命した。

て何も言わなかった。徴舒も諸侯からの討伐を心配して予防策として陳成公は心の内では徴舒を怨んでいたが今は力不足のためじっと堪え陳成公である。。

侯に晋と友好関係を結ぶよう強要した。

いま、徴舒の弑逆事件を聞きこれを口実に夏姫をものにしようと庄王にといま、徴舒の弑逆事件を聞きこれを口実に夏姫をものにしようと礼室、め辰、陵へ出かけたが、途中で徴舒の乱を聞き引返した。ちょうど孔室、だけを話をした。使者の話と合致するので庄王は群臣を集めて協議した。だけを話をした。使者の話と合致するので庄王は群臣を集めて協議した。だけを話をした。使者の話と合致するので庄王は群臣を集めて協議した。だけを話をした。使者の話と合致するので庄王は群臣を集めて協議した。だけを話をした。使者の話と合致するので庄王は群臣を集めて協議した。だけを話をした。使者の話と合致するので庄正は群臣を集めて協議した。本族の房中術を話し出すと止まらないという事である。 数年前使者としてでの房中術を話し出すと止まらないという事である。 数年前使者としていまの房中術を話し出すと止まらないという事である。 数年前使者としていまの房中術を話し出すと止まらないという事である。 数年前使者としていまの房中術を話し出すと止まらないという事である。 数年前使者としていまの房中術を話し出すと止まらないという事である。 数年前を対していました。

®「史記では、夏徴舒は霊公を殺した後自立して陳侯となり、 楚庄王が 弑逆の 問罪軍

は長寿のための正い、男女交合のあり方を教えむしろ禁欲的教えといわれる生きたという。 彭祖が伝えた長寿法は医食同源 呼吸法 房中術等多くある。房中術で彭祖 古代伝説上の仙人 帝尭の臣で長寿の代表とされ 殷代末までおよそ八百年を出し徴舒を殺し世子午を立て陳成王としたとある。『史記 陳杞世家

陳討伐を強力に勧めた。令尹の孫叔敖も「陳討つべし」という意見だっ たので庄王も決心した。周定王九年(紀元前五九八年)陳成公午元年の事

である。楚王は先ず陳に檄を飛ばした。

楚王告ぐ、少西氏(夏徴舒家)が君主を殺したる事、神も人もこ

討つべきは弑逆したる本人のみなり、その他の臣民は静粛にして騒 れに激怒せり。貴国にてこれを討たざれば、楚が代わって討たん。

ぐべからず。

途中の住民たちを慰問し兵士の住民に対する犯罪を厳禁した。夏徴舒は らの大将を随え三軍を率いて陳都へ急行した。無人の境を行くが如く して、ついに迎撃策をとらなかった。庄王は自ら公子嬰斉、公子側、屈巫 この檄文を見て陳の人々は罪を徴舒に押し付け楚の手を借りようと

成公はまだ晋にいて帰っていなかったので大夫の轅頗は家臣達を集めて 人々が自分を怨んでいる事を知り密かに 株 林に逃げ込んだ。この時陳

届け、講和を求めて国家を保全するのが上策ではないだろうか」 相談した。 「楚王は徴舒だけを誅殺すると言っているのだから、彼を捉えて楚に

ところしばらく政令が出される体制になかったし、陳侯が不在だった事 め徴舒を捕えさせた。僑如が行く前に楚軍が城下に到着した。陳はこの 群臣はみなその意見に賛成だったので息子の 僑 如 に命じて株林を攻

「徴舒はどうした」 株林におります」

と隊伍を組み入城した。諸将は轅頗等を擁して庄王の前に出た。

もあり民衆が勝手に都城の門を開けて楚軍を迎え入れた。楚庄王は整然

「誅殺する気がないのではなく彼に力が及ばないのです」

「そなたたちは臣下ではないのか。どうして逆賊を誅殺せずに許して

おくのだ

軍を率い株林に向かった。 庄公は早速轅頗を案内役にして、公子嬰斉の一軍を城中に残し自ら大

したそのやさきに、楚軍が株林を包囲し徴舒は逮捕され後方の檻車に閉 さて徴舒であるが、家財を整理して母親夏姫を奉じて鄭に逃げようと

じ込められた。 「夏姫はどうした」

わからない。夏姫は丁重に庄王に挨拶をした。 庄王は将士たちに家中を捜索させ園内で捕えた。 荷華は逃げて行方が

ます。もしお赦しいただければ奴婢の端でも喜んでお仕え致します」 一目見て心惑わされ諸将に、 夏姫の容色がただならず、話す言葉も落ち着いて上品なので、庄王は 「不幸にも国は乱れて夏家は亡び、わが命は大王の意のままでござい

と言うと、屈巫は庄王を諌めて言った。 後宮に入れて姫嬪にしようと思うがみんなはどう思うか」

す。夏姫を連れて帰ったのでは女色のためだということになってしまい

ると言うのでは覇主の行動とは申せません」 ます。罪を討つのは義、色を貪るは淫であります。義に始まり淫で終わ 「子霊(屈巫)の申す事もっともである。 夏姫を連れて帰るのはよそ

う。しかし大変な美人だからもしもう一度わしの目に入ったら我慢でき

「それはなりません。殿は陳の犯罪者を討つために軍を動かしたので 「楚の後宮に美人多しといえど夏姫に勝る者は見当たらない。

ないかもしれん

と言って兵士に裏の壁に穴を開け彼女を放してやった。

したので その時傍にいた将軍公子側も夏姫の美貌にとりつかれて、庄王が放棄 「臣、中年になりましてまだ妻がございません。彼女を賜りますよう」

「殿、それをお許しになってはなりません」

と跪いて庄王に頼むと、屈巫はまた口を挟んだ。

回注365)。

「子霊、どうしてわしが夏姫を娶ってはいけないんだ」

す。何もこんな淫乱な女のために後悔の種を残す事はないのではないで 御叔、陳侯、夏南それぞれみな殺され、孔、儀は出奔し、陳国は亡んで しまうなど不吉でろくな事がありません。天下に美人など幾らでもいま 「この女はどこにいても不吉な女でございます。子蛮を若死にさせ、

「子霊の言う通りだ、わしもそれが心配だ」

しようか

るんじゃないでしょうね」 そなた、殿にもわたしにも止せと言っておいてそなたが自分のものにす 「そういうことでしたら妻にするのはあきらめましょう。しかし屈巫、

「物に持ち主が無いと争いの元になる。連尹襄老が最近奥さんをなく 「いやいや、そんなこといたしませんよ」

したと言っていたので彼の後添えにするか」

襄老は今回の出兵に一軍を率いて従軍し後軍にいたので庄王は彼を

に置きたいという気持ちがあったからで、庄王が襄老に与えてしまった た。屈巫が庄王の意向を諌止し公子側の申出を断ったのは元々自分の元 呼び出し夏姫を与えると、夫婦は感謝して出て行った。公子側も引揚げ

> 栗門に引出し、斉襄公が高渠弥に行った車裂の刑(五牛分屍)に処した(8) かに心に懐いた。勿論これは屈巫の胸の中のことで口には出さない。 近いうちにきっとまた彼女は寡婦になる、その時また考えればいいと密 ので非常に残念だったが、この老人ではあの女を持ちおおせないだろう、 庄王は株林に一泊して翌日嬰斉の迎える陳城に入った。庄王は徴舒を

庄王の討伐時雨の如し 泗水の諸侯羽旗に期待する 陳主荒淫にて自ら禍を招くといえど 徴舒の弑逆もまた大罪

<sup>上としてし</sup> な祝賀に駆けつけた。 楚の各県の県公は言うまでもない。 ただ大夫の 幹部はすべて郢都へ連れて帰った。南方の弱小の属国はこれを聞きつけ 現地は楚の県に併合して公子嬰斉を陳公にして守らせた。轅頗等陳国の 庄王は徴舒の問題を処理した後、陳国の版図を調査して陳国をつぶし、 213

祝いに遣わしていたが、その時はまだ陳討伐の前だった。庄王が楚に帰 は友好関係が続いていたので、庄王は申叔時を恵公の弔問と頃公の就任 恵公が亡くなり世子無野が即位していた。すなわち頃公である。斉、楚 申叔時だけは斉へ使者に出ていて未だ帰って来ていなかった。その頃斉 国して三日目に申叔時が帰って来た。彼は庄王に復命はしたがお祝いを

言わなかった。

庄王はそれが不満で内侍に詰問させた。

「夏徴舒が道を外し弑逆事件を起こしたから追求して誅殺し陳の版

2 泗水の諸侯とは魯侯を指す。魯都曲阜は泗水の東。後に魯は楚に借兵を依頼する。

(当時楚庄王没後で十才の共王即位直後で借上はだめだ。た)羽旗は楚軍を指す

を討った事がまずかったと言う訳じゃないだろうな」 もみな祝いを言ってくれたのにそなただけ何にも言わないが、わしが陳 図を収容したこと、 これは義挙として天下に聞こえている。 諸侯も朝臣

申叔時は、使者に同道して庄王に直接意見を述べる機会をもらった。 「王は『蹊田奪牛 (田をよぎる牛を奪う) <sup>72</sup>』という話をお聞きにな

った事がお有りですか」

「知らないな」

んだので田の持ち主がその牛を取上げてしまったという事件が有ったと 「ある人が牛を引いて他人の田地を通っていた時、その牛が作物を踏

します。殿はこの事件にどう判決を下されますか」

「牽いた牛が田を踏んだと言っても大して作物を傷めたわけじゃな

に軽い損害賠償責任を課し牛は返してやるよ。卿はどう思う」 し牛を取上げるのはやり過ぎだ、もしわしが判決を出すなら、牛の持主

じではありませんか。とてもお祝を申し上げる気持ちにはなれません」 分ではなかったでしょうか、陳国を接収してしまうのは牛を取るのと同 過ぎず、国を滅ぼす程の事ではなかったと思います。犯罪者を討てば十 してその明察眼が曇られたのでしょうか。夏徴舒に弑逆の罪があったに 「殿はそんなに立派なご明断をなさいますのに、陳国の問題ではどう

「さようでございましたら直ちに牛をお返し願います」 「なるほどそれはいい話だ、わしはそこに気が付かなかった」 圧王はトンと足を踏みならして申叔時に言った。

2 蹊田奪牛『春秋左氏伝の宣公十一年「牛を引、て他かの田に入る。田主での牛を

だす討伐を理由に横取りするのは如何なものか 『史記 楚世家にも同様の記述 奪う。 生を引きて他人の 田に入るは罪なるも、 牛を奪うは行き過ぎなり…不正をた のであろうか 盗跖帝舜一緒に帰る 孔寧儀行父を大泥棒盗跖に轅頗を聖王舜に見立ている

圧王は直ちに陳の大夫轅頗を呼んでたずねた。

「陳君はいま何処におられるか

轅頗はそう答えると思わず涙がこぼれた。 「晋国の方へ参りましたが、何処にいるかは存じません」

庄王は痛ましく思って、

なさい。代々楚に仕えてわしの恩を忘れないように」 「わしは陳国を復国させようと思っている。陳君を迎えて君主に立て

とやさしく言い、さらに、孔寧と儀行父を呼び

と指示した。轅頗は二人が今回の事件の元凶だということをよく知っ 「そなたたちも帰国させてやろう、一緒に陳君を補佐しなさい」

ていたが楚王の前では言わず、それを胸にしまって感謝して帰って行っ

た。 楚との国境を越えたところで偶然陳侯午に出逢った。 陳侯は晋から帰 214

はすでに庄王から命令を受けており、すぐ受渡事務を終え楚国へ帰った。 轅頗は陳侯に楚王の好意を話し、君臣は車を並べて陳へ帰った。公子嬰 り国が滅びた事を知って楚王を頼って楚へ行こうと思っていたのである。

髯翁はそれを詩にしている。 陳の復国誰が予測できよう 跖 舜 気持を新たに共に帰るる

楚の義挙名声は四海を駆る

本件は楚圧王の第一の美挙であった。 賢臣に従うこれぞ賢主なり

それがもとで発狂し自分で池に飛込み死んでしまった。その夜、儀行父は孔寧は帰国して一月足らずで、真昼に夏徴舒がお命頂戴と言って現れ、

ある。で大変驚きこれがもとで急病に罹り死んだ。これらは即ち淫乱の報いで

陳霊公と孔寧、徴舒の三人に天帝の法廷に拉致される夢を見て、夢の中

賞として与えるべきではありません」「この北方の地は国として晋の侵略から守る戦略上の要地ですから

屈巫が、

この時から嬰肴と屈巫に溝ができた。周定王十年(紀元前五九七年)、楚庄王はその地を屈巫に与え申公とした。屈巫は遠慮なくこれを拝命した。と言うので取りやめた。申叔時が老齢を理由に辞職を願い出た時、庄

ちとこの件を協議した。 庄王は、陳は楚に帰順したが、鄭がまだ晋についたままなので大臣た 王の十七年の事である。

「鄭討伐軍を出す場合は、晋が救援に出るのは必至ですから大軍でな

した」

ければなりません」

ポンドょうろう (楚の軍制、左広・右広がある)の全軍で堂々と滎陽に攻め込んだ。

と令尹孫叔敖が進言すると庄王も同じ考えで、結局三軍と左右両広

百人を率いて一日先行し三軍のために道を開きましょう」「鄭は小国ですから大軍を煩わせる事はありません。わたくしが部下連尹襄老が先鋒として出発しようとした時、猛将唐狡が、

庄王は諸将を率いて一兵も損なわず一日も滞る事もなく直接鄭郊外して大軍を迎えた。 して大軍を迎えた。 と願い出た。襄老は、「よく言った」とこれを許した。唐狡は次々とと願い出た。襄老は、「よく言った」とこれを許した。唐狡は次々と

その神速を不思議に思い襄老に言った。

なかったぞ」
「卿は老いて益々壮んだな、こんなに勇猛に進軍するとは思いもよら

庄王は唐狡を召して賞を与えようとした。すると唐狡は、「これは臣の力ではありません。副将唐狡の力戦によるものです」

さかお報いできたに過ぎません。この上どうして賞を頂く事ができまし「臣はすでに王からご厚恩をいただいております。今日はそれにいさ

よう」

庄王は訝って、

「絶纓会の席上美人の袖を引いたのは臣であります。あの時不殺のご『やしはまだ卿に見覚えがないが何処でわしから恩を受けたのかね』

恩を蒙りました。ですから身命を賭してご恩に報いようと思っておりま

を尽くしてもらう事はできなかったのだな」
「ああ、あの時明かりをつけて罪を咎めていたら、今日のように死力

と感激し、鄭平定後重用するために軍正に命じて功第一等と記させた。

しかし彼は

殺の処置を賜った。それをしゃべってしまった以上、罪ある身で後日賞「わしは本来死罪の罪を犯したのに、王は敢てそれをお隠しになり不

を受ける事はとてもできない」

いいはこれで引い、人にそっとそう言ってその夜軍から逃出し行方知れずになった。

庄王はそれを聞き、

「これぞ真の烈士ぞ」

と誉め称えた。

しおよそ十七日間昼夜を休まず攻撃を命じた。鄭襄公は晋の救援を恃み楚の大軍は鄭郊外の関門を破り城下にやってきた。庄王は周囲を包囲

城内から地を振るわせる泣き声が聞こえた。庄王はその悲惨な声に耐えの城壁が数十丈崩れ落ちた。楚兵がよじ登って侵入しようとしたとき、講和をしなかったので城内では大変な死傷者が出た。そのうち東北の隅

「まさに落城という時にどうして軍を下げるのですか」

られず、軍を十里下げた。公子嬰斉は解せない。

決めようと思う」のだ。ここで軍を下げ徳を示して帰順するか否かを見定めてから進退をのだ。ここで軍を下げ徳を示して帰順するか否かを見定めてから進退を「鄭はわしの威力はわかっているがわしの徳は未だわかっていない

鄭襄公は片肌を脱ぎ手に羊を牽いて楚軍を迎えた。を叩き壊した。庄王は三軍に掠奪を禁じたので軍紀は粛然としていた。堅守したが支えきれなかった。楚将楽伯は兵たちをに皇門に登らせ城門堅守したが支えきれなかった。 楚将楽伯 は兵たちをに皇門に登らせ城門庄王は鄭に投降の意志がないと分かり再び城攻めを命じた。 鄭は三ヶ月

て民衆を急がせて城壁を修復させ、民衆をみな城に入れて守備を固めた。

です」

鄭襄公は楚が兵を下げたと聞き、晋の救援軍が来たのだと勘違いをし

わたくしの罪でございます。存亡死生ただ王のご命令のままにございまの逆鱗に触れまして貴軍の進攻を受ける事になりましたが、これは正に「わたくしの不徳によって貴国におとなしく帰順する事ができず、王

ましたらありがたき幸せに存じます」

す。もし先人の好誼に免じて先祖の祭祀を続けるよう生かしていただけ

こめずしてしまっこまうごヽヽ こおっトミナご・「鄭は力尽きて投降したのです。 赦せばまた寝返ります。 いっそのこ

と言って軍を三十里下げさせた。鄭襄公は自ら楚軍へ行き、罪を詫び

するだろう」 (第53回 注217)

庄公が軍を返し郔に着いた頃、晋国が荀林父を大将、先縠を副将にして講和を求め弟の公子去疾を質に出した。

て六百輌の戦車を率いすでに黄河を渡って救援に来ているとの情報が入

「晋軍が来ているようだ。戦うべきか退くべきか」った。

いますので、晋と戦っても意味がありません。全軍引揚げるほうが安全「鄭と講和前であれば戦うべきですが、もう鄭はわが国に帰順にして庄王はを諸将にたずねた。令尹の孫叔敖は、

きます。晋軍を避けるのは弱みを見せるという事です。鄭が楚についた「令尹の意見は問題です。鄭はわが力が及ばないと判るとまた晋に付と答えた。しかし寵臣伍参はこれに反論し二人の議論が続いた。

ら我われも救援に行くべきです」とわかると晋は必ず鄭に軍を進めるでしょう。晋が救援に来たのですかとかいると晋は必ず鄭に軍を進めるでしょう。晋が救援に来たのですか

たら、たとえそなたを処刑して肉を食っても何にもならん」
「先に陳を攻め今また鄭に攻入り、わが軍は疲れている。戦って負け

たしの肉は晋軍に食われて楚の人の口にははいりませんよ」「戦って勝てば令尹は策のない人だという事になります。負ければわ

で、公子嬰斉、公子側、公子穀臣、屈蕩、潘党、楽伯、養由基、許柏、で、公子嬰斉、公子側、公子穀臣、屈蕩、潘党、楽伯、養由基、許柏、うべきだと思うものは「戦」、退くべきだと思うものは「戦」、退くべきだと思うものは「退」と書かせた。 きょきょき ほうき ないしょうち しんじょうき はんじょうき はんじょうき はんじょうき はんじょうき はんじょうき はんじょうき はんじょうき はんじょう まっぱい できだと思うものは「退」と書かせた。 正王は諸将たちの意見を聞いた後、それぞれに筆をわたして掌に、戦

と言って、早速轅を南に向け帰還準備を整え、翌日馬に水を与え引揚「虞邱達の意見は令尹と同意見で穏健でありこの意見をとる」

伍参は夜庄王に会って訊ねた。

げると伝令を発した。

「王はどうして晋を畏れて鄭をお捨てになったのですか」

「鄭を捨ててはいない」

来て楚が引揚げれば晋は鄭を救った事になり、結局楚は鄭を失います。「鄭の城下に九十日もいてやっと鄭を手に入れたのです。晋がやって

これが鄭を捨てた事でなくて何でしょうか」

「五ますでこ晋軍の勺青を閒べております。 筍木父は中軍を売率し「必勝でなければ引揚げるべきだというのが令尹の意見なのだ」

っては人の笑い種になりますし、そういう事では鄭を服させることもでっては人の笑い種になりません。ですから晋軍は数は多くても負かすのは難したた軫の孫、先且居の子で父祖の功を恃み傲慢で慈愛心がなく命令違反は先軫の孫、先且居の子で父祖の功を恃み傲慢で慈愛心がなく命令違反ばかりで威信はまだ皆を服させるに十分ではありません。彼の副将先穀ばかりで威信はまだ皆を服させるに十分ではありません。彼の副将先穀ばかりで威信はまだ皆を服させるに十分ではありません。

きません」

軍を管城まで進め晋軍を待った。早速その夜のうちに令尹孫叔敖に連絡し、再び轅を一斉に北に向けてない。わかったそなたの意見に従い晋軍と決戦しよう」ない。おかったそなたの意見に従い晋軍と決戦しよう」

この勝負如何なりますか、次回をお楽しみに。

### 荷林父 部下の違令を放任し大敗 孟侏儒 芝居に託し楚庄王に忠告す

を出発した。 等数十人という陣容で、戦車合計六百乗という大軍を率いて六月に絳州 晋景公の即位三年目、楚王が鄭を親征するという情報を得た。救援の

荀林父は諸将を集め進軍中止を協議した。士会は、 まったと言う情報を得た。楚軍はすでに引揚げにかかっているという 黄河の岸まで来ると、鄭は楚に包囲され救援が来ないので投降してし

て再挙を待つべきです」 「鄭を救えなかったとなれば楚と戦う大義名分はありません。引揚げ

ら、小職は自分の部隊だけででも進軍するつもりです」 事はできなくなります。元帥がどうしても撤退しようとなさるのでした げるようでは小国は誰を頼めばいいのです。晋はもう諸侯に覇を称える しましたが、楚を討てば鄭はきっと晋に戻ります。鄭を捨てて楚から逃 す。鄭は救援を待っていたのに間に合わなかったから仕方なく楚に投降 人が身を挺して意見を述べた。副将の先縠である。字は彘という。 と言い林父は同意し、諸将に引揚げを命じた。すると中軍の上将の一 「それはなりません、危急を救い信頼を得てこそ諸侯の覇者でありま

> っても飢えた虎に肉を投げるようなもので益するところは何もない」 「楚王は親征して来ている。 強力な軍だ。 そなたの配下だけで河を渡

林父がそう言うと先縠は大声で吼えた。

気を見せ付けてやる」 いないのかと言われ大変な恥です。たとえ敵の陣前に死すとも晋人の志 「わたしが行かなければ、この堂々たる晋軍に気概のある者が一人も

括の兄弟に出会ったので二人にこの事を話した。 そう言いとばして営門を出て行った。出たところでちょうど趙同、 趙

救済に行くつもりだ」 「元帥は撤退している楚軍を恐れている。わしは一人でも渡河して鄭

これを聞き、二人は先穀の意気に投合し、三人でそれぞれの部隊を率

いて元帥の断りなく河を渡った。

下軍の 荀 首は趙同が見えないので兵たちに聞くと、 「先将軍に随って楚軍に向かわれました」

行き荀林父に言った。 と言う。驚いて司馬の韓厥に報告した。韓厥はそれを聞きすぐに中軍

から彘子が敗れればあなたの責任になります。どうなさいますか」

このまま楚軍にあたれば負ける事は必定。あなたは中軍の総責任者です

「元帥は彘子 (先穀)が河を渡ってしまったのをご存知ないのですか。

の大功になり、万一失敗しても六人の均等責任です。あなただけの責任 林父はゾーとしてどうしたらいいか韓厥にたずねた。 「事ここに至っては全軍進軍せざるを得ないでしょう。 勝てばあなた

には致しません」 「わかった」

全軍の渡河を命じ、敖、鄗二山の間に駐屯した。

「きっと元帥は来て下さると思っていました」

先穀は非常に喜んだ。

た場合、楚に下った罪を問われる事を心配して家臣たちを集め協議した。 大夫皇戍が進言した。 話は変わる。鄭襄公は晋軍が非常に強力な大軍だとわかり、晋が勝つ

にすれば心配はございません」 じます。晋が勝てば晋に、楚が勝てば楚に、いずれか強い方につくよう 「使者として晋軍へ行かせていただき、楚と戦うよう説得したいと存

ます。もし貴国が楚を討って下さるのでしたら弊国も後に続かせていた 楚はわが国に勝った後傲慢で、しかも長期の戦役で非常に疲弊しており の場しのぎを行ないました。決して貴国に背くつもりではございません。 ついに支えきれず国の存亡が危なくなり、滅亡を免れるため楚に対しそ 襄公はその案を採用し、皇戍を晋軍へ派遣し鄭伯の考えを伝えさせた。 一わが主君は貴国の救援を今か今かと固守して待っておりましたが、

「楚を討ち鄭を帰服させるのはこの一戦にあり」

だきたく存じます」

と先縠が気炎を吐くが、欒書は、 「鄭の連中は二股膏薬でどうも信用ならん

と慎重であったが、趙同、趙括が、

「鄭を救うにはこの機を逸するべきではありません。彘子の言う通り

者皇戍と楚と戦う約束をしてしまった。 と趙同、趙括が先縠に同調し、遂に先縠は荀林父の許可なく、鄭の使せとし、世界の別の許可なく、鄭の使

者を戦わせ勝負の様子を高みの見物しようとの考えである。

鄭襄公は実は楚王にも晋と交戦するように別な使者を出していた。

両

孫叔敖は晋軍の勢いを見て楚王に進言した。 「晋に講和の意思があれば講和を提案し、講和の提案に応じなければ

庄王は承認し、蔡嶋居を晋にやり講和を提案させた。

戦うという事にすれば非は晋にあり、戦いの大義名分が立ちます」

「これは両国にとって幸せです」

荀林父が喜んでそう言うと、先縠が蔡鳩居に怒鳴りつけた。

「吾属国を奪っておいて、講和でこちらの矛先を緩めようとは勝手な

滅多切りにしてやりたいところだが命だけは助けてやる。さっさと帰っ 話じゃないか。元帥が講和すると言ってもこの先穀が許さん。本来なら

て楚君に、命が欲しければ早々に逃げて帰るよう伝えたまえ」

先穀の罵声を受けほうほうの体で逃げ帰ろうとすると陣門で趙同、

括兄弟に出会った。

たもや趙旃が彼に向けて弓を引き、 と二人は鳩居に剣を突きつけて言った。鳩居が門を出ると門の外でま 「再び講和に来れば先ずわが一剣がお見舞いする事になろう」

「お前は今わが矢の前の肉に過ぎん。帰ってお前ところの蛮王に伝え

よ、早晩首をいただきに行くとな」

鳩居は楚陣に戻り庄王に復命した。庄王は怒って諸将に問うた。 「誰か晋に挑戦しようという者はいないか」

大将楽伯がこれに応えて、

許伯は疾風の如く駆けて晋陣に迫った。楽伯は晋軍の前でわざと自分が

御者に代って轡を取り許伯に車を下りて馬を飾らせ余裕を見せた。そこ へ晋の十数名の遊撃隊が通り過ぎた。 楽伯は落ち着き払って矢を放ち一 と言って兵士に引返すよう命じた。 楽伯は何事もなかったようにゆっ

くりと帰陣した。この事が詩にうたわれている。

人を射殺し、摂叔は更に車から跳び降りて一人を生け捕って車に飛び乗 単車で挑戦豪勇楽伯 車は雷神馬は龍の如し

神箭将軍を恐れざる者なく
追手首を縮め風の如く去りぬ (単車=戦車一両のみで援護車がない)

晋将の魏錡は鮑癸が楽伯を取逃がしたのを知って大変怒り、

にされる。わしも楚の連中の力がどんなものか単車で挑戦してみる」 「楚が挑戦に来たのに晋が誰も出て行かないのでは楚の連中に馬鹿

「先ずお前等の左側の馬を射倒し、次に右の方は人を射る。もし射損 と趙 旃が言い出した。 荀林父は慌てて抑えて命じた。 「わしも魏将軍と一緒に行こう」

ねたらわしの負けだ」

左から逢盖は右から三路に分かれて追撃して来た。

逃げながら楽伯は大声で叫んだ。

将が挑戦してきて自軍に損害があった事を知り、鮑癸が中央から逢寧が ので許伯は元通り戦車を御して自陣に向かって馬を走らせた。晋軍は楚

った。他の兵士はそれを見て声を上げて逃げ散った。挑戦の実を挙げた

そう言いながら矢継ぎ早に右と左に放つと、言った通り、左の方は数 行くと言うのなら和議をして来てもらいたい。それが礼儀と言うものだ」 220 「じゃわたしが和議の話をしてきましょう」 「楚は講和を提案してきてから挑戦してきているのだ。そなたが楚へ

れ分担しましょう」 と魏錡が答えた。趙旃は、 「将軍は鳩居の役をお願いします。わたしは楽伯役を担当し、それぞ

晋上軍の元帥士会は、趙、魏の二人が楚へ行くと聞いてそれを引止め と魏錡を先に送り出しながら言った。

ようと急いで林父の所へやって来たが、中軍についたときは二人は出て しまっていた。そこで林父に、

行けばきっと楚軍を怒らせるに違いありません。もし楚が急に攻め込ん ています。しかも血気だけは盛んで進退の時がわからない連中ですから 「二人は父祖が大功あるのに重用されていない事を常に不満に思っ してきた。 一計を案じ最後の一矢をその鹿に向けて射た。 矢はピッタリ かったら敵の手にかかると思っていた時、一頭の大鹿が眼の前に飛び出 楽伯はそれで鮑癸を射ようと思ったが、もしこの一本の矢で彼を倒せな 来たのを見計らって矢をさぐると最後の一本しか残っていなかった。 になったが、鮑癸だけは次第に追い上げて来た。楽伯は鮑癸が近づいて あと他の兵士たちにも負傷者がでた。こうして左右二路の追跡は不可能 頭の馬が倒れ追撃できなくなり、右側では一箭が逢盖の頭に命中しその

彼は楽伯の弓に外れが無かった事に内心驚いていたところだったの 「どうぞ従者にでも召し上がってもらって下さい」

大鹿の心臓を射た。 摂叔に命じその大鹿を鮑癸に届けさせた。

で、贈物として摂叔が持ってきたものを見て、 「楚将にこのように礼を尽されるとわたしも礼に答えざるを得ませ

で来たらどう防ぎますか」

とたずねた。傍らから副将の郤克が、

と言うと、先穀は防御を考えるよりとにかく攻撃すべきだと大声でわ 「楚の考えが測りかねます。防御態勢を考えておくべきです」

めいた。荀林父は決めかねた。 「 荀 伯は木偶だ、我われは我われで十分計画を練っておく必要があ

<u>,</u>

かんせん 士会は退出して郤克にそう言った。そして郤克に上軍の大夫輩 朔、士会は退出して郤克にそう言った。そして郤克に上軍の大夫輩 朔、しかい 待ち伏せさせた。中軍の大夫趙嬰斉も晋が負けた場合を考慮して、黄河 韓穿に連絡させ、それぞれの部隊を率いて三箇所に分かれ敖山の手前に

の渡り口に舟を用意させた。

大沢の中に六頭の大鹿が見えたので楚将楽伯の大鹿の件を思い出しその ほんの近くまで迫って来ているのを知って応戦しようと思ったが、ふと 急いで馬に鞭打ち追跡した。魏錡は大沢まで来たあたりで潘党の一隊が た。楚将潘党は蔡鳩居が晋将から侮辱の罵倒を受けた事を聞いていた 前では講和をすると言って楚軍へ行ったが結局宣戦布告をして帰って来 ので、魏錡に復讐してやろうと中軍に駆けつけたが帰ったばかりだった。 頭を射倒し御者に命じて潘党に届させた。 さて、魏錡の方であるが、一応荀林父が大将だからしかたなく彼の面

「以前楽将軍に大鹿を頂戴いたしましたので、今日はお返しをさせて

けたら楚人は礼を知らないとという事になってしまう」 と潘党は笑って御者に車を返させ引揚げた。魏錡は帰陣して荀林父に 「やつはおれに前例に従えと言っているのだ。もしこのまま追跡を続

嘘の報告をした。

「趙 旃は何処にいる」

「彼はわたしの後から来ましたが一度も逢っていません」 楚が講和に応じないとなれば趙将軍は窮地に陥っているに違いな

を見ると未だのんびりと席に坐っている。助け起して車に乗せたが御者 り火をつけて賊を捜し十余人が捕えられた。残りの者は逃げ出して趙 旃 偽者に気づき詰め寄ったので抜刀してその兵を傷付けた。陣中騒然とな から酒を出し飲み始めた。従者二十人ほどに命じて楚の言葉を真似てゆ っくり巡視させ軍用ラッパに合わせて陣内へ潜入させた。ある楚兵が さてその趙旃は夜になって楚の陣に近づき陣門の外に席を設け車中 そこで荀 罃に命じ戦車二十乗歩兵千五百人で趙 旃を救いにやった。 221

の甲冑や着物戦車を持ち帰って庄王に献納した。 れないので甲冑上着を脱ぎ松の木に掛け身一つで逃げ延びた。 見つけ、彼も車を降りて追いかけて来た。情勢は危急で体面を言ってお 精兵を率いて追撃してきた。その早いこと。 趙 旃は追いつかれてはどう すかせて走ろうとしない。庄王は陣中から賊が逃げ出したと聞いて自ら がいない。夜が次第に明けてきた。 趙 旃自ら馬の轡を取ったが馬も腹を しようもないので車を捨て松林の中へ逃げ込んだ。楚将の屈蕩がそれを

潘党である。彼は北方に見える車の砂塵を指して晋の大軍がやって来るはなどう 塵であり、潘党が遠くから見たため大軍と誤認し、針小棒大な報告にな という。 これは荀林父が趙 旃を助けるために出した 荀 罃 軍の戦車の砂 圧王が陣に戻ろうとすると単車が風を切って走って来るのが見えた。

から鼓角の音が天を突いた。他でもない孫叔敖であった。庄王はほっと ってしまったのである。庄王は驚いて顔が土色に変った。その時突然南

「相国はなぜ晋軍が来るのが分って、わしを援けに来たのかね

して訊ねた。

す かれたので臣がとりあえず救援に参ったのです。間もなく三軍も参りま 「臣は晋軍の事は存じませんでした。 王が軽々に晋軍の方に入って行

庄王が落ち着いてもう一度北方を見ると砂塵の高さはそう高くはな

「あれは大軍じゃないな」

ましたので王より攻撃をご命令願います。中軍がつまずけば上下共に崩 「兵法に『迫るも、迫られるべからず』と申します。諸将がみな参り

こうしきく こういせい とういきい 住王は、公子嬰斉と副将蔡鳩居に左軍を率いて晋の上軍に当らせ、 れてしまいます」

き、馬は走り、歩兵はそれについて走り飛ぶが如く全軍が突入して行っ 合図の太鼓を打った。全軍の太鼓が一斉に打たれたので雷鳴のように響 公子側と副将工尹斉に右軍を率いて晋の下軍を攻撃させ、自らは中軍の 両広を率いて荀林父の本陣へ攻入った。庄王は自らばちを取って攻撃の

無二迎撃を命じた。楚軍はみな一騎当千。その様まさに海は吠え山は崩 ていたのである。そんな事とはつゆしらず、林父は驚いて策もなく遮二 と物見を出す体たらくである。楚軍はすでに晋の本営外の各所に布陣し 晋軍は全く準備ができていなかった。荀林父は太鼓の音を聞いてやっ

> れ軍はばらばらに崩れてしまった。 荀 罃は趙 旃を助けに行ったが途中うして対抗できようか。 魚や鳥が逃げ散るように楚軍に散々蹴散らかさ て来て、多勢に無勢、歩卒は逃げ散り荷、罃の乗る左端の馬が矢を受けて 楚将熊負羈軍にぶつかった。両者渡り合ったがそのうち楚の大軍がやっ 西も南も北もわからず、『心に備えなき者、備えある者に遭遇』してはど

また、晋将逢伯は二人の子逢寧、逢盖を同乗させて敗走していた。倒れ遂に熊貨羈に捕えられてしまった。

突然趙旃が裸の状態で傷ついた両足を引きずって走ってきた 「その車に乗っているのは誰ですか。一緒に乗せてくれませんか」

逢伯は趙 旃の声だと判り二人の子に言った。

「振り返らずに早く行け」

二人は父親の言う意味がわからず振り向いてしまった。趙旃はすぐに、 「逢君わしを乗せてくれないか」 222

「趙さんが後ろから呼んでるよ」

二人は父親に言った。逢伯は怒って、

せざるを得ない」 「馬鹿だな、お前ら趙 旃殿を見てしまったんじゃ仕方がない。彼を乗

てきた。額に矢を受けており鮮血が滴り落ちるのを服を裂いて巻き止血 走した。捨てて来た戦車、馬、兵器は数え切れない。先穀が後から追っ ま行ってしまった。 逢霊、逢盖は車をなくして乱軍の中で討ち死にした。 ま行ってしまった。 逢雪、 と言って二人を叱って車から下し、轡を趙旃に渡して二人を置いたま 荀林父と韓厥は陣の後方から敗残兵を連れて山の右を河に沿って敗

している。

れ、天裂け地崩落す。晋軍は夢か酔いから醒めたばかりのようで、東も

った。

の趙嬰斉が密かに舟を用意してさっさと河を渡ってしまったと林父に文 林父は彼を指して言った。黄河の渡航口に着くと趙括もやってきて兄

句を言う

となだめたが趙括はぷりぷりして怒りが収まらない。この時から兄弟 「生き死にの瀬戸際だ、連絡する間など無かったんじゃないか」 「わし等に知らせないというのは一体どういうことでしょう」

「わが軍はこれ以上戦う事はできない。今となっては早く河を渡る事

林父はそう言って先穀に河下へ行って船を集めさせた。しかし舟はあ

の仲に溝が生じた。

次々と集まってきた。 楚将公子側に敗れた下軍の正副将軍の趙 朔、 欒書 ちこちばらばらに泊めてあって一時に集める事はできない状態であった。 騒動が起こりそうになったところへ、さらに河に沿って無数の人馬が

こった。林父は勝に乗じた楚軍の追撃を心配して太鼓をたたき、 のか。舟数は一艘が出るたびに数が減っていく。南の方に砂塵が巻き起 が率いる残兵である。中軍下軍の両軍が岸に集まり、どちらが先に渡る 「先に黄河を渡った者には褒美をとらす」

と伝えた。 両軍舟を奪い合い仲間討ちが始まった。 舟が満員になって

\*\*\*で、りに取り付くので舟が転覆しあるいは三十余艘壊れてしまった。も船べりに取り付くので舟が転覆しあるいは三十余艘壊れてしまった。 わせ谷にこだまし、天は暗く地は酸鼻をきわめた。史臣は次のように詩 川に投げ入れるという目を覆う残酷さであった。岸に残る泣声が天を震 先穀は船上の兵士に船縁に取り付いている手を叩き切るよう命じた。他 の船もこれを真似た。一時手の指が花が散るよう船の中に落ち、掬って

> 哀れ数万の山西の兵 船は波に翻弄され帆は倒れ 半ばは黄河の藻屑なり 血は波の上に帯をなす

ところを見たという情報を得た。 ないので従者に岸に捜しにやったところ、ある小隊が荀罃が捕えられた の敗将が次々と逃げてきたのである。荀首は船に乗ったが子の荀 罃がい 後方に再び砂塵が巻き上がった。 荀 首、趙同、魏錡、逢伯、鮑癸ら

と説得したが、荀首は、 と言って再び岸に上がり敵中へ行こうとした。荀林父は止めて 「罃はもう楚に捕えられたんだから、行っても仕方がないじゃないか」

「わが子が捕えられたというのにわしだけ帰る気にはなれない」

に死力を尽したいとつぎつぎと船をおりて来たので、彼等の士気は非常 たし、すでに船に乗っていた者までも下軍の荀大夫について小将軍救出 ので、まだ岸にいた下軍の兵たちはもとよりみな積極的に協力を申しで いた。その上彼は日頃から兵士たちを可愛がり皆から大変慕われていた うと言った。<br />
荀首は非常に喜んだ。<br />
荀氏の家兵を集めるとまだ数百人は に壮んであった。荀首は晋で一二の弓の名手でもあったので、選りすぐ と言う。魏錡はむかしから荀罃と仲が良かったので自分も一緒に行こ 「敵の子を捕えたらわが子と交換できるかもしれない」 223

やってきた。魏錡はこれを迎え撃った。荀首は傍らから狙いを定め矢を 連尹襄老に遇った。不意に現れた晋兵に対し準備ができてなく荀首の 一箭を頬に受け車上に倒れた。公子穀臣が襄老が倒れたのを見て救出に 先ず晋軍が棄てて行った車や武器を持って行こうとしている老将 った矢を十分持って楚軍の中へ突っ込んでいった。

魏錡に生け捕られ、襄老の死体と一緒に車に積まれた。 紫紫紫とこれも穀臣の右腕に命中した。穀臣は痛みを堪えて矢を抜いたが

はずは、これ可に張っなのにから。 楚軍が気がついて追かけて荀 首 は全員に撤退を命じ急いで逃げた。 楚軍が気がついて追かけて「この二つの獲物で息子の命は確保できた。 楚軍は強い長居は無用」

一方晋上軍に目を向けてみよう。晋上軍には楚将公子嬰斉が攻めてきた時はすでに河を渡り終わっていた。

大将が車上から大声で叫んだ。の麓まで追って来ると、突然砲声が轟き一軍が飛び出してきた。そのの麓まで追って来ると、突然砲声が轟き一軍が飛び出してきた。子気が敖山準備もしてあったので戦いながら撤退してわり早くから探りを入れきた。士会はあらかじめこの事態を予想しており早くから探りを入れ

「鞏 朔 これにあり、貴様らの来るのを待ってたぞ」

まいと再び自撃してハくと前方で又庖声が起こり瑋穿が飛び出して来しつこく戦わず士会を守りながら徐々に撤退して行った。嬰斉は逃がす嬰斉は非常に驚いた。鞏朔は嬰斉と渡り合って二十余合打ち合うと、

突撃してきた。嬰斉はあまりに伏兵が多いので晋軍の詭計にはまるのを声がまたまた響き渡り無数の旗がひらめいて、大将郤克が一軍を率いてた。楚の蔡鳩居が迎えて干戈を交えようとすると、山のくぼみから砲た。楚の蔡鳩居が迎えて干戈を交えようとすると、山のくぼみから砲まいと再び追撃していくと前方で又砲声が起こり韓穿が飛び出して来まいと再び追撃していくと前方で又砲声が起こり韓穿が飛び出して来

この後楚軍が完全に撤退したあとゆっくり隊伍を整えて粛然と引揚七つの小塞を築いて楚の追撃に備えたが楚軍はついに攻めては来なかっ人もいなかった。そこでは敖山の険に依って北斗のように連絡させた恐れ、鐘を鳴らして引き揚げた。士会が将士を点検したところ死傷者は

日暮れになり楚軍は邲城に到着し、伍参は晋軍を急追するように言ったが庄王は、

これ以上無益な殺生をすることはない」「この一戦で城濮の敗戦の恥を雪ぐ事ができたんだから、楚晋講和し

になってやっと渡り終わった。と言って兵を駐屯させた。晋軍は夜中じゅう混乱の中を渡河し明け方と言って兵を駐屯させた。晋軍は夜中じゅう混乱の中を渡河し明け方

いる。の戦いに敗れ、遂には中原の覇主は楚に譲ってしまったと強く批判しての戦いに敗れ、遂には中原の覇主は楚に譲ってしまったと強く批判して史臣は、荀林父が無能のために敵はおろか味方の将さえ制御できずこ

船中指を掬う酸鼻の情景(指揮無き黄河の渡河 慚愧の極みなり国を出ずれば元帥権は至高なる(副将の違令なぜに赦せし)

潘党は晋兵の死体を集めて京観『を造り千載に武功を顕彰するよう進楚王を衡雍に迎え(晋文公が天子を迎えた践士)、大宴会を設けて祝った。鄭襄公は楚軍が勝った事がわかると自ら邲城に出向き軍をねぎらい、

言した。しかし庄王は、

論功行賞において、伍参の策略を誉めて大夫に任じた。五挙、伍奢と言って、兵士たちに遺骨を埋めさせて河神を祀り凱旋した。り立てて武功を云々するほどではない」

「晋は討伐するほどの罪があったわけではない。幸い勝ったが何も取

が渡り終えてないので驚いた。北岸へ渡った趙嬰斉は空船を南に返して

話を戻し、荀首が兵を戻して黄河の岸に帰ってきてもまだ林父の大軍

<sup>14</sup> 京観 古代の戦争で勝者は武功を顕彰するために敵の死体を集めて高塚を築きこれを京観 古代の戦争で勝者は武功を顕彰するために敵の死体を集めて高塚を築き

伍尚、伍員(伍子胥)はその後裔である。令尹孫叔敖は、ニュキューニュー

「あんな卑賤な者の策で晋に勝ったとは恥辱この上ない」

と嘆き、鬱勃として病に伏してしまった。

見えた。景公は林父を斬ろうとしたが群臣がさかんに引きとめ さて、晋の方を見てみよう。荀林父は敗残兵を引連れ帰国し景公にま

を立てさせるべきではないでしょうか」 わなかったので襄公がご心配になりました。林父殿の罪を許し、後に功 が子玉(成得臣)を殺して文公が喜びました。秦が孟明の敗戦の罪を問 反によるものです。むしろ先穀を斬り将来の戒とすべきです。むかし楚 「林父殿は先朝の功臣で、敗戦の罪はございますが全て先縠の軍令違

卿に将兵の訓練を命じ、後日の報復を期した。 と言うので景公もその意見に従い先縠を斬り、林父を原職に戻し、六

周定王十年(紀元前五九七年)のことである。(これが春秋時代の有名な戦

役の一つ『邲の戦い』である) 定王十二年三月、楚令尹孫叔敖の病は危篤になり、息子の孫安を呼ば五十二年三月、楚令尹孫叔敖の病は危篤になり、息子の孫安を呼

び、

そなたの才能はごく普通のもので世を救える程のものではないから、み 出してくれ。楚王がそなたに官爵を封じようとしても受けてはいけない。 「此処に遺表(遺言としての奏上文)がある。わしが死んだら楚王に提いない。

ろう て人が欲しがらないところだ。そこならば長く子孫に継承していけるだ い。断りきれない場合は寝 丘 をお願いしなさい。此処は地が痩せてい

と言い含めて言い終わると亡くなった。孫安は遺表を楚王に呈上した。

だりに官爵を得ないほうがいい。もし大邑に封じられたら必ず断りなさ

ございますが不肖の息子で官爵をお受けする力はございません。甥 ます。当面は兵に休息を与え民を安んずるを上策と存じます。臨終 はいえ軽視することはできません。民は戦闘で久しく苦しんでおり します。晋国は代々諸侯に覇を称えてきており、今回偶々敗れたと 死ぬ事ができますことを大変幸せに存じております。臣には一子が 愧の至りで責任を痛感致しております。ただ、お陰さまで畳の上で の言葉は至誠なりと申します。なにとぞよろしくご賢察願い上げま の
遠
凭
は
有
能
で
ご
ざ
い
ま
す
か
ら
然
る
べ
き
職
を
担
い
う
る
と
思
量
い
た

臣は無能にもかかわらず宰相を拝命いたしましたが、大功なく慙

庄王は読後溜息をついて、

らこんな良臣を奪ってしまった。非常に残念だ」 と言って早速納棺に立会い柩を抱いて号泣した。参列者も涙を流さな

「孫叔は亡くなってもなお国のことを思ってくれている。 天はわしか

命を守り固辞して朝廷を退き田野を耕し一平民になった。 任じた。 庄王はさらに孫安を工正(労働大臣)に任じようとしたが、安は遺 い者はなかった。翌日公子嬰斉を令尹に命じ、遠凭を箴尹(諫言官)に

ものを喜ばしていた。 者の孟という意味)という者がいた。いつもユーモアで人を笑わせ周りの 庄王が寵愛している者に、背丈が五尺に満たない小人の役者、優孟 (役) しょびと ゆうもう

に訊ねた。 ある日郊外で孫安が薪を集めて背負って帰るのに出会った。優孟は彼

「公子、どうして自ら薪を担ぐような苦労をなさるのです」 「父は数年令尹を勤めましたが、家には一銭も入れませんでしたので、

父が亡くなった後は財産がまったくありません。 ですからこれは仕方が 君は知らずや 令尹孫叔敖 生前に蓄財なく 貪吏卑しく子は栄え 一朝その身亡くなれば 家は零落 子孫飢え住居は荒廃 廉吏は高潔にて子は清貧

「公子がこんな状態だとご存知になれば王はきっとあなたをお召し 孫叔敖を真似るなよ

優孟は孫叔敖の生前の衣冠佩剣を一揃え作り、懸命に孫叔敖の言行ゆらう。そんさくら 孫叔安の姿を見て優孟はため息をついてそう言った。

になるでしょう」

ないんです」

が生き返ったようになった。宮中の宴会の時役者を集めて芝居を上演し ふるまいを真似た。三日も練習すると叔敖とほとんど変らなくなり叔敖

せ、自分は叔敖に扮して登場した。楚王はそれを一目見て大変驚き、 た。優孟は役者の一人に楚王を演じさせて叔敖を懐かしむシーンをやら 「孫叔、元気だったのか。わしは卿の事をずっと思い続けていたんだ、

帰ってきて今までどおりわしを補佐しておくれ」 とおもわず口に出した。優孟はそれに正直に答えた。

「臣は本当の孫叔敖殿ではありません、たまたま似ていただけです」

えば少しはわしの慰めになる。そなたを大臣にしよう」 「いつも叔敖の事を思い続けているが会えない。叔敖に似たものに会

じた女ですので、帰って相談のうえご返事いたします」 「大変ありがたいお言葉でございますが、ただ家内は非常に世情に通

と言ってその場を退出した。その後楚王に会ってその返事をした。 「家内と相談いたしましたところ、彼女は反対致します」

**一どうしてだ** 

ただきます」 

「家内が村の或る歌を教えてくれたのです。ここでそれを歌わせてい

の歌が終わると思わずさん然と涙を流し、 「孫叔の功をどうして忘れられよう」

庄王は優孟の問答歌を聞き叔敖といるような気がして胸がいたみ、彼

殿の脳裏に令尹の功は既になし

そう言って早速優孟に孫安を呼びにやった。 孫安はくたびれた服に草履をはいて庄王に会った。

「そなた、ここまで困窮していたのか」

と庄王が言うと、優孟が傍から答えた。

「孫安が官職を望まないのであれば万戸の封地をあたえよう」 「彼の困窮を見れば、前令尹がいかに清貧であったかがわかります」

「封地の件、わしの気持ちはもう変わらない、断らないで欲しい」

庄王がそう言ったが孫安は固辞した。

そこで孫安は庄王に言った。

いう事でございましたら臣を寝丘の地に封じていただければこの上な 「大王様が先臣(父)の尺寸の労に対しご高配下さり、衣食を賜ると

「寝 丘は痩せたろくでもない土地だ、 あんな所どうする」

い幸せに存じます」

「先臣の遺命で、その他の地はお受けできないのです」

庄王は彼の言うままにした。

後の人は、寝丘が痩せ地だった故に誰も争奪しようとする者がなく

う。史臣が優孟を詩にしている。 子々孫々守り継ぐことができたが、これは孫叔敖の先見の明によるとい

侏儒の諷諌がなかりせば 庄王何ぞ先臣の功を思い起さん清貧の官 子孫の貧窮考えず 没後も主君の敬愛はあれど

諸将は鄭城を攻めようと進言したが林父は、できないと判断し、鄭へ攻入り鄭の郊外を掠奪し意気揚々と引揚げた。一方、晋の荀林父は孫叔敖が亡くなった事を知って、楚軍はもう出兵

人質を弟の公子張と交換し、公子去疾を帰国させて国事を共同で行いたと言って彼らを抑えた。鄭襄公は案の定非常に怖れて楚に使者を出し、ら又敵を求める事になる。今回は鄭を脅かす事ができれば十分なのだ」「鄭を包囲攻撃しても未だ勝てるとは限らない。万一楚が救援に来た

と言って思い切って去疾も張も返し、群臣を集め次の協議に入った。「鄭が本当に信義があるなら人質など要らないではないか」

いと申し出た。庄王は、

回のお楽しみ。 次の協議とは、一体その内容は如何なるものであったろう、それは次

## 宋華元 楚に潜入し元帥を寝室で脅迫 老人 草を結びて杜回を倒し旧恩に報ゆ

先ず公子側が進言した 楚庄王は群臣を大集合し晋国対策を協議した。

我々と鄭争奪を行う余裕はなくなります」 も臣服しているのは宋であります。宋を攻めれば晋はその救援に忙しく 「いま諸侯の中で我々と最も親しい関係にあるのは斉であり、晋に最

になるが、討伐する名目は今のところ見当たらないぞ」 の後、昭公が殺されその子鮑が継ぎ文公になってこれまで十八年あまり 君が泓水の戦い。 で宋を破り宋君の太股に大怪我を負わせて以来、宋 はずっと我慢しており厥貉の会。でも宋君は自ら手伝いをしている。そ \*\*\*\*\*・\*\*
「なかなかいい案だが、宋には何の怨恨もなく出兵の理由がない。先

それには公子嬰斉が答えた。

と借道書を発行しないで宋の出方を探ります。もし宋が問題にしなけれ を派遣して来ますが、我々はまだ答礼をした事がありません。ここで斉 へ答礼の使者を出したら如何です。 その場合必ず宋を通りますからわざ 「それはそんなに難しい事ではありません。斉の君主はしばしば使節

そこで宋公が楚王の指示を誤り、禁の目付け申無畏が楚王に、宋公の命令違反として、宋公の御者 を鞭打刑に処し諸侯の面前で宋公に恥をかかせた。 により厥貉に出かけ楚王に拝謁。そして猛諸の林での巻狩りを提案している(しかし で 厥貉の 会 楚が陳 鄭 蔡を厥貉に会し宋を攻めようとした。宋公は華御事の説得 有名この戦の後楚穆公が厥貉で諸侯を会配した。 泓水の戦。宋襄公と楚穆王との戦。宋の大敗で終わる。BC638年「宋襄の仁で

> ば我々を恐れている事であり後に会盟を行えば必ず出席します。 もし斉 「の使者が侮辱を受けるような事があればそれを口実にできます」

「その使者には誰がいいだろう」

申無畏は不安そうに言った。 」と嬰斉が推薦した。庄王はすぐ申無畏を呼出し斉への使者を命じた。

「申無畏が以前厥貉の会盟に参加していますので適任と存じます」

ければ通さないでしょう」 「斉へ参るには必ず宋を通らなければなりませんが、借道書を見せな

「そなたは宋を怖れて使いをしないと申すのか」

宋君が命令に違反したので臣が宋君の従者を殺してしまいました。宋の 人は臣を大変恨んでいますからもし借道の文書がなければ宋人はきっと 一厥貉の会盟では諸国の君主と孟諸で巻き狩りを行いました。その時

るがそれでどうだ」 「それでは文書上では名前は申 舟と変え無畏とは言わないようにす

臣を赦さないと思います」

と、申無畏がなおも行こうとしないので庄王は怒って言った。 「名前は変えられますが顔は変えられません」

ち仇をとってやる」 「宋が身の程知らずにお前を殺したらわしは必ず軍を出して宋を討

申無畏もそれ以上は断る事はできない。

翌日、息子の申犀を連れて庄王に謁見した。

「臣が国に殉じるのは本分でございますが、その時は何卒この子を宜

しくお願い申し上げます」

「それは当然の事だ。心配する事はない」

れようとするのか」

申 舟 は使者としての土産を受取り出発した。 子犀は郊外まで送って

てつ、うれどすってい、い、や、こごれらでないご! 「今回はわしはきっと宋で死ぬ事になろう。 そなたは必ず王に願い出

てわしの仇を討ってくれ、決して忘れるでないぞ」

一日足らずで睢陽に着いた。関所役人は楚の使者だとわかると借道書申舟はそう言って父子は涙の中に別れた。

を出せといった。

関する書類はございません」 「楚王の命を奉じて斉に挨拶の文書を届けに参る道ですので借道に

道の礼も尽くさないとは全く我われを馬鹿にした話です。使者を始末い「楚はわが国の代々の仇敵であります。厚かましく宋へやって来て借

たしましょう」

てはどう考えているのか」

「使者を殺せば楚はわが国に攻めて来るに決まっている。それに対し

ぐべきです」ですから、どちらにしても攻撃して来るでしょう。ならば受けて恥を雪ですから、どちらにしても攻撃して来るでしょう。ならば受けて恥を雪(侮辱の最たるものは討伐を受ける事ですが相手はもうそのつもり

「汝は以前わが主君の従者を殺しておきながら名前を変えて死を免が申無畏であることが判り、彼の怒りに油を注いだようで、そう言って申舟を宋の議場へ引張ってこさせた。華元は一見してそれ

と怒鳴った。申舟は死を覚悟してるので、宋鮑(文公)を大声で罵倒

した。

や書簡を城外で焼いてしまった。
華元は怒って申無畏の舌を切って殺し、使者が持っていた斉への贈物みだりに殺そうとする。楚が一たび兵を起こせばお前等木っ端微塵だぞ」みだりに殺そうとする。楚が一たび兵を起こせばお前等木っ端微塵だぞ」ながら、悪運強くまだ天誅を受けないようだな。その上に大国の使者をながら、悪運強くまだ天誅を受けないようだな。その上に大国の使者を

整え自ら宋討伐に出向いた。申犀も軍正として従軍した。申舟が四月にがった。即刻司馬の公子側を大将、申叔時を副将に任命して直ちに軍を食時であったが、申舟が殺されたと聞き箸を投げ出し袂を払って立ち上申舟の従者は車を棄てて逃げ帰り庄王に報告した。庄王はちょうど昼

潜淵はこの状況を詩にした。

殺され、九月には宋の国境を越えるというとてつもない早さであった。

庄王激怒し疾風迅電米に至る。華元使者殺害を悔ゆるべし宋を 侮 れば死は覚悟。君命は天命なり。何ぞ命を惜しまん

ったが、謀臣伯宗が諌めていった。楽嬰斉を使者として晋国へ危急を告げた。晋景公は救援軍を出そうと思楽嬰斉を使者として晋国へ危急を告げた。晋景公は救援軍を出そうと思いる。対立てた。華元は一方では民兵を指揮して城を守り、一方では大夫ら攻め立てた。華元は一方では民兵を指揮して城を守り、一方では大夫を攻め立てた。華元は一方では民兵を指揮して城を守り、一方では大夫になる。

あったのです。出兵しても救援できるかどうか分りません」「林父が六百乗もの戦車を使って邲の戦いで敗れたのは楚に天佑が

「しかし今では晋と親交があるのは宋だけだぞ、これを救援しなけれ

ばその宋さえ失いかねないじゃないか」

「楚は宋と二千里も離れていますから食料の輸送が続かず長くは持

ば我われは楚と戦う事なしに宋を救う事になります」 ちません。宋に使者を出して晋の救援の大軍は出ているから堅守して待 つようにと言っておけば、数ヶ月以内に楚は引揚げましょう。そうすれ

景公はその意見に従い、

「宋への使いをしようという者はいないか

と群臣に問うと、大夫の解揚が名乗りを上げた。 「おお子虎か、そなたこそこの役に適任だ」

景公は喜んで彼を使者とした。

解揚は目立たない服装で出発したが、宋の郊外で楚の遊撃兵に捕えら

れて庄王の前に連行された。

庄王はそれが晋将解揚だとわかった。 「そなた何をしに来たのだ」

「そなたは晋の使者だ。 以前北林の役でそなたは蔿賈につかまったが 「晋侯の命で、宋に堅守し晋の援軍を待つように連絡に来たのです」

うすを見せず落ち着いた声で答えた。

たい事はあるか」 わしは放免してやった。 今回またわしの網にかかってきたな。 何か言い

ざいましょう」 「晋と楚は仇同士、死は覚悟できております。何を申し上げる事がご

庄王は解揚の身辺を捜させて文書を見つけそれを読んで、 「宋城の落城は旦夕に迫っている。そなたが文書の内容とは別に、『晋

駄な殺戮を防ぐ事ができる。うまくいけばそなた県公にしよう」 う事を連絡に来た』と伝えたら宋は必ず投降する。そうすれば両国の無 は今国内が忙しくてすぐに救援を出せず間に合わないかもしれないとい

解揚が承知しそうにないので更に、

のでは晋君の趣旨を宋に伝えられなくなってしまうので、同意する振り と脅迫した。解揚は本来同意する気はないが、このままここで死んだ

「承知しなければ斬る」

をして承諾した。

士に向って大声で叫んだ。 庄王は彼を横に見張りをつけて楼車の上に登らせた。解揚は宋国の兵

にあなた達を騙して投降させようとしている。絶対騙されないで下さい。 「わたしは晋国の使者解揚だ。楚軍に捉えられている。彼らはわたし

我主君は大軍を率いて救援に来ています。近いうちに必ず到着します」 庄王はそれを聞き急いで楼車から下ろして、

自ら信頼を裏切ったのでありわしの咎ではないぞ」 と言って部下に解揚を斬って報告せよと命じた。解揚は全く怖れるよ 230 「そなたはわしと約束したにもかかわらずわしを騙したな、そなたは

背いたらあなたは彼が信義の人と認めますか。どうぞ処刑してください 楚国が表面の信義を重んじる国だと言う事がはっきりいたします」 に信を失う事になります。もし楚の臣が外国の賄賂を得て大王の命令に 「わたしは背信とは思っておりません。もし楚に信を求めれば必ず晋

と言って庄王は解揚を許し帰国させた。" 「『忠臣は死を怖れず』というのはそなたのことを言うのだな」

に捕らえられ「援軍来ず と言えと命じられたが、「織田 徳川連合軍がすぐに来るか た徳川方奥平信号の使者鳥居強衛門は、信長家康の来援情報を持帰る途中、武田軍 77 ら早まて降伏するな と叫んで殺された。解揚は赦され強衛門は殺された 日本にも同様の鳥居強衛門の話がある。 長篠の戦において長篠城で援軍を待てい

きして宋城内の一挙一動が手に取るようにわかるようになった。華元も命じて築山の上に敵陣を望む望楼のようなものを造り、自らそこで寝起宋華元は解揚の言葉を聞き城を固めて益々堅守した。公子側は兵士に

て薪にしてでも投降しようとしなかった。励し軍民もこれに感激し、お互いに子供を交換して煮て食べ遺骨を拾っ睢陽城中では食物が尽き餓死者が続出した。華元は一人力強く軍民を激

庄王はどうしようもない。それに陣中の食料も七日分しか残っていな

い事を聞き

て粛然としているので又長い溜息をつき公子側と撤兵について相談した。と溜息をつき、自ら戦車に乗って宋城を見て回った。軍容は依然とし「宋がこんなに落とせないとは思ってもいなかったな」

申犀は泣いて馬前に跪き、

「父は王命により死にました。どうか父とのお約束をお果たしいただ

けますようお願い申し上げます」

この時申叔時が次のような献策をした。と懇願するのを聞き庄王は恥じ入った。

久戦の構えを見せれば宋人は恐れるに違いありません」に違いありません。もし兵士に命じて郊外に小屋を建てて田を耕し、持「宋が頑張って投降しないのは我々に持久力がないと見ているから

「それはいい案だ」

樹木や竹林を切り倒し開墾した。そして兵士十人を一組にし五人は城を「庄王は早速兵士に城の周辺一帯に小屋を建てさせ、城外の民家を壊し

「そなたは誰だ」

攻め五人は田を耕し十日で交代するよう指示した。

華元はこれを聞き文公に、

て講和に持っていけば、或はうまくいくかもしれません」如何いたしましょうか。臣が楚の陣営に参り子反(公子側)に会って脅し「楚王は引揚げる気持ちはないようですし、晋の救援は参りません。

えの子にようなことがあっている気をつけてこのです。

「宋の存亡はそなたにかかっている気をつけてたのむ」

華元は公子側が毎晩土山の建物にいる事や、身辺に仕える人の名前

木を打っている夜回りに出くわした。と城壁から綱を伝って降りてそのまま築山の近くへ行った。そこで拍子習慣、規則などを探知していた。真夜中に華元は王の近侍に扮してそっ

「元帥は上に居られますか」

「おられます」

「もうお休みですか」

「元帥は毎日ご苦労で、今夜は大王からお酒を一樽賜ったのでお飲み

になって早くにおやすみになられました」

が、まだ酔いが醒めておられないようなので醒められるまでお待ちして「私は伝令の庸僚です。大王が元帥と機密事項の相談がお有りです華元が築山を上っていくと守衛に止められた。

いるのです」

元に押えられていた。側は目を覚まし体を動かそうとすると両袖が華軽く手で揺り起こした。側は目を覚まし体を動かそうとすると両袖が華がついていたが公子側は服を着たまま寝ていた。華元はその枕元へ行き兵士はそれを信じて華元をそのまま行かせた。築山の中はまだ明かり

ดา

ちに同盟を結びますし、ご了解いただけなければわたしと元帥殿は今宵 命で夜分ですが講和のお願いに参りました。元帥殿がご了解下されば直 「元帥殿、驚かないでください。わたしは宋の右師華元です。主人の

ら一本の冷たく光る匕首を取出した。それは灯火のもとでキラリと光っ 華元はそう言うと、左手で側をベッドに押さえつけ、右手に袖の中か 限りの命という事になります」

けにはいかない」 「重要な事はみなに相談しなければ、そう勝手にばたばたと決めるわ

側はあわてて答えた。華元は匕首を収めて謝って言った。

のんびりしておれなかったのです」 「大変な無礼を致しましたお許し下さい。危急が迫っておりますので

「お国の状況はどんな様子ですか」

「子供を交換して食べ骨を薪にする状況で困窮しきっております」

はどうしてそこまで実情を話されるのですか」 「そこまで行ってましたか。軍事は『虚虚実実』といいます。あなた

す。元帥は君子だとお見受けしておりますのでわたしは隠さずに申しま 『『君子は人の危難を同情し、小人は人の危難を利用する』といいま

「それならどうして投降しないのですか」

「国は困窮していても民には投降しないという強い意志があったの

憐れみのお心を賜り軍を三十里下げていただけましたら、わが主君は貴 です。君民命を捧げ城と玉砕するというのに投降できましょうか。もし

国に帰服し二心なき事を誓います」

違い無きようお願いいたします」 引くよう説得します。おたくのご主君におかれましても呉々もお約束間 てて田を耕したのは虚勢にすぎません。明日わたしは主君に三十里軍を 七日を過ぎれば城を落とす事ができずに撤退する予定でした。小屋を建

「わたしも正直に申しますが、我軍も七日分しか食料はありません。

いに誓いを立てたからには絶対に翻す事はありません」 「ご心配なく。わたくしが人質にならせていただきます。 元帥とお互

渡し急いで帰した。華元は令箭が有ったので公然と帰ることができた。 二人は盟約して兄弟の契りを交わし、公子側は華元に一本の令箭った

入れた。華元はその夜の内に宋公に復命した。宋公は大変喜び翌日の楚 城下に着いて口笛で合図をするとかごが下りてきて華元を吊り上げ城に

報告した 軍退却の報せを待った。 早朝、公子側は深夜に華元が押入って来て話していったことを庄王に

のご裁決を願います」 を後退させてほしいと懇願しましたので、許してやる事にしました。殿 ったので幸いしました。彼はわたしに宋国の困窮の実状を話し、 「危うく匕首の一刺しに遭うところでしたが華元が人柄のいい男だ」

ろう 「そんなに気息奄奄状態になっているのなら奴を討ち取ってから帰

公子側は叩頭して頼んだ。

「わが軍も七日分の食料しか有りません。臣はそれを彼に言いました」

それを聞いて庄王は突然怒り出した。

「そなた何故敵に内情を漏らしたのか

わたしは敢えて隠さなかったのです」国の楚がどうしていい加減な事ができましょうか。そう思いましたから国の楚がどうしていい加減な事ができましょうか。そう思いました大

庄王は怒りを収めて、

「そなたの言う通りだ」

のを知ったがもうそれを止める事はできず、胸を叩いて大声で泣いた。と言い、軍を退げ、三十里外に駐屯させた。申犀は撤退の軍令が出た

「そなたはもう十分孝心を尽くしている。そう悲しむことはない」庄王はそれを聞いて慰めた、

質として楚に置いた。庄王は軍を引揚げて帰国し申舟を朝廷を挙げて厚すすり同盟を誓った。宋公は華元に申舟の柩を楚陣に届けさせそのまま公の命を伝え盟約を申し出た。公子側は華元について入城し宋公と血を楚軍が約束どおり軍をさげて駐屯したので、先ず華元が楚軍へ行き宋

華元は楚国では、公子側が公子嬰斉と仲が良かったので、公子嬰斉とく葬むり、葬儀の後申犀に父親の大夫を継がせた。

も親しくなった。

ある時二人で話をしていて話題が時事になった時

だろうか」
「晋楚の争いが絶えず、いったい何時になったら天下は太平になるの

と則案角が憂鬱そうに言うと

えません。二国の講和の仲を取る事ができる人がいれば、兵を休め人民「愚見を申しますと、晋楚はそれぞれ大国でどちらが上とも下ともい

は塗炭の苦しみから免れ、天下の幸せにつながるのですが」

と華元が持論を述べた。

「それができるのはあなたじゃありませんか」

を話した事はあるんですが、結局仲に立って話をまとめる人がいなかっ「わたくしは晋の欒書と親しくて、以前晋へ挨拶に行ったときこの件

たのです」

「両国にはまだ厭戦気分が醸成されていませんからこの件はまだ簡翌日嬰斉は華元の話を公子側に言った。しかし側は時機尚早と見た。

単には話しできないんじゃないですか」

亡くなってその子固が位を継ぎ共公となった。華元は喪に駆けつけやっ華元は楚で六年滞在した。周定王十八年(紀元前五八九年)、宋文公鮑が

と宋に戻った。

こうとしないので伯宗に、
さて話変わって晋であるが、晋景公は楚が一年たっても宋の包囲を解

をなくするわけにはいかん、援軍を出そうと思う」

「宋の籠城も長いので我慢の限界に来ているんじゃないか。

宋の信頼

いたという報せが入った。と言って救援軍の手配をしているところへ潞国から緊急の密書が届

**冑平王の時、路君が黎矦を追攷しその地を奪ったので赤伙は益々強くな」路は赤狄の一種で姓は隗、子爵で黎国(現山西省長治)の隣国である。** 

った。<br />
周平王の時、潞君が黎侯を追放しその地を奪ったので赤狄は益々強くな

だったので宰相の鄷舒が国事を仕切っていた。先に狐射姑が潞へ出奔し潞君は嬰兒といい晋景公の姉伯姫を夫人としていた。嬰児は体が虚弱・プ

くなり、潞君に晋と絶交させようと、伯姫を誣告し潞君をそそのかしてれ気ままな行動を控えていた。射姑が死んでからは誰にも憚ることがなた時、射姑が晋の重臣で博識多才な人物だったので、鄷舒は彼の力を恐

、女 こくが、 玉が誤って潞子の目を傷付けてしまった。 それにもかかわらず鄷舒は弓後、酔っぱらって君臣が石弓で鳥を打落とす賭けを始め、 鄷舒が放った

彼女を自殺に追込ませた。またある時は、潞君と郊外で巻き狩りをした

「当らなかったな、しかたない罰酒を飲もう」

とわかった。

晋に送り晋の力で鄷舒を討って欲しいと頼んで来たのである。

きますからこの機会を逃す事はありません」に入れることができ、西南の土地が広く開けて軍兵を徴集することもでに入れることができ、西南の土地が広く開けて軍兵を徴集することもで

て戦車三百乗をつけ潞へ討伐軍を出した。れなかった事に腹を立てていたので、荀林父を大将に、魏顆を副将にしれなかった事に腹を立てていたので、荀林父を大将に、魏顆を副将にしと謀臣伯宗は言う。景公も潞君嬰児自身が、自分の妻(晋君の姉)を守

と言って黎侯の後裔を訪ねて潞の地の五百戸を割譲してそこに城を

「黎の人がいまも黎侯を思い慕っている」

嬰児は国を滅ぼした事を痛恨に思い自刎して果てた。潞の人はこれをしたのである。

哀れみ祠を立てた。黎城の南十五里の所にある潞祠山がそれである。

連 ので、晋討伐のため杜回がやって来たというわけである。と したところへ鄷舒はすでに殺され潞君も捕えられたという情報が入った今秦桓公十一年目で、晋が鄷舒を攻めてきたと聞き、救援に行こうと

りもある。力は千鈞を持ち上げ、常に重さ百二十斤(約30㎏)もある大さながら鉄鉢である。髪はもじゃもじゃに縮れていて、身の丈は一丈余がねがついており、目は金の目玉がとび出し、拳は銅錘のようで、顔はこの杜回、秦では有名な力持ちである。歯には生まれながらに銀のたこの杜回、秦では有名な力持ちである。歯には生まれながらに銀のた

斧を振り回している。もともと白翟の人である。青眉山で一日に五頭の

きるが戦車は方向転換に不便で前後左右から攻められて魏錡は大敗を喫 刀、大斧を持って馬も人もなぎ倒した。歩卒は車の動きにすぐに対応で

生け捕った。杜回の部下は主将が囚われたので逃げ散ったがみな晋兵に

退治し、その威名は大いに振るい遂に大将にまでなった男である。 右将軍に 招 聘 した。 さらに、 三百人を引連れて嵯峨山の万余の山賊を 虎を殴り殺しその皮を持ち帰ったという武勇談を聞き、秦桓公は彼を車

いで、本国へ情況を報告すると弟の魏錡をよこしてきた。 隊を連れて陣外へやって来て三日間罵倒し挑発を続けたが魏顆は応じな ず敗勢になり、魏顆は兵を陣内に戻して出て戦う事を禁じた。杜回は部 うであった。晋の兵たちはこんな凶暴なのは見たことがない。支えきれ 馬の足を叩き切り、上は甲首を斬り落とす。正に天降って来た厄神のよ

て戦いに慣れた三百人の手勢を連れて魏顆の陣に踏み込んできた。下は

魏顆は布陣して交戦の時を待った。杜回は車に乗らず手に大斧を持っ

なわないので救援を要請したんだと話したが、魏錡はあまり気にしない たしに救援に行くようにとのご下命がありました」 と魏錡は兄に言った。魏顆は秦将杜回の事を細かく説明し、とてもか 一殿は赤狄の残党が秦と結託して異変が起こるのを心配なさって、 わ

すよ。明日陣をよく見てみてみましょう。大丈夫ですよ」 「やつはもともと山賊みたいなものですからたいした能力はないで

翌日、杜回はまた挑発にやってきた。魏錡は怒って出ようとしたが魏

と請け負った。

笛が鳴って三百人の寄せ手があちこちから集まりみな杜回の後につき大 顆は止めた。魏錡は聞かず、すぐに新来の兵士を引き連れ駆けだしてい った。秦の兵士は四方に逃げ散ったので魏錡は兵を分けて追った。突然

> 三更(深夜十二時前後)になって疲れて眠くなり朦朧として眠り込んだ。 る。そこで魏錡にその事を話した。魏錡は、 目が覚めてもその意味がわからず、また眠ると先ほどと同じ声が聞こえ 夢の中で誰かが耳元で『青草坡』と 囁 いたようだった (坡は坂の意味)。 その夜、魏顆は陣中で悶々としてあれこれ考えてみるがいい策がない。

した。魏顆が応援を出してくれたお陰で帰陣することができた。

右から挟撃すればきっと勝てます」 て待ち伏せておきましょう。兄上は敵を誘ってそこへ来てください。左 軍がそこで敗れるという事かもしれません。わたしが先にその坂へ行っ 「輔氏沢の左方十里ほどの所に大きな坂があり青草坡といいます。秦

魏顆は数合ほど刃合わせをしては車を返して逃げ、次第に青草坡に引き き払い黎城に撤退するとデマを流した。杜回は案の定追撃してきた。 魏錡は自分で青草坡へ行って待ち伏せの体勢を取った。 魏顆は陣を引 235

寄せてきた。その時ドーンと砲声が一発鳴り響き、魏錡の伏兵が一斉に し当る者みな縦横になぎ倒した。杜回の方にもたくさんの死傷者が出て にした。杜回は全く怖れる様子を見せず百二十斤(30㎏)の大斧を振り回 飛び出してきた。魏顆は再び方向を変え杜回を包囲し両方から挟み撃ち いるがどうしても負かすことができない。魏兄弟が力戦するが杜回は

である。すぐに魏顆、魏錡の二輌の戦車が駆込み二人の戟で突き刺して 軍中に喊声が起こったので顔を上げると、綿の上着にすすきの草履を履 然油の靴で氷を踏んだように足元がふらついて立っておれなくなった。 歩も下らないのである。青草坡の中間位まで押寄せて来た時、杜回が突 いた一見農夫に見える老人が青草を結んだもので杜回の足を絡ませたの

追われて捕まり、三百人のうち逃げることができたのはせいぜい四五十 人しかいなかった。

魏顆が杜回に聞いた。

「英雄を自認していたのにどうして捕まったんだ」

「足が何かに絡みついて動けなくなったんだ。天の神にやられたんで、

に連れて行きたいのだ」

と言ったが魏顆は、

と言って亡くなった。魏顆は彼女を殉葬しなかった。魏錡は、

「父上の臨終の言葉をお忘れになったのですか」

って欲しい。忘れるな、そうすればわしも安心してあの世へ行ける」

「わしが戦死したら彼女にいい相手を見つけてやって嫁に出してや

と言っていたが臨終の時になって、

「わしはあれが可愛ゆくてならん。是非殉葬してくれ、あの世へ一緒

魏顆はどうも尋常ではないとひそかに思った。

実力で負けたんじゃねえ」

魏錡がそう言い魏顆もそう思ったのですぐに斬首し、兵を休め稷山に 「やつは大変な力があり、生かしておくと何か問題を起しそうです」

戦勝の報告をした。 この夜、魏顆はやっと安眠できた。夢の中で昼間見た老人が現れ拱手

の礼をして、

を結びっ彼を倒したのです」 「将軍は杜回が捕まった理由をご存知ですか。実はこの年寄りが青草

いました、どのようにお礼を致したら宜しゅうございましょうか」 「わたしは祖姫の父でございます。 あなたさまはお父上の平時の本当 「初めてお会いしたご老人にお助けいただき本当にありがとうござ

ご恩に感じ、将軍の軍功に微力ながらご協力申し上げた次第であります。 将軍が今後も功を重ねられれば、子々孫々栄えられ王侯にもおなりにな のお気持ちに従ってわが娘を再嫁させてくださいました。黄泉よりその

りましょう。わたしの申し上げましたことお忘れにならないように®」

徳があって老人の青草の恩返しがあったのである。魏顆は夢のことを、 と言って、葬儀が終わるとしかるべき人を選んで嫁にやった。この陰 236

時の命令に従うべきではない」

ておられたのだ。孝子は平時の本当のお気持ちに従うものであり、錯乱

「父上は臨終の時は錯乱状態だったが、常には嫁にやってくれと言っ

けずこのようにあの世から彼女の父親の恩返しを受ける事になったのだ」 と魏錡に話してやると彼も感心することしきりであった。 「わしが父上の臨終の言葉を曲げて彼女を助けてやったので、 思いが 草を結び杜回倒せしは誰ならん一夢中に聞こえし報恩の由縁

した。 秦の敗兵が雍州に戻り杜回の戦死を報告をすると君臣共に意気阻喪

陰徳積善の功 その中におのずから福運有り

月を明記した大鐘を鋳造した。後人は景公が造った鐘だからその名に因 方晋景公は魏顆の功を喜び令狐の地を与えてこの事績を記念し年

®後に魏氏は趙氏 韓氏と共に晋を三分し諸侯となりその後魏王となった。 結草死後恩に報る事

晋に帰する事になった。および留吁の属国鐸辰の三小国を滅ぼした。これよって赤狄の地は全ておよび留吁の属国鐸辰の三小国を滅ぼした。これよって赤狄の地は全てみ『景鐘』と名付けた。景公は更に士会に赤狄の一掃を命じ、甲氏、留吁、

せると果たしてその通りなのである。林父が何故判るのかと聞くと、人は泥棒を推定する異才がある。街を歩いていてさっと指摘して調べさ国中を訪ね盗賊捜索一人者である郤氏一族の名雍という者を得た。この三の年晋は飢饉に見舞われ盗賊が蜂起したので、尚林父はこの対策に

り悪そうな表情の者に出会うと、近づいて声をかけたら慌てるのですぐ「わたしはその人の眉と睫毛の間を見ます。街で貪欲なあるいはきます。「シープ

判ります」

れど盗賊は減るどころか益々増えた。大夫羊舌職は林父に、という。郤雍が毎日数十人もの盗賊を捕えたので市中は大変怖れたけ

りませんし、郤雍の死期が近づいています」「元帥は郤雍に盗賊逮捕を任せておられますが、盗賊は一向になくな

と言う。

林父は驚いて聞いた。「どうしてだ」

羊舌職は林父にどのように説明したのだろう、それは次回のお楽しみ。

## 斉国母 簫 夫人 楼台から客を愚弄し 逢 丑 父 衣を交換し主君の影武者となる

っと死を免れないだろうというので、その理由を聞いた。 荀林父は郤雍を使って盗賊を退治しようとしたが、羊舌職が郤雍はき

「周の諺で『淵の魚を探るのは凶、隠れている者を暴くは死』と言い

ます。郤雍一人の捜索に頼ったのでは群盗をなくすることはできず、逆 に群盗が力を合わせば郤雍の力を上回り結局殺される事になります」

人の群盗が彼を襲撃し殺して逃げた。 林父は憤懣で寝込み、遂に亡くな 職がそう言って三日もしないうちに、郤雍が偶々郊外へ出た時、数十

晋景公は羊舌職の事を聞き、彼を召して聞いた。

った。

について何か策はあるか」 「そなたは郤雍のことを予想していたようだが、盗賊の乱を終息する

理解させ恥を知るようにするのです。朝廷の中から徳のある立派な人を には彼等の心を変える事が大切です。 物を取るだけが能ではないことを うなものでどちらも砕けてしまいます。ですから、盗賊をなくするため の隙間から出てきます。力で力を抑えようとすると石を石にぶつけるよ 「智で智を御するのは、石で草を押し付けるようなもので草は必ずそ

> ありません。しかも剛直で威厳があるけれどおとなしい人柄です。彼が 動基準になっています。 和して 諂 う事がなく、清廉であって横柄さが

「士会の他にはおりますまい。発言には信頼が置けますし彼は義が行

適任者と考えます」

改封した。これが范氏の始まりである。 更に上 卿に任じ荀林父の代りに中軍の元帥とし、太傳も兼任させ范に し士会の功を周定王に報告した。 定王は士会に礼服を下賜した。 景公は

士会が赤狄問題を片付けて帰国すると、晋景公は狄の捕虜を周に献上

果盗賊たちは皆秦へ逃げて行き国に盗賊は居なくなり晋国は治まった。 景公は再び覇を唱える気になった。謀臣伯宗が景公に進言した。 士会は盗賊処罰条項を全て削除し民衆の勧善教化に専心した。この結

注記 57) 以来秦との友好関係は途切れています。斉、宋の弑逆事件を問 時にも新城で会盟し変節する者はいませんでしたが、令狐の背信(48回

「先君文公は践土で会盟し列国は敬服して帰順いたしました。 襄公の

罪できなかったため山東諸国もわが国を軽く見て楚についてしまいまし

す。その二国に使者を出して同盟を結び楚をうかがえば志はかなうでし ています。殿が諸侯の盟主をお望みでしたら斉、魯と親交を結ぶべきで たし、鄭や宋も救援できずこの二国も失ないました。晋の傘下に残って いるのは衛と曹などわずかに数カ国だけです。斉と魯は諸侯が一目置い

を持たせて魯、斉に派遣した。 景公は伯宗の意見に従って、上軍の元帥郤克を使者として十分な土産

ようになり、盗賊の心配をすることはなくなります」

「この朝廷の中で誰が一番適任だろうか。卿の方で適任者を挙げてみ

選んで民衆に誉れというもの教化させれば、無頼の者共も自ら改心する

ょう

しば斉に挨拶に行っていた。斉恵公の死後、頃公無野が継位してからもところで、魯宣公は斉恵公に君位を認めてもらった事を感謝してしば

に行く時期だからと言って、上卿の季孫行父を郤克と一緒に斉へ派遣し終えて、これから斉へ行く予定だというと、魯宣公もちょうど斉へ挨拶 見してそれぞれ主君の挨拶を述べた。挨拶が終わった後、頃公は四人の たが期せずして同じ趣旨であった。四人の大夫は客館に入った。翌日朝 曹の大夫公子首に出会った。四人が顔を合わせそれぞれ来た理由を言っ た。斉の郊外まで来た時、これもまた斉に挨拶に来た衛の上卿孫良夫と 従来のやり方に従って礼を欠いた事はなかった。郤克が魯へ行き挨拶を

のご用意を致させましょう」 「皆さんしばらく公館にお帰りになってお待ち下さい。すぐにお食事

大夫の容貌を見て心中奇怪に思いながら、

らえきれなくなった。太夫人は蕭君(蕭 叔 大 心 南宮長万の謀叛平定) 頃公は内宮へ戻って母親の蕭太夫人に会うと我慢していた笑いがこ そう言って大夫たちを下らせた。

しいことを話して楽しませていた。 いたので、孝行な頃公は母親が喜びそうな事を探し街での面白い事や珍 の娘で斉恵公に嫁した人である。恵公が亡くなった後昼夜泣き悲しんで

その日、頃公が笑ってばかりでその理由を言わないので蕭太夫人は、 「外宮で何かそんなに楽しい事があったのかえ」

とたずねた

「特に楽しい事じゃないんですが奇妙なものを見たんですよ。 いま晋

曹の公子首は猫背なんです。病気やかたわの不具者は世の中にいっぱい いますが、揃いも揃ってどこかに欠陥がある四人が同時にやってきたん 晋の大夫の郤克は隻眼、魯の大夫季孫行父は禿、衛の大夫孫良夫は跛行、 魯、衛、曹の四カ国からそれぞれ大夫が表敬訪問に来ているんですが、

です。朝堂に突然こんな妙な人物が集まったので可笑しくって」

蕭太夫人は信じられない。

「わたしもちょっと見てみたいけどいいかしら」

高殿の下を通ります。母上は高殿のカーテンの後ろからそっとご覧にな たかとの を明日裏の苑で開くよう指示しましょう。そうすれば使者たちは必ずを明日裏の苑で開くよう指示しましょう。 て、その後恒例によって私的な宴会を行う事になっています。その私宴 って下さい」 「それは簡単です。 他国の使者が来た場合は先ず公式の宴会を行なっ

国の上卿国佐がこれを聞きつけ頃公に諌言した。 づづ選んでそれぞれ晋、魯、衛、曹の使者の御者をさせたのである。斉 親に笑ってもらおうとわざわざ国中から片目、禿、びっこ、猫背を一人 者がやってきた。すべて斉が用意をした御者付きの車である。頃公は母 翌日になった。蕭太夫人はすでに高殿に上がっている。例によって使

二人ずつ車に乗って高殿の下を通過した時、蕭夫人はカーテンを開いて これを見て思わず大声で笑った。左右にいた侍女たちも口を覆わず声を 方を尊敬すべきで、ふざけて戯れるなどとんでもない事です」 しかし頃公はその諌言を聞かなかった。片目、禿げ、猫背、びっこが 朝見の使者を受入れる儀式は国家の大事です。主客はそれぞれ相手

夫人だとわかった。まもなく、魯、衛、曹の三国の使者もやって来て郤克 た。しかし台の上で女達の笑い声を聞きおかしいと思った。早々に数杯 の酒をあけて宿舎へ帰り、台上にいたのが誰かを調べさせて国母の蕭太

出して笑い、その笑い声は外まで聞こえた。

郤克は初めに片目の御者を見た時は偶然だと思い特に気にしなかっ

に言った。

「斉国がわざと御者を使って我われを愚弄し、女どもの笑いものにし

た了見がわからん」

った。このまま引下ったのでは男がすたるじゃないか」 「我々は好意を持って表敬訪問に来たのに逆にピエロにされてしま

を尽して協力いたしますよ」
「大夫が出兵して斉を討つと言われるなら、我々は主君に言って全力

行父等三人も声を揃えて言った。

約を結ぼうじゃないですか」
「みなさんもやっぱり同じお考えだったのですね。それじゃここで盟

国佐はこれが斉の禍の元にならなければいいがと心配して大きなた拶もしないで流星のように車を急がせそれぞれ本国へ帰国した。四人の大夫は一箇所に集まり一晩かけて相談し、夜明け前に斉侯に挨「斉討伐兵を挙げる時、非協力者には神の祟りがあるであろう!」

台上の笑声消えぬ間に 四国すでに報復の狼煙を上げたり主客は互いに尊敬すべし 客の不具を弄ぶとは何事か

め息をついた。史臣はこの状況を詩にしている。

侯に楚へ借兵の使者を出すように進言した。 見が合わないため晋侯の許可を得られていないと聞き、いらいらして魯報復を誓っていた。郤克が、晋侯に斉討伐軍を要請したが太傅士会と意報復を誓っていた。郤克が、晋侯に斉討伐軍を要請したが太傅士会と意なって政権を担当していた。彼は自ら斉へ表敬に行ったのに馬鹿にされなって政権を担当していた。彼は自ら斉へ表敬に行ったのに馬鹿にされての時、魯は東門仲遂、叔孫得臣共に亡くなり、季孫行父が正卿に

その時楚は庄王旅が病死し十歳の世子の審が即位して共王となって

いた。

威声は正に猛虎の如く 荊蛮にありて桓文に伍せり野を討って尚武を示し 周を窺い宋を攻め野を討って尚武を示し 周を窺い宋を攻め戦姫の内助 孫叔の輔弼 徴 舒を誅し義を広め、まましま。

史臣は楚庄王を称えて次のように言っている。

たなハ時、晋からやって来た者が欠のようなことを言った。 楚共王は父親の喪に服したばかりなので出兵は断った。 行父憤懣やる

桓文 斉桓公晋文公

「邪こは友にないない」というではつ川と見ない。そと寸になければ肩かたない時、晋からやって来た者が次のようなことを言った。

た。その結果郤克が中軍の元帥になって晋国の政権を握ったので間もなの考えを撤回させるのは難しいと判断し、老齢を理由に政権の座を下りは難しいと説得するので、晋侯はこの意見に動かされていて、士会は郤克は難しいと説得するので、晋侯はこの意見に動かされていて、士会は郤克は死亡なとなく斉を討つ利を説き、斉を討たなければ覇業

斉討伐の日程の打ち合わせのために晋へ挨拶に行かせた。
行父は大変喜び、仲遂の子公孫帰父を使者として、郃克に昇格祝いとく斉へ報復の兵を挙げるだろう」

でも特別籠信していた。

魯宣公は仲遂のお陰で君主になれたのでその子公孫帰父を群臣の中

から帰父が出かける日、彼の手を握って密かに言った。はいつもこの三家に主家が乗っ取られるに違いないと憂慮していた。だこの頃魯は孟孫、叔孫、季孫の三家(三桓)が代々非常に力があり、宣公

の事情を訴えて、もし晋の力を借りて三家を追放できたらお礼として毎なたも知っての通りだ。晋へ行ったら晋の君臣の様子を探って内々にこ「三桓の勢力が日増しに強くなって、公室が衰微してきているのはそ

年年貢を納め晋国に二心を持つことはないと伝えてもらいたい。くれぐ

240

帰父は拝命し多額の賄賂を持って晋へ出かけた。れも他に漏れる事がないよう慎重に頼むぞ」

欒書はそう言って機会を見て郤克にこの件を話しすると、彼は案の定、くこの計画には協力しないと思うよ。まあちょっと探ってみよう」「元帥(郤克)は季孫氏とは斉に対し同じ恨みを持っているから恐ら

はさかのぼって処断すべきである」

と言って密書をしたため大至急季孫行父に知らせた。行父は怒って、「これは魯を乱す策謀だ、こんな話聞いてはならん」

と言い、郤克の密書を叔 孫 僑 如に見せた。
「あの時公子悪、公子視を殺した首謀者はみな東門遂だった。わしは「あの時公子悪、公子視を殺した首謀者はみな東門遂だった。わしは

う。

僑如はそう言って仲孫蔑も誘ったが、蔑は、様子を見てみたらどうだろう」

「臣が君主に問い質すというのは如何なものか

け言って帰った。 宣公が危篤だと言うのをきいて面会を求める事もできず、よろしくとだ宣公が危篤だと言うのをきいて面会を求める事もできず、よろしくとだと言って断わったので司寇の臧孫許を同行した。三人が宮門へ来ると

翌日宣公が亡くなったという報せがあった。周定王の十六年(紀元前五

九一年)の事である。

を壊したのはすべて東門遂のやった事だ。仲遂のこの国を誤らせた大罪に年少ゆえ国政は全て季氏が牛耳り、大夫たちを朝堂に集めて相談した。は年少ゆえ国政は全て季氏が牛耳り、大夫たちを朝堂に集めて相談した。本孫行父らは十三歳の世子県近と強立した。即ち魯成公である。成公季孫行父らは十三歳の世子県近を擁立した。即ち魯成公である。成公季孫行父らは十三歳の世子県はを推立した。即ち魯成公である。成公季孫行父らは十三歳の世子県立と

大夫たちは唯々諾々と彼の意見に従った。行父は司寇臧孫許に命じて大夫たちは唯々諾々と彼の意見に従った。行父は司寇臧孫許に命じて大夫たちは唯々諾々と彼の意見に従った。行父は司寇臧孫許に命じて大夫たちは唯々諾々と彼の意見に従った。行父は司寇臧孫許に命じて大夫たちは唯々諾々と彼の意見に従った。行父は司寇臧孫許に命じて

楹は折れ東門の高木枯れ ただ青簡ºに悪名を留めしのみいでという。 三桓の恨を買おうとは まとう

に攻め込んだ。ところが斉侯の寵臣盧蒲就魁が軽率に前進して北門の兵勝と自ら大軍を率いて魯に出兵し平陽を通り龍邑(魯邑、現山東省泰安)が有る事を知り、先ず楚に使者を出し友好を図り外の備えとし、先手必が成る即位の翌年、斉頃公は魯が晋と連合して斉を討とうという陰謀

に捕えられた。頃公は兵士に命じて、城の上の兵に向かって、

「盧浦将軍を帰してくれたら即刻撤兵する

と叫ばせたが、龍邑の兵は信用せず就魁を殺し死体を城の上に磔にし

た。頃公は怒って、全軍に四方からの総攻撃を命じ三日三晩総攻撃を続

らした。更に深攻しようとしていたところへ、斥候から衛の大将孫良夫けて遂に落とし、城北では兵と民衆を皆殺しにして盧浦就魁の恨みを晴

が斉の国境に侵入してきたとの情報が入った。

ろうじゃないか」 龍邑に一軍を留め撤兵して南に向かった。 新 築(衛の邑)の境界辺り 「衛め、わしの虚をついて来よったな、ようし、返す刀で始末してや

で衛軍先鋒の副将石 稷に出遭い、両軍軍営を設営して対峙した。

石稷は中軍へ行き孫良夫に会って、

を譲り晋、魯軍を待って合同で再挙するのが万全ではないでしょうか」 ました。斉君自ら率いていますので軽視できません。ここは引揚げて道 と進言すると孫良夫は、 「命令に従い斉の虚を突いて国境を脅かしましたが、斉軍が戻って来

にして逃げ出すことなどできるか。 「斉君に笑われた恥辱の仇を討つために出て来たのだ、 仇敵を目の前

と言って石稷の諌言を聞かず、その夜中軍を率いて斉の軍営に攻め込

らは高固の両大将が包囲してきた。斉侯も自ら大軍を率いてやってきて、 斉陣は空っぽだった。兵を帰そうとすると左の方からは国佐、右の方か んだ。斉軍は衛の夜襲に備えがあり、良夫が一斉に攻めこんだ時は何と 「びっこめ。首を置いていけ」

と大声で叫ぶ。良夫は懸命に対抗したがとても支えきれず、正に危機

を救援にやって来て、 を喫した。斉侯は両将と共に良夫を追った。そこへ衛将石稷軍も孫良夫

一髪のところを寧相、向禽の両軍に救出され北に逃れたが、衛軍は大敗

に砂塵が起こり車馬の音が天に轟いてきた。 と叫んだ。孫良夫は自軍を率いて急いだが、一里も行かない内に前面 「元帥とにかく前方へお逃げください、わたしが後を断ちますから」

良夫は落胆して言った。ところが近づいてくる軍を見ると、一人の将 「斉軍に伏兵がいたか…万事休すだ」

軍が車中から腰を屈めて挨拶をした。

れてしまいました誠に申し訳ありません」 「小職は元帥がすでに斉と交戦されているとは存ぜず、つい救援が遅

に戦車百余乗用意してありますので一戦するには十分です。元帥どうぞ 「わたしは新築の大夫仲 叔于 奚と申します。本邑の全軍を集めここ 242「あなたはどなたですか」

ご安心下さい」 孫良夫はやっと安心して于奚に頼んだ。

「石将軍が後方にいる、救援に行ってやってくれないか」

于奚は了解して救援に向かった。

ては兵力が続かなくなると心配し、輜重の掠奪を辞めて撤兵した。石稷、 駆けつけたことがわかった。斉頃公はここは衛の領域なので衛軍と戦っ に天をおおう砂塵が見えた。探らせたところ仲叔于奚が石稷軍の救援に

た時、衛侯は于奚に孫良夫を救った功により邑を封じようとした。しか

于奚も追撃はしなかった。後の事であるが晋と連合し斉を破って帰国し 方斉軍は 殿 の石 稷軍に出遭い戦を仕掛けようとした時、北の空 魯臧孫許はその前に魯に帰り季孫行父と叔 孫 僑 如に軍を率いて新築 して、周定王十八年(紀元前五八九年)六月絳州城を出発し東に向かった。

鄭 丘 緩を車右にし、士燮を上軍の将、欒書を下軍の将、韓厥を司馬と

としての栄誉を賜わる事ができれば十分でございます」 「邑をいただく事はご遠慮申し上げます。 曲 懸 と繁纓を頂戴し臣下

と言った。周礼によると、天子の楽器は四面みな楽器懸けがありいわ

ものだから、持つ資格のある者が持つべきだと言い、衛侯は賞とするも 孔子は『春秋』の中でこの事に触れて、道具は貴賎の区分を明確にする り于奚は功を恃んでこんな事を要求し、衛侯は笑いながらこれを許した。 これを『曲懸』または『軒懸』といい、大夫は左右の二面だけである。 ゆる『宮 懸』という。諸侯の楽器懸けは三面だけで南方だけがなくて 『繁纓』は諸侯の馬飾りである。この二件は諸侯に決められたものであ

諸将が帰国の時期をたずねると さて話を戻し、孫良夫は敗軍を集めて新築城に入り数日休息した。

のを誤っていると批判している。

あってご主君にお会いできよう。直ちに晋に出陣を要請して斉君を捕縛 しなければこの胸の中が治まらん」 「わしは斉に復讐しようとして却ってやられてしまった。何の面目が

ていきゅうかん ししょう あいました。彼は中軍の将となり解し、を御者、を要請し景公はこれを許した。彼は中軍の将となり解した。 で景公も承諾せざるを得ない。郤克は斉軍の強さを考慮して戦車八百乗 公に拝謁した。郤克も二人の客人も同じ考えであり皆口を揃えて言うの 魯の司寇臧 宣 叔も晋に借兵を頼みに来ていた。二人は郤克を通して景 と言って石稷らを新築城に残し、自ら晋国へ借兵に行った。ちょうど

> 間がなかった。 築城に集まり隊伍を編成して次々と出発し三十余里の間人馬の音の絶え に集まるよう連絡した。衛孫良夫は曹公子首に約束を取り付け、各軍新 斉頃公は予め魯の国境を偵察させていたので、臧司寇が晋軍の救援を

求めていた事を察知していた。 「晋軍が国境を侵入して来たら民衆たちが震え上がるだろうから、 逆

にこちらから先に国境に軍を出しておいたほうがいい」

余里を進軍し鞍(現山東省済南鞍山)で駐屯した。 頃公はそう言って軍を観閲し五百乗を選抜し、三日間昼夜兼行で五百

(この戦いを鞍の戦いという)。

という斥候の報告を受け頃公は宣戦布告書を届けさせ、 「晋軍はすでに靡笄山の麓で駐屯しています」 郤克も翌日の

決戦を承諾した。

りません。臣が探ってみたいと思います」 「晋との戦いは初めてですから、晋の兵が勇猛なのか惰弱なのかわか

逃げた。高固はその車に飛び移り、御者を蹴落として手綱を取って斉陣 拾って投げつけた。石は頭に命中して車上に倒れ、御者はびっくりして 将の一人がこれに応じて陣門から飛び出してきたので高固は大きな石を 大将の高固はこう願い出て、単車で晋の陣前へ行き挑戦した。 晋の末

と叫んで斉軍のみんなをドッと笑わせた 「余裕しゃくしゃく。余力を売りますよ」 に戻って来た。そして周囲に向かって大声で、

高固は頃公に報告した。 晋軍の中に高固を追かける者がいたが追着けなかった。

です。恐れる事はございません」
「晋国は軍隊の数は多いけれど戦争ができる奴はあまりいないよう

錦袍と 綉 甲を着用し黄金で装飾した豪華な戦車に乗り、兵士にはいつきに、 頃公は自分の武勇に自信があるので晋軍など眼中になく、身にはた。 頃公は自分の武勇に自信があるので晋軍など眼中になく、身にはた。 頃公は自ら甲冑を着て邴夏を御者に、逢丑父を車右に命じて出翌日斉頃公は自ら甲冑を着て邴夏を御者に、逢丑父を車右に命じて出翌日斉頃公は自ら甲冑を着て邴夏を御者に、逢丑父を車右に命じて出

でも射られるよう弓の準備をさせて、

「わしの馬が晋軍に踏み入れたらすぐに一斉に発射せよ」

進退を決めるのです。元帥の傷はまだ命に別状はありません。頑張って「全軍の耳目は中軍の旗と太鼓に向いています。三軍はこれによって

た。解張は声をからして叫んだ。

戦いましょう」

と鄭 丘 緩も言うので、郤克は気を取り直して撥を取り太鼓を打った。「張殿の言われる通りです。生きるも死ぬも運命です」

をたたきその音は天をも震わせた。晋軍は中軍が優勢と見て先を争って郤克を守り、右手で矛を奮って敵に当った。左右軍の将士も一斉に太鼓解張も馬の手綱を引き矢を冒して進んだ。鄭丘緩は左手で傘を持ってと 黛 丘 綴 も言いのて 谷克に気を取り直して操を取り太鼓を打った

「元帥はしばらく休んで下さい、わたくしが敵を追撃いたしますから」えきれず大敗を喫して逃げ出した。韓厥は郤克の傷が重傷なのを見て、敵にぶつかりその勢いは山をも動かし海を覆すほどで、斉軍はとても支

でいたしが将軍の代わりに手綱をとりますから」か。わたしが将軍の代わりに手綱をとりますから」「将軍は大至急この包囲を抜けて救援軍を呼びに行ってくれません

万一不測の時は臣が殿の身代わりになれば殿は脱出なさる事ができましお使いになり臣の隣で轡をお取りいただいて晋軍の目をごまかします。い。臣がそれを着させていただき殿の代わりになります。殿は臣の服を「事態は大変な状況です。急いで錦 袍 綉 甲をお脱ぎになってくださ

思い斉公の馬のたずなを引き挨拶をした。ろで韓厥に追着かれた。韓厥は錦袍綉甲を身に着けた逢丑父を斉頃公と何公は彼の言葉に従って着替え終わり車が華泉のそばまで来たとこ頃公は彼の言葉に従って着替え終わり車が華泉の

よう

「わが主君は魯、衛両国の要請もだし難く、貴国にどんな罪を犯した頃公子としますのでまげて弊国へお運びいただきたく存じます」のかを聞かせていただくためにまいりました。わたくし韓厥が車をお引のかを聞かせていただくためにまいりました。わたくし韓厥が車をお引いが主君は魯、衛両国の要請もだし難く、貴国にどんな罪を犯した

「丑父、喉が渇いた、水を汲んで来てくれ」

いなくなるだろうよ」

と命じた。頃公は車を下りて華泉の水を汲んできたが丑父は、 「こんな汚い水が飲めるか、きれいな水を汲んでこい」

うことができた。 振りをして山の左を迂回して逃げ、ちょうどそこで斉将の鄭周父に出遭 と頃公に更に命じ、頃公は彼の意味を了解して奥へ清水を汲みに行く

この道は敵兵はほとんどいません。どうぞ急いでご乗車下さい」 「邴夏はすでに晋軍に捕えられました。晋の勢いは大変なものです。

した。しかし韓厥が丑父を連れていくと、郤克はそれを見て、 韓厥が事前に中軍に斉侯を捕えた事を報告させた時は郤克は大喜びかける。 斉侯はそれに乗って遂に脱出した。

韓厥は知らなかったので一杯くわされたわけである。 と人目で見抜いた。郤克は使者として斉に行き斉侯を知っていたが、

「これは斉侯ではない」

韓厥は怒って丑父に聞いた。

「お前は誰だ」

のがわが主君です」 「それがしは車右将軍逢 丑 父です。先ほど華泉に水を汲みに行った

郤克は怒って、

わが軍を騙したのだ。それでも助かる望みがあると思うか」 「軍法に『三軍を欺きし者は死』とある。そなたは斉侯の名をかたり

殺されようとしているんだ、今後はご主君のために身代わりになる者は と言い、部下に縄をかけさせた。丑父は声を張り上げて言った。 「晋の者共よ、まあ聞け。わしはいま主君の身代わりになったために

> ろうと思い彼の縄を解いて檻車に乗せた。潜淵居士はこれを詩にした。 これを聞いて郤克は、忠君を尽くす者を殺せばいい結果を生まないだ 全山に戈甲林の如く 綉甲の君王危機

千尺の深き華泉の源は尽きずといえど

丑父の深き謀には及ぶべくもなし

が止められた事からこの名がついたものである。 後の人は華不注山を金輿山と名付けたが、これはここに斉侯の金の車があります。 きんよきん

しもの事があってはと心配して、それぞれの軍を率いて救出に向かい、 また救出に馳せ入った。国佐、高固はすでに中軍は敗れており斉侯にも 再び軽車で晋軍の中へ馳せ入り丑父を探したがわからず出てきて、更に 頃公は包囲を脱出して本営に帰ったが、命の恩人である丑父を思い、

斉侯を晋軍の中に見出し驚いて言った。 髪、どうして大切なお体で軽々しく虎穴をさぐろうとなさるのです」

らず、不安でいてもたってもいられず探しにきたのだ」 「逢丑父がわしの身代わりになって敵に捕えられた。まだ生死もわか

分かれて攻めて来ると言うのである。 そんなことを言っている時、斥候が急を知らせてきた。晋軍が五隊に

ん。早々に帰国して都を堅守し楚の救援を待つべきです」 「すでに軍気は沮喪しています。殿はもうここに留まる事はできませ

斉侯も国佐のその言葉に従って軍を撤退させ臨淄に帰った。 郤克は晋、魯、衛、曹の連合軍を率いて長駆し途中略奪を加えながら、

臨淄に攻入り一挙に斉を滅ぼそうと考えた。

さて、斉はこの大敵に対しどう対応するか、それは次回のお楽しみ。

245

## 楚巫臣 夏姫を娶り晋へ出奔第五十七回 かき

# 趙一族の下宮の難で程襲孤児を匿う

きここで駐屯して集中攻撃を行った。 晋軍は斉侯を四百五十里ほど追撃し袁娄(現山東省臨博)という所に着

器を晋に献上し、魯、衛の二国には占領している土地を返却するという 「紀侯の甗 (穀物を蒸す器)と 玉 磬 (うちいし=楽器の一種) の二つの宝斉侯は慌ててみなに策を尋ねた。 国佐が一案を進言した。

案で和平交渉を進めたいと存じますが如何でございましょうか」 「しかたがない、しかし卿の譲歩案がわしの我慢の限界だ。これでだ

めなら決死の一戦をやるのみだ」 国佐は二つの宝器を持って直接晋の陣営へ行き、先ず韓厥に会って来

出したのです。わが主君は本来貴国には何の恨みもありません」 意を説明した。韓厥はそれを聞いて、 「貴国が魯、衛を度々侵略するのでわが主君が可愛そうに思って軍を

と言うので国佐は、

思いますがそれで如何でしょうか 「魯、衛に占領している土地をお返しするようにわが主君に頼もうと

と意向を探ってみた。しかし韓厥は、

「本件は中軍の元帥がいますので私が専断する事はできません」

たが郤克は憤怒の表情で国佐に対した。 と言って国佐を郤克に引見させた。国佐は終始恭順な言葉使いであっ 「あなたの国が亡びるのは時間の問題だ。この期に及んで未だ何か言

> って我が方の力を削ごうというのですか。もし本当に講和を望むのなら 一つの要件があります」

「その要件をお聞かせ願えますか 「先ず第一は蕭夫人と女達を晋国へ人質として送る事。第二に斉国内

の全田畑の畝を東西向きに変える事。万一後に違背した場合は人質を殺 戦車が西から東へ走って直接臨淄を攻め落す」

国佐はこれを聞いて突然怒り出した。

帥がこの様に難題を言われるのは講和が不承知だという事ですか」 です。貴殿の話に従って方向を変える事は国を滅ぼす事と同じです。元 できましょうか。田畑のあぜにしましても全て地勢で方向が決まるもの 晋国はほぼ同等ですから、晋君の母君をお考えになれば、国母を人質に 「ひどいじゃありませんか。蕭夫人は君主の母君であります。斉国と

「講和を許さないと言ったらどうするつもりだ」

たとえ国が亡びても国母を人質にし、畝の方向を変える事はできません。 にだめならもう一戦。三戦とも負けたら斉は全て晋のものです。しかし ではございません。元帥が講和を認めないとおっしゃるなら、斉は残兵 国は富み兵は強く、今日たまたま敗戦いたしましたがまだ決定的な損害 を集め元帥と城下で決戦いたしましょう。一戦でだめならもう一戦、更 「元帥が斉を馬鹿になさるのにも程があります。斉は国土は狭くても

と言って、二つの宝器を下においたまま郤克に一礼して胸を張って陣

申すべきことは申しましたのでわたくしはこれにて失礼します」

季孫行父と孫良夫はテントの後ろで話を聞いていて郤克に言った。営を出ていった。

「斉は我われを非常に恨んでいるようです。我われに必死になって掛

窓宋儒は宋代の儒家の意味。ここでは具体的な人でなく作者の代弁者であろう。

出を了承したほうがいいのではないでしょうか」かってくると思います。戦いはいつも勝てるとは限りません。彼の申し

「斉の使者は帰ってしまったがどうする」

「後を追って連れ戻しましょう」

営に連れ戻した。
行父はそう言って車に良馬をつけ十里以上追って、強引に国佐を晋陣

郤克は国佐に季孫行父と孫良夫を引き合わせて言った。

意しているので、わたしもその意見を大切にして承諾する事にします」るので簡単に承諾できなかったのです。しかし魯、衛の大夫が講和に同「今回の戦いでは勝たなければわが主君に責任を問われる恐れがあ

斉は、晋に朝見し、魯、衛には侵略した土地を返還し、晋は撤兵する盟約をお願い致します」

「元帥がわが国の申し出をお受けいただけるのでしたら確認のため

にふれ、講和を認めて返したが、斉を心から服させる事にはならなかっ約を批判して、郤克が勝ちに乗じて驕慢な態度に出たために国佐の怒り逢丑父は釈放され、頃公は帰国した彼を上卿にした。宋儒。はこの盟ことを取決め、それぞれ誓約書にして血をすすり盟約を結んで別れた。

たと言っている。

は皆卿とした。晋国はこれより六軍になり、景公はまた諸侯に対し覇を元帥、韓穿を副に、荀 騅を新下軍の元帥、趙 旃 を副に任命し、爵位上中下三軍を加え韓厥を新中軍元帥、趙 括 を副に、鞏 朔 を新上軍の上中下三軍を加え韓厥を新中軍元帥、趙 括 を副に、鞏 朔 を新上軍の事は凱旋し景公は戦勝の功を称え称に等に加封した。そして新たに晋軍は凱旋し景公は戦勝の功を称えがは、

っては景公に誣告していた。さらに欒、郤の両家とも関係を深くし後に司寇屠岸賈は趙氏が再び隆盛になるのを嫌い、常時趙氏の問題点を探称えることになった。

備えた。この件は後述する。

にもとるとして諸侯の気持ちが次第に離れていった。返還させた斉が侵略した土地を再び斉に返させた。これよって晋は信義し覇業に傷つく事を心配し、斉が恭順であると言う事を口実に、魯衛にいやり政治の改革を進め、復讐の決意を強くした。晋も斉が恨んで反抗いやり政治の政戦を大変な恥と思い発憤し、戦死者を弔い民衆を思

公屈巫は彼女の従者に 賂 をわたし夏姫に、 
ずかしく思い、遺体を迎えに行くと言う口実で鄭国に帰ろうとした。 
申の遺体を引き取りに行かなかったので人々から非難を浴びた。 
夏姫は恥通してしまった。黒要は襄老が戦死しても彼女の色香に恋々として父親通してしまった。黒要は襄老が戦死しても彼女の色香に恋々として父親

ところで陳の夏姫であるが、彼女が連尹襄老と結婚し一年も経たない。

と伝えさせた。司時に人を介して鄭襄公にも、りになりたいとお考えでしたらそのうちお迎えに参ります」りになりたいとお考えでしたらそのうちお迎えに参ります。もし夫人が鄭にお帰

出されたら如何がでしょうか」
「夏姫さまは故国。へお帰りになりたいお考えのようです。お迎えをと伝えさせた。同時に人を介して鄭襄公にも、

と言った。襄公は承知して夏姫を迎える使者を出した。楚庄王は大夫

<sup>∞</sup> 夏姫はもともと鄭穆公の娘で陳の御叔に嫁にいた。

たちに鄭が夏姫を迎えに来る意図が何かをたずねた。

で鄭がお手伝いをしようと使者を出したのでしょう」 屈巫がそう答えた。 「夏姫は襄老の遺体を収めて葬儀をしたいとおっしゃっていますの

「遺体は晋にある、鄭が取戻そうと思っても承知するわけがないだろ

と襄老の遺体と荀 罃と交換させる事ができましょう。鄭君は晋の邲の戦 もと親交があります。鄭の皇戍に晋楚の仲介をさせれば王子(公子穀臣) います。荀首は今回中軍の副将になりましたし、鄭の大夫皇戍とはもと いの報復を怖れていますからこの件で晋のご機嫌を取ろうという考えだ 「荀 罃は荀首が大変可愛がっている息子です。 罃はこちらで捕えて

と思います」 そんな話をしている時、夏姫が楚王に鄭に帰る別れの挨拶に来た。 「遺体を取り返さなければ楚国に顔向けができません」

夏姫が出かける時、屈巫は鄭襄公に手紙を書き、夏姫を妻にくれるよ と大粒の涙を流しながら言うので庄王は哀れに思って許してやった。

結納を受取った。このことは申公(屈巫)以外楚の人は誰も知らない。 うたのんだ。襄公は庄王や公子嬰斉も彼女を嫁にしたいという経緯があ ったことは知らず、屈巫が楚で重用されている人物なので婚姻を希望し

一方屈巫は自分の言った事が正しいという事を示すため、 晋の 荀 首 と

の遺体を取り戻したかったので、荀罃を晋に帰し、晋も二人の遺体を返 かけた。荀首は鄭の皇戍に手紙を書き仲介の労を頼み、庄王も子の穀臣 も連絡を取って二人の遺体と楚にいる
荀 罃との交換をするように話し

**還した。 楚の人は屈巫の発言が真実だと信じ彼が別に(夏姫と結婚したい** 

ょうど楚は庄王が亡くなったばかりですぐには出兵できない状況にあっ という)意図があったとは疑わなかった。 晋の斉討伐が始まった時、斉頃公は楚に救援を申し込んだ。その時ち

思っている。誰かわしの考えを斉侯に伝えてくれるものはいないか」 ない。わしは斉のために衛、魯を討って鞍の敗戦の恥を雪いでやろうと 楚の共王は、 「斉が晋と同盟を結んだのは楚が救えなかったからで、斉の意思では

た。後に斉軍が大敗を喫しすでに国佐が晋と同盟を結んだことを聞くと、

申公屈巫がそれに答えて、

「臣にやらせて下さい」

に衛の国境で会う約束を取り付けて、斉侯にはその時期を伝えておいて 「卿が行ってくれるなら、鄭は通り道だからついでに鄭に十月十五日

欲しい」 夜を通して鄭へ行き楚王の出動命令を伝えた。その後公館で夏姫と喜び と財産を十数車に積み込み城を出た。自分は軽馬車に乗って後に続き、 の結婚式を挙げた。 屈巫は拝命して屋敷へ帰り、新邑へ税の徴収に行くと言って先ず家族

佳人元来不易の妖精 至る所で男を迷わす 数度の争奪戦後屈巫遂に結婚 今回の激戦で勝負は決せり

夏姫は枕辺で屈巫に、

「この事は楚王におっしゃいましたか」

り話してやった。 と聞くので、屈巫は庄王、公子嬰斉が夏姫を欲しがっていた事を一通 せた。側は、

はありません。明日、あなたと別な安穏な場所へ行って共に長く楽しみ 水を得たように日頃の願いが叶ったのです。小官はもう楚には帰る積り 「小官はあなたのためにずいぶん頭を使いましたよ。今日やっと魚が

たいですが如何ですか」

使者の使命はどうなさるのです」 「そういう事だったのですか。楚にお帰りにならないとなれば斉への

なたと一緒に晋へ行こうと思います」 「わたしは斉へは行きません。晋楚互いに譲りませんが、わたしはあ

出奔した。 翌日早く、一通の手紙をしたため楚王に届けさせ、夏姫と共に晋国へ

ず道に疲れて死ぬことになろう。

晋景公は楚に敗れ屈辱を舐めたところなので屈巫が来たと聞くと、 「これは天が我に賜ったものだ」

より晋で安穏に暮らした。 て巫を姓とし名を臣とした。これより人々は彼を申公巫臣と呼び、これ と喜んで、即日大夫に封じ食邑として邢を与えた。屈巫は屈の姓を棄

楚共王は巫臣の手紙を受取った。その内容は概ね以下の通り。

うお願い申し上げます。この罪万死に当りますが平にご容赦願い上 せていただきます。斉使の件改めて代わりの良臣を遣わされますよ した。王のお怒りいかばかりかと堪えがたく、しばらく晋に寓居さ 鄭君は夏姫を臣に賜りました。不肖の臣、断る事ができませんで

> こうしえいせい るともいえます。これを討たずにおけましょうか! 「晋はわが国の累代の仇です。巫臣が晋へ行ったという事は謀叛であ

公子嬰斉も、

が分け取った。巫臣は家族が殺された事を聞き、二将に手紙を書いた。 を没収させ、側を遣わして黒要を捕えて斬った。両族の家財は全て二将 と言うので共王はその意見に従い、公子嬰斉に巫臣一族を殺して財産 「黒要が母親(夏姫)と私通した事も犯罪ですから討つべきです」 お前たちは王に讒言し多くの罪なきものを殺したな。 お前たちは必

次々呉に侵略され戦いのない年はなかった。巫臣の死後狐庸は巫の姓を を攻め取り、寿夢はついに呉王を僭称するようになった。楚の辺境は で呉は日増しに盛んになり、兵力も日増しに強くなって楚の東方の属国 ために画策し呉国と友好関係を作って呉に戦車の戦法を教た。そして子 の狐庸を呉に行人。として仕えさせ、晋と呉の間を常時行き来させたの 嬰斉らはその手紙を内緒にし楚王には何も言わなかった。巫臣は晋の

成公はこちらにも承諾した。 し講和を求め撤兵させた。一方晋も魯侯に使者を送り鄭討伐をさそい魯 ますうを尽っ を侵略し、さらに魯を打つために兵を移し楊橋に駐屯させた。魯のを侵略し、さらに魯を打つために兵を移し楊橋に駐屯させた。 継いで呉に留まり、呉は彼を相国にして国政を任せた。 仲 孫 蔑は国内から職人、織女、鍼灸女をそれぞれ百人集めて楚に献上 十月、楚王は公子嬰斉を大将に任命し鄭軍と一緒に衛を攻め衛の城外

共王はこれを見て非常に怒り、公子嬰斉、公子側を呼び彼の手紙を見

があた 20 行人 古代の官名 天子 諸侯等との外交役 春秋 戦国時代には各国に此の官職

共王が許に理ありと認め鄭を追及したので、鄭悼公は怒って楚を棄て晋 悼公となった。鄭と許国の間で境界の争いが起こり許君が楚に訴え、楚 周定王二十年(紀元前五八七年)鄭襄公堅が亡くなり世子費が継位し

が鄭を攻めたが欒書はこれを救った。 て亡くなった。後任として欒書が中軍の元帥になり、翌年楚の公子嬰斉 この年郤克は矢傷のため左腕を失って老齢を理由に引退したがやが

てきた。趙同、 趙 括 兄弟はその兄趙嬰斉と不仲で、嬰斉を淫乱だと誣 用し毎日酒を飲んだり巻き狩りをしたりで、昔の霊公の時と同じになっ 晋景公は斉、鄭がともに晋に服したので驕慢になり、屠岸賈をまた寵

史に此れが何の予兆か占わせた。屠岸賈は太史に賄賂を渡し『刑罰不中』 (刑罰が当を得ていない) の現れだと言わせた。 ある日梁山が突然崩れ土砂が河を塞ぎ三日流れが止まった。景公は太 告し斉へ追放し景公はそれを抑えられなかった。

景公は不審に思った。屠岸賈はこれを解釈して景公に説明した。 「いわゆる『刑罰不中』は、罰すべき者を未だ罰していない場合も指 「わしは刑罰を乱用した覚えがない、何故こんな結果が出たのだろう」

も聞いています。兄嬰斉はこれを止めようとして追放されたのです。灓に す。これを処罰しなければ後の者の戒めになりません。しかも趙朔、 郤の両氏も趙氏の勢いに押されて我慢して何も言いません。梁山が崩れ 原同(趙同)、屏括(趙括)らは趙一族の隆盛を恃み謀叛を企んでいると を任せました。その結果、今は逆臣の子孫が朝廷の要所を押さえていま これは許しがたい罪であります。成公は彼を罰しなかった上に彼に国政 します。 趙 盾 が霊公を桃園で殺害した事が史書に明記されていますが、

> たのは霊公の冤罪を知らせる天意ではないでしょうか、正にそれは趙氏 を咎めているのです。」

讒言に惑わされ、韓厥に聞いてみた。韓厥はそれに対し、 景公は邲の戦い以降、趙同、趙 括の専横が不満だったので、 屠岸賈の

があります。小人の言葉をお聞きになって功臣の子孫をお疑いに成るの 昔から成季(趙衰)彼の字は子余、原季。諡は成子)以来晋国に対する大功 | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\* | \*\*\*

家のために弁明をしようとはしなかった。そこで景公は屠岸賈の讒言を はすでに屠岸賈が仲間に引込んでいたのであくまでも言葉をごまかし趙 は如何なものでしょうか」 と答えたが景公は釈然とせず、更に欒書、郤錡に聞いた。 郤両家

信じて趙氏の罪状を罪版に書き記し、 「善処せよ。だが都の人々を驚ろかすではないぞ」

と言って屠岸賈に渡した

とになってしまいました。今、岸賈が君命を奉じて捕殺に来るのであれ 趙 朔に知らせて至急逃げるように忠告した。 しかし趙朔は 韓厥は屠岸賈の陰謀を知ってその夜下宮(趙氏の屋敷の名) 「父上はずっと先君の弑逆を否認していましたが、結局汚名を被るこ へ出向き、

であれば趙氏の祀りを続ける事ができます。この僅かな血脈を将軍にご ています。女の子であれば何も言う事はありませんが、幸いにも男の子 ば朔は逃げ隠れは致しません。ただ妻が懐妊していてすでに臨月に入っ

の原因が「祀りが絶えた者の祟りといわれ赦したとある による趙氏再興を赦すのは本書では悼公となているが、史記では十五年後景公が病 85 史記では屠岸賈は景公に奏上せず趙氏一族を全滅させたとある。また、後に趙武 けが見当たらない。屠岸賈が、

守護いただければ趙朔は死んでも心残りはありません」

と韓厥に答えた。韓厥は涙ながらに言った。

いますが、ご依頼の件は力の限りやりましょう。しかし賊は以前から陰と変わりません。今、賊の謀略を叩けない自分の力不足を恥ずかしく思「厥は宣孟(趙盾)さまの知遇を受けて今日があり、そのご恩は父子

にお返しして難を避けておかれたら如何です。後日公子が成長すれば報は何ともなりません。賊が乱を起こす前にそっと公主(先君の娘)を公宮

できない」

謀をめぐらしており根絶を目指しているでしょう。それはわたしの力で

復の日もあるでしょう」

「もし女の子が産まれたら名を文と付け、男の子だったら武と付けな趙朔はそっと庄姫に言った。趙朔ははっと気が付き、韓厥に感謝して杯を交わし涙の別れを告げた。

この事は食客の程嬰にだけに言い、その夜の内に庄姫を温車(寝台車)さい。 いまは文人は必要ない、 武人なら仇を討つ事ができるのだ」

の悲しみはとても言葉にならない。に乗せ程嬰に護送させて宮中の母親成夫人のもとへやった。夫婦の離別

大門に掛け、大声で、翌日早朝、屠岸賈が自ら兵を率いて下宮を包囲し、景公親筆の罪版を翌日早朝、屠岸賈が自ら兵を率いて下宮を包囲し、景公親筆の罪版を

「君命を奉じ逆賊を討伐する」

横たわり血は庭の 階 を真っ赤に染めた。死者を点検したところ庄姫だいて幸い難を免れ、後にこの変を聞いて宋に出奔した。死体は各部屋ににした(趙氏下宮の難)。ただ一人趙 旃の子 趙 勝 だけがその時邯鄲にと叫び、趙朔、趙同、趙括、趙神等各家の老若男女を問わず皆殺しと叫び、趙朔、

「公主はどうでもいいのだが懐妊しており間もなく出産だと聞いて

「逆臣の一門は全て根絶致しましたが、公主だけが宮中に入られたよ屠岸賈はそれが庄姫だと判断し、即刻晋侯に会い、

うでございます。いかが致しますかご裁決ねがいます」

「彼女は母夫人が可愛がっている娘だからこれには手をつける事は、ここともます。して光至しますが、まだれてします。

の種を残す事になり成長するときっと報復を考え桃園の二の舞になりか「公主は懐妊なさっており間もなく出産です。もし男子でしたら逆臣

ねません。よろしくご検討願います」

屠岸賈は人を遣って日夜庄姫の出産の消息を採らせた。「男子が生まれたら処分する事にしよう」

せようとした。庄姫はおどろいて母成夫人と相談し生まれた女の子は死と言わせた。屠岸賈は疑って、自分の家中の乳母を宮中に入れて調べさ数日後庄姫は男の子を出産した。成夫人は宮中には女の子が生まれた

に捜索した。庄姫は子を袴の中に隠し天に祈った。うのも、死んだというのも信用せず自ら女の従者を連れて宮中を徹底的

岸賈に任せ好きなようにさせていた。岸賈は生まれた子が女の子だといんでしまったということにした。この頃景公は淫薬に耽って国事を全て

うかこの子を泣かせないでください」
「お天道さま、もし趙家の一脈を延ばしてやろうとお考えでしたらど

ず袴の中からは一声も泣き声が聞こえなかった。屠岸賈はしかたなしに女の従者たちは庄姫を引きずり出し、宮中を捜索したが何も見つからった。のうる滔光もないでくれるい。

ないかと考え宮門に懸賞の看板を掛けた。 宮中を出たが未だ疑いを拭ってはいなかった。 或は宮外に預けたのでは

ていて知らさず隠匿した場合は一族皆殺しとする』 『趙家の孤児の本当の消息を知らせたものには千金を与える。知っ

さらに宮門の出入りには厳しく査問させた。

ところで、趙盾には二人の心服する食客がいた。 一人は公孫杵臼、

もう一人は程嬰である。最初屠岸賈が下宮を包囲したと聞き公孫杵臼は 緒に死のうと程嬰をさそった。 「屠岸賈が君命にかこつけて賊を討つと言っているらしいじゃない

か。我われが一緒に死んでも趙氏のためには何にもならないぞ」

げる気はしない」 「趙氏のためにはならないけれど趙盾さまのご恩を思うとここで逃

でお守りしよう。残念ながら女のお子さんだったらその時死んでも遅く 「庄姫さまはお子を孕んでおられる。もし男のお子さまだったら二人

その後庄姫が女の子を生んだと聞き杵臼は、

はないじゃないか」

「天は趙氏を滅ぼすのか」

と泣いた。程嬰は

「まだ信じられん、よく調べてみる」

忠義の男だとわかっていたのでそっと一文字『武』の字を書いて渡した。 と言って宮女にまいないを使って庄姫と連絡を取った。庄姫は程嬰が

と密かに喜んだ。その後屠岸賈が後宮に捜査に入ったが見つからなか

「やっぱり公主は男の子をお生みになったのだ」

った事を知り程嬰は、

安心できない」 るに決まっている。何とかして宮中から連れ出して遠くへ隠さなければ かしごまかせるのは一時だけだ。後日事実が漏れたら屠賊がまた捜索す 「趙氏の孤児が宮中にいたのに見つからなかったのは正に天佑だ。し

と杵臼に言うと、杵臼はずいぶん考えた後、程嬰にたずねた。

「死ぬのと孤児を護っていくのとどっちが大変だろうか」

「そりゃ当然孤児を護る方が大変だろう」

「それじゃ貴殿に難しい方を頼みわしが簡単な方をやる、どうだい」 「どういう事だ」

隠している場所を自白する。屠賊は偽者を殺して安心するだろうから、 まかしてわしが首陽山に連れて行って匿うから、貴殿は自首して孤児を 「もし誰か他の嬰児を手に入れることができたら趙氏の孤児だとご

本当の孤児は助かるというすんぽうだ」

「別な嬰児を手に入れるのは簡単だが、本物の孤児の安全を確保する

にはどうしても宮中から連れ出さなければならん」

「諸将の中では韓厥殿が趙氏の恩を一番深く受けているから、孤児を

わりにちょうどいい。しかし貴殿は孤児を匿った罪で必ず殺される。貴 「わしに生まれたばかりの子がいて、孤児とは誕生日が近いから身代

連れだす件は彼に頼もう」

殿がわしより先に死んでしまうのはとても耐えられん

程嬰はそう言って泣き止まない。 杵 臼は慰めて言った。

「これは義挙です。どうして泣く事があろう」

程嬰は涙を収めて立ち去り夜半に自分の子を抱いて来て杵臼に手渡

話した。 し、すぐに韓厥に会いに行き先ず『武』の字を示して、杵 臼との密謀を

韓厥は程嬰の話を聞くと彼に、

るところだ。貴殿が屠賊を騙して首陽山に連れ出してくれれば、わしに 「庄姫さまはご病気でわしはちょうど医者を呼ぶように言われてい

孤児を連れ出す考えがある」

と言った。そのあと程嬰はそれとなく大衆に、

「屠司寇は趙氏の孤児を捕まえようとしながらどうして宮中ばかり

と流した。屠氏の食客がこの噂にひっかかってきた。

捜しているんだろうな」

「貴殿は趙氏の孤児の所在を知っているのか

その食客は彼を岸賈に引き合わせた。岸賈は程嬰に氏名を聞いた。 「本当に千金もらえるなら話してもいい」

いました。公主が孤児をお生みになり、生まれた子をすぐ女性に抱かせ 「姓は程名を嬰といいます。公孫杵 臼と一緒に趙氏にお世話になって

に告発されて事がばれ、賞金はもっていかれ一族皆殺しになってしまう 宮門を出てわれわれ二人に匿うように託されました。わたしは後日誰か

事態を心配して、自首いたした次第です」

「孤児は今何処にいる」

屠岸賈が側近たちを下らせると程嬰は口を開いた。 「お人払いをお願い致します」

う、間もなく秦国へ行く予定ですから。しかしこれには大夫おん自らい 「首陽山の奥深くにいます。すぐにいらっしゃれば捕えられるでしょ

らっしゃった方がいいと思います。他の人は趙氏と何らかのつながりが

ありますから軽々には人に託すべきではないと思います」

「そなたもわしに随いて来い。事実であれば重賞をとらせよう、但し

偽りであったら命はないぞ」

「わたしはいま山から下りてきて非常に腹が減っています。一食いた

だければ大変ありがたいのですが」

ぐよう催促した。 岸賈は自ら自家の武装兵三千を率いて、 程嬰を先導と 屠岸賈は彼に酒食を与えた。食事が終わると嬰はまた岸賈に出発を急

して首陽山へ向かった。

谷の際に粗末な草庵が見えた。両開きの柴門が閉じている。。嬰は指差し 曲がりくねった道を数里、道は非常に暗くひっそりとして、そのうち

「あれが杵臼と孤児の隠れ家です」

| 繋が先に戸を叩いた。杵臼が出てきたがたくさんの武装兵を見て慌て 258

て逃げ隠れようとした。

嬰は大声で、

で捕えに見えているんだ。速く孤児を献上しろ」 と叫んだが、その声も終わらない内に兵たちは杵臼を縛り上げ屠岸賈 「杵臼よ逃げるな、司寇はもう孤児がここにいる事をご存知でご自分

の前に引きずり出した。

「いない」 「孤児は何処にいる」

杵臼は咎めるように言った。

屋があった。その鍵を取りはずすと中は非常に暗く、ぼんやりと竹のべ 屠岸賈は兵士に草庵の捜索を命じた。奥に固く鍵がかかっている壁部

すと、錦に刺繍のついたむつきにくるまれ、いかにも貴家の子供のよう である。杵 臼はそれが目に入るとすぐ取り戻そうとしたが縛られて動け

ッドが見え、赤子の驚いた泣き声が聞えた。兵士が抱きかかえて外に出

首しやがって。わしは死んでも惜しくはないが、趙宣孟(趙 盾)さまの てこの山に匿ったんじゃないか。それなのに千金に目がくらみ勝手に自 か。公主さまは孤児を我われ二人にお預けになり、二人でいろいろ謀っ る、死んだらだれが孤児をお守りするんだ』と言ったのは貴様じゃない 緒に死のうと言った時お前は何と言ったか。『公主さまがご懐妊されてい 「つまらぬ男だな程嬰よ、貴様と言う奴は。わしが趙家受難のとき一

ご恩にいったい貴様はどうやって報いるつもりなんだ」

**罵倒は止まない。程嬰は満面に恥を見せ屠岸賈に** 

「速くやっちまって下さい」

上げて地面に叩きつけた。嬰児は即死した。髯翁は詩の中に言う。 趙氏の一縷 危機一発 実のわが子を孤児に代え

と言うと、屠岸賈は兵士に公孫杵臼の斬首を命じ、自分は孤児を持ち

のだ

屠賊天網をいっぱいに広げしも 誰か知る杵 臼の密謀を

書いた『武』の字が貼ってあるのに気がつき、医師の意図を了解した。 をを貼り付けた薬嚢を持たせて宮中に入れた。庄姫はその薬嚢に自分が の医者に扮装させ、圧姫の診察のために、程嬰からもらった『武』の字 このため宮門の検問は粗略になってしまった。韓厥は腹心の食客を在野 に知れ渡たり、屠岸賈関係者は喜び、趙家関係者は非常に残念がったが、 屠岸賈が自ら首陽山へ行って趙氏の孤児を捕えて殺した情報は城中と新えか。

> やりながら天に祈った。 ようとすると突然泣き出した。庄姫は驚いて薬嚢の上から優しく撫でて 居るものが全て腹心である事を確かめてから孤児を注意深く薬嚢に入れ 「趙武や趙武、わが一門の多くの人々の冤罪の仇を雪ぐのはお前の一

診察が終わった後、産前産後のいろいろな話をしながら周りを見渡し、

家人と言えども一切誰にもこの事を知らさなかった。 り至宝を手に入れたように赤ん坊を奥の密室に隠し、乳母に養育させて 児の問題は終わったと思いだれも訊問をしなかった。韓厥は孤児を受取 身に係っているのよ、宮中を出る時泣かないでね、絶対に泣かないで」 そう言うとぱたっと泣き止んだので急いで宮門を出た。 検問所では孤

は賞を受取ろうとしなかった。 一方、屠岸賈は、帰ってきてすぐ程嬰に千金を取らそうとした。 . 「そなたが自首したのは賞金目当てではなかったのか、どうして断る 25 4

ございましたら、そのお金で趙氏一門の亡骸を葬むらせていただきそれ 合で趙家の孤児を殺すという不義を行ってしまいました。この上大金を により万分の一でも罪滅ぼしができればと思っています」 いただく勇気はございません。 もし小生の微労をご考慮いただけるので 「小生は趙家での食客が大変長ごうございましたのに、いま自分の都

は葬儀の費用に当てるがよい」 「そなたは信義ある男だ、趙氏の遺体の片付けを許して遣わす。賞金

屠岸賈は彼を引止めて重用しようとしたが、程嬰は涙を流しながら、 趙盾の墓の周囲に埋葬した。それが終わって屠岸賈に礼を言いに行った。 そこで程嬰は堂々と趙一族の全ての遺体を木棺に収棺し立派に弔い

「一時は死を怖がってこんな不義をはたらいてしまい、再び晋国の人

\*\*・、.... にあわせる顔が有りません。これからは遠く他郷へ行きなんとか余生をにあわせる顔が有りません。

である。
このである。

後の人は孤児を蔵した事にちなんでこの山を蔵山と呼んだ。

三年後、景公は新田に遊びに出かけ、そこが土地が肥沃でいい水が出三年後、景公は新田に遊びに出かけ、そこが土地が肥沃でいい水が出三年後、景公は新田に遊びに出かけ、そこが土地が肥沃でいい水が出三年後、景公は新田に遊びに出かけ、そこが土地が肥沃でいい水が出三年後、景公は新田に遊びに出かけ、そこが土地が肥沃でいい水が出三年後、景公は新田に遊びに出かけ、そこが土地が肥沃でいい水が出三年後、景公は新田に遊びに出かけ、そこが土地が肥沃でいい水が出三年後、景公は新田に遊びに出かけ、そこが土地が肥沃でいい水が出

さてこのあと景公は如何なりますか。

(下巻五十八回につづく)

と怒鳴りつけると、銅錘を振って景公を打った。天帝に訴えてお前の命をもらいに来た」

景公は佩剣を抜きその鬼を斬ろうとして誤って自分の指を斬った。群

一助けてくれー」

臣は何が起きたのかわからず慌てて剣を取上げた

景公は鮮血を吐きその場に倒れ人事不省に陥った。